

板 平 遺 跡 (第3・4次調査)

Itabira Site

東九州自動車道(門川～日向間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

2011

宮崎県埋蔵文化財センター

『板平遺跡（第3・4次調査）』正誤表

ページ・図番号	誤	正
p49 右16行目	5～10cm大のものが1個	5～10cm大のものが10個
p136 右 2行目	中期末葉までの土器皿	中期末葉までの土器鉢

第91～93図の挿出典一覧

挿出典No.	遺跡名	出土遺構	挿出典No.	遺跡名	出土遺構	挿出典No.	遺跡名	出土遺構
109	板平(2次)	SA1	142	木脇	SA19	2	74	75
230	232	板平(2次)	228			99	160	百町原
16	板平(2次)	SA4	152	木脇	SA20	163	175	周溝状遺構
263	板平(2次)	SA5	154	木脇	SA33	25	159	百町原
215	板平(2次)	SA6	89	126	銀代ヶ迫	172	176	整穴住居
4	35	54	26	188	国光原	37	122	前原北
76	114		211	212	熊野原C地区	103	179	前原南
117	155		216			178		間越
14	15		120	210	熊野原C地区	124		六野原地下式
52	57	板平(2次)	213			6	38	40
260	板平(2次)	SA11	115	116	熊野原C地区	93	144	森ノ上B区
77	80		119	204	熊野原C地区	151	240	山口2地点
170	180	板平(2次)	196	202	熊野原C地区	241	242	山口2地点
206		包含層	105	193		243	244	
17	18	板平(3次)	194	205	熊野原C地区	39		山口2地点
30	133		214	218		156		山ノ田1
140	147		162	195	熊野原C地区	157		山ノ田1
149	219		28	125		72		湯平田(2次)
234	236		221	222	黒仁田	198		湯平田(2次)
47	121	板平(4次)	226			187		湯平田(2次)
32	264	板平(4次)	141			95	104	湯平田(2次)
21		板平(4次)	86			185	186	湯平田(2次)
23	56	赤坂	78	192	黒仁田	11		湯平田(2次)
83		赤坂	199			9	246	吉野2
112	173	赤坂	42	237	黒仁田	254		
51		赤坂	238	239	黒仁田			
61	164	赤坂	53	200	猿野			
131	132	生目7号墳	203					
145		周溝	81	88	猿野			
91	127	生目22号墳	217					
225		周溝	49					
59	70		223	224	下北方			
134	150	上藪E地区	197		沙土江			204号整穴建物
227			102	201	新立			
33	257		107	209	新立			
258	259	上藪F地区	128	233	隼ノ内			
261	262		73		隼ノ内			
248	250	上藪F地区	165		隼ノ内			
153		上藪F地区	96	113	新別府下原			
90	130	上藪F地区	158	171	新別府下原			1号周溝状遺構
139		上藪F地区	24	63	鶴野内中水流			
94		上藪F地区	84					
177		上ノ原	48		天神河内			包含層
66	79	上ノ原	27	67	橋田			SA8
118		上野原	1		中尾原			SA25
36		上野原	55	136	中野内			SA11
46	87		247	249				
129	207	上の原1	251	253	中野内			SA13
208		土器埋納遺構	8	19	31			SA17
135	137		41	252	中野内			SA18
138	148	上の原2	255	256	中ノ迫2			SA2
229			71					
68		上の原2	3	13	34			
191		内野々	65	85				
60	146	江田原3	183	184	西ノ別府			SA1
235			189	190				
12	22		245		野首1			SA5
82	97		5	7	220			SA5
166	169	大戸ノ口2	161		野首2			SA37
174	181		44	58	野首2			SA38
98	182	大戸ノ口2	231		野首2			SA71
45		橋中学校	20	43	野首2			SA1
64		尾立2	123		野首2			SA1
106		川床	29	69	八幡上			SA3
108		川床	92					
10	101	祇園原	50	62				
		SAC0601	100	110	東平下			1号周溝基
			111	167				



第4次調査区全景（北より）

平成 21 年 7 月、調査区全域を富高川上流側から撮影したものである。中央に見える道路が東九州自動車道（門川～日向間：平成 22 年 12 月開通）であり、この部分が第 1・2 次調査（平成 17・18 年度）調査区にあたる。道路右側はアスファルト製造プラント建設予定地であり、撮影当時発掘調査中の第 4 次調査区にあたる。



F-1区(第4次)土層



8号集石遺構(第4次)半截狀況



F-2区(第4次)炉穴群(1)



F-2区(第4次)炉穴群(2)



50号陥し穴状遺構（第4次）半截状況



1号竪穴建物跡（第4次）遺物・炭化材出土状況



1号竖穴建物跡（第4次）出土遺物



1号竖穴建物跡（第4次）出土転用羽口と鉄滓

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（門川～日向間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成17年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した板平遺跡（第3・4次調査）は、平成20・21年度に発掘調査を行い、後期旧石器時代の遺物や、縄文時代早期の炉穴や集石遺構などの遺構や遺物、弥生・古墳時代の竪穴建物跡や土師器などの遺構や遺物、陥し穴状遺構などさまざまな遺構や遺物を確認することができました。特に1号竪穴建物跡で「鍛冶炉」・転用羽口・金床石・鉄滓などが確認されたことは、南部九州における古墳時代中期中葉の鉄生産を考える上で貴重な調査事例です。ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 森 茂

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道(門川～日向間)建設に伴い、平成20・21年度に実施した日向市所在の板平遺跡(第3・4次調査)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社(NEXC O西日本)九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、第3次調査については、島木良浩、日高優子が、第4次調査については、松田博幸、土屋雄毅、橋口由佳、岸田裕一、岡田諭が行った。
- 4 整理作業は、遺物洗浄・注記・接合を整理作業員が行い、実測・トレースは整理作業員の補助を得て島木・日高・松田・橋口が行った。一部の石器実測及びトレースを(株)バスコに委託した。また、整理作業全般について今塩屋毅行の、石器類の分類や石材同定については松本茂の助言を得た。
- 5 次の業務はそれぞれ業者に委託した。

基準点測量・グリッド杭設置	第4次調査:(株)日向測量設計
空中写真撮影	第4次調査:(株)九州航空
自然科学分析	第3次調査:(株)バリノ・サーヴェイ
	第4次調査:(株)古環境研究所
金属分析	第4次調査:(株)JFEテクノロジーサーチ
- 6 本書で使用した周辺遺跡位置図は国土地理院発行の5万分の1図を、周辺地形図等はNEXC O西日本延岡高速道路事務所から提供の1,000分の1図をもとに作成した。
- 7 国土座標は平面直角座標系Ⅱ(世界測地系)に基づく。また、標高は海拔絶対高である。なお、本書で使用した方位は、第二章(第3次調査の記録)については磁北(M.N.)、その他については座標北(G.N.)である。
- 8 土層断面・土器等の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。
- 9 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S A... 竪穴建物跡	S B... 掘立柱建物跡	S C... 土坑	S E... 溝状遺構
S I... 集石遺構	S P... 炉穴	S H... ビット	
- 10 本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主に以下のように統一している。

集石遺構... 1/30	炉穴... 1/40	竪穴建物跡... 1/50	掘立柱建物跡... 1/60
陥し穴状遺構・その他の土坑... 1/30	縄文土器・弥生土器... 1/3	土師器... 1/4	
須恵器... 1/3	陶磁器... 1/3	旧石器... 1/2	石鏃・石斧・スクレイパー... 1/2
磨石・敲石・砥石... 1/3	石皿・台石... 1/4		
- 11 本書の石器実測図中の使用痕については、次のように表現している。
 - ・面的に図示可能な磨面・砥面…網掛け
 - ・断面図での磨痕(面)の範囲…矢印+「ス」
 - ・断面図での敲打痕(面)の範囲…矢印+「コ」
- 12 本書の執筆・編集は土屋(第一章)、島木(第二章)、松田・今塩屋(第三・四章)が担当した。
- 13 出土遺物、その他の記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに		第III章 第4次調査の記録	
第1節 調査に至る経緯.....	1	第1節 基本層序.....	30
第2節 調査の組織.....	1	第2節 調査の方法及び経過.....	34
第3節 遺跡の位置と環境.....	2	第3節 整理作業及び報告書作成.....	37
第II章 第3次調査の記録		第4節 教育普及活動.....	37
第1節 基本層序.....	5	第5節 調査の記録	
第2節 調査の方法及び経過.....	5	1 旧石器時代の遺物	
第3節 整理作業及び報告書作成.....	5	(1) 概要	38
第4節 調査の記録		(2) 遺物	38
1 旧石器時代の遺物		2 縄文時代早期の遺構と遺物	
(1) 概要	8	(1) 概要	46
(2) 遺物	8	(2) 遺構	46
2 縄文時代早期の遺構と遺物		(3) 遺物	63
(1) 概要	11	3 縄文時代後～晩期の遺物	
(2) 遺構	11	(1) 概要	66
(3) 遺物	14	(2) 遺物	66
3 縄文時代後期の遺物		4 弥生時代の遺構と遺物	
(1) 概要	15	(1) 概要	67
(2) 遺物	15	(2) 遺構	67
4 古墳時代の遺構と遺物		(3) 遺物	67
(1) 概要	16	5 古墳時代の遺構と遺物	
(2) 遺構	16	(1) 概要	69
(3) 竪穴建物跡出土の遺物	18	(2) 遺構	69
5 中世の遺構		(3) 遺物	90
(1) 概要	22	6 古代～近世の遺構と遺物	
(2) 遺構	22	(1) 概要	95
6 その他の遺物.....	23	(2) 遺構	95
第5節 自然科学分析の結果.....	25	(3) 遺物	101
第6節 小結.....	29	7 その他の遺構と遺物	
		(1) 概要	104
		(2) 遺構	104
		(3) 遺物	117
		第6節 自然科学分析の結果.....	119
		第7節 小結.....	123
		第IV章 総括.....	131

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図.....	3
第2図	調査区と周辺地形図.....	4
(第3～	26図：第3次調査に関する図)	
第3図	全体遺構配置図.....	6
第4図	土層断面図.....	7
第5図	旧石器時代遺物分布図.....	8
第6図	旧石器時代トレンチ配置図.....	9
第7図	旧石器時代遺物実測図.....	10
第8図	縄文時代早期遺構配置図.....	11
第9図	縄文時代早期集石遺構実測図.....	12
第10図	縄文時代早期陥し穴遺構実測図.....	13
第11図	縄文時代早期炉穴実測図.....	14
第12図	縄文時代土器実測図(1).....	14
第13図	縄文時代石器実測図.....	15
第14図	縄文時代土器実測図(2).....	16
第15図	古墳時代遺構配置図.....	17
第16図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 実測図... 17	
第17図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 出土土器実測図.....	18
第18図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 出土石器実測図(1).....	19
第19図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 出土石器実測図(2).....	20
第20図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 出土石器実測図(3).....	21
第21図	中世遺構配置図.....	22
第22図	中世掘立柱建物跡実測図.....	22
第23図	その他の遺物 D-1区出土 実測図... 23	
第24図	その他の遺物 D-2区出土 実測図(1).....	23
第25図	その他の遺物 D-2区出土 実測図(2).....	24
第26図	自然科学分析の結果.....	28
(第27～	89図：第4次調査に関する図)	
第27図	グリッド配置図.....	31
第28図	土層断面図(1).....	32
第29図	土層断面図(2).....	33
第30図	全体遺構配置図.....	35～36
第31図	旧石器時代調査トレンチ配置図.....	39
第32図	旧石器時代遺物分布図.....	41
第33図	旧石器時代石器実測図(1).....	42
第34図	旧石器時代石器実測図(2).....	43
第35図	旧石器時代石器実測図(3).....	44
第36図	旧石器時代石器実測図(4).....	45
第37図	縄文時代早期遺構配置図.....	47
第38図	散礫分布図.....	48

第39図	集石遺構実測図(1).....	51
第40図	集石遺構実測図(2).....	52
第41図	集石遺構実測図(3)及び集石遺構出土遺物実測図.....	53
第42図	炉穴実測図(1).....	55
第43図	炉穴出土遺物実測図(1).....	57
第44図	炉穴実測図(2).....	58
第45図	炉穴出土遺物実測図(2).....	59
第46図	炉穴実測図(3)及び炉穴出土遺物実測図(3).....	60
第47図	炉穴実測図(4).....	61
第48図	縄文時代早期包含層等出土遺物実測図(1).....	62
第49図	縄文時代早期包含層等出土遺物実測図(2).....	64
第50図	縄文時代早期包含層等出土遺物実測図(3).....	65
第51図	縄文時代後～晩期土器実測図.....	66
第52図	弥生時代竪穴建物跡 SA3 及び出土土器実測図.....	68
第53図	弥生時代包含層等出土土器実測図.....	69
第54図	古墳時代遺構配置図.....	70
第55図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 実測図... 72	
第56図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 内炉・土坑実測図及び遺物出土状況図.....	73
第57図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 出土遺物実測図(1).....	74
第58図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 出土遺物実測図(2).....	75
第59図	古墳時代竪穴建物跡 SA1 出土遺物実測図(3).....	76
第60図	古墳時代竪穴建物跡 SA2 実測図... 77	
第61図	古墳時代竪穴建物跡 SA4 実測図... 79	
第62図	古墳時代竪穴建物跡 SA4 出土遺物実測図(1).....	80
第63図	古墳時代竪穴建物跡 SA4 出土遺物実測図(2).....	81
第64図	古墳時代竪穴建物跡 SA5 及び出土遺物実測図.....	82
第65図	古墳時代竪穴建物跡 SA6 及び出土遺物実測図.....	83
第66図	古墳時代竪穴建物跡 SA7 実測図... 84	
第67図	古墳時代竪穴建物跡 SA7 出土遺物及び竪穴建物跡 SA8～10 実測図 ... 85	
第68図	古墳時代竪穴建物跡 SA11 及び出土遺物実測図.....	87
第69図	古墳時代竪穴建物跡 SA12 及び出土遺物実測図.....	88

第70図	古墳時代竪穴建物跡(SA13)・土坑及び出土遺物、古墳時代包含層等出土土器実測図.....	89
第71図	古代～近世遺構配置図.....	96
第72図	掘立柱建物跡実測図(1).....	97
第73図	掘立柱建物跡実測図(2).....	99
第74図	掘立柱建物跡実測図(3).....	100
第75図	掘立柱建物跡実測図(4)及び古代～近世遺物実測図.....	102
第76図	土坑配置図.....	105
第77図	陥し穴状遺構実測図(1).....	107
第78図	陥し穴状遺構実測図(2).....	109
第79図	陥し穴状遺構実測図(3)及び陥し穴状土坑出土遺物実測図.....	110
第80図	土坑実測図(1)及び土坑出土遺物実測図(1).....	112
第81図	土坑実測図(2).....	114
第82図	土坑実測図(3).....	115

第83図	土坑実測図(4)及び土坑出土遺物実測図(2).....	116
第84図	包含層等出土土器実測図.....	118
第85図	自然科学分析の結果(1).....	126
第86図	自然科学分析の結果(2).....	127
第87図	自然科学分析の結果(3).....	128
第88図	自然科学分析の結果(4).....	129
第89図	自然科学分析の結果(5).....	130
(第90～93図:第1～4次調査全体に関する図)		
第90図	全体遺構配置図.....	133・134
第91図	板平遺跡出土土器の変遷的位置(1).....	138
第92図	板平遺跡出土土器の変遷的位置(2).....	139
第93図	板平遺跡出土土器の変遷的位置(3).....	140
第94図	竪穴建物変遷図.....	144
第95図	土坑配置図.....	148

表 目 次

(第1～10表:第3次調査に関する表)

第1表	基本層序.....	5
第2表	旧石器時代石器計測表.....	8
第3表	縄文時代土器観察表(1).....	14
第4表	縄文時代石器計測表.....	15
第5表	縄文時代土器観察表(2).....	16
第6表	古墳時代土器観察表.....	19
第7表	古墳時代石器計測表.....	21
第8表	その他の遺物観察表(土器類).....	24
第9表	その他の遺物計測表(石器).....	24
第10表	自然科学分析の結果.....	27
(第11～42図:第4次調査に関する表)		
第11表	基本層序.....	30
第12表	旧石器時代石器出土地点別器種・石材分類表.....	40
第13表	旧石器時代石器計測表.....	45
第14表	縄文時代早期集石遺構一覧表.....	49
第15表	縄文時代早期炉穴一覧表.....	54
第16表	縄文時代早期土器観察表.....	63
第17表	縄文時代早期石器計測表.....	65
第18表	縄文時代後～晩期土器観察表.....	66
第19表	弥生時代竪穴建物跡一覧表.....	67
第20表	弥生時代土器観察表.....	69
第21表	古墳時代竪穴建物跡一覧表.....	71
第22表	古墳時代土坑一覧表.....	90
第23表	古墳時代土器観察表(1).....	90
第24表	古墳時代土器観察表(2).....	91

第25表	古墳時代土器観察表(3).....	92
第26表	古墳時代土器観察表(4).....	93
第27表	古墳時代竪穴建物跡出土石器計測表(1).....	93
第28表	古墳時代竪穴建物跡出土石器計測表(2).....	94
第29表	古墳時代竪穴建物跡出土装飾品計測表.....	94
第30表	古墳時代竪穴建物跡出土鉄滓計測表.....	94
第31表	古墳時代竪穴建物跡出土棒状礫計測表.....	94
第32表	掘立柱建物跡一覧表.....	95
第33表	古代～中世土器観察表.....	103
第34表	近世陶磁器観察表.....	103
第35表	中世銭貨計測表.....	103
第36表	陥し穴状遺構一覧表.....	104
第37表	陥し穴状遺構を除く土坑一覧表.....	110
第38表	土坑出土土器観察表.....	117
第39表	土坑出土石器計測表.....	118
第40表	包含層等出土石器計測表.....	118
第41表	自然科学分析の結果(1).....	124
第42表	自然科学分析の結果(2).....	125
(第43～45図:第1～4次調査全体に関する表)		
第43表	土器師の色調/胎土の分類基準.....	141
第44表	板平遺跡出土土器師の色調/胎土の分類(1).....	141
第45表	板平遺跡出土土器師の色調/胎土の分類(2).....	142

図版

- 巻頭図版 1 第4次調査区全景(北より)
- 巻頭図版 2 F-1区(第4次)土層
8号集石遺構(第4次)半截状況
F-2区(第4次)炉穴群(1)・(2)
- 巻頭図版 3 50号陥し穴状遺構(第4次)半截状況
1号竪穴建物跡(第4次)遺物・炭化材出土状況
- 巻頭図版 4 1号竪穴建物跡(第4次)出土遺物
1号竪穴建物跡(第4次)出土転用羽口と鉄滓
- 図版 1(第3次) 1号集石遺構検出状況
2号集石遺構検出状況
散礫検出状況
2号陥し穴状遺構完掘状況
1号炉穴完掘状況
1号竪穴建物跡完掘状況
1号竪穴建物跡遺物出土状況
- 図版 2(第3次) 旧石器時代石器
縄文時代早期遺物
縄文時代後期土器
1号竪穴建物跡出土土器(1)・(2)
- 図版 3(第3次) 1号竪穴建物跡出土土器(1)~(4)
古墳時代土器(1)・(2)
中世・近世遺物
- 図版 4(第4次) 1号集石遺構検出状況
3号集石遺構検出状況
4号集石遺構検出状況
6号集石遺構検出状況
8号集石遺構検出状況
8号集石遺構半截状況
10号集石遺構検出状況
11号集石遺構検出状況
- 図版 5(第4次) 12・13号集石遺構検出状況
14号集石遺構検出状況
1号炉穴完掘状況
2号炉穴完掘状況
F-2区炉穴群(1)
- 図版 6(第4次) F-2区炉穴群(2)
6・7号炉穴完掘状況
8・10号炉穴完掘状況
25号陥し穴状遺構完掘状況
- 図版 7(第4次) 27号陥し穴状遺構完掘状況
27号陥し穴状遺構半截状況
31号陥し穴状遺構完掘状況
36号陥し穴状遺構完掘状況
60号土坑遺物出土状況
- 図版 8(第4次) 3号竪穴建物跡完掘状況
1号竪穴建物跡遺物出土状況(1)・(2)
1号竪穴建物跡炭化材出土状況
1号竪穴建物跡貼床下状況
2号竪穴建物跡完掘状況
4号竪穴建物跡遺物出土状況
5号竪穴建物跡完掘状況
- 図版 9(第4次) 6号竪穴建物跡焼土検出状況
7号竪穴建物跡完掘状況
10号竪穴建物跡完掘状況
11号竪穴建物跡完掘状況
12号竪穴建物跡完掘状況
13号竪穴建物跡完掘状況
F-1区全景
- 図版 10(第4次) 旧石器時代石器(1)・(2)
- 図版 11(第4次) 旧石器時代石器(3)
縄文時代早期土器
- 図版 12(第4次) 縄文時代早期炉穴出土石器
縄文時代早期包含層等出土石器(1)
- 図版 13(第4次) 縄文時代早期包含層等出土石器(2)
縄文時代後期土器
弥生時代中期土器
3号竪穴建物跡出土土器
1号竪穴建物跡出土土器(1)~(4)
- 図版 14(第4次) 1号竪穴建物跡出土土器(5)~(12)
- 図版 15(第4次) 1号竪穴建物跡出土土器(13)~(17)
- 図版 16(第4次) 1号竪穴建物跡出土土器(18)~(22)
1号竪穴建物跡出土石器
- 図版 17(第4次) 4号竪穴建物跡出土土器(1)~(3)
4号竪穴建物跡出土石器
古墳時代竪穴建物跡出土石器
古墳時代竪穴建物跡出土棒状礫
- 図版 18(第4次) 5号竪穴建物跡出土土器
6号竪穴建物跡出土土器(1)・(2)
7号竪穴建物跡出土土器(1)・(2)
- 図版 19(第4次) 11号竪穴建物跡出土土器
12号竪穴建物跡出土土器(1)~(4)
13号竪穴建物跡出土土器(1)
- 図版 20(第4次) 13号竪穴建物跡出土土器(2)
古墳時代包含層出土土器(1)・(2)
60号土坑出土土器
1号土坑出土土器
古代・中世・近世遺物

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道(延岡～清武間)は、平成元年2月に基本計画区間に決定された。本遺跡が所在する門川～日向間約14kmについては、県文化課が平成15年8月に日本道路公団(当時、現在：NEXCO西日本)から遺跡の分布調査の依頼を受け、翌16年3月、7遺跡174,000㎡の埋蔵文化財包含地の所在を回答している。そして、門川～日向間を担当する公団延岡工事事務所が開設された同11月には、工事計画や用地取得、埋蔵文化財調査等の調整会議も開催されている。

また、平成17年2～3月には「埋蔵文化財発掘調査におけるコスト縮減及び限定協議に伴う除外面積について」の協議が同公団と県文化財課との間でなされ、これらにより発掘調査の対象面積が当初の174,000㎡から91,000㎡に縮減された。

本遺跡は、平成17年度から第1次調査、平成18年度に第2次調査(A・B・C区)を行った。第2次調査の成果は平成19年度に報告書として刊行している。(『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第176集)

その後、平成20年度に第2次調査区の西側に側道を作ることになり、その側道部460㎡の調査を第3次調査(D区)として行った。また、高速道本線の西側にアスファルトを作るためのプラントを建設することになり、その建設場所と資材置き場にあたる、約8,500㎡を平成21年5月より調査することとなった(第4次調査：E・F区)。平成22年1月に調査を終了した。

第2節 調査の組織

板平遺跡(第3次・4次)の調査組織は次のとおりである。

【調査主体】

宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

平成20年度(第3次調査)

所長

福永 展幸

副所長	加藤 悟郎
総務課長	長友 英詞
同課主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
調査第一課長	長津 宗重
同課主幹兼調査第二担当リーダー	菅付 和樹
同調査第二担当	主査 島木 良浩
	主事 日高 優子

平成21年度(第4次調査)

所長	福永 展幸
副所長兼総務課長	長友 英詞
同課主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
調査第一課長	長津 宗重
同課主幹兼調査第二担当リーダー	菅付 和樹
同調査第二担当	主査 松田 博幸
	主査 土屋 雄毅
	主事 橋口 由佳
	臨時調査員 岡田 諭
同調査第一担当	主事 岸田 裕一

平成22年度(報告書作成)

所長	森 隆茂
副所長	北郷 泰道
総務課長	矢野 雅紀
同課副主幹兼総務担当リーダー	長友由美子
調査第一課長	長津 宗重
同課主幹兼調査第二担当リーダー	菅付 和樹
同調査第二担当	主査 松田 博幸
	主任主事 今塩屋敏行
	主事 橋口 由佳

【調査協力】

日向市教育委員会

東九州自動車道用地事務所

第3節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

板平遺跡は、宮崎県日向市大字富高字板平・程ヶ迫・前原・鍛冶屋・小坂平に位置する（第1図）。

日向市は、宮崎県の北部に位置し、尾鈴山系の北端にあり、東に日向灘を臨む。市内のほぼ中央を流れる塩見川を挟んで南北で基盤層が変わり、北が四万十層群、南が尾鈴山酸性岩類である。本遺跡は、塩見川の支流富高川左岸河岸段丘上に位置し、標高は、約20～40mを測る。基盤層は四万十層群で、富高川の埋積谷低地にあたる。富高川は本遺跡付近の上流地域では、雨季と乾季で水量が大きく変化する。

本遺跡は弥生時代の散布地として、周知の遺跡である。

2 歴史的環境

今回の第3次・4次調査でも第2次調査同様、旧石器時代～近現代までの遺構や遺物が確認された。本遺跡の周辺には以前から多くの遺跡が周知されており、一部は発掘調査も行われている。そこで、発掘調査が行われた遺跡を中心に、時代ごとに述べる。

旧石器時代の主な遺跡は、寺ノ上遺跡（図1-32）や奥野B遺跡（同-33）、東草場遺跡（同-14）、池ノ下遺跡（同-6）がある。寺ノ上遺跡では、A T（始良T n火山灰層）直上から礫群4基や、石器ブロック5箇所よりナイフ形石器など1,200点の石器が確認されており、奥野B遺跡ではA T下位から石器ブロックが検出されている。池ノ下遺跡では、角錐状石器が出土している。板平遺跡第2次調査では、二次加工剥片が3点、石核が4点、剥片が2点A T下位層から出土している。

縄文時代では、早期の後陣遺跡（同-31）、越シ遺跡（同-30）、後期の東草場遺跡、分蔵遺跡（同-2）などがあげられる。後陣遺跡、越シ遺跡の両遺跡とも早期の集石遺構を検出している。特に後陣遺跡では、60余基を数える集石遺構が早水台式の押型文土器や吉田・前平式の円筒貝殻文土器、無文の円筒土器等に伴って検出された。また、後期の東草場遺跡では、円形竪穴建物跡が、分蔵遺跡では御領式の黒色磨研土器などを確認している。板平遺跡第2次調査では、縄文早期～後晩期にかけての集石遺構や炉

穴・土坑が確認され、貝殻履縁刺突文土器や後晩期の土器が出土している。

弥生時代では、越シ遺跡で弥生時代終末期の間仕切りのある方形基調の竪穴建物跡が検出されており、東草場遺跡で中期の溝状遺構、終末期の方形竪穴建物跡等が確認されている。

古墳時代では、本遺跡の南東2kmには県指定富高1号墳・2号墳（同-12）があり、盟主と目される2号墳（全長86mの前方後円墳）では盗掘坑から仿製の四獣鏡が発見され、市指定の鈴鏡塚古墳（同-13）では、獸文八鈴鏡が出土している。板平遺跡第2次調査では、古墳時代前期～後期にかけての竪穴建物跡12軒が確認され、土師器や須恵器等が出土している。また、古墳時代前期のものと思われる車輪石が出土している。

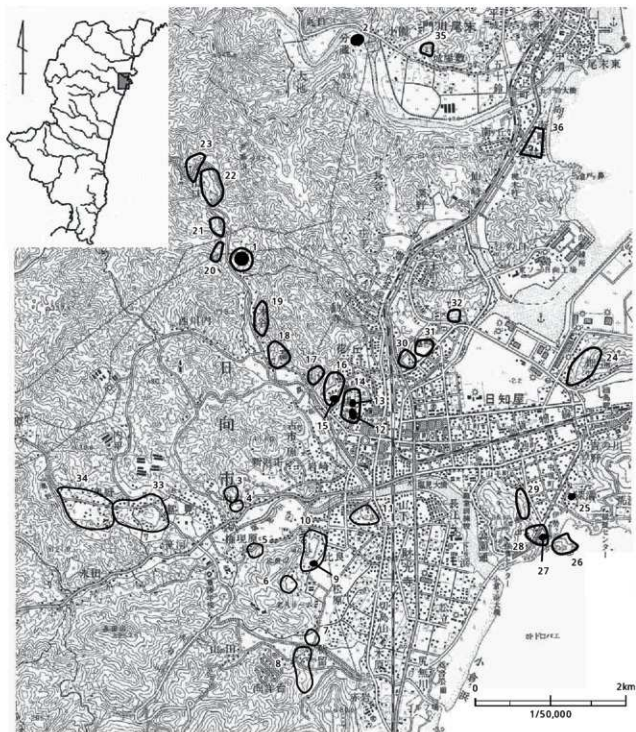
古代では、越シ遺跡から土師器坏を伴う集石遺構や布痕土器を確認している。

さらに中世では、南方3kmに戦国時代には日知屋城、門川城とともに「日向三城」とよばれた塩見城跡（同-3）や中山遺跡（同-4）があり、中世の掘立柱建物跡や輸入陶磁器等が確認されている。

板平遺跡第2次調査では、古代から近世にかけての掘立柱建物跡11棟確認され、土師器や布痕土器・陶磁器・銭貨等が出土している。

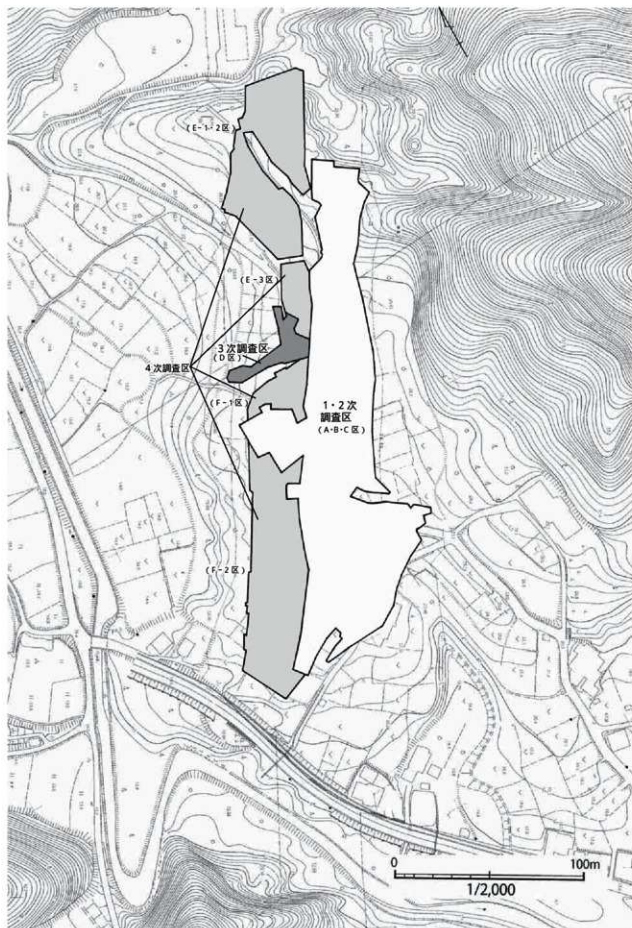
【引用参考文献】

- 日向市教育委員会 1983 「寺ノ上遺跡」
- 日向市教育委員会 1986 「後陣遺跡・越シ遺跡」
- 日向市教育委員会 1991 「富高古墳2号墳」
- 宮崎県 1989 「宮崎県史」資料編考古I
- 日向市教育委員会 1985 「日向市遺跡詳細分布調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 「中山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第93集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 「分蔵遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』139集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「板平遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第176集



- | | | | | |
|-----------|------------|----------|----------|----------|
| 1 板平遺跡 | 2 分蔵遺跡 | 3 塩見城跡 | 4 中山遺跡 | 5 権現原遺跡 |
| 6 池ノ下遺跡 | 7 大谷尻遺跡 | 8 秋留遺跡 | 9 比良山古墳 | 10 比良遺跡 |
| 11 山下遺跡 | 12 富高古墳群 | 13 鈴鏡塚古墳 | 14 東草場遺跡 | 15 西谷横穴群 |
| 16 西草場遺跡 | 17 谷口遺跡 | 18 宮ノ尾遺跡 | 19 和田遺跡 | 20 谷川遺跡 |
| 21 北川内遺跡 | 22 黒原遺跡 | 23 山口遺跡 | 24 畑浦遺跡 | 25 細島遺跡 |
| 26 日知屋遺跡 | 27 伊勢ヶ浜古墳群 | 28 野首遺跡 | 29 竹之下遺跡 | 30 越シ遺跡 |
| 31 後陣遺跡 | 32 寺ノ上遺跡 | 33 奥野B遺跡 | 34 奥野A遺跡 | 35 門川城遺跡 |
| 36 門川南町遺跡 | | | | |

第1図 遺跡位置図



第2図 調査区と周辺地形図

第二章 第3次調査の記録

第1節 基本層序

第3次調査は用地買収の都合上、現道と側道をつなぐ道路の事前調査として480m(D区)実施した。第2次調査(2008年)の基本層序を参考に調査を行った。ただし、第II層(二次堆積アカホヤ火山灰)はほとんど残存していない(第4図)。

第1表 基本層序

層No	層名	特徴
I	表土	10YR3/4 暗褐色土。粘性はない。固くしまる。φ 5mm程度の角礫を多く含む。現在の耕作土。
II	二次堆積アカホヤ火山灰層	7.5YR7/8 黄褐色土。粘性はない。しまりはややある。10YR3/3 暗褐色土が混ざる。アカホヤ火山灰の二次的堆積物。第3次調査では残存していない。
III	暗褐色土層	10YR3/4 暗褐色土。粘性ややある。しまりがある。
IV	褐色土層	10YR4/6 褐色土。粘性はIII層に比べて強い。しまりがある。
V	白班ローム層	10YR3/2 黒褐色土。粘性なし。非常に硬くしまり、10cm程度のブロック状の呈をなす。φ 2mm以下の白色のガラス質を含む。
VI	拾良 Tn 火山灰層	10YR5/8 黄褐色土。粘性なし。しまりなし。
VII	小礫混じり褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性ややあり比較的やわらかい。A T粒子が混ざるためサクサクしている。VI層とVIII層の漸移層にあたる。
VIII	褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性が非常に強い。固くしまる。最大4-5cmの小角礫を多く含む。
IX	礫層	10YR4/4 褐色土。粘性非常に強い。固くしまる。φ 0.5cm-10cm大の礫を多く含む。

第2節 調査の方法及び経過

D-1区は道路の舗装部分をバックホーで除去後、第III層で遺構の検出作業を行った。

その結果、中世の掘立柱建物跡、古墳時代の竪穴建物跡、縄文時代の集石遺構、陥し穴状遺構および土坑が検出された(第3図)。

D-2区は、以前畑地で栽培されていた柑橋類(ヘベズ)の影響が多く見られ、攪乱を受けていたが、陥し穴状遺構、炉穴が検出された。

旧石器時代の調査は、トレンチを設定した後、第VII層を掘り下げて調査を進めた。

遺物包含層中の遺物は、平板により位置を記録して取り上げた。他の遺物は一括等で取り上げをした。

遺構実測図は1/10を基本とし、一部1/20で記録した。写真記録は35mmおよび中判ネガ・リバーサル・カラー・写真及びデジタルカメラを併用した。

調査日誌抄

H20.05.07 第3次調査開始。D-1区の舗装部分を重機で除去。トイレ・テント搬入・設置。器材搬入。

05.08 集石遺構実測。

D-1区は側道が通っていたため、舗装部分を重機で除去すると第III層から確認できる部分と第VI層からわずかに残存する部分とに分かれる。

D-2区は、東側が柑橋類の植栽により攪乱されており第III層がわずかに残存する。また西側は、第VI層から残存していた。以下で各層ごとに概説する。

05.09 ビット8基、陥し穴状遺構1基検出。

05.12 作業員投入。

05.13 A T下よりチャート剥片1点出土。

05.14 掘立柱建物跡1棟実測終了。

05.15 竪穴建物跡1軒検出。

05.16 土坑1基検出。

05.26 D-2区調査開始。

05.27 陥し穴状遺構2基検出。

05.28 炉穴2基検出。

05.29 陥し穴状遺構1基検出。

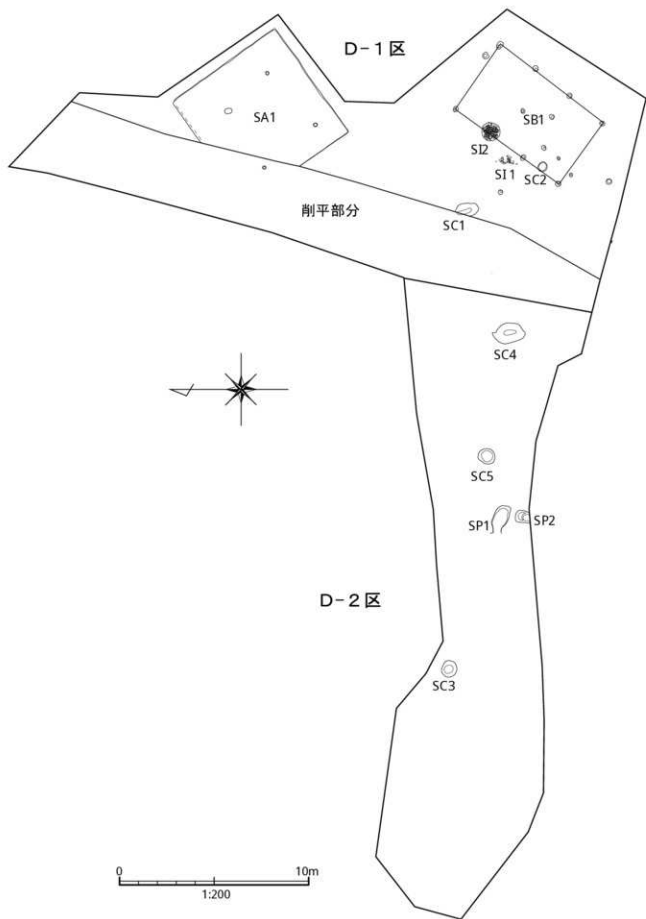
06.05 竪穴建物跡完掘。写真撮影。

06.06 A Tトレンチ掘削終了。作業員終了。

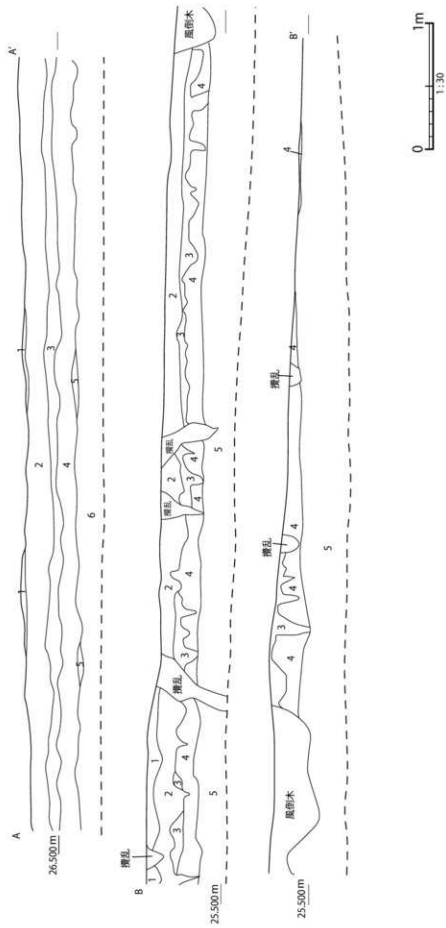
06.13 テント等リース品撤収。最終確認。

第3節 整理作業及び報告書作成

遺物の洗浄・注記・接合・実測・拓本・トレース等及び報告書作成は平成20年10月~平成21年3月の期間において埋蔵文化財センター本館で実施した。平成20年10月~11月に遺物の洗浄・注記・接合・実測を行い、12月~平成21年3月にデジタルトレース、区画レイアウト、文章作成を行った。



第3図 全体遺構配置図



土層断面 B - B' (第 6 図参照)

- 1 : 暗褐色土 (7SYR3/3.5) 粘性あり、ややしまる。シルト質で微細な砂粒を含む。
- 2 : 褐色土 (10YR4/4) 粘性あり、しまりは普通。シルト質で微細な砂粒を含む。
- 3 : に近い黄褐色土 (10YR5/6) 堆積は部分的であり、西側にいくほど堆積量は多い。
- 4 : 明黄褐色土 (10YR6/8) 下層は粒子の密度が高くしまりが強い、上層は砂利が多く含まれ、しまりは下層より弱い。
- 5 : 褐色土 (10YR4/6) 粘質土中に 1cmほどの扁平礫を少量含む。

土層断面 A - A' (第 6 図参照)

- 1 : 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性ややあり、固くしまる。(第 III 層)
- 2 : 褐色土 (10YR4/4) 粘性あり、固くしまる。(第 IV 層)
- 3 : 褐色土 (10YR4/4) 固くブロック状のものが AT の上に層になることがある。(第 V 層)
- 4 : に近い黄褐色土 (10YR6/8) AT 層 (第 VI 層)
- 5 : 褐色土 (10YR4/6) 粘性ありやわらかい、AT 粒子が混ざったためサクサクしている。(第 VII 層)
- 6 : 褐色土 (10YR4/6) 小角礫をまばらに含む。(第 VIII 層)

第 4 図 土層断面図

第4節 調査の記録

1 旧石器時代の遺物

(1) 概要

トレンチ(T1～T8)を設定(第6図)し、A T下位の第Ⅶ層まで掘り下げた。T1・3・4周辺の第Ⅶ層にて石器が出土した。しかし、礫群などの遺物は認められなかった。

(2) 遺物

第Ⅶ層からは、石器が14点出土した(第5図)。チャート1点(剥片)ホルンフェルス8点(石核1点、剥片7点)流紋岩5点(石核1点、剥片4点)である。

石材については、第2次調査に合わせて説明するが、流紋岩については二つの様相に分かれる。

流紋岩Ⅰ類は、灰褐色から褐色を呈する。表面にやや風化が進むが、流理構造は明瞭に観察される。

流紋岩Ⅱ類は、淡黄白色を呈し、表面の風化が進

んでいるため流理構造は明確でない。新鮮な面は黒色緻密である。流紋岩Ⅰ、Ⅱ類とも肉眼的特徴が、五ヶ瀬川流域の旧石器時代に多用される石材に類似しており、同種の石材と考えられる。

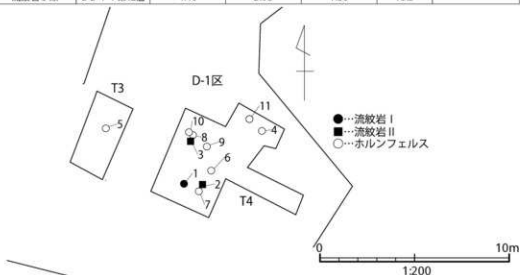
ホルンフェルスは、やや光沢のある黒色を呈し、風化はさほど進まず緻密である。点紋が見られるものもある。

1は流紋岩Ⅰ類の剥片である。背面に自然面を残す。2・3は流紋岩Ⅱ類の剥片である。ともに自然面を残す。4はホルンフェルスの石核である。剥片剥離痕を多く残す。5～11はホルンフェルスの剥片である。接合関係は認められなかった。12はチャートの剥片である。上面に自然面を残す。

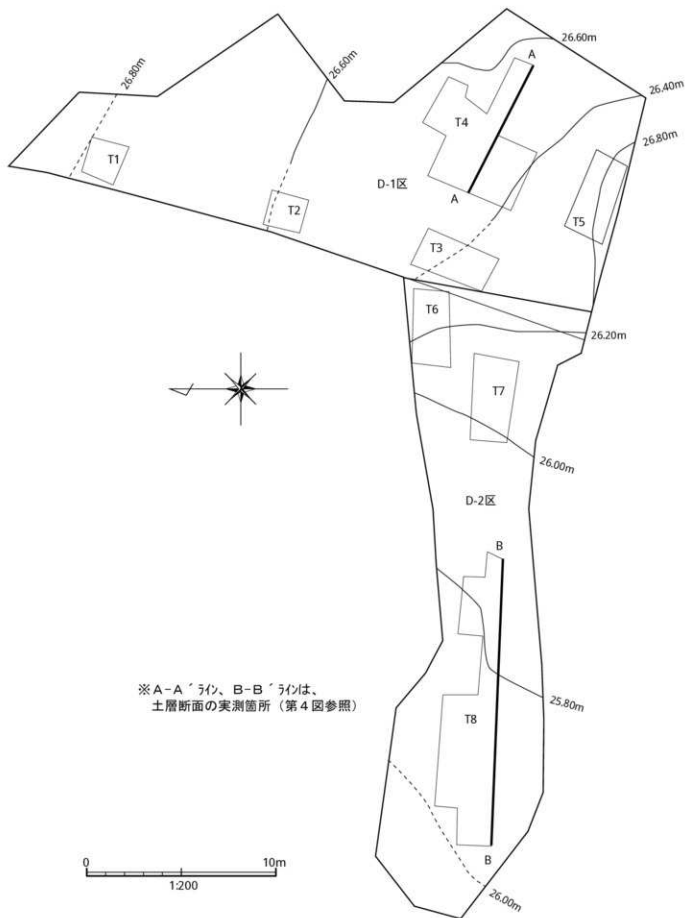
13は流紋岩Ⅰ類の石核である。打面をかえて多方向からの打撃による剥片剥離痕を残す。背面に自然面を残す。14は流紋岩Ⅰ類の剥片である。背面に自然面を残す。

第2表 旧石器時代石器計測表

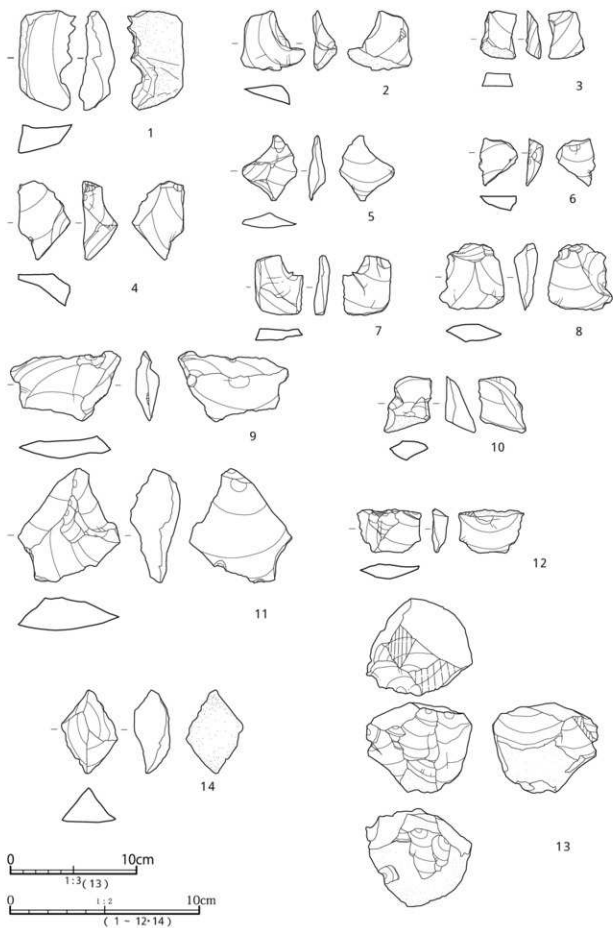
No	器種	石材	出土地点	計測値			備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	
1	剥片	流紋岩Ⅰ類	D-1 第Ⅶ層	5.20	2.95	1.50	21.3
2	剥片	流紋岩Ⅱ類	D-1 第Ⅶ層	3.10	3.35	0.85	7.3
3	剥片	流紋岩Ⅱ類	D-1 第Ⅶ層	2.55	1.90	0.65	4.1
4	石核	ホルンフェルス	D-1 第Ⅶ層	4.15	2.70	1.65	11.6
5	剥片	ホルンフェルス	D-1 第Ⅶ層	3.45	2.85	0.80	4.7
6	剥片	ホルンフェルス	D-1 第Ⅶ層	2.50	2.55	0.75	3.1
7	剥片	ホルンフェルス	D-1 第Ⅶ層	3.15	2.55	0.60	6.0
8	剥片	ホルンフェルス	D-1 第Ⅶ層	3.50	3.40	0.85	12.0
9	剥片	ホルンフェルス	D-1 第Ⅶ層	3.20	5.85	1.20	17.0
10	剥片	ホルンフェルス	D-1 第Ⅶ層	2.95	2.50	1.00	7.1
11	剥片	ホルンフェルス	D-1 第Ⅶ層	6.05	5.40	1.20	43.0
12	剥片	チャート	D-1 T1 第Ⅶ層	2.30	3.30	0.80	6.2
13	石核	流紋岩Ⅰ類	D-2 T1 第Ⅶ層	7.15	8.40	7.55	438.1
14	剥片	流紋岩Ⅰ類	D-2 T1 第Ⅶ層	4.40	2.95	1.80	15.3



第5図 旧石器時代遺物分布図



第6図 旧石器時代トレンチ配置図



第7図 旧石器時代遺物実測図

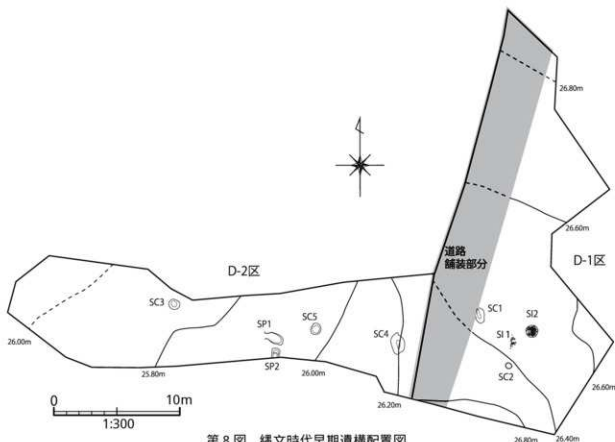
2 縄文時代早期の遺構と遺物

(1) 概要

D-1区の道路の舗装部分を剥ぎ、遺構検出を行っていくと第Ⅲ層（暗褐色土）から礫が集中している部分が2箇所あり、集石遺構と認定した。陥し穴状遺構が1基と土坑1基も検出された。D-2区では、陥し穴状遺構3基、炉穴2基が検出された（第8図）。

遺物としては、貝殻刺突文土器、石斧、石錘等少量が出土している。

なお、土坑は削平・攪乱等により検出面から時期を確定することは難しい。しかし、埋土中にKAh火山灰が含まれないこと、同じ検出面で隣接して炉穴が検出されたこと等から縄文時代早期の可能性が高いので、この節にて報告する。



第8図 縄文時代早期遺構配置図

(2) 遺構

① 集石遺構

集石遺構は2基検出された。礫はほとんどが砂岩で破碎していた。報告にあたっては、第2次調査で行った分類に従って整理した。なお、第3次調査ではA類は確認されていない。

分類と検出された集石遺構との関係は以下のとおりである。

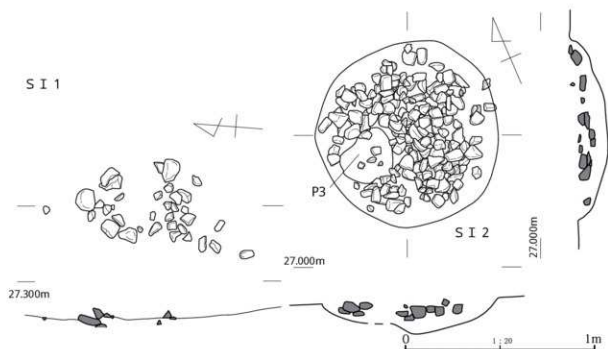
- A類... 掘り込みがあり、配石の有るもの（未検出）
- B類... 掘り込みがあるが、配石の無いもの（S I 2）
- C類... 掘り込みが無いもの（S I 1）

S I 1（第9図）

D-1区の第Ⅲ層で検出された。長径1m、短径0.45mで掘り込みははっきりと確認できないが中央部が若干黒色である。礫は5～12cm大の円礫で赤化している。削平により構成礫は少ないが、本来的にはより多くの礫が存在していたと考えられる。

S I 2（第9図）

D-1区の第Ⅲ層で検出された。長径0.9m、短径0.85mで約0.2mの掘り込みを持ちわずかに炭粒が混じる。礫は3～15cm大でわずかに赤化がみられる。一部の礫は、掘立柱建物跡の柱穴で失われる。



第9図 縄文時代早期集石遺構実測図

② 陥し穴状遺構

4基の陥し穴状遺構が検出され、いずれも第Ⅷ層まで掘り込む。報告にあたっては、第2次調査における下記の分類に従って整理した。

A類...平面形態が楕円形のもの (SC1・4)

B類...平面形態が円形のもの (SC3・5)

(A類)

SC1 (第10図)

D-1区の平坦面で検出され、長軸方向は等高線に直交する。検出面の1/3程度は道路により失う。平面形態は長軸1.3m程度×短軸0.7mの楕円形である。断面形態は深さ1.3mの逆三角形である。中ほどにテラス状の平坦面をわずかに設け、そこから更に深く掘り下げている。埋土中部に第Ⅷ層(A.T)を含む。なお、遺物は出土しなかった。

SC4 (第10図)

D-2区の平坦面で検出され、長軸方向は等高線に並行する。平面形態は、長軸1.7m×短軸1.05mの楕円形である。断面形態は、深さ1.1mの台形である。中ほどにテラス状の平面を設け、そこから更に深く掘り下げている。埋土上部に第Ⅷ層(A.T)を含む。なお、遺物は出土しなかった。

(B類)

SC3 (第10図)

D-2区の平坦面で検出され、長軸方向は等高線に直交する。平面形態は、長軸0.85m×短軸0.8mの円形である。断面形態は深さ0.8mの台形である。埋土の中位には、第Ⅷ層(A.T)が含まれる。遺物は、埋土より石錘(第13図の17)が出土した。

SC5 (第10図)

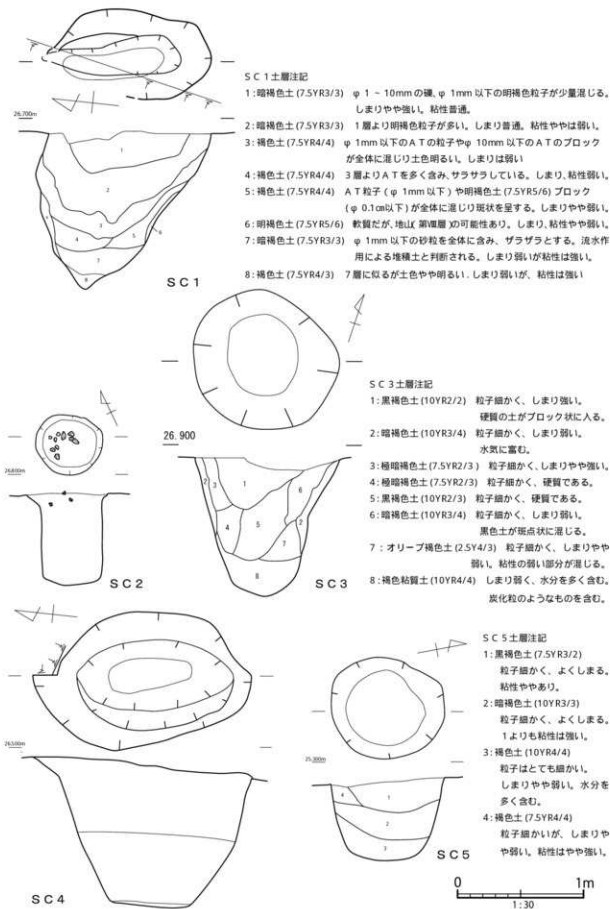
D-2区の平坦面で検出され、長軸方向は等高線に並行する。平面形態は、長軸0.9m×短軸0.8mの円形である。断面形態は深さ0.6mの台形である。埋土の下位には第Ⅷ層(A.T)が含まれる。なお、遺物は出土しなかった。

③ 土坑

土坑は1基、検出された。

SC2 (第10図)

D-1区の平坦面で検出された。平面形態は、直径0.5mの円形である。断面形態は深さ0.75mの長方形である。直径の小さい割には、掘り方は深い。検出面に礫の集中が認められ、埋土の中位には第Ⅷ層(A.T)が含まれる。なお、遺物は出土していない。



第 10 図 縄文時代早期陥し穴状遺構実測図

④ 炉穴

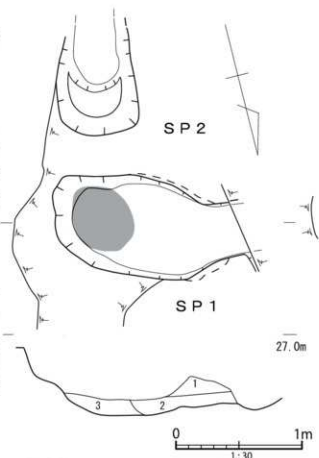
D-2区で2基の炉穴が発出された。2基は隣接しているが切り合いは見られない。第2次調査では、単独の炉穴をB群と分類して報告している。

SP1 (第11図)

攪乱により大きく上部が削平されていた。長軸15m+α、短軸0.8m、深さ0.3m+αを計る。長軸方向は東西をとるが、その西側は失われる。床面は第VI層(AT)で、焼土面は西端にある。焼土と炭化物は大量に広がる。なお、床面の張り出し(ブリッジの残存部)部分がわずかに見られた。

SP2 (第11図)

SP1と同様に攪乱により大きく上部が削平されている。長軸0.8m+α、短軸0.6m、深さ0.1m+αを計る。長軸方向は南北でSP1と直交する。長軸の南側は調査区外のため確認できなかった。床面は第VI層(AT)である。北側に段が見られ、足場の可能性もある。



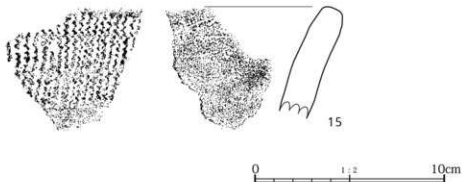
- 1: 極暗褐色土(7.5YR2/3) しまりやや強い、粘性弱い。
 2: 黒褐色土(7.5YR3/2) しまり強い、部分的に硬質なブロックが混じる。小さい炭粒と焼土が混じる。
 3: 褐色土(10YR4/6) 黒褐色ブロック焼土と炭の大きな固まり(1-2cm大)が混じる。しまりは強いが脆い。

第11図 縄文時代早期炉穴実測図

(3) 遺物

① 包含層出土の土器(第12図)

15は、深鉢の口縁である。口縁付近に間隔の狭い貝殻腹縁刺突文1段の下に、間隔の広い貝殻腹縁刺突文を2段施す。第2次調査分類ではA類に属する。



第12図 縄文時代土器実測図(1)

第3表 縄文時代土器観察表(1)

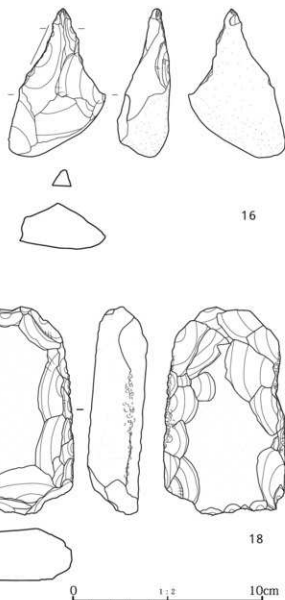
No	器種	部位	出土地点	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
15	深鉢	口縁部	D-1	貝殻腹縁刺突文、ナデ	ナデ	明黄(10YR7/6)	黄橙(10YR7/8)	3mm以下の白色粒を多く含む。 1.5mm以下の黒色光沢粒を多く含む。	

②包含層出土の石器(第13図)

16は流紋岩I類の二次加工剥片である。右側縁に背面からの調整を施す。先端部を錐状に加工している。背面に自然面を残す。

③遺構出土の遺物(第13図)

17はSC3に伴う遺物で、砂岩の石錘である。短軸の両端と長軸の左側縁を打ち欠いている。18はSP1から出土した砂岩の打製石斧である。礫を素材としている。刃部が欠損している。上左右縁部に背腹両面から加工が施されている。背腹両面に自然面を残す。17の砂岩よりも目が粗い。



第13図 縄文時代石器実測図

第4表 縄文時代石器計測表

No	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
16	二次加工剥片	流紋岩	第三層	7.85	5.10	2.40	78.8	先端部に摩滅
17	石錘	砂岩	SC3	4.10	6.75	1.25	53.0	
18	打製石斧	砂岩	SP1	11.00	6.40	2.70	310.8	

3 縄文時代後期の遺物

(1) 概要

縄文時代後期の遺物は、古墳時代の竪穴建物跡の埋土中から出土した土器が挙げられる。

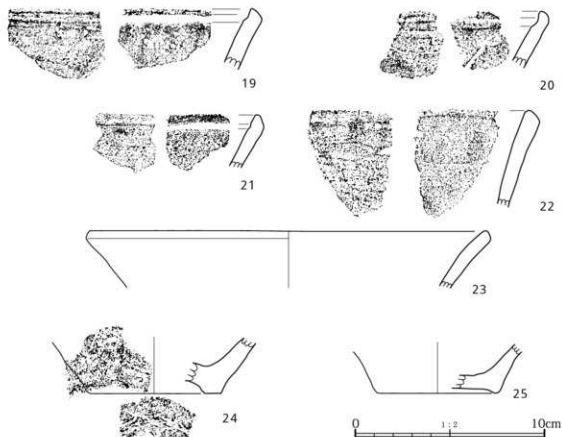
(2) 遺物

①土器(第14図)

19～21は、深鉢の口縁部である。いずれも平口

縁で口縁部内面に1本の沈線を施す。22は深鉢の口縁部である。平口縁で文様はない。23は深鉢の口縁部で外側に炭化物が付着している。

24・25は、深鉢の底部である。24は上げ底の底部である。底面からなだらかに斜め上方に伸びる。25も上げ底の底部である。24よりも接地面積が小さく、底面からなだらかに斜め上方に伸びる。



第14図 縄文時代土器実測図(2)

第5表 縄文時代土器観察表(2)

No	器種	部位	出土地点	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考 (法量:cm)
				外面	内面	外面	内面		
19	深鉢	口縁部	SA1 古墳時代	ナデ	沈線、ナデ	両褐(7.5YR5/8)	橙(7.5YR6/8)	1.5mm以下の黒、灰白色粒をまばらに含む。	
20	深鉢	口縁部	SA1 古墳時代	ナデ	沈線、ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	2mm以下の褐色粒・1.5mm以下の乳白色粒を少し含む。	
21	深鉢	口縁部	SA1 古墳時代	ナデ	沈線、ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	微細な浅黄橙粒と黄橙粒を少し含む。	
22	深鉢	口縁部	SA1 古墳時代	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	両赤褐(5YR5/6)	微細な浅黄橙粒を少し含む。1mm以下の褐灰粒を少し含む。	
23	深鉢	口縁部	SA1 古墳時代	ナデ	ナデ	赤褐(5YR4/8)	両赤褐(5YR5/8)	1mm以下の灰色粒をわずかに含む。	炭化物付着
24	深鉢	底部	SA1 古墳時代	工具によるナデ、ナデ	工具によるナデ、ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1mm以下の黄橙粒・2mm以下の透明粒を多く含む。	直径(7.0)
25	深鉢	底部	SA1 古墳時代	ナデ	ナデ	両赤褐(5YR5/6)	両赤褐(5YR5/6)	2mm以下の赤褐、灰褐、灰色粒を多く含む。	底径(6.2)

4 古墳時代の遺構と遺物

(1) 概要

D-1区の道路の舗装部分を除去後、第三層で竪穴建物跡1軒が検出された。

(2) 遺構

① 竪穴建物跡

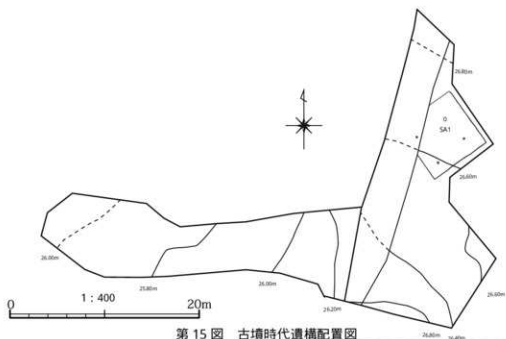
SA1(第16図)

竪穴部の北西隅部を道路により失う。平面形は

6.5m×6.5mの方形である。竪穴建物に伴う主柱穴は4本が確認できる。P4からは根石や根固め石と考えられる礎が出土した。

また、遺構埋土2層上面で炭化材が検出された(炭化材の詳細は自然科学分析結果参照)

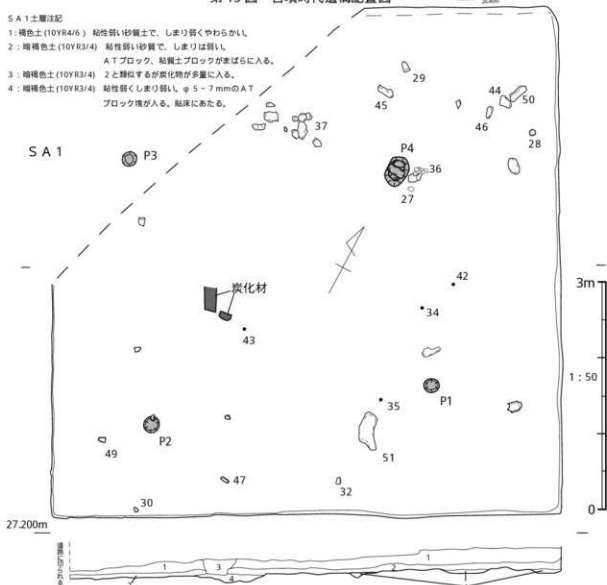
遺物は、床面で土師器(壺、高坏脚部)や台石が出土している。また、縄文時代後期の遺物(土器、石器類)も出土している。



第15図 古墳時代遺構配置図

SA1土層注記

- 1: 褐色土(10YR4/6) 粘性弱い砂質土で、しまり弱くやわらかい。
- 2: 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱い砂質で、しまりは弱い。
ATブロック、粘質土ブロックがまばらに入る。
- 3: 暗褐色土(10YR3/4) 2と類似するが炭化物が多量に入る。
- 4: 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱くしまり弱い、φ5-7mmのAT
ブロック塊が入る。陥床にあたる。



第16図 古墳時代竪穴建物跡(SA1)実測図

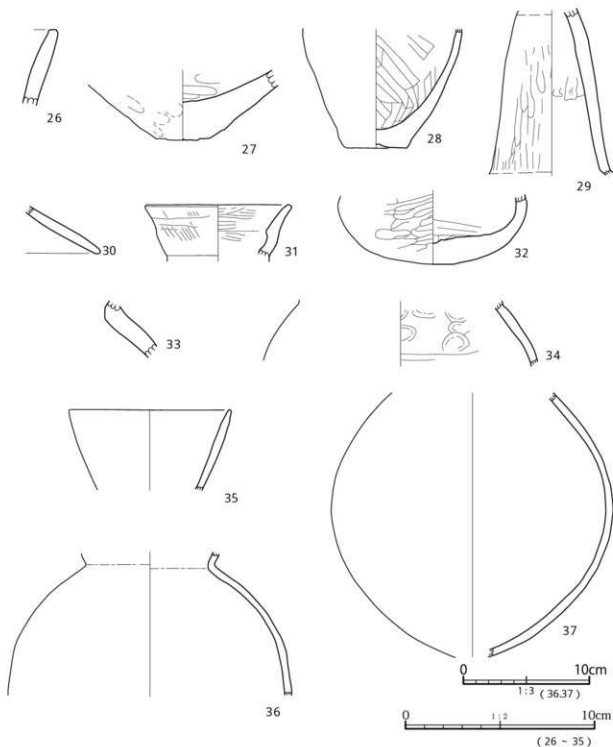
(3) 竪穴建物跡出土の遺物

①土器(第17図)

26・27は土師器の甕である。26は口縁で、27は底部である。

28は鉢の胴部から底部である。29と30は高坏である。29は脚部で丁寧なミガキがある。内側にシボリ痕を消す工具痕が残り、その後になデ調整が見ら

れる。30は裾部である。丁寧なミガキがある。31は壺の口縁部である。口縁から頸部が残存する。32～37は壺である。32は底部である。内面に外側から中心に向かってなデた跡が明確に残る。33は頸部であり34は口縁部から胴部、35～37までは頸部～胴部である。



第17図 古墳時代竪穴建物跡(SA1)出土土器実測図

第6表 古墳時代土器観察表

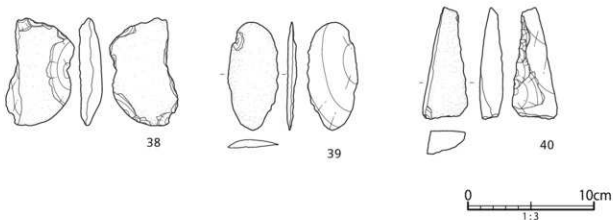
№	器種	部位	出土地点	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考 法量 (cm)
				外面	内面	外面	内面		
26	甕	口縁部	SA1	工具による横ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	明黄褐 (10YR7/6)	2mm以下の灰赤、黒、灰白色粒を多く含む。	炭化物付着
27	甕	底部	SA1	指押さえナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	4mm以下の灰、灰褐、赤褐色粒を多く含む。	底径 (2.9)
28	鉢	胴部	SA1	短ナデ、横ナデ	ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (7.5YR7/6)	5mm以下の灰赤色粒を多く含む。	底径 (3.0)
29	高坏	胴部	SA1	ミガキ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	淡黄橙 (10YR8/6)	1mm以下の灰色粒を少し含む。	
30	高坏	底部	SA1	ミガキ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (7.5YR8/8)	透明で微細な光沢のある粒を多く含む。2mm以下のにぶい橙色粒を少し含む。	
31	壺	口縁部	SA1	斜方向のナデの後に横ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	1mm以下の灰、白色粒を多く含む。黒色粒を多く含む。	内面に横口径 (7.6)
32	壺	底部	SA1	横方向ミガキ	工具ナデ	淡黄 (2.5YR8/2)	淡黄橙 (10YR8/4)	2mm以下の灰白色粒を少し含む。3mm以下の暗灰黄粒、明赤褐色粒を多く含む。	
33	壺	胴部	SA1	横ナデ	ナデ	黒褐 (5YR3/1)	黒褐 (5YR4/6)	2mm以下の灰赤色粒を多く含む。	
34	壺	口縁部	SA1	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/6)	微細な黒褐色粒を多く含む。微細な灰白色粒を少し含む。	胴部最大径 (10.0)
35	壺	胴部	SA1	ミガキ	指押さえ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黄橙 (7.5YR8/8)	1mm以下の明赤褐色粒を多く含む。微細な灰白色粒を少し含む。	口径 (8.6)
36	壺	胴部	SA1	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (7.5YR7/6)	3mm以下の明褐色粒を少し含む。1mm以下の橙褐色、淡黄褐色粒、灰白色粒を多く含む。	
37	壺	胴部	SA1	たたきの痕跡有り	風化のため調整不明	橙 (2.5YR6/8)	灰黄褐 (10YR5/1)	2mm以下の明黄褐色粒、1mm以下の淡黄褐色、灰白色粒、褐色粒を多く含む。	胴部最大径 (22.4)

②石器 (第18～20図)

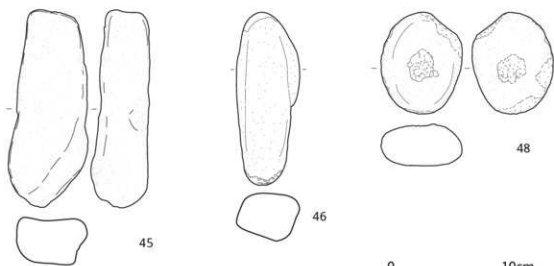
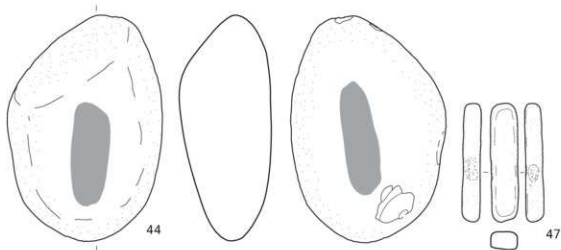
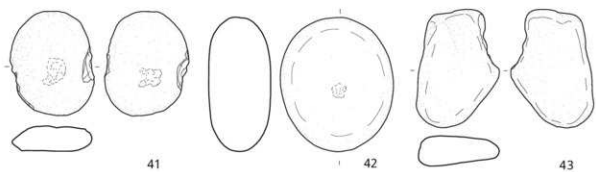
38・39は砂岩の二次加工剥片である。右側縁に背腹両面から調整を施す。40は砂岩の二次加工剥片である。左右両側縁に背腹両面からの調整を施す。

41は砂岩の石錘である。赤褐色の楕円礫である。短軸の両端を打ち欠いている。表・裏面中央部に敲打痕が認められる。42は尾鈴山酸性岩類の磨石である。表・裏面ともに磨痕が残る。表面中央にわずかに敲打痕が見られる。

43・44は砂岩の磨石である。43は裏面に磨痕が残り、44は表面に磨痕が筋状に広範囲に残る。45・46は砂岩の磨石・敲打石である。45は裏面に磨痕とわずかな敲打痕が残る。46は上・下面に敲打痕が明瞭に残り、表面に磨痕が残る。47～51は砂岩の敲打石である。47は表・裏面ともに敲打痕が残る。48は表面中央部と側面に敲打痕が明瞭に残る。49は表面中央部に敲打痕が残る。50は裏面に敲打痕が残る。51は砂岩の台石である。表面に使用痕が明瞭に残る。



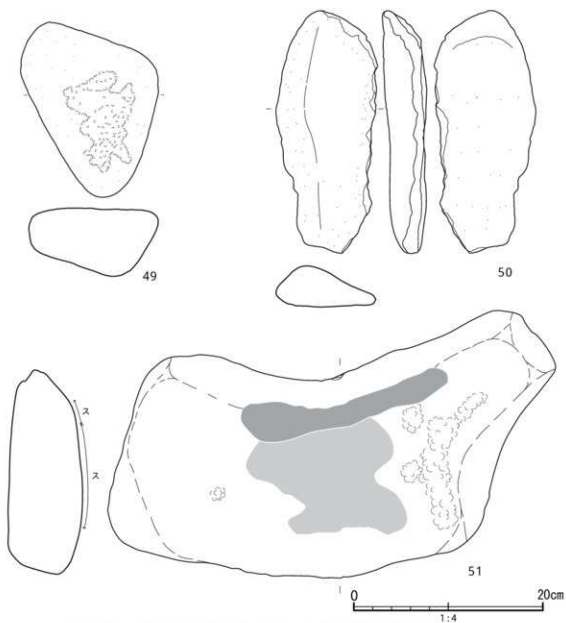
第18図 古墳時代竪穴建物跡 (SA1) 出土石器実測図 (1)



0 10cm
1:3 (41 - 43·47·48)

0 20cm
1:4 (44 - 46)

第 19 图 古墳時代豎穴建物跡 (SA 1) 出土石器実測図 (2)



第20図 古墳時代竪穴建物跡(SA1)出土石器実測図(3)

第7表 古墳時代石器計測表

No	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
38	二次加工剥片	砂岩	SA1	8.65	5.40	1.80	85.6	
39	二次加工剥片	砂岩	SA1	8.55	4.00	0.70	24.4	
40	二次加工剥片	砂岩	SA1	8.90	3.50	1.80	58.6	
41	石鏃	砂岩	SA1	8.40	6.70	2.00	166.3	
42	磨石	尾鈴山酸性岩類	SA1	10.65	8.95	4.90	721.5	
43	石皿	砂岩	SA1	9.40	6.60	2.40	206.5	
44	敲石	砂岩	SA1	24.00	16.55	9.80	4732.7	
45	磨石・敲石	砂岩	SA1	20.55	8.45	5.00	1365.5	
46	磨石・敲石	砂岩	SA1	18.40	6.70	5.00	791.2	
47	敲石	砂岩	SA1	9.45	2.25	1.35	56.7	
48	敲石	砂岩	SA1	8.10	6.40	3.30	234.8	
49	台石	砂岩	SA1	18.80	14.60	7.20	2097.7	
50	台石	砂岩	SA1	25.70	10.75	4.35	1360.2	
51	台石	砂岩	SA1	47.50	27.90	8.00	13600.0	

5 中世の遺構

(1) 概要

D-1区の道路舗装分を剥いで遺構検出を行うと、第Ⅲ層面で掘立柱建物跡を1棟確認した(第21図)。遺物は、陶磁器が数点出土している。

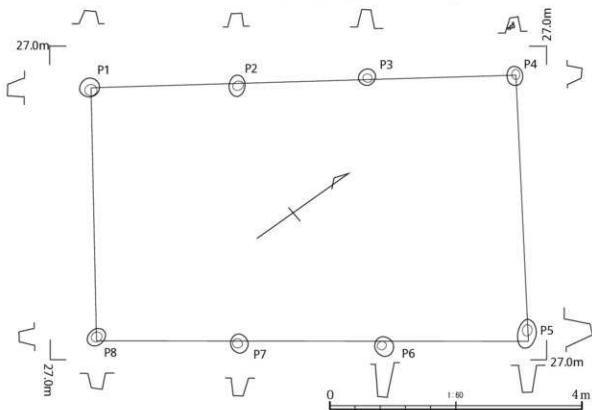
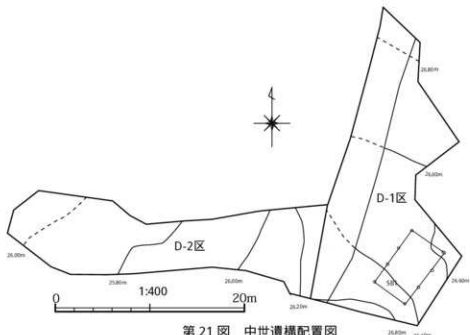
(2) 遺構

① 掘立柱建物跡

S B 1(第22図)

主軸は北から40度東に振れる。梁行1間(約4m)桁行3間(約6m)で、身舎面積は24m²を測る。柱穴は2m間隔の均整のとれた配置となる。P3から根石や根固め石と考えられる礎が出土した。

S B 1の時期は、遺物が伴わないため推定は困難だが、柱間隔から中世に属すると考えられる。



第22図 中世掘立柱建物跡実測図

6 その他の遺物

①D-1区出土(第23図)

52はSB1のP8から出土した、土師器甕の口縁部である。埋土に混入した可能性が高い。

53は、中国龍泉窯の青磁皿の体部である。54は肥前の陶器鉢で施釉で刷毛目装飾が施される。55は肥前染付皿の底部で、高台側面に二重界線を描く。

②D-2区出土(第24-25図)

56は土師器高坏の脚部である。57と58は土師器甕であり工具によるナデが見られる。T5トレンチで出土した。調査区外に遺構がある可能性が高い。

59は肥前の磁器で丸文が施されている。

60、61は、チャート製の石鑑である。60は平面形態が正三角形で基部に挟りがあるもの(第2次調査ではB1類)である。脚部の先端が平坦面を作る。

61は平面形態が砲弾型・五角形で基部に挟りがあるもの(同C1類)である。62はチャートの尖頭状石器である。全面に加工を施し、丁寧なつくりである。

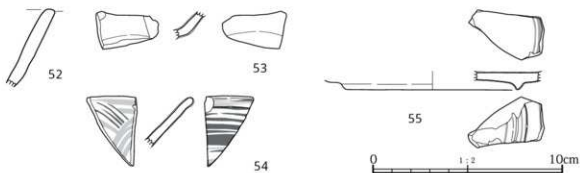
63は尾鈴山酸性岩類の二次加工剥片である。左側縁部は脛縁から、右側縁部は背面から調整を施す。

64は馬の鞞(しりかゝい)である。一部欠損しているが長さ約5cm、直径約1.2cmで形状は円筒形をなし、両端部分は若干内側に湾曲している。側面部分の曲面がやや平坦になるように整形されている。

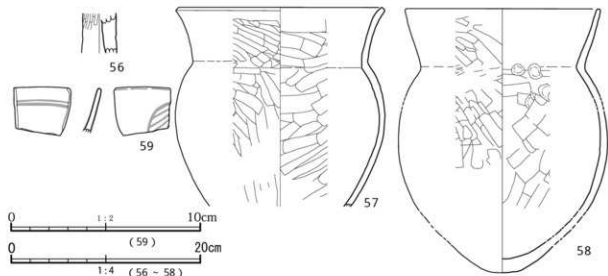
この遺物は、宮崎県立西都原考古博物館の藤木聡氏によると、鹿児島地方の方言で「ウンマン シッゲ」と呼ばれる馬の鞞(しりかゝい)の一部であるという。本県では、本城跡や宮鶴第1遺跡で類別がある。

65、66は表面採集の遺物である。65はキセルで、雁首部分は2.3cm、火皿の径1.6cmで、火皿の厚さ0.1cm、吸口側端の径0.6cm、吸口側端の厚さ0.1cmを計る。雁首部分は一部欠損している。材質は、全体的に緑青が生じているので銅と考えられる。

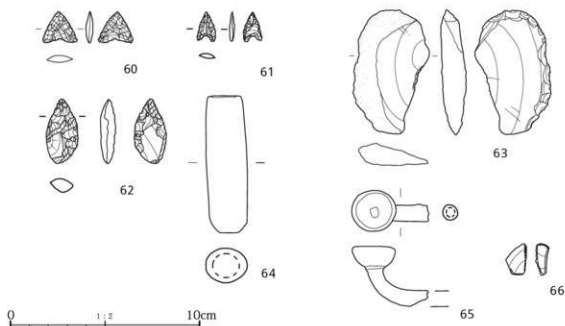
66は太田井産チャートの火打ち石である。使用時のつぶれが明瞭に残る。



第23図 その他の遺物(D-1区出土)実測図



第24図 その他の遺物(D-2区出土)実測図(1)



第25図 その他の遺物（D-2区出土）実測図（2）

第8表 その他の遺物観察表（土器類）

№	器種	部位	出土地点	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
52	甕	口縁部	SB1	工具によるナデ	ナデ	明赤褐 (5YR5/8)	明赤褐 (5YR5/8)	1mm以下の黒、灰、白色粒を多く含む。	
53	青磁皿	体部	D-1	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	緑灰 (7.5GY6/1)	緑灰 (7.5GY6/1)	黄灰 (2.5Y7/2)	
54	陶器皿	口縁部	D-1	回転ナデ 施釉 文様あり	回転ナデ 施釉 文様あり	灰白 (5Y7/2)	灰白 (5Y7/2)	灰白 (5Y5/4)	
						にぶい黄橙 (10YR4/3)	にぶい黄橙 (10YR4/3)		
						黒 (10YR2/1)	黒 (10YR2/1)		
55	磁器皿	底部	D-1	回転ナデ 施釉 文様あり 施釉は ぎ	回転ナデ 施釉 文様あり 二重の 界線見込み	灰白 (2.5GY8/1)	灰白 (2.5GY8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	
						青灰 (10BG6/1)	青灰 (10BG6/1)		
						暗青灰 (10BG4/1)	暗青灰 (10BG4/1)		
56	高坏	脚部	攪乱	旋方向ミガキ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の灰、白色粒を多く含む。	
						褐灰 (7.5YR5/1)	褐灰 (7.5YR5/1)		
57	甕	口縁- 胴部	攪乱	口縁... 工具による 横ナデ 胴部... 工具による 斜めナデ 底部... 工具による 板ナデ	工具による横斜ナ デ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	4mm以下の赤褐色粒を多く含む。	
58	甕	口縁- 底部	攪乱	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	4mm以下の明褐色粒を多く含む。4mm以下の褐灰色粒を少し含む。	スス付着
59	磁器碗	口縁	攪乱	回転ナデ 施釉 文様あり	回転ナデ 施釉	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	
64	鉄製瓶	完形	表採			灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	

第9表 その他の遺物計測表（石器）

№	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
60	石鏃	チャート	D-1	1.60	1.80	0.35	0.8	
61	石鏃	チャート	D-1	1.55	0.95	0.25	0.4	
62	尖頭状石器	チャート	D-2	3.40	1.65	0.70	4.8	
63	二次加工剥片	尾鈴山酸性岩類	D-2	9.20	5.60	1.60	84.0	
66	火打ち石	チャート	D-2	1.65	1.10	0.70	1.3	太田井産と考えられる

第5節 自然科学分析の結果

(1) 分析の目的

第3次調査区は道路部分による削平や耕作により、土層の堆積が乱されている関係で、遺構は表土直下で検出された。

そこで、遺構出土の炭化物の自然科学分析を通して、遺跡の当時の植生や遺構の詳細な年代などの有用な情報を得ることで当時の様相をより詳細に復元するために自然科学分析を行った。

この自然科学分析では、竪穴建物跡から出土した炭化材を対象として、住居跡の年代確認のための放射性炭素年代測定と、木材利用を明らかにするための樹種同定を委託した。

(2) 試料と分析方法

①試料

試料は、竪穴建物跡(SA1)から出土した炭化材1点である。同じ試料を分割して、年代測定試料と樹種同定に供する。

②分析方法

(a) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。

その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)500℃(2時間)で加熱する。

液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデ

ム加速器をベースとした14CAMS専用装置(NEC Pelletron 95DH2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて δ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)68%に相当する年代である。測定年代は、 δ 13Cの値を元に同位体効果の補正を行う。また、補正年代値を利用して暦年校正を実施する。

暦年校正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730 \pm 40年)を校正することである。暦年校正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年校正プログラムや暦年校正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表すこととする。暦年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and P J Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。また、試料が炭化材であることから、北半球の大気中炭素に由来する校正曲線を用いる。

暦年校正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(b) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柱目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴等については、島地・

伊東(1982)および Wheeler 他(1998)を参考にする。また、各分類群の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(3) 分析の結果

(a) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1、暦年較正結果を表2、暦年較正曲線を図1に示す。SA1から出土した炭化材の補正年代は、 $1870 \pm 30BP$ を示す。また、測定誤差を σ として計算させた暦年較正値は、calAD79 ~ 209である。

(b) 樹種同定

炭化材はクリ近似種に同定された(表1)。解剖学的特徴等を記す。

・クリ近似種 (cf. *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

試料はいずれも薄い板目板状を呈する。年輪界で割れており、早材部の大部分を欠く。年輪界部分に翌年の道管壁が僅かに残っており、比較的径の大きな道管と考えられることから環孔材と判断される。晩材部の小道管は、多数が集まって紋様状あるいは火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同生、単列、1 ~ 15細胞高。

以上の特徴からクリが最も近いが、よく似た組織を有する環孔性放射孔材のシイ属や、環孔材で複合放射組織を有するコナラ節の可能性もあるため、クリ近似種とする。

(4) 建築部材と古環境の復元

竪穴建物跡SA1は、第III層上面から検出されており、床面は一辺約65四方の方形を呈し、床面から土師器や台石等が出土しており、出土遺物から古墳時代前期の遺構とみられている。炭化材は、住居中央部のやや南寄りの床面から出土しているが、用途・部位等の詳細は不明である。

炭化材の暦年較正結果は、cal79 ~ 209であり、住居の推定年代より古いのが、樹齢の問題等を考慮すれば同程度の結果といえる。

この炭化材は、クリ近似種に同定された。クリや

よく似た組織を有するコナラ節は、落葉広葉樹であり、木材は重硬で強度の高い材質を有する。一方、シイ属は、常緑広葉樹のツブラジイとスタジイがあるが、強度的にはクリやコナラ節より劣るとされる(平井,1996)。

宮崎県内では、野田町八田遺跡(延岡市)で弥生時代後期~古墳時代初期の住居跡から出土した炭化材にアカガシ亜属、シイ属、シャシャンボ、ツバキ属、モッコク等の常緑広葉樹が確認されているが、クリやコナラ節などの落葉広葉樹は確認されていない(大塚,1978a)。

一方、熊野原遺跡および前原北遺跡(宮崎市)と大萩遺跡(野尻町)では、アカガシ亜属、タブノキ属、ハイノキ属等の常緑広葉樹と共に、ハンノキ属、クヌギ節、クリ、コナラ節等の落葉広葉樹が確認されている(大塚,1975,1984)。

薄糸平遺跡(高千穂町)では、ミズキ属やカエデ属などの落葉広葉樹を主体としており、常緑広葉樹はニッケイ属が1点確認されたのみである(大塚,1978b)。

これまでの結果をみると、より標高の高い地域で落葉広葉樹が多くなり、標高が比較的低い地域で常緑広葉樹が多くなる傾向がある。これは、現在の植生とも調和的であり、樹種構成の違いは遺跡周辺の植生を反映したものと考えられる。

今回の炭化材は、クリの他にコナラ節やシイ属の可能性が考えられるが、いずれもこれまで弥生時代後期~古墳時代の竪穴住居跡出土炭化材に確認されている樹種であり、今回の結果はこれまでの調査結果とも矛盾しない。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京大木質科学研究所。
平井 信二,1996,木の百科 解説編,朝倉書店,･･････
伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I.木材研究・資料31,京大木質科学研究所 81-181。
伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II.木材研究・資料32,京大木質科学研究所 66-176。
伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III.木材研究・資

科,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

大塚 誠,1975,住居址木材炭化物の樹種.「大萩遺跡(2)」,宮崎県教育委員会,15-18.

大塚 誠,1978a,住居跡木材炭化物.「野田町八田遺跡」,延岡市教育委員会,28-32.

大塚 誠,1978b,住居跡木材炭化物の樹種.「薄糸平遺跡」,高千穂町教育委員会,71.

大塚 誠,1984,住居跡出土の木材炭化物.「宮崎学園都市住居跡出

土の木材炭化物」,宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ,59-66.

島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler EA,Bess P.and Gasson PE.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler EA,Bess P.and Gasson PE(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第 10 表 自然科学分析の結果

遺構	試料名	種類	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
SA1 (竪穴建物跡)	炭化物	炭化材	クリ近似種 cf. <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	1,870 ± 30	-27.20 ± 0.64	1,910 ± 30	10191-1	IAAA-81060

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

試料名	補正年代 (BP)	σ	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.		
			cal AD	79	-	cal AD	139	cal BP			1,871	-
SA1	1,874 ± 28	σ	cal AD	155	-	cal AD	168	cal BP	1,795	-	1,782	0.110
			cal AD	195	-	cal AD	209	cal BP	1,755	-	1,741	0.118
			2 σ	cal AD	72	-	cal AD	222	cal BP	1,878	-	1,728

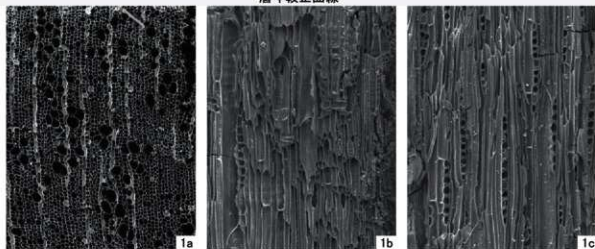
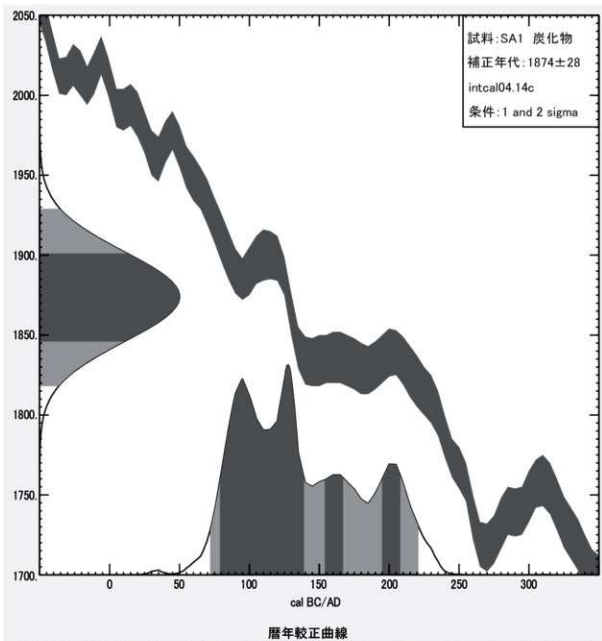
1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and Pj Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、2 σ は 95%である

5) 相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



1. クリ近似種 (SA1:炭化物)
a:木口, b:柃目, c:板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

第 26 図 自然科学分析の結果

第6節 小結

板平遺跡第3次調査は、第2次調査と同じように旧石器時代から縄文時代早期・後期、古墳時代中期、中世までの遺構や遺物が確認されている。自然科学分析のデータでもほぼ第2次調査と同様である。古環境の復元については第2次調査の報告書を参照されたい。以下に時代ごとに説明する。

旧石器時代

A T火山灰層下位の褐色粘質土層で、ホルンフェルスと流紋岩とチャート製の剥片と石核が出土した。

流紋岩については、第2次調査と同様に五ヶ瀬川流域で見られる火成岩と類似している。

縄文時代早期

今回の調査区では、集石遺構2基と陥し穴状遺構4基、炉穴2基が検出された。

集石遺構は、削平により一部壊れ加っている。1基(SI2)は中世のビットによって切られており、集石遺構の礎を根固め石として使った可能性もある。

陥し穴状遺構は、平面形態が楕円形のもの2基、円形のもの2基である。楕円形のは、ともに中ほどにテラス状の平坦面を設け、そこから更に深く掘り下げているという特徴を持つ。

炉穴は、SP1において第2次調査と同じくブリッジの痕跡が見られた。

縄文土器は、口縁部付近に貝殻腹縁刺突文を3段施す深鉢が1点出土した。いわゆる「政所式土器」に類似する考えられる。石器は、流紋岩製の二次加工剥片が1点と陥し穴状遺構1基から砂岩の石錘1点、炉穴1基から砂岩の打製石斧が出土した。

縄文時代後期

遺構は検出されなかったが、古墳時代の竪穴建物跡(SA1)の埋土中より当該期の縄文土器が得られた。その内訳は、深鉢の口縁部が5点、底部が2点である。これらの土器群は、口縁部内面に沈線を有することや底部は上げ底状をなすことからいわゆる「三万田式土器」の様相をもつ。第2次調査でも同様な土器が出土している。

古墳時代中期

竪穴建物跡(SA1)1軒が検出された。一部道路に切られているが6.5m×6.5mの方形である。柱穴を4本確認した。出土した土器群の形態的特徴は、古墳時代中期でも前半に位置づけられるので、竪穴建物跡もこの時期に帰属すると考えられる。

竪穴建物跡埋土中の炭化材は、放射性炭素年代測定の結果、AD79～209年となる。出土遺物の年代とは調的ではない。

中世

遺構は、掘立柱建物跡(SB1)が確認された。第2次調査の特徴は①柱穴の径約30cm、②庇をもたない、③3間×1間の割合が多い、④身舎面積は15～25㎡、⑤桁行の柱間は2m前後⑥梁間が桁行の約1.5倍の6点を上げている。第3次調査の遺構もその6つの特徴に全てあてはまる。

遺物は、龍泉窯の青磁が出土している。

まとめ

第3次調査は480㎡と面積は狭いが、第2次調査と同様の遺構と遺物を確認することができた。

この調査区は、東九州自動車道建設範囲の西端に位置するので、調査区外にも旧石器時代～中世にかけての遺構や遺物が広がる可能性を強く示唆する。なお、本書の第IV章にて、第1～4次調査全体の調査成果がまとめられている。

【参考文献】

東京大学出版会 2003『新編 火山灰アトラス』
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大坪遺跡』
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第79集

第三章 第4次調査の記録

第1節 基本層序

1 E区の土層堆積状況

E-1・2区の北側の谷部において、表土直下に第Ⅱ層（二次アカホヤ）の堆積が見られた。第Ⅲ層（暗褐色土）・第Ⅳ層（暗褐色土）は約0.4～0.7mで谷の下部ほど厚くなり、第2次調査の谷部と同様に、小礫が混じていた。はっきりとした第Ⅵ層（AT）が見られなかった。第Ⅶ・Ⅷ層は0.4m程の厚みで第Ⅸ層に達した。

E-1・2区の南側では、表土直下は第Ⅲ～Ⅶ層であり、南に行くほど第Ⅶ層が露出するようになった。農耕等の影響を強く受けている範囲と思われる。ここでは、ATは第Ⅶ層上面に時折ブロック状に見られる程度であるが、E-2区南側では層として確認できるところもあった。

E-3区では、表土直下は第Ⅳ層であり、明確な

第Ⅴ・Ⅵ層の堆積が見られた。その下の第Ⅷ層が1m以上の厚さであることを確認した。

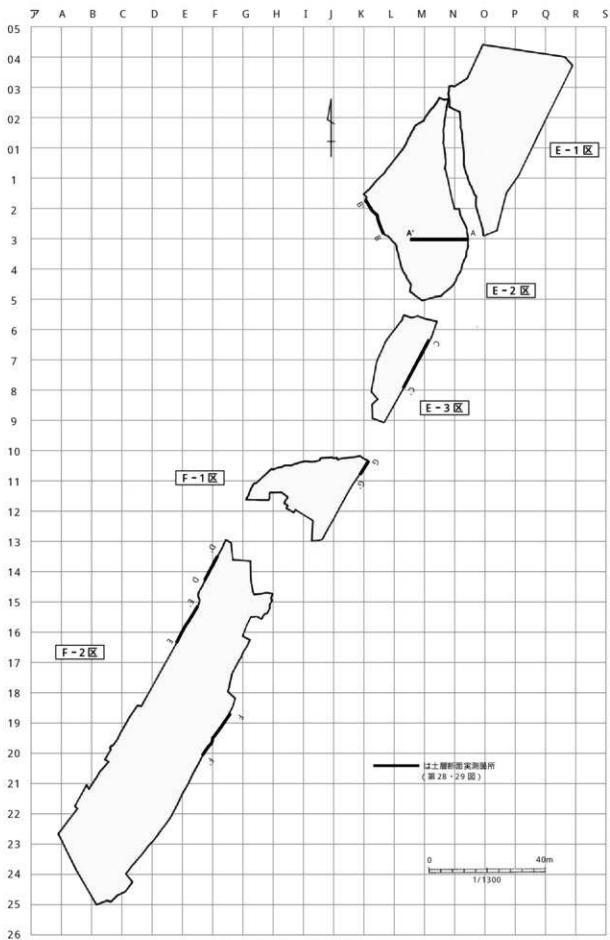
2 F区の土層堆積状況

F-1区の表土直下は第Ⅲ・Ⅳ層であり、明確な第Ⅴ層（白斑ローム層）・第Ⅵ層の堆積が見られた。その下の第Ⅶ・Ⅷ層はそれぞれ約0.4m・0.6mほどの厚みで、第Ⅸ層に達した。

F-2区では、表土直下は主として第Ⅱ～Ⅳ層であった。E18グリッドやSC48(土坑)SA12(竪穴建物跡)周辺では第Ⅱ層の良好な堆積が見られた。第Ⅲ・Ⅳ層は、場所によっても違うが、それぞれ概ね0.1～0.3mほどの厚みで堆積していた。全体的に第Ⅴ・Ⅵ層は良好に残存しており、その下の第Ⅶ・Ⅷ層はそれぞれ0.4～0.6mの厚みで第Ⅸ層に達した。F-2区の南端、SE8(溝状遺構)より南側では、表土直下で礫層が露出した。F区の数箇所で大いなる風倒木の痕跡が見られ、順層の逆転が見られた。

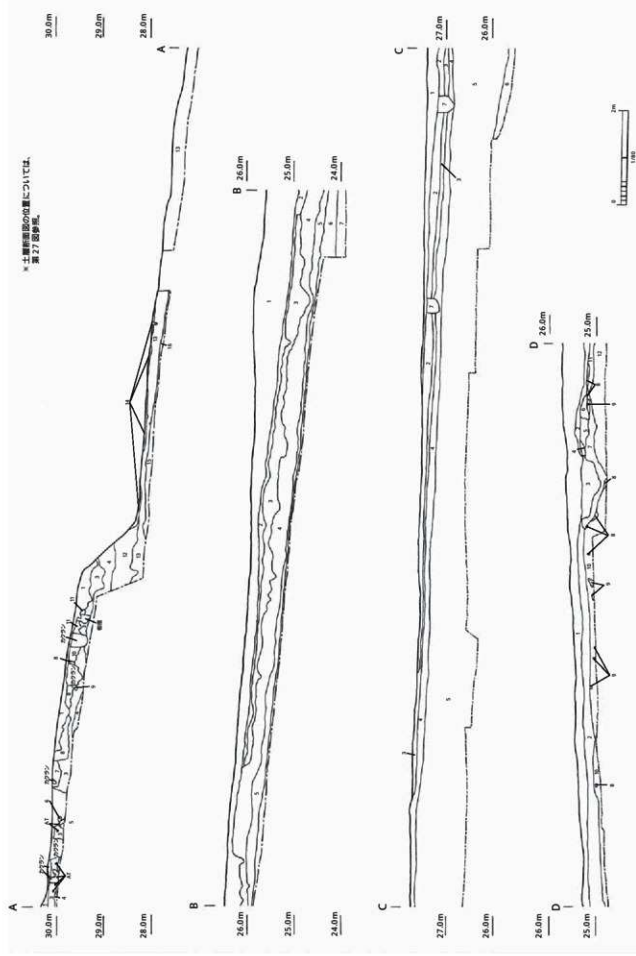
第11表 基本層序

層No	層名	特徴
I	表土	10Y R3/4 暗褐色土。粘性はない。固くしまる。φ 5mm 程度の角礫を多く含む。現在の耕作土。
II	二次堆積アカホヤ火山灰土	7.5Y R7/8 黄褐色土。粘性はない。しまりはややある。10Y R3/3 暗褐色土が混ざる。アカホヤ火山灰土の二次的堆積物。
III	暗褐色土層	10Y R3/4 暗褐色土。粘性ややある。しまりがある。(縄文時代早期相当層)
IV	褐色土層	10Y R4/6 褐色土。粘性は第Ⅲ層に比べて強い。しまりがある。
V	白斑ローム層	10Y R3/2 黒褐色土。粘性なし。非常に硬くしまり、10cm 程度のブロック状の呈をなす。φ 2mm 以下の白色のガラス質粒子を含む。
VI	始良T n火山灰層	10Y R5/8 黄褐色土。粘性なし。しまりなし。
VII	小礫混じり褐色粘質土層	10Y R4/6 褐色土。粘性ややあり比較的やわらかい。AT粒子が混ざるためサクサクしている。第Ⅵ層と第Ⅷ層の漸移層にあたる。(後期旧石器時代相当層)
VIII	褐色粘質土層	10Y R4/6 褐色土。粘性が非常に強い。固くしまる。最大4～5cmの小角礫を多く含む。
IX	礫層	10Y R4/4 褐色土。粘性非常に強い。固くしまる。φ 0.5cm～10cm 大の礫を多く含む。



第27図 グリッド配置図

*土層断面図の0層については、
第27図参照。



第28図 土層断面図(1)

第2節 調査の方法及び経過

平成21年5月18日から調査に着手する。調査対象面積は8500㎡である。

調査の便宜上、第1～3次調査区に引き続き、調査区をE区(4330㎡)・F区(4170㎡)に区分した。

グリッド杭は、国土座標を基準とし10m間隔で設置した(第27図)。

表土を重機で除去後、二次アカホヤ(第II層)～褐色土層(第IV層)で遺構検出を行い、その後第II～IV層を掘り下げ、縄文時代以降の調査を行った。調査区は以前、果樹園や畑であり、樹根や耕作に伴う溝など、至る所にて攪乱を受けていた。

その後、トレンチを設定し、第VII～VIII層を掘り下げ、旧石器時代の調査を行った。F-1区では、第VII層から旧石器が多く出土したため、ほぼ全域において第VII層の掘り下げを行い、改めてトレンチを設定し、第VIII層の掘り下げを行った。

遺物包含層中の遺物は、平板実測により位置を記録して取り上げたほか、グリッド一括等により取り上げた。遺構内の遺物は遺物出土状況図として記録して取り上げたほか、埋土一括で取り上げた。

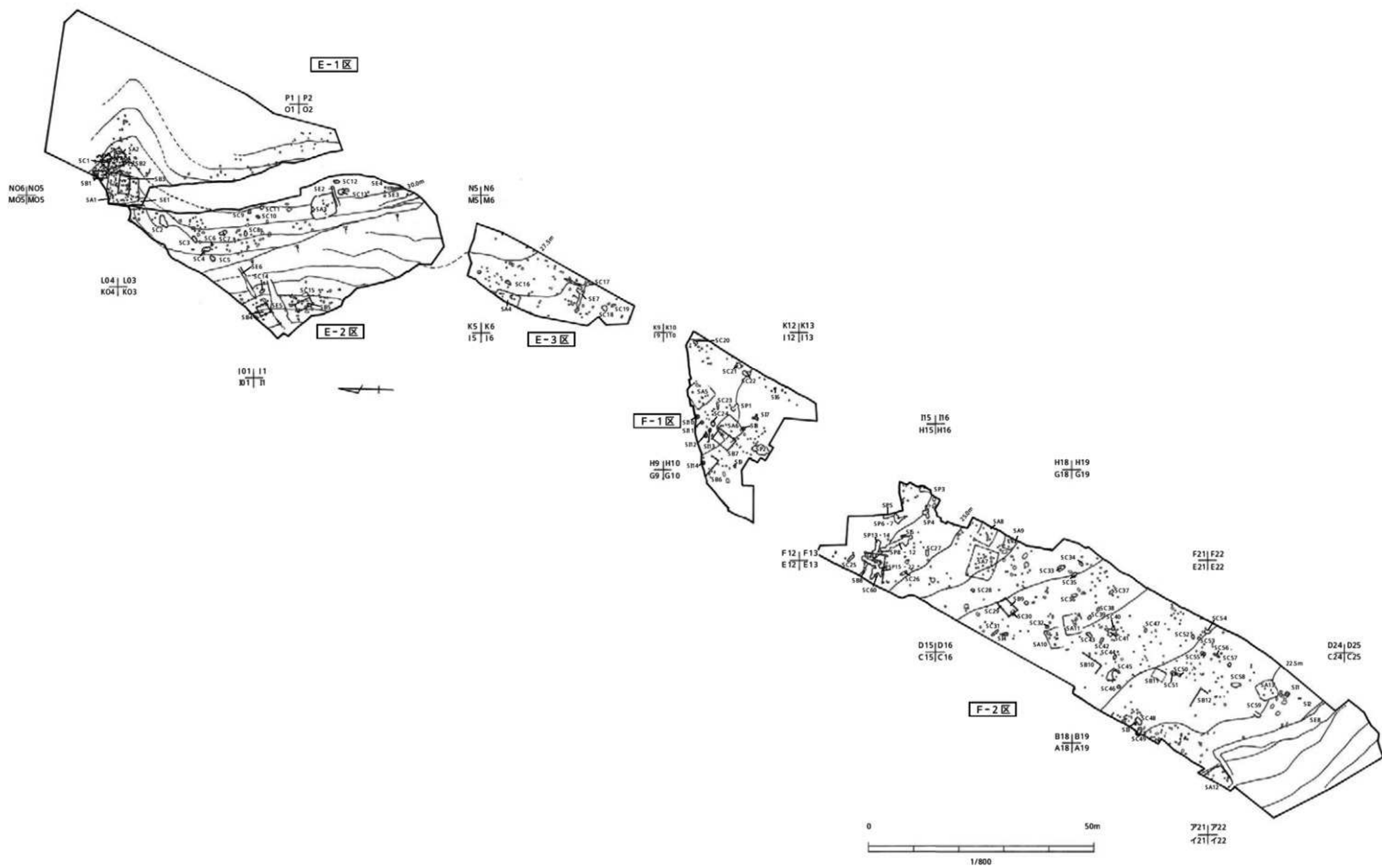
遺構実測図は集石遺構については1/10で、その他の遺構は原則として1/20で記録した。写真記録は主として35mmモノクローム・リバーサル写真及びデジタルカメラを併用し記録した。

調査日誌抄

H21.05.18 第4次調査開始。

- 05.19 草・竹木伐採作業(～0520)。
- 05.21 重機による表土除去(E-1・2区、F-2区の一部:1回目)開始(～0526)。E-1区においてトレンチ調査。駐車場の整地。
- 05.22 事務所等の設置完了。
- 05.28 測量杭設置(1回目)。
- 05.26 E-1区で土師器片が複数出土した地点で竪穴建物跡(SA1)検出。
- 06.01 作業員(26名)によるF-2区の掘削開始。
- 06.02 F-2区で遺構とみられる複数のしみ検出。
- 06.09 F-2区で縄文時代早期の土師器片出土。
- 06.11 F-2区で4軒の竪穴建物跡(SA7～10)検出。

- 06.12 F-2区で切り合う炉穴群(SP15～20)検出。
SA7で土師器が集中して出土。
- 06.15 F-2区で単独の炉穴(SP4)検出。
- 06.16 F-2区で集石遺構(SI4)検出。
- 06.19 F-2区で竪立柱建物跡1棟(SB1)確認。
- 06.22 F-2区で杭痕とみられる深い穴をもつ陥し穴状遺構(SC50)検出。
- 06.25 F-2区炉穴群より縄文土器、石鏃出土。
- 07.04 空中撮影(1回目:遠景とF-2区を中心に撮影)。
- 07.07 F-2区と並行して、作業員によるE-2区の掘削を開始。
- 07.14 F-2区で鋼材撤去用通路設置のため一部埋め戻し。
- 07.15 F-2区で陥し穴状遺構(SC25)検出。
- 07.22 F-2区、鋼材撤去作業(～0725)。
- 07.27 F-2区、工事用道路付け替作業・表土除去(2回目、～0731)。
- 07.28 F-2区で竪穴建物跡(SA12)検出。
- 08.04 F-2区で炉穴(SP6・7)検出。
- 08.05 F-2区で集石遺構(SI1・2)検出。
- 08.11 表土除去(E区:3回目)開始(～0813)。F-2区の土師器片が集中して出土した地点で竪穴建物跡(SA13)検出。SA12より小型丸底甕出土。
- 08.17 E-2区の土師器片が複数出土した地点で竪穴建物跡(SA3)検出。
- 08.19 測量杭設置(2回目)F-2区で炉穴(SP5・8～10)集石遺構(SI5)検出。
- 08.26 天候に恵まれ、遺構掘削等が順調に進む。乾燥のため、水まきなどの対策を行う。
- 09.03 F-2区で集石遺構(SI3)検出。
- 09.06 発掘体験。参加者23名。
- 09.07 E-3区の掘削開始。竪穴建物跡(SA4)検出。
- 09.08 F区で表土除去(4回目)・工事用道路付け替え・駐車場整備作業開始(～0917)。E-3区で陥し穴状遺構(SC16・19)検出。
- 09.16 E-3区で旧石器調査終了。土層断面図作成。(E-3区調査終了。)



第 30 図 全体機構配置図

- 09.17 測量杭設置（3回目）、F-2区で竪穴建物跡（SA11）遺構とみられる複数のしみ検出（-09.24）うち3基は陥し穴状遺構と確認（SC36・37・56）。
- 09.24 F-1区の掘削開始。4基の集石遺構を検出。
- 10.07 台風18号接近。被害なし。
- 10.09 E-1区の掘削開始。F-1区第Ⅲ層上面で多数の礫を検出。
- 10.10 F-1区で竪穴建物跡（SA5）土坑5基検出。うち1基は陥し穴状遺構（SC23）。
- 10.14 F-1区で竪穴建物跡（SA6）検出、SA5からガラス小玉出土。集石遺構の検出が続き、F-1区で合計9基検出（-11.16）。
- 10.15 F-2区で旧石器調査終了、土層断面図作成。（F-2区調査終了。）
- 10.16 F-1区で炉穴（SP1）検出。
- 10.27 空中撮影（2回目：F-1区・E-2区）。
- 10.29 F-1区で旧石器調査（AT上面まで）開始。
- 11.04 F-1区で旧石器剥片出土。
- 11.11 E-1区で竪穴建物跡（SA2）検出、攪乱より銭貨（洪武通宝）出土。
- 11.16 E-1区、道路の一部付け替え作業。
- 11.18 F-1区、重機によるAT除去。E-2区で旧石器調査終了。（E-2区調査終了。）
- 11.19 F-1区で旧石器調査（AT下位層）トレンチより多数の旧石器剥片が出土、全面掘削に切り替え。
- 11.20 SA1床面付近で土師器高坏5点・甕2点・焼土・炭化材検出。
- 11.30 F区の調査終了区域で工事開始、駐車場を本線上に移動。
- 12.18 F-1区の旧石器調査終了、埋め戻し。（F-1区調査終了。）E-1区、道路復旧作業。
- 12.21 E-1区の旧石器調査終了。
- 12.22 器材搬出。作業員による作業を終了。
- 12.25 平面図、土層断面図作成終了。（E-1区調査終了。）
- H22.01.13 事務所等撤去完了確認、安全対策を行い、板平遺跡（第4次）の調査終了。

第3節 整理作業及び報告書作成

整理作業は、平成22年2月～11月の期間で行った。遺物の洗浄・注記を2・3月に、接合を4～6月に、実測・拓本・計測を7～8月に、トレースを9・10月に行った。

整理作業と併行して、図面レイアウト、文章作成、写真撮影を行った。

第4節 教育普及活動

現地調査での教育普及活動として、平成21年9月6日（日）発掘体験を実施した。参加者は日向市を中心に23名で、遺構・遺物の説明の後、水洗作業・掘削作業の体験を行った。

また、平成22年8月21日（土）に行われた「ひむかの歴史2010～遺跡発掘速報会～」の中で、「炎がもたらしたものを」をテーマに、炉穴と焼失した竪穴建物を中心に紹介した。



発掘体験の様子

第5節 調査の記録

1 旧石器時代の遺物

(1) 概要

第IV層までの調査を終えた後、トレンチを設定（第31図Ⅸ、第VI層A T）下位の第VII・VIII層の調査を行った。F-1区の東側のトレンチにおいて、遺物が多く出土したため、F-1区のほぼ全域にわたり第VII層を掘り下げ、第VII層で遺物が多数出土した地点については、第IX層上面までの掘り下げを行った。E-3区は、第2次調査で旧石器時代の遺物がまとまって出土した区域に近いので、広めにトレンチを設定し、第VIII層上面まで掘り下げたが、遺物の出土はなかった。

調査の結果、礫群などの遺構は全く確認できなかったが、遺物は合計253点出土した。

(2) 遺物

出土遺物253点のうち252点は、F-1区東側から出土したものであり、そのうち第VII層上面で4点、第VII層上面で3点、第VII層中で245点が出土した。F-1区の第VII層は平均0.4m程度の厚さであったが、上面から0.2mまでの浅い面から集中して出土し、第VII層を掘り下げるにつれて、遺物はほとんど見られなくなり、第VIII層では全く出土しなかった。

グリッドごとに見ると、I 11・I 12・J 11の3グリッドで特に集中して出土し、点上げた遺物の出土状況から考察すると、遺物は、第2次調査区との境に近いJ 12グリッド杭付近を中心とした直径約15mの半円を描くように集中して出土していることがわかる（第32図）。

253点の遺物を石材別に分類すると、珪質頁岩が241点、チャートが5点、流紋岩が4点、黒曜石・砂岩・頁岩が各1点である。

珪質頁岩は光沢のある黒色のものが半分程度であり、残りは部分的、全体的に茶色や淡黄色である。これは、もとは黒色であったものが主に風化の影響を受けたものと考えられるが、茶色のものの中で、

被熱によるとみられる剥落があるものについては、熱を受けて色が変わったものと考えられ、礫群で使用されたものである可能性もある。チャートは灰色であり、やや透明感があるものである。流紋岩は淡黄色で、第2次調査で出土しているものと同様であり、五ヶ瀬川流域で見られる石材と同種であろう。

また、器種ごとに分類すると、製品は計2点と少なく、剥片181点（うち二次加工剥片3点）、石核70点である。剥片は、ほとんどが珪質頁岩であり、流紋岩、チャート等も使用されている。石核はすべて珪質頁岩である。

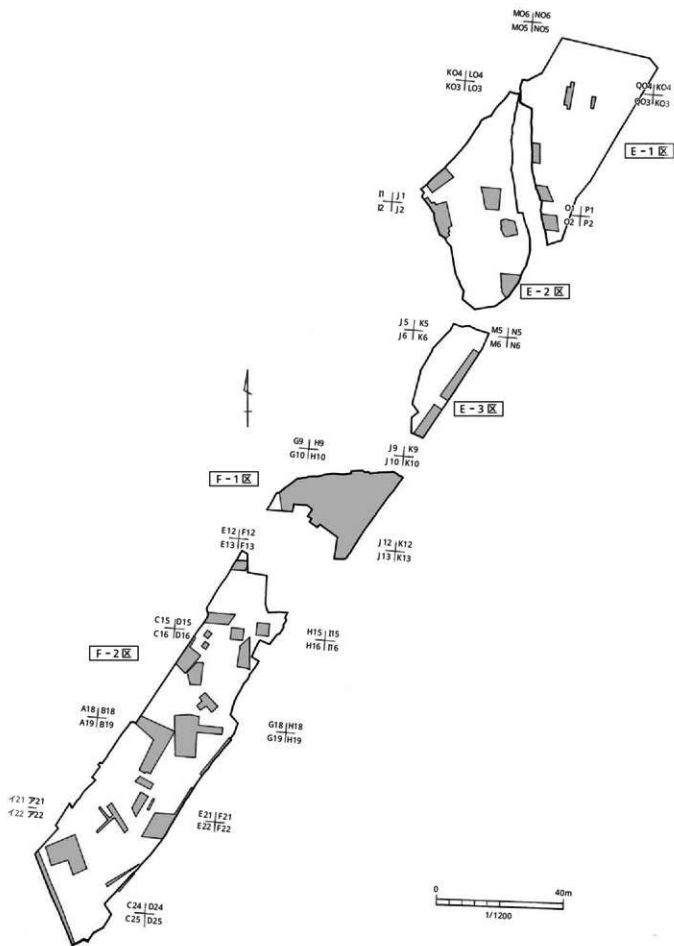
これらの遺物について接合を試みたが、剥片2点が接合したのみで、石核との接合は認められない。次に、図化した遺物について述べる。

67（第33図）は今峯型とみられるナイフ形石器である。この時代の遺物が集中して出土した区域から離れた、F-2区中央部のSA 11の埋土下部から出土したが、その形状などから旧石器時代のものであると判断した。淡黄色の頁岩製で、基部の両側に多数の剥離が見られる。刃部に筋理とみられる線が複数見られる。上部は欠損しており、もとの長さは約6cmと推定される。

68はチャート製の楔形石器である。縦長の形状で長さが12cmと、図化した旧石器の中では最も小さい。縦方向の剥離がみられ、特に裏面の上部では形の調整を行ったと考えられる細かな剥離が見られる。

69～71は珪質頁岩製の二次加工剥片である。69は第VII層の浅い層、70・71は第VII層上面の出土であり、比較的上位の層からの出土であるといえる。69は表面に自然面のある三角形の形状で、そのうち二辺には裏側からの剥離が見られる。70は五角形の形状で、うち三辺に微細剥離が見られ、上面には打面調整が見られる。71は横長剥片素材で、表面に広く自然面が見られ、下部に微細剥離が見られる。

72～78は珪質頁岩製の石核である。72～76には上部に打面調整が見られる。また、74・77・78には自然面が見られる。全体的に縦方向からの剥離が多いが、面によって横からの剥離が多いものもある。また、比較的大きな石核である74・77・78には大きめ



第 31 図 旧石器時代調査トレンチ配置図

の剥片を採取したと見られる剥離が見られるが、どの石核にも大小の剥離が多数見られる。

79～115は剥片で、79～110は珪質頁岩製である(第34図～第36図)。縦横の長さによる分類では、79～90が縦長剥片(12点)91～104が横長剥片(14点)105～110が幅広剥片(縦横の比率がほぼ同じのもの:6点)で、縦長剥片と横長剥片はほぼ同数であるといえる。また、32点中18点には自然面が見られるが、比較的大きい剥片にその傾向が見られ、小さい剥片には自然面が見られない。95～97には剥落が見られ、その周囲が茶色になっている。111は灰色のチャー

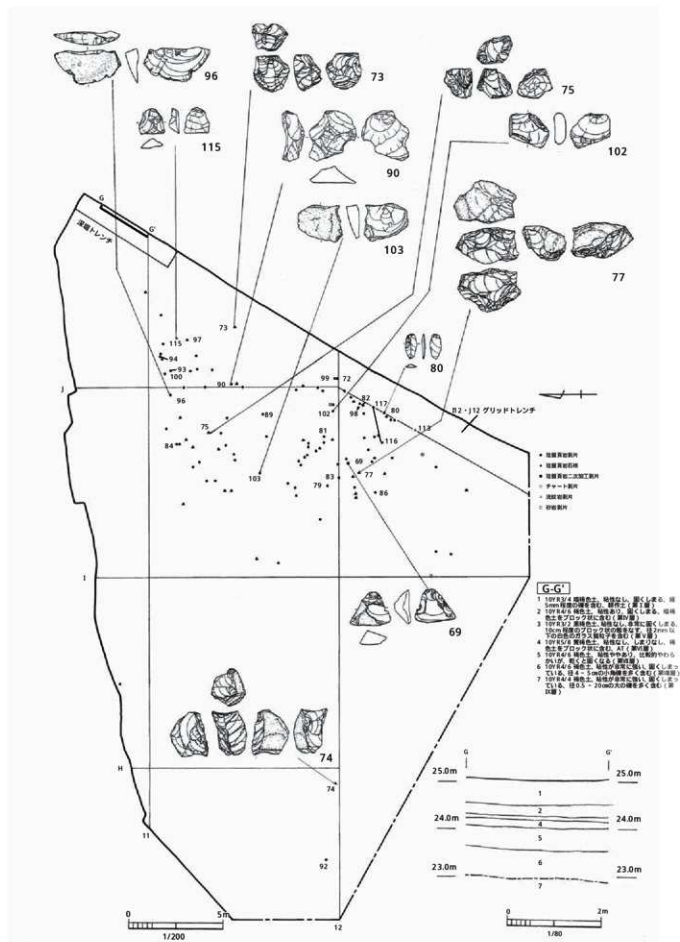
ト製、112は灰色から透明の桑ノ木津留産の黒曜石製であり、ともに縦長剥片である。113～115は流紋岩製である。自然面は見られず風化が進んでいるものとみられ、流理構造ははっきりしない。

接合資料1(第36図)は、上面、左面上部の剥離面が一致し、接合面のリングの向きが右上からであることから、まず上・左面で剥離がなされ、右上からの打撃で116と117に分割されたと考えられる。116と117はともに逆三角形の剥片であるが、右側面が一致しないことから、2つの剥片に分けられた後、意図せず割れたかさらに加工されたものと考えられる。

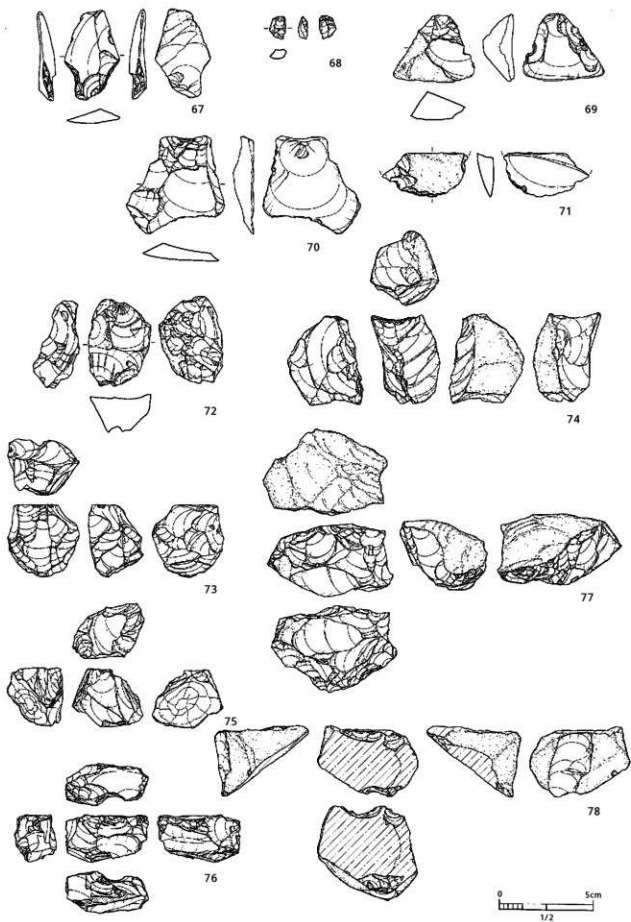
第12表 旧石器時代石器出土地点別器種・石材分類表

出土地点		楔形石器 チャート	二次加工 剥片		剥片				石核 珪質頁岩	合計
			珪質頁岩	珪質頁岩	チャート	流紋岩	黒曜石	砂岩		
F-1区	G 11 グリッド	0	0	1	0	0	0	0	1	2
F-1区	H 10 グリッド	0	0	1	0	0	0	0	0	1
F-1区	I 10 グリッド	0	0	8	0	0	0	0	6	14
F-1区	I 11 グリッド	0	0	43	0	1	0	1	12	57
F-1区	I 12 グリッド	0	1	27	2	1	0	0	7	38
F-1区	J 10 グリッド	0	0	16	0	1	0	0	11	28
F-1区	J 11 グリッド	1	0	29	1	1	0	0	11	43
F-1区	I 12・J 12 グリッドトレンチ	0	0	34	1	0	1	0	22	58
F-1区	壁沿い深掘りトレンチ	0	0	2	0	0	0	0	0	2
F-1区	第VII層	0	0	2	0	0	0	0	0	2
F-1区	第VII層上面	0	2	1	0	0	0	0	0	3
F-1区	第VI層上面	0	0	4	0	0	0	0	0	4
合計		1	3	168	4	4	1	1	70	252

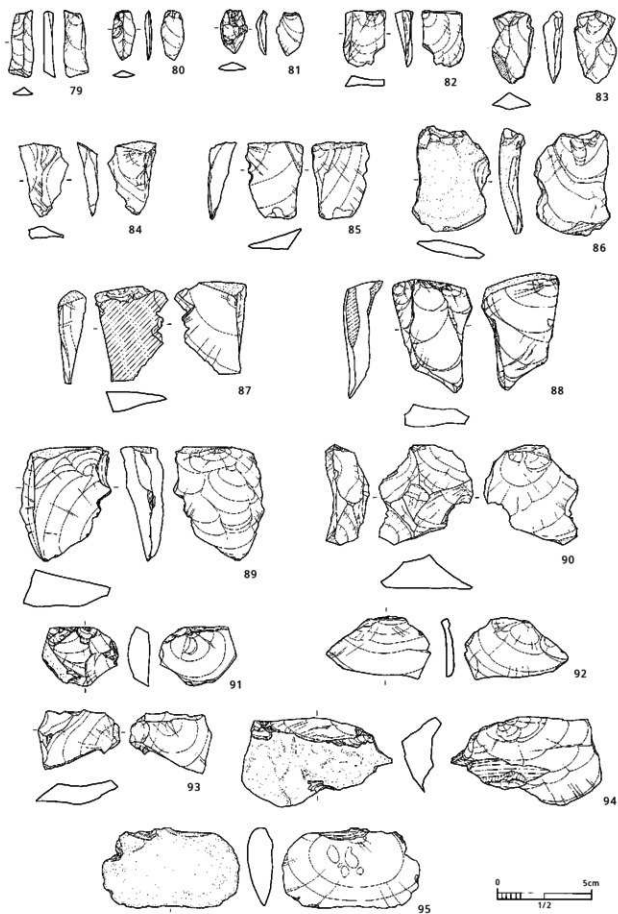
※ 他に、F-2区SA 11(竪穴建物跡)埋土中より1点(頁岩製ナイフ形石器)出土。



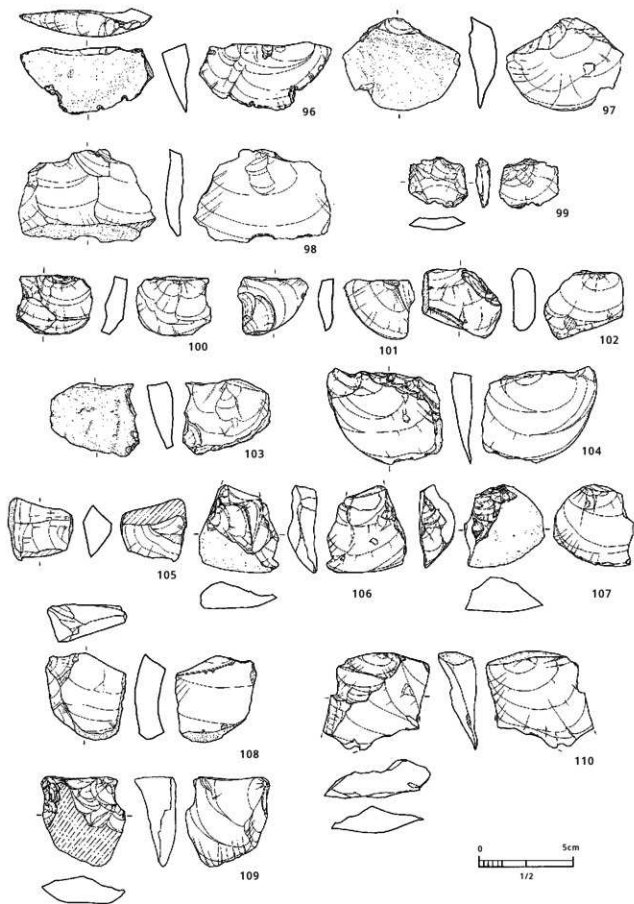
第 32 図 旧石器時代遺物分布図



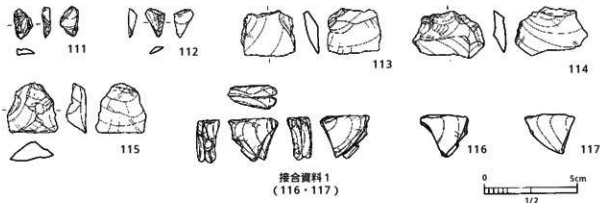
第 33 图 旧石器时代石器实测图 (1)



第 34 图 旧石器时代石器实测图 (2)



第 35 图 旧石器时代石器实测图 (3)



第 36 図 旧石器時代石器実測図 (4)

第 13 表 旧石器時代石器計測表

No	器種	石材	出土地点		計測値			取り上げ方法	備考	
			〔位置〕	〔層位〕	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			重量 [g]
67	ナイフ形石器	頁岩	SA 11	埋土	4.56	2.91	0.86	9.30	壁穴遺物跡より点上げ	縦長片素材, 今時点, 上方一部欠損
68	楔形石器	チャート	J11Gr	VE	1.20	0.85	0.50	0.60	一括	縦長の形状, 縦方向の割離
69	二次加工剥片	珪質頁岩	F-12Gr	VE	3.52	4.34	1.53	17.80	点上げ	やや縦長三角形剥片素材 両側面に二次加工痕
70	二次加工剥片	珪質頁岩	F-1区	VE上面	4.61	5.16	1.04	18.50	一括	やや縦長五角形剥片素材 右側面, 下部に二次加工痕
71	二次加工剥片	珪質頁岩	F-1区	VE上面	2.30	4.24	1.12	9.40	一括	縦長剥片素材 下部に二次加工痕
72	石核	珪質頁岩	J11Gr	VE	4.54	3.25	2.10	31.20	点上げ	正面: 上下からの縦長剥片割離 裏面: 小剥離多数
73	石核	珪質頁岩	J11Gr	VE	3.78	3.74	2.75	43.00	点上げ	正面: 上からの縦長剥片割離 裏面: 縦長剥片割離 打面調整あり
74	石核	珪質頁岩	G11Gr	VE	4.58	3.01	3.65	59.10	点上げ	正面: 上からの縦長剥片割離 側面: 自然面 打面調整あり
75	石核	珪質頁岩	F11Gr	VE	3.02	3.60	2.97	26.30	点上げ	正面: 縦長剥片割離 打面調整あり
76	石核	珪質頁岩	J11Gr	VE	2.46	4.35	2.12	25.50	一括	正面: 上からの縦長剥片割離 打面調整あり
77	石核	珪質頁岩	F12Gr	VE	3.71	6.32	4.15	103.00	点上げ	正面: 不定形割離 下部: 小剥離多数 上面: 自然面 打面調整なし
78	石核	珪質頁岩	F12-J12Gr T	VE	3.48	5.30	4.80	73.00	一括	正面: 擠埋面, 上から小剥片割離 裏面: 縦長剥片割離 打面調整なし
79	剥片	珪質頁岩	F11Gr	VE	3.52	1.37	0.55	2.20	点上げ	縦長剥片
80	剥片	珪質頁岩	F12Gr	VE	2.60	1.21	0.35	0.90	点上げ	縦長剥片
81	剥片	珪質頁岩	F11Gr	VE	2.30	1.44	0.55	1.40	点上げ	縦長剥片
82	剥片	珪質頁岩	F12Gr	VE	3.00	2.20	1.00	4.50	点上げ	縦長剥片
83	剥片	珪質頁岩	F12Gr	VE	3.79	2.06	1.04	6.80	点上げ	縦長剥片
84	剥片	珪質頁岩	F11Gr	VE	3.88	2.60	1.05	6.00	点上げ	縦長剥片, 上面に自然面
85	剥片	珪質頁岩	F-1区	VI上面	4.10	3.15	1.50	10.70	一括	縦長剥片, 上面に自然面
86	剥片	珪質頁岩	F12Gr	VE	5.50	4.00	1.30	24.30	点上げ	縦長剥片, 上面に自然面
87	剥片	珪質頁岩	J10Gr	VE	5.00	3.80	1.55	17.10	一括	縦長剥片, 上面に自然面
88	剥片	珪質頁岩	J10Gr	VE	6.10	4.10	2.15	34.00	一括	縦長剥片, 上面に自然面
89	剥片	珪質頁岩	F11Gr	VE	6.00	5.90	2.30	58.50	点上げ	縦長剥片, 上面に自然面
90	剥片	珪質頁岩	J11Gr	VE	5.30	5.00	2.33	44.40	点上げ	縦長剥片, 上面に自然面
91	剥片	珪質頁岩	F-1区	VI上面	3.15	4.05	1.20	18.28	一括	縦長剥片
92	剥片	珪質頁岩	G11Gr	VE	3.30	5.50	0.90	10.80	点上げ	縦長剥片
93	剥片	珪質頁岩	J11Gr	VE	3.10	4.40	1.19	14.80	点上げ	縦長剥片
94	剥片	珪質頁岩	J11Gr	VE	4.60	8.00	2.10	64.10	点上げ	縦長剥片, 正面に自然面
95	剥片	珪質頁岩	F12-J12Gr T	VE	4.25	7.25	1.34	42.60	一括	縦長剥片, 割離あり, 正面に自然面
96	剥片	珪質頁岩	F11Gr	VE	3.60	7.00	1.40	29.20	点上げ	縦長剥片, 割離あり, 正面に自然面
97	剥片	珪質頁岩	J11Gr	VE	4.91	6.21	1.45	39.30	点上げ	縦長剥片, 割離あり, 正面に自然面
98	剥片	珪質頁岩	F12Gr	VE	4.92	7.25	0.90	27.10	点上げ	縦長剥片
99	剥片	珪質頁岩	J11Gr	VE	2.61	3.12	0.70	5.90	点上げ	縦長剥片
100	剥片	珪質頁岩	J11Gr	VE	3.20	4.00	1.30	14.60	点上げ	縦長剥片
101	剥片	珪質頁岩	F12-J12Gr T	VE	3.09	3.74	0.94	10.10	一括	縦長剥片
102	剥片	珪質頁岩	F11Gr	VE	3.65	4.20	1.80	24.60	点上げ	縦長剥片
103	剥片	珪質頁岩	F11Gr	VE	3.90	4.65	1.30	22.10	点上げ	縦長剥片, 正面に自然面
104	剥片	珪質頁岩	F12-J12Gr T	VE	5.15	6.10	1.10	31.82	一括	縦長剥片, 右面に自然面
105	剥片	珪質頁岩	F12-J12Gr T	VE	3.30	3.45	1.63	18.60	一括	幅広剥片, 左面に自然面
106	剥片	珪質頁岩	J10Gr	VE	4.00	4.20	1.55	29.52	一括	幅広剥片, 正面に自然面
107	剥片	珪質頁岩	F12-J12Gr T	VE	4.35	4.30	1.90	33.74	一括	幅広剥片, 正面に自然面
108	剥片	珪質頁岩	F-1区	VI上面	4.65	4.20	2.05	36.60	一括	幅広剥片, 下面に自然面
109	剥片	珪質頁岩	J10Gr	VE	4.75	4.45	2.20	36.08	一括	幅広剥片
110	剥片	珪質頁岩	J10Gr	VE	5.15	5.65	2.00	33.02	一括	幅広剥片, 上面に自然面
111	剥片	チャート	J11Gr	VE	1.65	1.00	0.43	0.70	一括	縦長剥片
112	剥片	黒曜石	F12-J12Gr T	VE	1.50	1.05	0.50	0.30	一括	縦長剥片, 最も木澤館黒曜石
113	剥片	流紋岩	F12Gr	VE	2.45	2.88	0.75	4.90	点上げ	縦長剥片
114	剥片	流紋岩	F10Gr	VE	2.57	3.89	0.81	7.00	一括	縦長剥片
115	剥片	流紋岩	J11Gr	VE	2.67	2.69	1.07	6.40	点上げ	幅広剥片
接合資料 1		珪質頁岩	-	-	2.27	2.57	1.17	5.40	116 と 117 が接合したもの	上面は平らな割離面 116・117 は右側面からの打撃で割離か
116	剥片	珪質頁岩	F12Gr	VE	2.27	2.34	0.65	2.70	点上げ	幅広剥片
117	剥片	珪質頁岩	F12Gr	VE	2.15	2.57	0.52	2.70	点上げ	やや縦長剥片

2 縄文時代早期の遺構と遺物

(1) 概要

主に第Ⅲ～Ⅳ層において、縄文時代早期の遺構・遺物が確認された(第37図)。

F-1区では、表土直下の第Ⅲ層(暗褐色土)において、多数の礫が出土した。この礫に混じって、縄文時代早期の土器片や石器が出土した。散礫中には、集石遺構も確認され、F-1区だけでも9基の集石遺構が検出された。第Ⅳ層では、単独の炉穴2基が検出された。

F-2区では、散礫は見られず、5基の集石遺構が検出された。F-2区北側の第Ⅳ層では20基の炉穴が集中しており、うち17基は5群となり切り合っていた。炉穴中や周辺のピットを中心に、縄文時代早期の土器片や石器が出土した。F-2区中央部から南側にかけては、炉穴は検出されなかった。

E区においては、縄文時代早期の遺構は検出されなかった。包含層や土坑の埋土から少数ながら土器片や石器が出土した。

(2) 遺構

① 散礫(第38図)

今回の調査でも第2次調査に倣い、「集石遺構」とは、礫が1～15m以内ぐらいの範囲に、周辺より密に集まっている状態の遺構とし、比較的散らばった状態で広範囲に広がるものを「散礫」と定義した。

散礫を構成する礫の大半は砂岩である。富高川の河原でも見られることから、ここから持ち込まれたことも考えられる。ほとんどが破碎しており、赤化しているものも多く見られ、熱の影響を受けていると考えられる。散礫中の礫は合計1,788個、総重量204.7kgである。F-1区の集石遺構8基を構成する礫の総重量は238.0kg(SI9は検出当初土坑と考えていたため、礫の総重量は不明)であり、少なくとも合計440kgあまりの礫が遺跡外より持ち込まれたと考えられる。

散礫が見られる範囲は2箇所みられ、第2次調査で確認されたA・B群に引き続き、第4次調査ではC・D群と呼ぶことにする(第38図)。C群の礫は

約150個と少なく、比較的小さい礫が多い。その位置や、調査区境の壁でも多くの礫を検出したことから、第2次調査のA群とつながるものであると考えられる。C群の西には表土直下にアスファルト舗装道路跡があった。この道路によって第Ⅵ層(AT)上面まで削平されていたが、この道路から調査区東端までは、第Ⅲ層がほぼ削平されており、C群はこの第Ⅲ層の残っていた範囲で検出された。

D群は南北15m、東西10mの範囲に広がっている。特に北側調査区境で礫が密集しており、この範囲から集石遺構が4基集中して検出された。中央部でSA6(竪穴建物跡)と切り合い、北側調査区沿いでは風倒木1の影響を受けており、そこにも散礫や集石遺構があったと考えられる。礫の分布の状況から、散礫の範囲は、調査区の北側に広がる可能性がある。

C群とD群の間には、礫はほとんど見られなかった。これはSA5や風倒木2の影響を受けたとも考えたが、SA5や風倒木2に近づくにつれて礫が見られなくなることや、SA5と風倒木2の間に第Ⅲ層が残存しているにもかかわらず、礫がほとんど見られないことから、C群とD群はつながっておらず、D群の東端でいったんとぎれたと考えられる。

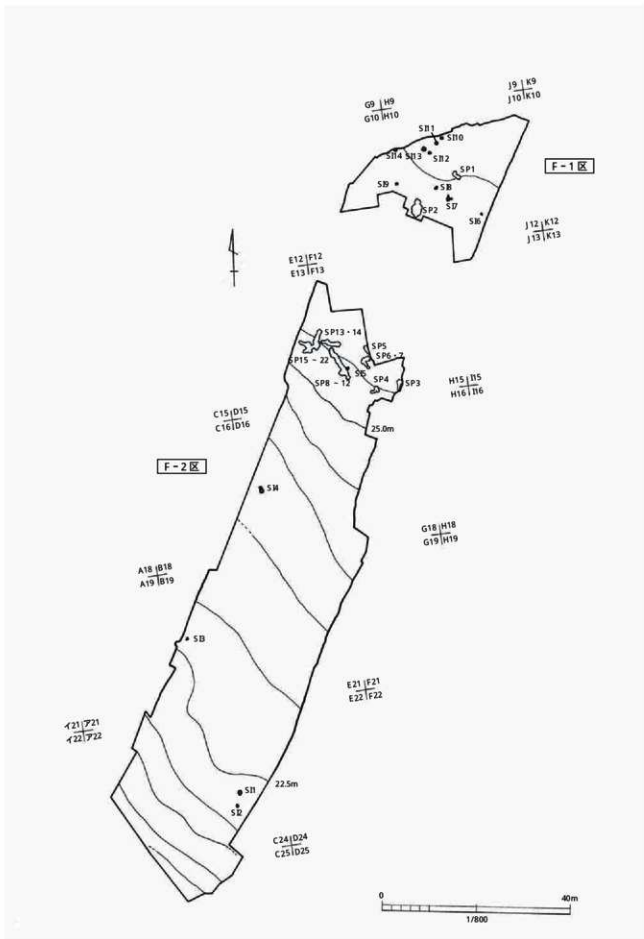
② 集石遺構(第14表)

合計14基の集石遺構が検出された。すべてF区からの検出で、特にF-1区の散礫の見られる範囲で多く検出されており、I11グリッド杭を中心とした半径3mの円の範囲内で4基検出された。F-2区の集石遺構5基は、集中せず散らばって検出された。礫はほとんどが砂岩で破碎しており、赤化しているものも多数見られた。半数以上で掘り込みがみられるが、配石を持つものは1基のみであった。

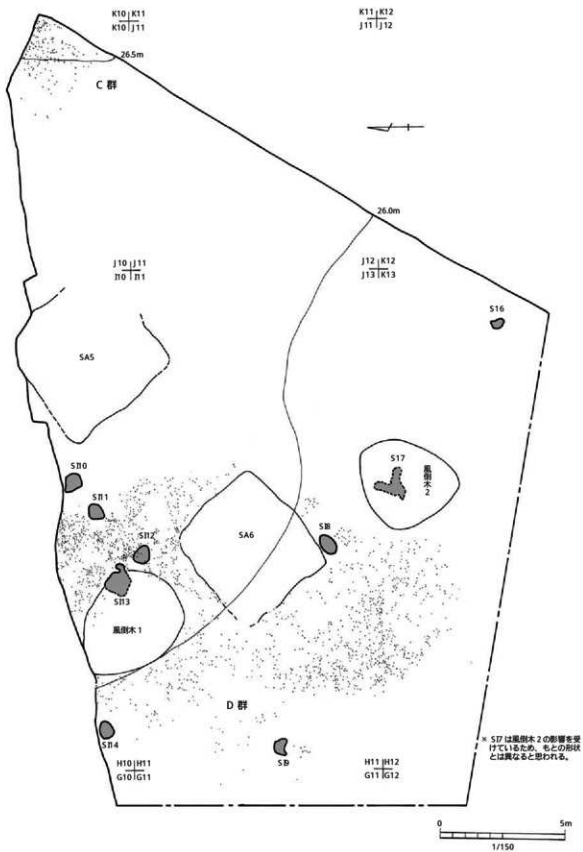
第2次調査に倣い、次のように分類した。ただし、SI7は風倒木の影響を受けているため、A-Cの分類の対象から外し、D類とした。

(集石遺構の分類)

- A類...掘り込みがあり、配石の有るもの(1基)
- B類...掘り込みがあり、配石の無いもの(6基)
- C類...掘り込みが無いもの(6基)
- D類...分類が困難なもの(1基)



第 37 図 縄文時代早期遺構配置図



第 38 図 散石分布図

〈A類〉

SI 8 (第 39 図)

表土直下の第Ⅲ層で検出された。北東側は竪穴建物跡 (SA 6) と切り合っており、およそ 1/3 は消失している。上部礫は 5 ~ 20cm 大であり、中央部に大きな礫がある。大半の礫は破砕、赤化している。配石は、中央に 30cm 大の礫を 3 つ置き、その横に 10cm 大の礫が配置される構造である。

〈B類〉

SI 1 (第 39 図)

第Ⅱ層上面で検出された。SI 2 と隣接しているが、他の集石遺構からかなり離れた位置にある。礫は破砕しており、赤化したものも散らばっている。やや疎である中央部分に、大きめの礫がみられる。礫の重量は約 90kg で、今回の調査では最大の重量である。礫の中から、敲石が 1 点出土した。埋土中の炭化材の樹種同定からアカガシ亜属との結果を得た。なお、この炭化材の¹⁴C年代測定の結果は、想定さ

れる遺構の年代とは齟齬をきたしている。

SI 3 (第 39 図)

第Ⅲ層で検出された。SI 1 同様、他の集石遺構からかなり離れている。礫は 10cm 大のものが多く、赤化しているものも見られる。

SI 6 (第 39 図)

第Ⅲ層で検出された。第 2 次調査で確認された集石遺構群と近い位置にある。礫は、10cm 大のものが多く、破砕や赤化が見られる。

SI 9 (第 39 図)

第Ⅲ層で検出された。F-1 区の集石遺構が集中しているところから、約 10m 離れた地点にある。礫は 20cm 大のものが 3 個、5 ~ 10cm 大のものが 1 個あまりからなり、破砕し、赤化しているものも見られる。握り込みは円形で、楕円形の落ち込みを切っている。

第 14 表 縄文時代早期集石遺構一覧表

遺構	出土位置 〔グリッド〕	検出面 〔層〕	集石範囲〔cm〕		握り込み〔cm〕			上部礫 密度	配石 有無	分類	礫重量〔kg〕	
			長径	短径	長径	短径	深さ				上部礫	配石
SI 1	C23	IV	111	104	85	76	10	密	×	B	90.0	-
SI 2	B24	IV	43	19	-	-	-	疎	×	C	-	-
SI 3	B20	III	65	62	81	73	10	普	×	B	-	-
SI 4	D17	III	135	88	-	-	-	密	×	C	55.0	-
SI 5	F15	IV	74	51	-	-	-	疎	×	C	-	-
SI 6	I12	III	57	45	61	43	19	疎	×	B	12.0	-
SI 7	I12	VII	124	112	253	246	44	普	×	D	53.5	-
SI 8	H11	III	85	61	60	32	13	普	○	A	27.5	23.5
SI 9	H11	III	62	56	98	82	36	普	×	B	-	-
SI 10	I10	III	80	65	105	104	12	普	×	B	32.0	-
SI 11	I10	III	78	74	97	65	18	普	×	B	17.5	-
SI 12	H11	III	81	80	-	-	-	疎	×	C	10.0	-
SI 13	H10	III	111	102	-	-	-	密	×	C	46.5	-
SI 14	H10	III	72	58	-	-	-	普	×	C	15.5	-

※ SI 5 は、のちの何らかの影響を受けており石が飛び散っていたため、もとの範囲と思われる範囲で計測。

※ SI 7 は風倒木中で検出。その影響を大きく受けているため、もとの範囲とは大きく異なると思われる。

※ SI 8 は竪穴建物跡 SA 6 と切り合っており、一部が消失したと考えられる。

SI 10 (第 39 図)

表土直下の第Ⅲ層で検出された。集石遺構が集中している範囲内にあり、SI 11 と隣接している。中央に 30cm 大の、隣に 20cm 大の礫が、その周辺に 5cm 程度の礫が散らばっている。礫は破碎・赤化している。

SI 11 (第 39 図)

表土直下の第Ⅲ層で検出された。SI 10 と隣接している。礫は 5cm 大のものが多く、破碎しており、中央部のものは赤化している。

(C 類)

SI 2 (第 40 図)

第Ⅱ層上面で検出された。掘り込みを持たない。礫の集中はあまり見られず、散らばったものも含め、30 個ほどの礫で構成されている。

なお、造成土直下で検出され、隣接する SI 1 より高い位置にあることから、人為的な活動の影響を受けたとも考えられる。

SI 4 (第 40 図)

第Ⅲ層で検出された。他の集石遺構からかなり離れたところに位置する。長径が 13m と比較的大きいものであるが、明確な掘り込みは見られない。礫はほとんど破碎、赤化しており、中央部がやや疎であるが、全体的に密集している。北側に延びるような形状をしているが、地山が局地的に北に約 0.3m 下っており、それに沿って礫が流れた可能性がある。

SI 5 (第 40 図)

第Ⅳ層で検出された。SP 9 (炉穴) と隣接している。SP 9 は、埋土に礫を多量に含んで検出されたが、礫を含むのは埋土上部に限られ、SI 5 の礫の下の高さよりやや低い程度であることから、SI 5 は SP 9 より後に作られ、SP 9 の埋没後、その上に礫が流れ、広がったと考えられる。SP 9 内の礫の方がかなり多いことから、もともとは規模の大きい集石遺構であったことが想定される。礫は破碎しているものが多く、赤化しているものもある。

SI 12 (第 41 図)

第Ⅲ層の散礫中で検出された。周辺より密に集まっているため、集石遺構であると認定した。SI 13 と隣接している。礫は破碎しており、赤化の見られるものもある。他のものと比較すると疎であるといえる。

・ SI 12 出土遺物 (第 41 図)

縄文時代早期の深鉢の口縁部 (118) が出土した。立ち上がりは、やや内湾気味で外面と端部に貝殻腹縁による刺突文がある。

SI 13 (第 40 図)

SI 12 と隣接して、散礫中で検出された。SI 12 と比較すると、規模が大きいが、礫は 20cm 大のものが数個あるほかは、5 ~ 10cm 大のものが多く、密度が高い。礫は破碎し、赤化しているものもある。

SI 14 (第 41 図)

第Ⅲ層で検出された。集石遺構が集中しているところから 5m ほど離れた地点にある。礫は 5 ~ 10cm 大で、破碎しており、中央部のものは赤化している。

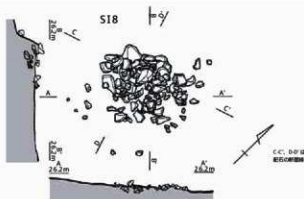
(D 類)

SI 7 (第 41 図)

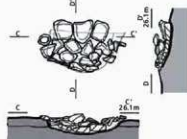
F-1 区の風倒木内の第Ⅲ層で検出。礫の集中範囲は、L 字型に曲がって、比較的大きく広がっている。掘り込みは礫の範囲と比べ、大きく広がり、深く、いびつな形をしている。礫は破碎し、赤化しているものが多いが、下部で見つかるものほどそうした傾向が見られる。また、礫は上部に大きめで平らなものが多く見られ、掘り下げるに従って、小さいものが多くなった。

このことから、本来は配石を伴った比較的大きい集石遺構で、風倒木の影響を受け、層ごとバックされたような状態で上下が逆転した可能性が高い。

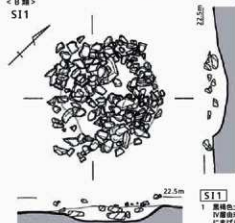
< A 類 >



S18 配石



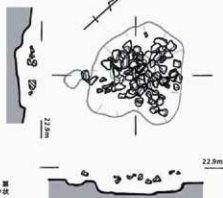
< B 類 >



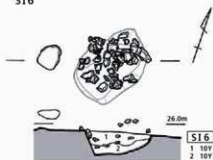
S11

1 凝結土、粘付、しまりともに無い、層IV層面中と認められる褐色土がブロック状にまばらに散らされる

S13



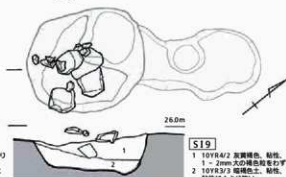
S16



S16

1 10YR4/4 凝結土、粘付、しまりあり
2 10YR4/4 凝結土、粘付は1層よりやや弱し、しまりあり、A-Tを数枚に10%程度含む

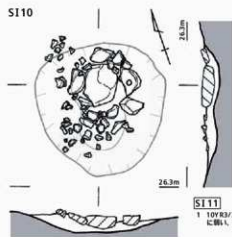
S19



S19

1 10YR4/2 凝結土、粘付、しまりともに無い、1-2mm次の褐色粘りをわずかに含む
2 10YR3/3 凝結土、粘付、しまりともに無い、粘付は1より強い

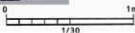
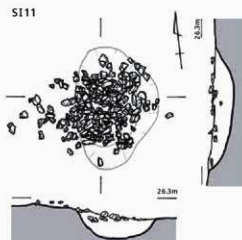
S110



S110

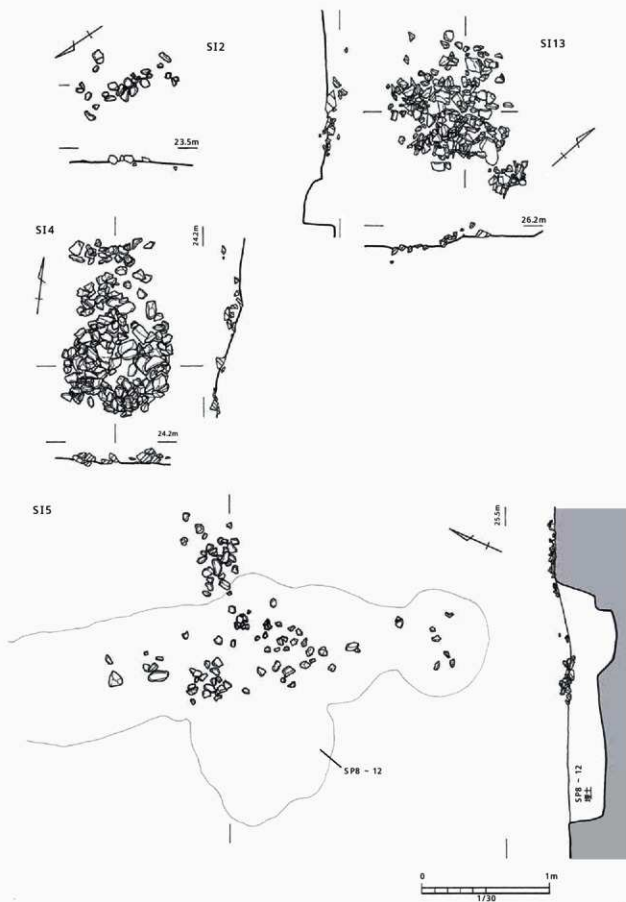
1 10YR3/3 凝結土、粘付、しまりともに無い、褐色ブロックをまばらに含む

S111



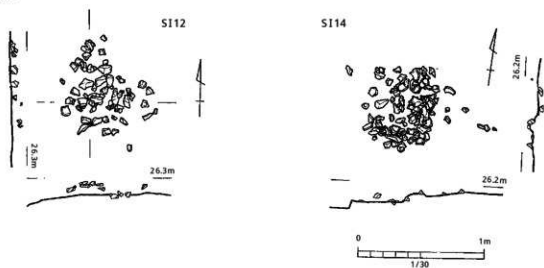
第 39 図 集石遺構実測図 (1)

< C 類 >

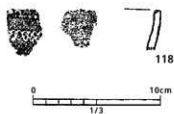


第 40 図 集石遺構実測図 (2)

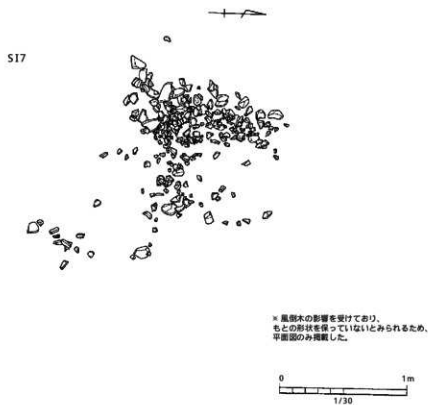
< C 類 >



S112 出土遺物



< D 類 >



第 41 図 集石遺構実測図 (3) 及び集石遺構出土遺物実測図

③ 炉穴（第15表）

F区の第IV層にて、切り合った炉穴が4群（17基）単独5基の計22基が検出された。炉穴の床面は、第VI層（A T）または第VII層上部であり、すべての炉穴で焼土が見られた。規模・形状は約2m×約1mの楕円形のものが多く見られた。

第2次調査に倣い、炉穴同士が切り合っているものをA類、単独のものをB類とする。

（A類）

S P 6・7（第42図）

表土直下の第IV層で検出された。掘削を進めるに従って、両者は第IV層の土を天井とするトンネル状の横穴で繋がっており、S P 6・7ともに焼土部分があることが判明した。断面の状況などから、両者は同時に存在したか、S P 6→S P 7の順に作られたと考えられる。床面は、ともに第VI層（A T）である。S P 6の平面の形状は直径約0.5mの円形である。焼土部分は中央よりややS P 7側に寄っている。

S P 7は焼土部分から東に約1.6m、南に約1.7m延びる、L字形の形状である。東側の床面はA Tま

たは白斑ロームで、外側に向けて少しずつ高くなっている。2方向の煙道を持つ炉穴であると思われるが、2つの煙道が同時期にあったのか、煙道を作り直したのかは判断できなかった。S P 7から、縄文時代早期の土器片が出土した。S P 7の焼土中から出土した炭化材の¹⁴C年代測定では、9,230±30年B P（B C 8,550 - 8,320年）樹種同定ではS P 6・S P 7から出土したものについて、どちらもクリとの結果が出ている。

S P 8～12（第42図）

S P 8～12の5基の炉穴が列状に切り合う形で検出された。S P 8・9・11は第IV層で、S P 10は方形の攪乱掘削中に、S P 12はS P 11の掘削中、下部壁面から床面でそれぞれ検出された。

検出時、S P 9の埋土正面に礫が多数検出していた状況は、前述S I 5の記述のとおりである。S P 9・10とS P 11の北半分の床面はA Tがブロック状に多く見られるが、S P 8・12とS P 11の南半分の床面はA Tがほとんど見られない小礫が混じった土で、第VI層下部から第VII層上部とみられる。断面の

第15表 縄文時代早期炉穴一覧表

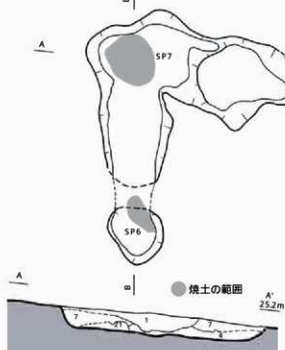
遺構	出土位置 〔グリッド〕	検出面 〔層〕	遺構規模〔m〕			床面 〔層〕	分類
			長径	短径	深さ		
S P 1	I 11	IV	1.9	1.0	0.3	VI	B
S P 2	H 12	IV	(4.0)	2.2	0.2	VI	B
S P 3	G 15	IV攪乱下	2.5	1.2	0.4	VII	B
S P 4	G 15	IV	2.0	1.5	0.3	VI	B
S P 5	F 14	IV攪乱下	1.9	(0.8)	0.3	VI	B
S P 6	F 15	IV	0.6	0.5	0.3	VI	A
S P 7	F 15	IV	2.4	0.8	0.3	VI	A
S P 8	F 15	IV	0.8	0.8	0.5	VII	A
S P 9	F 15	IV	(3.4)	0.9	0.3	VI	A
S P 10	F 15	IV	1.1	1.1	0.3	VI	A
S P 11	F 15	IV	(3.5)	0.9	0.5	VII	A
S P 12	F 14	IV	2.1	0.9	0.4	VII	A
S P 13	F 14	IV	2.2	1.0	0.4	VII	A
S P 14	F 14	IV	(2.1)	1.0	0.4	VII	A
S P 15	F 14	IV	(2.0)	1.0	0.3	VII	A
S P 16	E 14	IV	(2.1)	1.0	0.4	VII	A
S P 17	E 14	IV		0.7	0.5	VII	A
S P 18	E 14	IV	2.3	0.7	0.5	VII	A
S P 19	E 14	IV	1.1	0.9	0.5	VII	A
S P 20	E 14	IV	(1.8)	0.7	0.4	VII	A
S P 21	E 14	IV	(2.1)	0.8	0.4	VII	A
S P 22	E 14	IV	(1.8)	0.8	0.4	VII	A

※グリッドをまったく場合は、焼土のあるグリッドを記載。

※（ ）は切り合いなどで正確な長さが測定できないため、推定した長さ。

※S P 17・18の項目ははつきりしないため、2つを合わせた規模を記載。

< A類 >
SP6・7



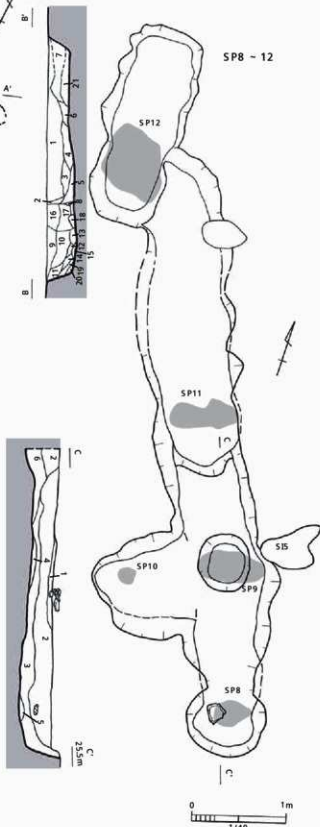
SP6・7

- 1 10YR2/3 黄褐色土、粘質やや多い、しまり強い、褐色土をブロック状に少し含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土、1層よりしまりが強い
- 3 10YR3/3 暗褐色土、1層よりしまりがやや強く、砂状である
- 4 10YR6/4 褐色土、粘質強い、しまり強い、褐色土をブロック状に30%含む
- 5 10YR4/4 褐色土、粘質多い、しまりやや強い、下部に灰けや黄色味が漂う
- 6 10YR3/3 暗褐色土、粘質なし、しまり強い、褐色土を粒状に含む、1層より砂状である
- 7 10YR3/3 暗褐色土、粘くしまっている、粘土を含み、全体に砂状の
- 8 10YR3/3 暗褐色土、粘質やや多い、中から強い、5層よりさらに強い
- 9 10YR3/3 暗褐色土、1層より強い
- 10 10YR3/3 暗褐色土、粘質強い、褐色土が人らすり層より強い、下部に褐色土を粒状に含む
- 11 10YR4/4 褐色土、粘質あり、しまり強い、灰層と思われる、焼けて入ったか
- 12 10YR3/3 暗褐色土、粘質強い、しまり強い、褐色土を粒状にわずかに含む
- 13 10YR3/3 暗褐色土、しまりあり、褐色土を粒状・ブロック状に40%程度含む、砂状でざるざるしている
- 14 10YR3/4 暗褐色土、粘質なし、しまり強い、裏面、IV層が混ざったか
- 15 7.5YR5/8 暗褐色土、しまり強い、凹部部分に暗褐色土を含む、砂状でざるざらしている
- 16 10YR6/4 褐色土、粘質あり、しまり強い、凹部層に25%の、やや黄っぽい
- 17 10YR3/3 暗褐色土、10層より少し明るい、粘土は少ない
- 18 10YR4/4 褐色土、粘質強く、しまりはややある、ATのブロックがみられる、断面層か
- 19 10YR3/4 暗褐色土、1層よりやや強い
- 20 10YR4/4 褐色土、白灰ローム、AT層の凹みに黄褐色土が混ざる
- 21 7.5YR5/8 暗褐色土、しまり強い、褐色土

SP8-11

- 1 10YR3/3 暗褐色土、粘質、しまりともに強い、クラックを生じる、壁はこの層の上層に由来する
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土、粘質強く、しまりは1層よりやや強い、AT粒・ブロック、1mm程度の炭化材を含む
- 3 10YR3/3 暗褐色土、粘質、しまりともにやや強い、1層より色調が明るい、AT粒、1mm程度の炭化材を含む
- 4 10YR3/3 暗褐色土、粘質強く、しまりやや強い、1-2mm程度の粒土(明赤褐色土2.5YR5/6)をばらばらに含む
- 5 10YR3/2 暗褐色土、粘質強く、しまりやや強い、1-2mm程度の粒土(明赤褐色土2.5YR5/6)をばらばらに含む
- 6 10YR3/3 暗褐色土、3層より強い、AT粒、1mm程度の炭化材を含む
- 7 粘質、しまりともに強い、1mm程度の炭化材を多量に含む、褐色土をばらばらに含む

SP8-12



第 42 図 炉穴実測図 (1)

状況などから、S P 12 → S P 11 → S P 9の順に作られたことが判明した。S P 10はS P 9に切られており、S P 9以前のものであることが分かる。

S P 8は断面からS P 9との先後関係を明らかにすることはできないが、両者の間に壁面の張り出しがあることから、同時期に存在し、トンネル状に繋がっていた可能性がある。

S P 10は上部で攪乱の影響を受けており、床面にわずかに焼土が残る程度である。

S P 11はS P 9とほぼ同規模の大きな楕円形であり、その床面は焼土のある南半分より北半分の方が高いことから、焼土から北の方向に煙道が延びていたと思われる。

S P 12も、焼土部分より床面が高くなりながら北に延びていることから、この方向に煙道が延びていたと考えられる。

・ S P 9出土遺物 (第 43 図)

深鉢の胴部 (119) が出土した。底部に近い部位である。外面は貝殻条痕文である。

・ S P 1 1 出土遺物 (第 43 図)

深鉢の口縁部 (120) がある。端部は平坦に面取りされる。内外面はナデ調整される。胴部 (121) の内外面はナデ調整される。122の外面は貝殻条痕文である。

砂岩製の石皿 (123) は平面方形で、断面は矩形である。短辺部は欠損する。磨面は上面全体にひろがる。

・ S P 1 2 出土遺物 (第 43 図)

砂岩製の石皿 (124) は平面五角形状だが、短面矩形の扁平な転石を利用する。磨面は上下面にある。

S P 15 ~ 22 (第 44 図)

第IV層で検出された。南北方向約6m、東西方向約45mの規模の大きい炉穴群である。S P 15 ~ 22の8基の炉穴が切り合う。土層断面の状況などから、S P 15 → S P 16 → S P 17・18 → S P 21 → S P 22の順に作られ、S P 19はS P 20・S P 21よりも後に作られたことがわかった。よって、S P 15またはS P 20が最初に作られたのち、南方向に繰り返し利用され、最後に作られたのはS P 22またはS P 19であると思われる。ほとんどが約2m×約1mの楕円形であるが、S P 19だけが直径約1mの円形をしている。

S P 17はS P 18の掘削中、礫の下から焼土が検出されたもので、S P 17とS P 18の項目や先後関係ははっきりしない。周囲の炉穴が1つの焼土を持つものであることから別遺構と考えたが、2つの焼土を持つ炉穴である可能性は残る。S P 20は風倒木の影響を受け、北側の壁面の上部が張り出している。

S P 21・22は、検出時土坑またはピットと思われたが、焼土が検出されたため、炉穴と確認した。S P 21は焼土部分から北へ、S P 22は東へ延びており、この方向に煙道が作られたと思われる。S P 21の焼土はS P 22に切られている。さらにS P 21はS P 19とも切り合っているが、S P 19の壁面はS P 21と接するところでも残っており、S P 21はS P 19・22以前に作られたと推定される。

・ S P 16 出土遺物 (第 43 図)

チャートの打製石鏃 (125) が出土した。平面略三角形で、基部は凹基となる。

・ S P 17 出土遺物 (第 43 図)

126は尾鈴山酸性石類製の磨石である。一部欠損する。使用痕は上下両側面に認められる。

・ S P 18 出土遺物 (第 45 図)

砂岩製の石核 (127) がある。略方形の礫を周縁より打撃を加えて剥片の獲得を行う。

・ S P 22 出土遺物 (第 45 図)

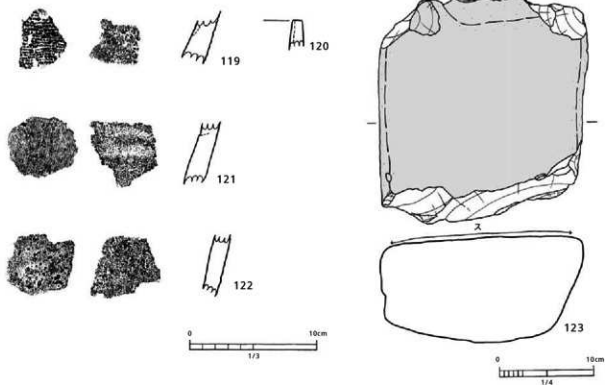
深鉢の口縁部 (128)、磨石 (129)、台石 (130) と石皿 (131) が出土した。128の端部は平坦で、肥厚気味である。129の両側面は磨耗が進み直線的となる。ホルンフェルス素材とする。130・131の石材は砂岩である。ともに上面に潰打痕があばた状に点在する。

その他、S P 20から縄文時代早期の土器片が、S P 19から石皿が出土した。

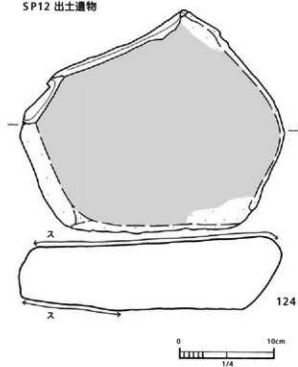
S P 13・14 (第 44 図)

第IV層で検出された。床面はともに第VII層であり、埋土にA Tを粒状に含んでいる。最深部はS P 13がS P 14より約0.3m深い。断面の状況から、S P 13の方が後に作られたことがわかる。ともに約2m×約1mの楕円形であり、焼土中に炭が粒状に見られる。焼土部分は、S P 14ではほぼ中央にあるのに対して、S P 13では東に寄ったところで見られた。

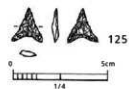
SP9・11 出土遺物



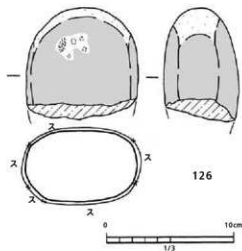
SP12 出土遺物



SP16 出土遺物

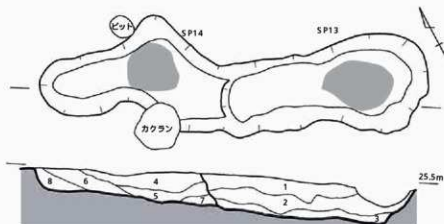


SP17 出土遺物



第 43 図 炉穴出土遺物実測図(1)

SP13・14



- SP13・14
- 10YR4/4 褐色土、粘りあり、水中の層を破り、ATを破損した部分に付く
 - 10YR4/4 褐色土、粘りあり、ATを破損した部分に付く
 - 10YR4/4 褐色土、粘りあり、ATを破損した部分に付く
 - 10YR4/4 褐色土、粘りあり、ATを破損した部分に付く
 - 10YR4/4 褐色土、粘りあり、ATを破損した部分に付く
 - 10YR4/4 褐色土、粘りあり、ATを破損した部分に付く
 - 10YR4/4 褐色土、粘りあり、ATを破損した部分に付く
 - 10YR4/4 褐色土、粘りあり、ATを破損した部分に付く

SP15・16・18・21

- 10YR4/4 褐色土、粘り、しまりは8層より強い
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りややあり、しまりあり、焼土を破損に少し含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りややあり、しまりあり、1層よりやや強い
- 10YR4/4 褐色土、粘りややあり、しまり強い、黒い層よりやや強い、ATをブロック状に10%程度含む
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りややあり、しまりは3層より強い、褐色土(黒い層)をブロック状に含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りあり、しまり強い、焼土をブロック状に10%程度含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りは5層より強い、しまりややあり、炭層(黒い層)よりやや強い、焼土をブロック状、小礫少し含む
- 10YR4/4 褐色土、粘り、しまりともにやや強い、北に行くほど黄色が薄す
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りややあり、しまり強い、灰色土(暗褐色土)を少し含む、炭を破損に含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りあり、しまりあり、8層よりやや強い、炭を破損に含む
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りは7層より強い、しまりあり、黒い層に近い、炭を破損に少し含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りあり、しまり強い、11層よりやや強い
- 10YR4/4 褐色土、粘りややあり、しまりあり、ATをブロック状にわずかに含む
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りややあり、しまりは11層より強い、黄色の粒をわずかに含む
- 10YR3/4 暗褐色土、14層に炭を破損にわずかに含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りややあり、しまりあり、ATをブロック状に50%程度含む、黒い方には焼土がみられる
- 10YR2/3 黒褐色土、粘りは5層より強い、しまりあり、炭を破損に少し含む、焼土を破損にわずかに含む
- 10YR2/3 黒褐色土、17層に黒い層が50%程度混じる、小礫を少し含む、ATをブロック状に少し含む
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りは14層より強い、18層よりやや強い
- 10YR4/4 褐色土、粘りあり、しまりあり、ATをブロック状に10%程度含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りややあり、しまりあり、黒い層面から
- 10YR3/4 暗褐色土、粘り強い、しまりあり
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りは12層より少し強い、12層より少し強い
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りは12層より少し強い、しまりあり
- 10YR4/6 褐色土、粘りは7層より強い、しまりあり、褐色土(10YR4/4)を40%程度含む、網織褐色土(10YR5/9)をブロック状に少し含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りは12層よりややあり、しまりあり、黒い層面から

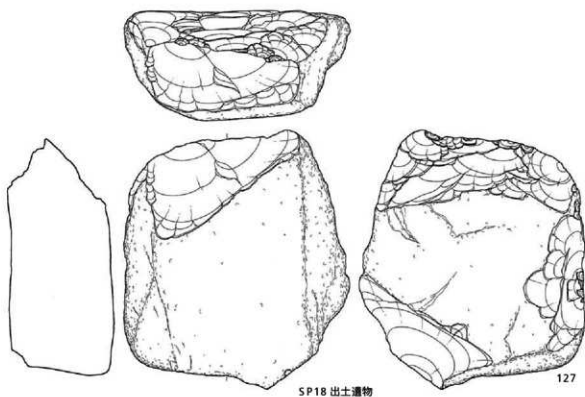
SP15・22



SP19・20

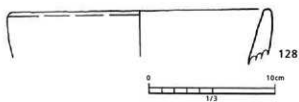
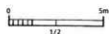
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りややあり、しまりあり、炭が破損に混じる、褐色土がわずかに混じる、黒い層面から
- 10YR4/4 暗褐色土、粘りは1層より強い、しまりあり、炭が破損に混じる、黒い層よりやや強い
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りややある、しまりは2層より強い、2.5YR5/8 暗褐色土と炭を破損にわずかに含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りはやや強い、しまりあり、2.5YR5/8 暗褐色土(S5)を含む
- 10YR4/4 褐色土、粘りは2層より強い、2層よりやや強い
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りは強い、しまりは3層より強い、2.5YR5/8 暗褐色土(焼土)をブロック状に含む、赤味がやや中づく程度
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りややあり、しまりあり、1層より黄色っぽい
- 10YR3/4 暗褐色土、粘りは7層より強い、しまりあり、2.5YR5/8 暗褐色土をわずかに破損に含む、1層と同様に少量含む
- 10YR3/4 暗褐色土、8層と同様だが、粘りは8層より強い、焼土はみられない
- 10YR4/4 褐色土、5と同様
- 10YR4/6 褐色土、粘りややあり、しまり強い、11層よりやや強い
- 5YR5/4 近い1層褐色土、粘り強い、しまりは1層より強い、焼土層から

第44図 炉穴実測図(2)



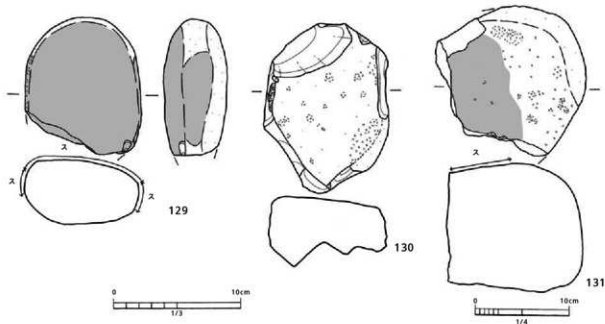
SP18 出土遺物

127



128

SP22 出土遺物



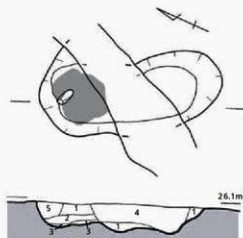
129

130

131

第 45 図 炉穴出土遺物実測図 (2)

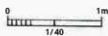
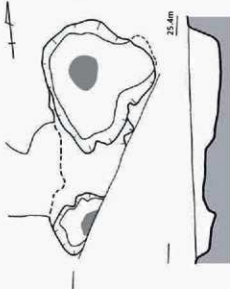
< B類 >
SP1



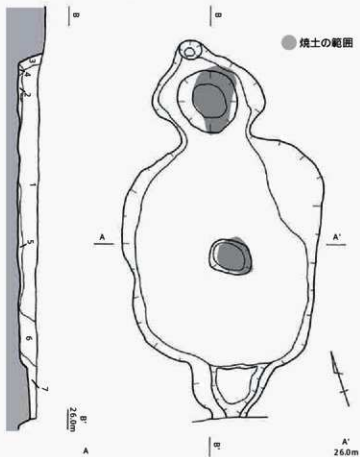
SP1

- 1 10YR4/3 に近い黄褐色土、粘り強い、しまりや強い、0.5 - 1mm 大の褐色粒を多く含む
- 1' 黄に色調や粘りが非常に弱化した土
- 2 10YR3/2 黄褐色土、粘性、しまりともに強い、0.5 - 1mm 大の褐色粒を多く、1 - 2mm 大の焼土粒をまばらに含む、焼土上の黄色色か
- 3 10YR3/3 暗褐色土、泥状、粘性、しまりともに強く、を多く含む
- 4 10YR3/1 黄褐色土、粘性、しまりともに強い、腐乱堆土
- 5 10YR3/1 黄褐色土、粘性、しまりともに強い、腐乱堆土

SP3



SP2



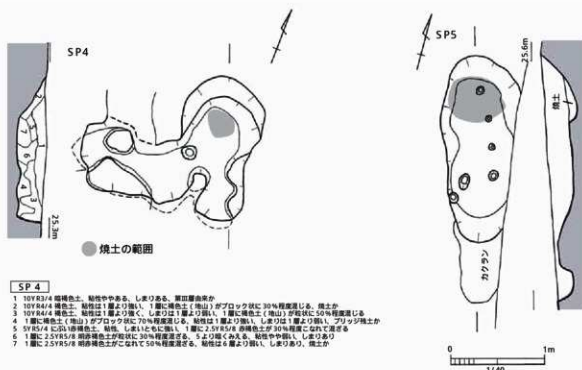
SP2

- 1 10YR3/1 黄褐色土、粘性、しまりともに強い、1 - 2mm 大の焼土粒をわずかに含む
- 2 10YR3/2 黄褐色土、非常に弱くしまる、1 - 2mm 大の焼土粒を多く含む
- 3 10YR4/3 暗褐色土、粘性、しまりともに強い
- 4 10YR3/3 暗褐色土、粘りは強い、しまり強い、1 - 2mm 大の焼土粒、褐色ブロックをまばらに含む
- 5 10YR5/4 に近い黄褐色土、粘りは強い、しまり強い、泥状に弱く、アカホヤのブロックをまばらに含む
- 6 10YR4/4 褐色土、粘りは強い、しまり強い、1 - 2mm 大の焼土粒と褐色ブロックをわずかに含む
- 7 10YR4/2 黄褐色土、粘りは強い、しまり強い、褐色ブロックをまばらに含む、基本層の腐乱堆土に類似する土

SP2 出土遺物



第 46 図 炉穴実測図 (3) 及び炉穴出土遺物実測図 (3)



第 47 図 炉穴実測図(4)

(B類)

SP 1 (第 46 図)

第IV層上面で検出された。約2m×約1mの楕円形である。中央部を農業用の溝とみられる攪乱に切られている。床面のうち、焼土とみられる範囲にはATがブロック状に含まれており、焼土のない西側の床面は固い白斑ローム層であった。

SP 2 (第 46 図)

第IV層で検出された。直径1mほどの円形の部分と、約3m×約2mの方形の部分からなる。長径が約4mと大きいことと、くびれた形状、2つの焼土部分を持つことから、検出当初は2つの炉穴の切り合いと考えていたが、断面の土層からは切り合い関係が確認できなかった。2箇所で火を用いていた規模の大きい1つの炉穴であるのか、2つの独立した炉穴が同時期に埋まったものなのかは断定できない。床面にはATがブロック状に多く含まれる。円形の部分と方形の部分で、床面の高さに差はほとんど見られない。床面付近の埋土中から出土した炭化材の¹⁴C年代測定では9260±30年BP(BC8610~8340年)樹種同定ではクリとの結果が出ている。

・SP 2出土遺物(第 46 図)

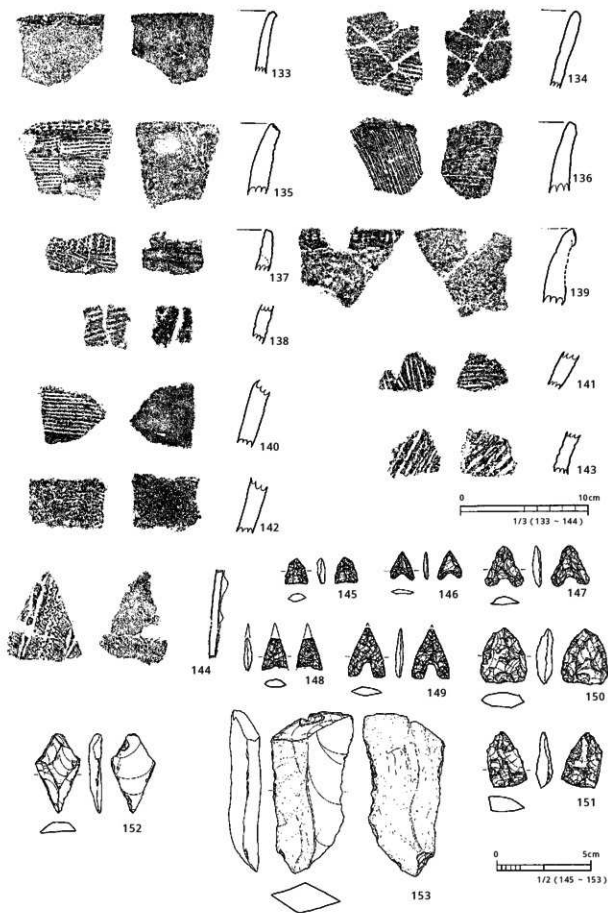
深鉢の胴部片(132)が出土した。風化が著しく、器面は磨耗している。

SP 3 (第 46 図)

F区の調査区境付近で、第IV層で検出した農業用の溝とみられる攪乱を掘削していたところ、床面で焼土が検出されたため、炉穴であると確認した。焼土部分を持つ2つの落ち込みからなり、その間には第V層(白斑ローム)がテラス状に高く残っている。南側の落ち込みは直径0.6mほどの円形とみられるが、東半分は調査区外である。北側の落ち込みは直径約1.2mである。2つの落ち込みがそれぞれ独立した遺構であった可能性もある。小礫の見られる層まで掘り込まれており、床面は第VII層と判断した。

SP 4 (第 47 図)

第IV層で検出された。焼土の見られる範囲から、南西方向(弓状に15m)と、南方向(1m)の2方向に延びており、延びた先端部分は壁面が張り出している。2つの煙道が同時期にあったのか、煙道を作り直したのかは確認できなかった。壁には白斑ロームやATがテラス状に残っており、床面にはATがブロック状に残っている。



第 48 图 縄文時代早期包含層等出土遺物実測図(1)

SP5 (第47図)

農業用の溝とみられる攪乱を掘削したところ、床面で焼土が検出されたため、炉穴であると確認した。そのため、土層断面及び埋土の詳細の記録はとれなかった。床面はATが少し残る第VI層下部である。焼土は他の炉穴より炭を多く含むため黒みを帯びており、厚さは約0.1mである。縄文時代早期の土器片が出土した。

(3) 遺物

ここでは縄文時代早期の包含層や他時期の遺構埋土に混入した遺物を掲載した。

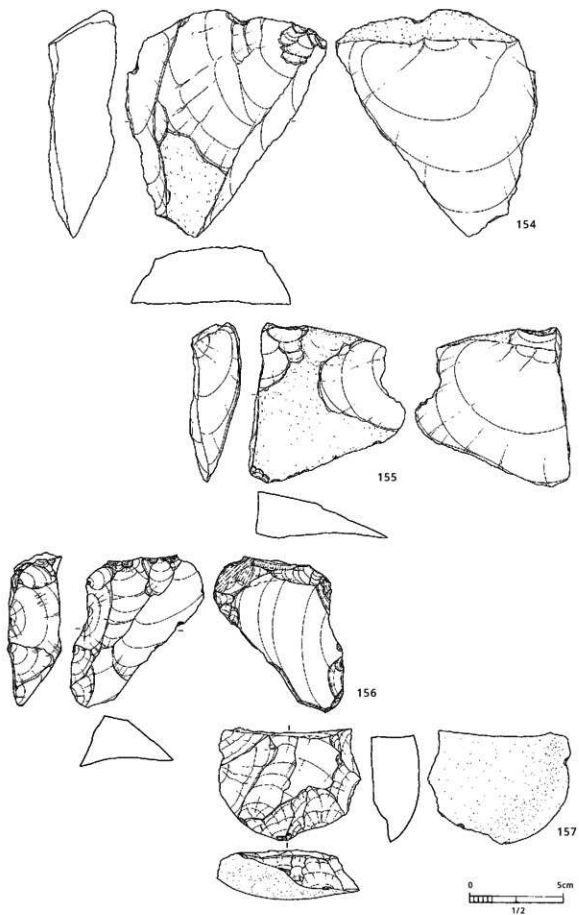
土器は深鉢の口縁部や胴部資料のうち12点を図化・掲載した(第48図)。133~137・139は口縁部、それ以外は胴部である。133は内外面をナデ調整する。134・135・137・139の外側は貝殻条痕文、内側はナデ調整である。端面外面には貝殻腹縁による連続刺突文がある。これらは中原Ⅱ式土器に相当すると考えられる。136の外側は櫛歯状工具による条線が認

められる。138・140~144は胴部で、142は押型文土器(山形文)、143は手向山式土器、144は天道ヶ尾(妙見)式土器に相当しよう。

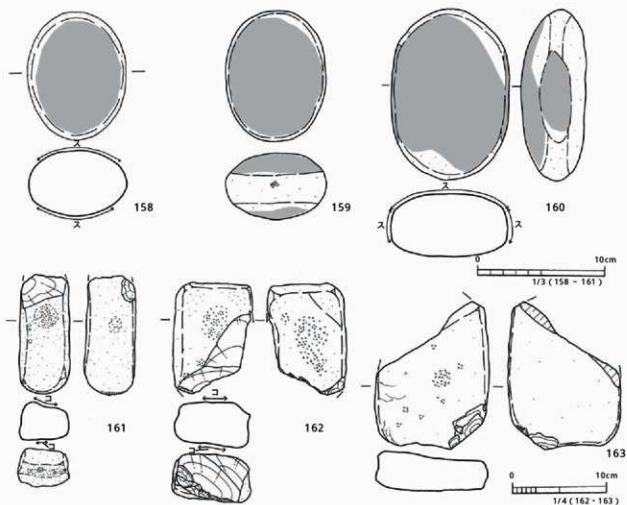
石器は打製石器類と磨石や台石類など18点を図化・掲載した(第48~50図)。打製石鏃(145~149)は平基や凹基、挟りを有する基部となる。150・151はチャート製の尖頭形石器である。平面三角形で見た目は石鏃に近しい。152は微細剥離ある剥片である。珪質頁岩製で平面剣菱形を呈する。153は二次加工剥片で石材は珪質頁岩である。154・155は剥片で、石材は砂岩である。破面を一部残す不定形を呈す。石核は珪質頁岩(156)尾鈴山酸性岩類(157)がある。157は破面を裏面として周縁から打撃を加えている。158~160は磨石で尾鈴山酸性岩類を石材とする。160は側縁部も使用している。161は敲石で棒状の砂岩を礫器とする。表裏中央と端部に使用痕が明瞭に残る。162・163は台石である。扁平な砂岩の転石を利用する。上面中央には集中的な溝打痕が認められる。

第16表 縄文時代早期土器観察表

No	器種	部位	出土地点 (位置)(層位)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考 (法量:cm)	
				外面	内面	外面	内面			
118	深鉢	口縁	S112	埋土 貝殻縁文 波部:貝殻刺突文	貝殻条痕文	橙 5 Y R 6/8	橙 5 Y R 6/8	2mm以下の光沢粒を多く含む		
119	深鉢	胴	SP9	埋土 貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐色 7.5 Y R 6/4	黒褐色 7.5 Y R 3/2	2mm以下の透明な光沢粒・黒色の光沢粒・5mm以下の褐色の粒。3mm以下の灰色の粒を含む		
120	深鉢	口縁	SP11	床面	ナデ	浅黄褐色 10 Y R 6/4	浅黄褐色 10 Y R 6/4	1mm以下の灰白・灰色の粒を含む。角閃石をまばらに含む		
121	深鉢	胴	SP11	埋土	ナデ 上部貝殻条痕文	前黄褐色 10 Y R 7/6	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	2mm以下の灰色の粒。5mm以下の暗褐色の粒。2mm以下の黒色の光沢粒を含む		
122	深鉢	胴	SP11	床面	貝殻条痕文	ナデ	黒褐色 7.5 Y R 3/2	5mm以下の明褐色の粒を多く含む。2mm以下の黒色の光沢粒を含む	黒化が著しい	
128	深鉢	口縁	SP22	埋土	擦・上部・櫛歯状ナデ 下部:嵐方向のナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	1~3mmの灰白・灰色の粒。1mm程の褐色の粒を含む。2mm程の褐色の粒をまばらに含む	外側に入付層目付(202)	
132	深鉢	胴	SP2	床面	上部:貝殻刺突文全体ナデ	黒化が著しく不明	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	7mm以下の灰白色の粒。3mm以下の黒色の光沢粒を多く含む。2mm以下の黒褐色の粒を含む		
133	深鉢	口縁	SA5	埋土	斜め方向ナデ	ナデ	橙 5 Y R 6/8	2mm以下の暗褐色の粒を含む		
134	深鉢	口縁	H12Gr	埋土	貝殻条痕文	ナデ	橙 7.5 Y R 7/6	2mm以下の透明な光沢粒・黒色の粒を多く含む。2mm以下の浅灰色の粒を含む		
135	深鉢	口縁	I11Gr	埋土	貝殻条痕文・波部:貝殻刺突文	ナデ一部指摺	にぶい黄褐色 10 Y R 6/3	にぶい黄褐色 10 Y R 5/4	6mm以下の灰白色の粒を多く含む。3mm以下の黒色・透明の光沢粒を含む	外面口縁部黒化
136	深鉢	口縁	F14Gr	埋土	工具による条線文	貝殻条痕文	にぶい黄褐色 10 Y R 6/6	にぶい黄褐色 10 Y R 6/6	3mm以下の褐色・橙色の粒。2mm以下の灰白の粒。透明の光沢粒を含む	
137	深鉢	口縁	SH612	埋土	上部:貝殻縁文下部:貝殻条痕文	ナデ	橙 7.5 Y R 6/6	にぶい黄褐色 10 Y R 7/4	2mm以下の透明な光沢粒を多く含む	
138	深鉢	胴	J11Gr	埋土	刺突文	ナデ	橙 5 Y R 7/8	2mm以下の灰白色の粒を含む		
139	深鉢	口縁	H11Gr	埋土	ナデ	黒化が著しく不明	暗褐色 10 Y R 3/3	黒褐色 10 Y R 3/2	4mm以下の灰白・灰色の粒。2mm以下の黒色・透明の光沢粒を含む	
140	深鉢	胴	F16Gr	埋土	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐色 7.5 Y R 6/4	橙 5 Y R 6/6	3mm以下の黒色の光沢粒。5mm以下の透明の光沢粒・灰白色の粒を多く含む	
141	深鉢	胴	F14Gr	埋土	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	4mm以下のにぶい黄褐色の粒。2mm以下の黒褐色の粒を含む	
142	深鉢	胴	SH609	埋土	貝殻条痕文	ナデ	前黄褐色 10 Y R 6/6	にぶい黄褐色 10 Y R 5/3	5mm以下の赤褐色の粒。4mm以下のにぶい赤褐色の粒。2mm以下の黒色・透明の光沢粒・灰白色の粒を含む	
143	深鉢	胴	J30Gr	埋土	黒条文	黒条文	明赤褐色 5 Y R 5/6	明赤褐色 2.5 Y R 5/6	10mm以下の灰白色の千枚岩小片をわずかに含む。6mm以下の明赤褐色の粒。4mm以下の黒色の粒を含む	
144	深鉢	胴	H10Gr	埋土	貝殻縁文・交差	嵐方向のナデ	橙 2.5 Y R 6/8	橙 2.5 Y R 6/8	2mm以下の透明な光沢粒を多く含む。2mm以下の灰白色の粒を含む	



第 49 図 縄文時代早期包含層等出土遺物実測図 (2)



第 50 図 縄文時代早期包含層等出土遺物実測図 (3)

第 17 表 縄文時代早期石器計測表

No	器種	石材	出土地点		計測値			備考	
			(位置)	(層位)	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]		重量 [g]
123	石皿	砂岩	SP11	埋土	23.75	22.20	11.50	10000.0	裏面は正面全体、一部欠損
124	石皿	砂岩	SP12	埋土	23.60	22.70	7.80	7580.0	裏面は正面全体と裏面の一部、一部欠損
125	打製石皿	チャート	SP16	埋土	1.80	1.60	0.30	0.55	正三角形、凹基
126	磨石	尾跡山酸性岩類	SP17	埋土	8.80	5.95	5.60	708.7	全面に磨面、特に左右側面の使用頻度が高い、半分程度欠損
127	石核	砂岩	SP18	埋土	13.26	11.87	5.72	1225.9	上下両面から縦長割片剥離、打面調整あり
129	磨石	ホルンフェルス	SP22	埋土	10.80	9.20	5.10	778.3	裏面は正面と両側面、左側面は斜打痕もみられる、1/4程度欠損
130	台石	砂岩	SP22	埋土	18.05	13.30	7.30	2295.0	正面にまばらに斜打痕、一部欠損
131	石皿	砂岩	SP22	埋土	15.50	15.90	14.70	4960.0	正面の一部に磨面とまばらな斜打痕、台石としても使用か、一部欠損
145	打製石皿	チャート	L 2 G r	Ⅲ	1.40	1.20	0.40	0.68	先端面に丸みのある二等辺三角形、平基
146	打製石皿	チャート	H 11 G r	Ⅲ	1.50	1.25	0.25	0.37	正三角形、凹基
147	打製石皿	チャート (赤)	N 4 G r	Ⅲ	2.15	2.05	0.45	1.35	先端面に丸みのある二等辺三角形、凹基、裏面は平らに加工
148	打製石皿	黒曜石 (豊川系)	F - 2 区	I	1.70	1.40	0.40	0.84	二等辺三角形、先端面と裏面の一部欠損、凹基で狭りは小さい
149	打製石皿	チャート	S A 1	埋土	2.65	2.00	0.40	1.60	二等辺三角形、凹基で狭りは大きい、裏面は平らに加工
150	尖頭形石皿	チャート	H 11 G r	Ⅲ	2.90	2.40	0.90	6.30	丸みのある二等辺三角形、平基
151	尖頭形石皿	チャート	S A 6	埋土	2.90	2.10	0.80	4.45	二等辺三角形、平基、一部欠損
152	教組刺片	珪質頁岩	L 1 G r	Ⅲ	4.14	2.31	0.63	4.90	縦長割片、両側面下部に多数の教組刺、形状はナイフ形石器に似ている、上部打面調整あり
153	二次加工割片	珪質頁岩	H 10 G r	Ⅲ	8.13	4.18	1.58	55.30	両側面に教組二次加工痕、裏面は自然面、上部打面調整あり
154	割片	砂岩	L 1 G r	Ⅲ	11.76	9.90	3.56	391.80	縦長割片、上面は自然面
155	割片	砂岩	F - 1 区	Ⅲ	8.40	8.01	2.53	140.20	幅広割片、正面に自然面
156	石核	珪質頁岩	I 10 G r	Ⅲ	8.20	7.00	2.90	1068.0	正面・上からの縦長割片剥離 裏面：縦長割片剥離 打面調整あり
157	石核	尾跡山酸性岩類	F - 1 区	Ⅲ	5.90	7.60	2.20	136.40	正面・下からの縦長割片剥離 裏面：自然面
158	磨石	尾跡山酸性岩類	H 11 G r	Ⅲ	10.20	7.80	5.00	608.1	正面・裏面全体に磨面
159	磨石	尾跡山酸性岩類	H 11 G r	Ⅲ	10.30	8.00	5.30	623.7	正面・裏面全体に磨面、下部に斜打痕
160	磨石	尾跡山酸性岩類	H 11 G r	Ⅲ	13.45	9.40	5.00	992.7	正面全体・両側面に磨面
161	磨石	砂岩	F - 1 区	Ⅲ	9.50	4.00	3.10	155.0	表面中央部と下部に斜打痕集中、裏面中央部にまばらな斜打痕、一部欠損
162	台石	砂岩	H 11 G r	Ⅲ	11.70	8.40	4.80	750.0	表面中央部に斜打痕集中、裏面にまばらな斜打痕、下面に割離あり
163	台石	砂岩	F - 1 区	Ⅲ	15.60	11.85	3.40	525.0	表面にまばらな斜打痕、一部欠損、一部欠損

3 縄文時代後～晩期の遺物

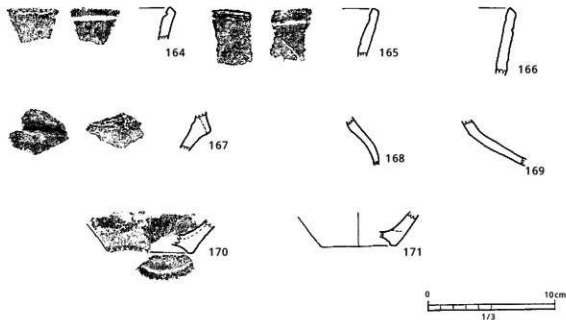
(1) 概要

縄文時代後期から晩期については、竪穴建物跡や土坑、包含層から少数ながら当時期の土器が出土したが、遺構埋土からの出土であったり、他の時期の遺物と同時出土したりしたため、当時期のものであると思われる遺構は確認できなかった。石器については、出土状況から明らかに当時期のものである

ものは確認できなかった。

(2) 遺物

三万田式系の深鉢や浅鉢が出土した(第51図)色調や胎土は第2・3次調査で出土したものと同様な傾向である。164～166は深鉢の口縁部で、端面の面取りは外傾し、内面には一条の沈線がめぐる。167～169は浅鉢の肩部付近である。170・171は底部で上げ底となる。



第51図 縄文時代後～晩期土器実測図

第18表 縄文時代後～晩期土器観察表

No	器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量: cm)
			(位置)	(層位)	外面	内面	外面	内面		
164	深鉢	口縁	S A 6	埋土	ナデ	ナデ 沈線	橙 2.5 Y R 6/6	にぶい黄橙 1.0 Y R 7/3	2mm以下の灰白色の粒、暗赤褐色の粒を含む	
165	深鉢	口縁	N 4 G r	Ⅲ	縦方向のミガキ	ミガキ 沈線	明赤褐 5 Y R 4/6	明赤褐 5 Y R 4/6	2mm以下のにぶい橙色の粒をわずかに含む	
166	深鉢	口縁	S A 5	埋土	ミガキ	ナデ 沈線	にぶい黄橙 1.0 Y R 5/3	にぶい赤褐 5 Y R 5/4	2mm以下の灰白色・赤褐色の粒を多く含む	
167	浅鉢	肩	S A 4	埋土	ナデ 突縁	縦方向のミガキ のミガキ	にぶい黄 7.5 Y R 5/4	橙 7.5 Y R 4/3	2mm以下の黄色の光沢粒を含み、3mm以下の暗褐色の粒・灰白色の粒をわずかに含む	
168	浅鉢	肩	S A 5	埋土	ミガキ	ナデ	橙 2.5 Y R 6/6	橙 2.5 Y R 6/8	2mm以下の灰白色の粒を多く含む、2mm以下の暗褐色の粒を含む	
169	浅鉢	肩	S A 5	埋土	ミガキ	ナデ	橙 5 Y R 6/6 にぶい赤褐 5 Y R 5/4	橙 5 Y R 6/6	2mm以下の明赤褐色・橙灰色の粒を多く含む	
170	深鉢	底	S A 5	埋土	底化が著しく不明	ナデ	明赤褐 2.5 Y R 5/6	にぶい黄橙 1.0 Y R 6/3	3mm以下の灰白色の粒を含み、2mm以下の暗褐色の粒・3mm以下の赤褐色の粒をわずかに含む	底径(6.8)
171	深鉢	底	S A 5	埋土	縦方向のミガキ	ナデ	にぶい黄橙 1.0 Y R 7/4	黄黄橙 1.0 Y R 8/4	2mm以下の暗灰色・にぶい黄褐色を多く含む	底径(5.8)

4 弥生時代の遺構と遺物

(1) 概要

弥生時代の遺構は、竪穴建物跡1軒がある。遺物については、竪穴建物跡や土坑、包含層から少数ながら当時代の土器が出土した。石器については、出土したものに当時代のものが含まれる可能性はあるが、出土状況から時期が不明確であることから、一括して別の節に掲載することとした。

(2) 遺構

竪穴建物跡1軒(SA3)のみが検出された。

SA3(第52図)

E-2区東側の緩斜面、表土直下の第IV層で検出された。削平の影響を大きく受けているとみられ、検出当初は東側と南側の壁付近を除き形状ははっきりしなかったが、トレンチを設定し掘削した結果、長辺(東西方向)41m、短辺(南北方向)40mの方形であることが確認された。埋土は黒褐色土のブロックを含む褐色土であるが、0.2mほどの厚さであるため、下部埋土であったと考えられる。

また、第V層(白班ルーム)を含む貼床面はとも薄いため、床を作るため土を盛り固めたというより、使用しているうちに硬化した面である可能性が高い。東から西に0.5mほど下る傾斜に沿って床面が形成されており、南東側の角付近は0.2mほどの掘り込みが見られる。

柱穴は東西に同程度の深さのビットがあり、2本柱の建物であった可能性が高い。竪穴部中央付近で集中して出土した土器片の特徴から、弥生時代でも後期の竪穴建物跡であると考えられる。

・SA3出土遺物(第52図)

172は甕の口縁部である。頸部との接合面が残っている。173は壺の胴部-底部である。色調は浅黄橙色(10YR系)で、胎土は1mm以下の黒色粒が多く含む。胴部中位は屈曲して、底部が平底の「ソロバン玉」状の胴部である。外面の調整はヘラ状工具によるミガキである。

(3) 遺物

ここでは他時代の遺構埋土等に混入した遺物のうち、当時代のもので確認された土器を10点を掲載した(第53図)。

174-178は下城式や亀の甲タイプの甕である。色調と胎土の関係から、①浅黄橙色(10YR系)できめの細かい粘土に1-3mm大の円磨度の高い砂粒を含むもの(174・175)、②明褐色・にぶい赤褐色(5YR系)で粒子の粗い粘土に1mm以下ないし1-2mmの石英や長石、結晶片岩などを含む(176-178)の2者に区分される。口縁部端部の外面に刻目突帯を貼り付けたタイプ(174-176)である。突帯の断面は三角形となる。口縁部端部の外面ないし胴部に数条の刻目突帯を貼り付けたタイプ(177・178)もある。

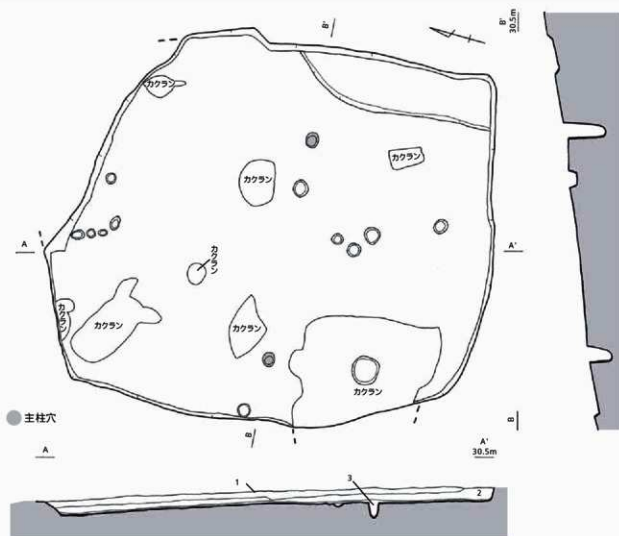
179・180は甕または壺の底部である。色調と胎土の関係から179は①、180は②と分類できるので、これらも下城式系の土器と考えられる。

181は須玖式系の壺口縁部である。色調はにぶい黄橙色で、胎土は1mm以下の黒色粒が多く含まれる。口縁部外面には刺突列点文が、上面には円形浮文が付加される。

第19表 弥生時代竪穴建物跡一覧表

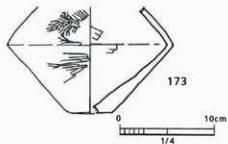
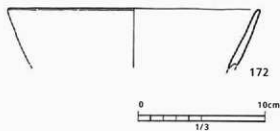
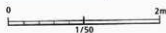
遺構	包層 (区)	検出層 (層)	主軸方位	形状	規模(m)		構造 (本柱)	備考
					長辺	短辺		
SA3	E-2	IV	N-78°-W	方形	41	40	2	弥生土器 甕・壺

SA3

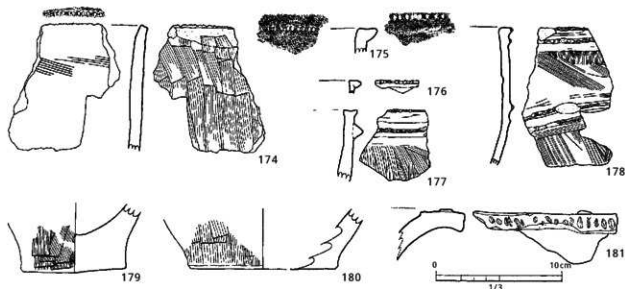


SA3

- 1 7.5YR4/6 褐色土。粘性わずかにあり、しまりあり。黒褐色土をブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR5/8 暗褐色土。粘性わずかにあり、しまりあり。白濁ロームをブロック状にわずかに含む
- 3 7.5YR5/8 暗褐色土。粘性わずかにあり、しまりあり（粘床）



第 52 図 弥生時代竪穴建物跡 (SA3) 及び出土土器実測図



第53図 弥生時代包含層等出土土器実測図

第20表 弥生時代土器観察表

No	器種	部位	出土地点 (位置) [層位]	手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量: cm)	
				外面	内面	外面	内面			
172	甕	口縁	SA3	埋土	横ナデか?	横ナデ	浅黄褐色 10 Y R 8/4	浅黄褐色 10 Y R 6/4	1mm程度の灰色・灰白色・灰褐色の粒を多く含む。5mm程度の灰黄色の粒を含む	口径 (198)
173	甕	胴・底	SA3	埋土	上部: 斜方向のミガキ下部: 旋・斜め方向のナデの後はまばらなミガキ	工具によるナデか?	浅黄褐色 10 Y R 8/4	橘灰 7.5 Y R 6/1	3mm以下の暗褐色・1mm以下の黒色の粒を多く含む。1mm程度の灰白色・赤褐色の粒を多く含む。角閃石をまばらに含む	一部黒斑。赤化あり 底径 (46)
174	甕	口縁・胴	SA13	床面	縦方向のハケ目 上部: 突帯の削げた面	横ナデ。一部工具による横ナデ	浅黄褐色 10 Y R 8/4	にぶい黄褐色 7.5 Y R 6/4	3mm以下の灰白色の粒を多く含む	肩部: 連続した列目
175	甕	口縁	SA13	床面	肩部: 斜目突帯 縦方向のハケ目	横ナデ	黄褐色 10 Y R 3/1	浅黄褐色 10 Y R 8/3	3mm以下の灰白色の粒を多く含む。2mm以下の淡褐色の粒を含む	肩部: 連続した列目
176	甕	口縁	SA12	埋土	肩部: 斜目突帯横ナデ	横ナデ	橙 7.5 Y R 7/6	にぶい黄褐色 10 Y R 7/4	2mm以下の灰白色・黒色・橘灰色の粒を含む	
177	甕	口縁	SA4	埋土	肩部: 2条の斜目突帯。横ナデ 下部: ハケ目	肩部: 突帯 ナデ	橙 5 Y R 6/6	橙 7.5 Y R 6/6	3mm以下の乳白色・赤褐色の粒を含む	
178	甕	口縁・胴	C22g	IV	肩部: 斜目突帯 斜方向のハケ目。一部横ナデ	ナデ	暗赤灰 2.5 Y R 3/1	橙 5 Y R 6/6	2mm以下の灰白色・赤褐色・黒色の粒を含む	外面に入付着
179	甕または壺	底	SA13	埋土	縦方向のハケ目	ナデ? 風化が著しく不明	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	橙 7.5 Y R 6/6	3mm以下の黒褐色・5mm以下の灰白色の粒を多く含む	
180	甕または壺	底	SA12	埋土	縦方向のハケ目	一部ナデ 風化が著しく不明	にぶい赤褐色 5 Y R 5/4	明赤褐色 2.5 Y R 5/8	6mm以下の灰白色・3mm以下の灰白色の粒を多く含む	
181	甕	口縁	SA	埋土	肩部: 連続した斜交文ナデ?	風化が著しく不明	にぶい黄褐色 10 Y R 7/4	にぶい黄褐色 10 Y R 7/4	1mm以下の黒色の粒を多く含む。5mm以下の灰白色の粒を多く含む。5mm以下のにぶい黄褐色の粒を含む	上面: 円形浮文

5 古墳時代の遺構と遺物

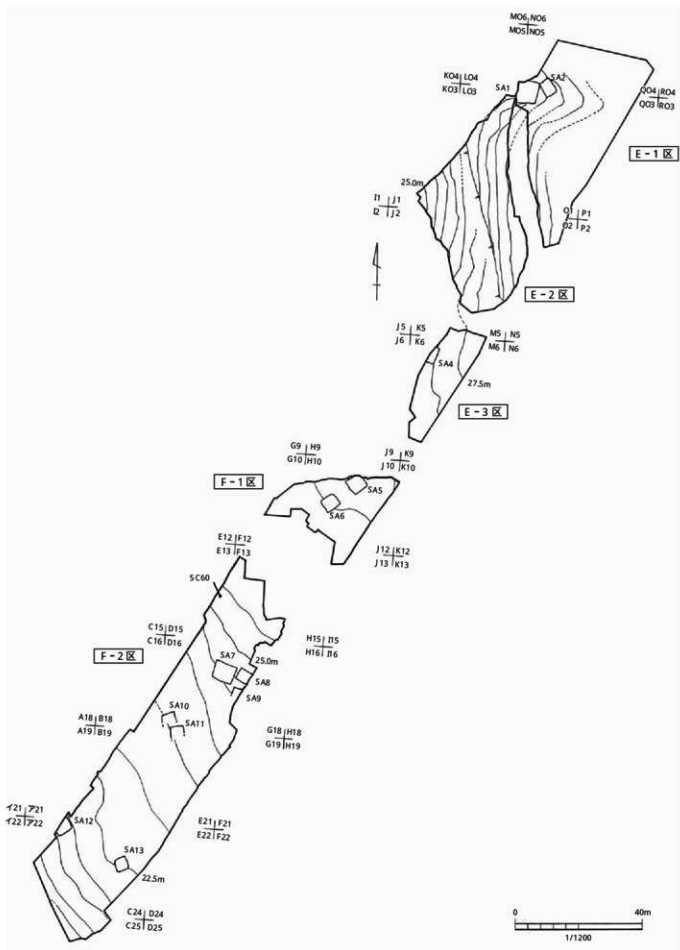
(1) 概要

表土除去後、第II層～第IV層で、竪穴建物跡12軒、土坑1基が検出された(第54図)。また、遺構内や攪乱、包含層から、多くの土器や、敲石や台石、石皿等の石器が出土した。土器の大半は土師器であり、特に竪穴建物跡から集中して出土した。

(2) 遺構

① 竪穴建物跡(第21表)

竪穴建物跡は、E-1区に2軒、E-4区に1軒、F-1区に2軒、F-2区に7軒検出され、調査区全体に分布していることを確認した。竪穴建物跡同士の切り合いはないが、SA1・2、SA5・6、SA7・9、SA10・11はそれぞれ隣接している。削平や攪乱の影響で、全体の形状などが確認できないものもあったが、残存状況の良い竪穴建物跡からは、多くの土器片や石器類が出土した。



第 54 図 古墳時代遺構配置図

SA1 (第55・56図)

E-1区北側の、西へ下る谷部に位置する。表土除去作業中に、第I層において土師器片が集中して出土し、やや土が黒ずんで見えたものの、直上に攪乱が集中してあったこともあり、竪穴建物跡が流れ込みによるものか判断できなかった。そこでトレンチを設定し、掘削を行ったところ、埋土2・3層と地山の第II層の間で明確な立ち上がりがあり、長辺(南北方向)68mの方形の竪穴建物跡と判断した。

西側はSE1(溝状遺構)に切られており、短辺(東西方向)は48mまでしか確認できないが、支柱穴の位置から、正方形に近い形態であったと考えられる。谷の落ち込む方向に主軸が直交する。検出面から貼床面までは約0.9mで、今回検出された竪穴建物跡では最も深いものである。埋土は暗褐色土であり、土師器の小片や炭化材を含んでいる。埋土3は褐色のブロックを含んでいる。

貼床は、東側では0.05mほど、西側では0.3mほどの厚さであり、掘り方による凹凸や谷の傾斜による地山の傾きを平らにしたものと考えられる。

壁帯溝は幅0.1～0.3m、深さ0.2mほどであり、ほぼ全体に巡っている。

貼床面で焼土と炭化材が多量に検出されたことから、上屋構造が焼失したのと考えられる。焼土は中央付近に広がっているほか、北側壁寄りにみられた。厚さは0.03～0.05mほどであるが、西側の焼土は0.1mほどの厚みであった。

また、中央付近に焼土の上に直径5～10cmの炭化材が多量出土したほか、南側壁寄りにとも垂木とみられる直径15cmの炭化材が出土した。炭化材は、

主軸と並行のものと直交するものが折り重なって検出された。¹⁴C年代測定では炭化材№1において1,670±20年BP(AD330～430年)樹種同定では炭化材№1・2・4・5・6はツブラジイ、炭化材№3はクリとの結果が出ている。

建物に伴う炉と土坑は、それぞれ1基検出された。埋土はどちらも暗褐色土で炭化物を多量に含んでいる。炉は長軸0.5m、短軸0.3mの不整な楕円形で、深さは0.4mである。東側壁上方に焼土化した粘土がみられ、細長く掘られた底はとても硬くしまっている。土坑は長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形である。

支柱穴は4本認められるが、ピットが多数みられるので、建て替えの可能性もある。また、建物中央部をSB3(掘立柱建物跡)に切られており、他のピットにも後世のものが含まれる可能性がある。

・SA1出土遺物(第57～59図)

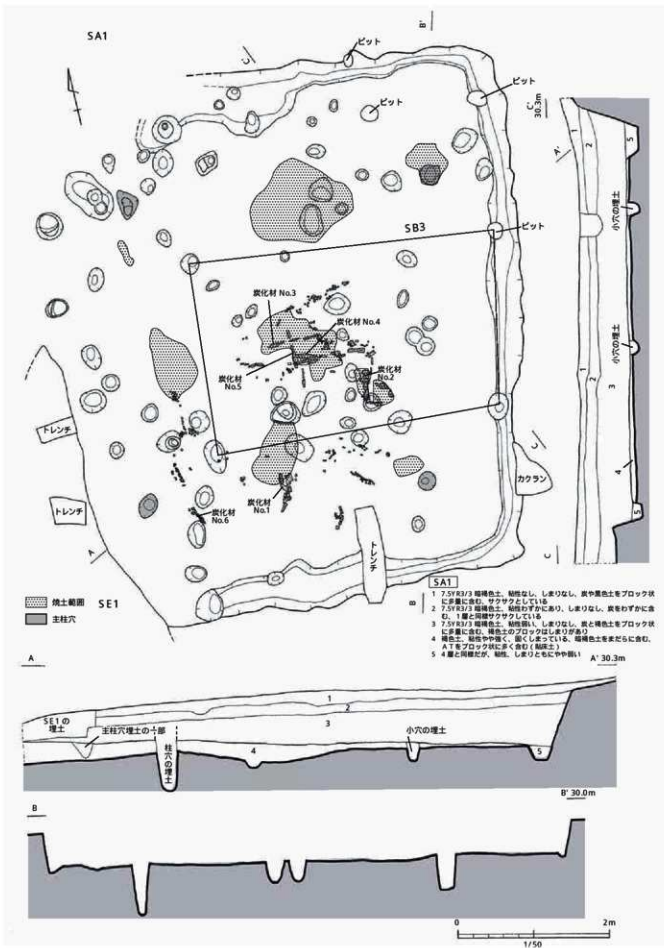
遺物は、床面直上とやや浮いた位置(埋土3層の下部)より出土した。遺物は支柱穴に囲まれた範囲で散在して出土する分布で、原位置を保つものや二次的移動を受けたものが混在する。第56図は床面の遺物出土状況を示した。

土師器襖(184・185)は炉の両端付近で出土しており、184は出土状況から建物廃絶時に正立した状態と考えられる。土師器高坏の脚部を転用したフイゴの羽口は、炉の周辺に出土する傾向がある。

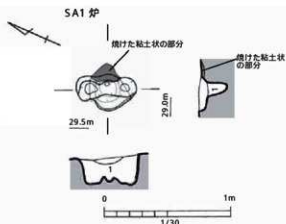
ここで図化・掲載した遺物は43点である。土師器襖の口縁部は直立気味(184)で、内湾気味(182)もある。底部は接地面の小さい平底(189)である。襖の多くは脚部下位から口縁部の外面にかけてススの付着が認められる。184・186・189の外面は、板状

第21表 古墳時代竪穴建物跡一覧表

遺構	位置 (区)	検出層 (層)	主軸方位	形状	規模(m)		構造 (本柱)	備考
					長辺	短辺		
SA1	E-1	I-II	N-11°-W	方形	68	48+a	4	焼土付帯、掘立間溝遺物、壁帯溝
SA2	E-1	II	N-40°-E	長方形	47	33	4	
SA4	E-3	IV	N-22°-W	(長方形)	50	21+a	(4)	炉、壁帯溝
SA5	F-1	III-IV	N-49°-W	方形	53	46	4	
SA6	F-1	III-IV	N-52°-W	方形	48	40	2	2辺壁部に張り込み、床面焼土
SA7	F-2	IV	N-79°-E	長方形	71	54	4	床面焼土
SA8	F-2	IV	N-27°-W	方形	42+a	38	4	
SA9	F-2	IV	N-10°-W	(方形)	-	-	(4)	
SA10	F-2	III	N-83°-W	(方形)	42	30+a	(4)	
SA11	F-2	IV	N-74°-W	方形	42	37	2	炉
SA12	F-2	II	N-30°-E	方形	50	45+a	-	
SA13	F-2	IV	N-4°-E	方形	42	41	(4)	須磨器、炉

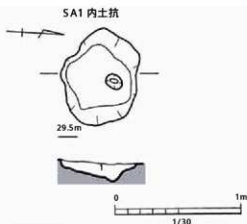


第 55 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA1) 実測図



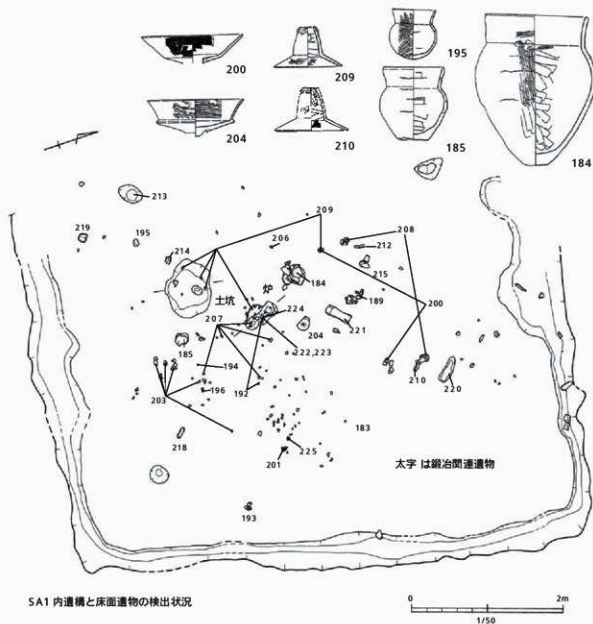
SA1 炉

1 10YR3/3 暗褐色土、粘性弱い、しまりなし、炭を粉状に多く含む



SA1 内土坑

1 10YR3/3 暗褐色土、粘性弱い、しまりなし、炭を粉状に非常に多く含む



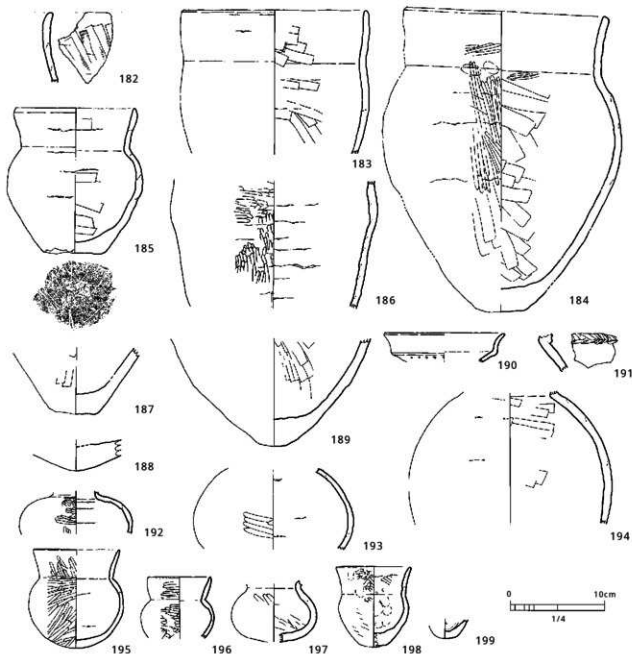
SA1 内遺構と床面遺物の検出状況

第 56 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA1) 内炉・土坑実測図及び遺物出土状況図

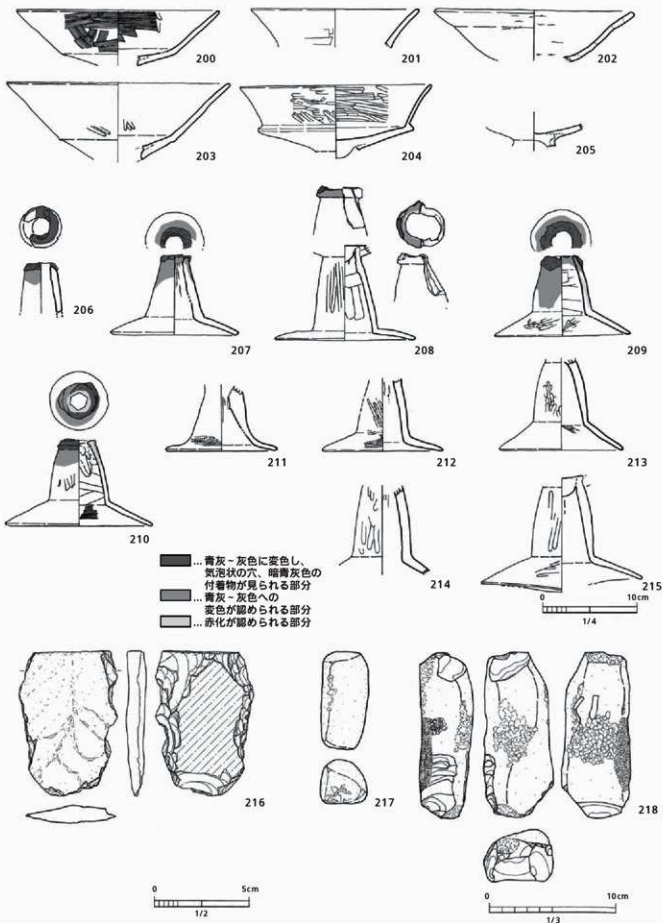
工具のナデ調整のうえにヘラ状工具による粗雑なミガキ施される。なお、183と189は色調と胎土の比較から同一個体の可能性が高い。190は二重口縁壺の口縁部で一次口縁部外面に連続刺突文がある。191は壺の頸部で縄目を模した突帯がつく。196・197は小型丸底壺、199はミニチュアの鉢である。

200～215は土師器高坏の坏と脚部である。両者は接合できなかったが、200と209・210・213、203と207、202と205は色調と胎土が相互に類似する資料

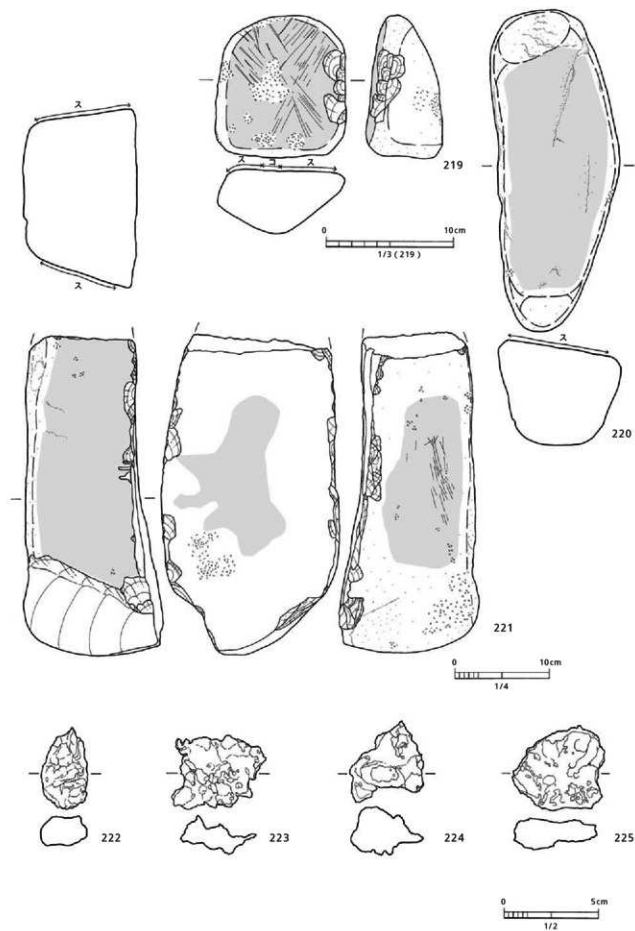
である。坏部の一群は在地系(202)、外来系(庄内・布留式)の系譜をひく(200・201・203～205)形態を含む。後者は、坏底部が広いもの(200)と狭いもの(204)がある。204は口縁部と坏底部の接合部が外方へ突出する形態である。脚部は、脚柱部が直線的(207)エンタシス状(213・215等)にスカート状の脚裾部がつく形態である。206～210はフイゴの羽口として転用された脚部である。坏部と脚部の接合部分は不純物の付着やガラス化が著しく、脚柱部は



第57図 古墳時代竪穴建物跡(SA1)出土遺物実測図(1)



第 58 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA1) 出土遺物実測図 (2)



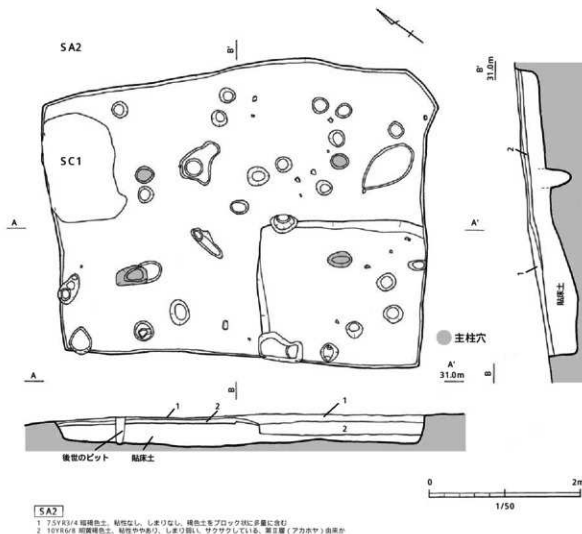
第59図 古墳時代竪穴建物跡(SA1)出土遺物実測図(3)

被熱による赤化や還元状態となる部分が認められる。このうち 208 は、羽口に転用するために接合部を打ち欠いた過程が読み取れる資料である。206 は金属分析の結果、素地は締まり緻密であるが、溶融している先端部以外は熱影響をあまり受けておらず、耐火度は鍛冶炉用の羽口としては低め、炉壁並の 1,140°C と測定された。

石器は 7 点を図化掲載した。216 は珪質頁岩製の打製石斧である。礫面の残る扁平な剥片に周縁部のみ剥離調整を施す。217・218 は砂岩製の敲石である。棒状の形態で側面中央と端部に溝打痕がある。219 は砥石である。石材は砂岩である。中心から側縁に

向けた鋭い線状痕が放射状に残る。磨面や溝打痕もあり、石皿や敲石としても使用されたようである。220・221 は石皿で、建物中心付近と北西方向の床面で出土した。円形ないし長方形の石皿で砂岩の転石を使用する。ともに磨面がよく残る。220 は茶色に変色、221 は茶色の粒状の付着物がみられ、錆着とみられる。221 の裏面は赤化している。

鍛冶関連に伴う鉄滓や生成物のうち 4 点を図化・掲載した(222～225)。鉄滓・生成物は炉の内部(222～224)と建物床面及び建物埋土中(225)で出土し、その総重量は 185.9g である。なお、鍛造鉄片の出土はない。222～225 については金属分析を行った。その結果、222・223 はほぼ粘土組織で、炉壁と反応し



第 60 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA2) 実測図

て生成した炉壁附着滓であると判定された。224も炉壁附着滓であるが、表面に木炭痕が見られ、約半分は鉄滓部分であり、顕微鏡組織分析・化学成分分析の結果、始発原料は鉄砂であると判定された。225はメタル反応を示し、化学組成分析の結果、鍛錬工程の初期に生成した椀形鍛冶滓と判定され、もともと炉の下部で生成したが、不純物を多く含むため、そのまま廃棄されたものと推定される(金属分析結果の詳細は第6節参照)

また、炉壁と推定される焼土塊も建物床面及び埋土中より出土している。

S A 2 (第60図)

E-1区の北側の谷部の第Ⅱ層上面で検出された。S A 1の東側に隣接し、S A 1より約1m高い地点にある。谷の落ち込む方向に主軸が直交する長辺47m、短辺33mの長方形の形状である。北側の隅をS C 1(土坑)に切られている。暗褐色土の埋土中に、土器片を確認できた。床面は南側がやや低く、2段の構造であった可能性がある。その下に02~04mの貼床がみられる。主柱穴は4本認められる。

出土遺物は縄文土器、弥生土器や土師器があるが、図化に耐えない程度の小片化が著しい。

S A 4 (第61図)

E-3区の平坦部、表土直下の第Ⅳ層で検出された。南北方向に50mの規模の方形または長方形で、西側は調査区外である。埋土は04mほどで、炭化材を多く含む褐色土である。その下にある貼床が壁際で切れ、深さ01mほどの壁溝が巡っている。床面に焼土が2箇所見られ、そのうち北側の焼土は炭を多く含み、その上面を囲むように礫や石器類が確認でき、炉として利用されたと考えられる。また、炉から東側の壁に向けて溝状の掘り込みが見られる。

炉周辺の埋土中より、フローテーションにより採取した炭化種実がイネであると同定された。炉が建物の中心付近にあったとすれば、プランを確認できたのは東側の半分程度ということになり、主柱穴とみられるピットが2基認められることから、4本柱の建物であったと考えられる。

・S A 4 出土遺物(第62・63図)

第61図に建物埋土中及び床面上で出土した遺物の分布を示している。遺物の多くは建物埋土の2層より出土し、特に手のひら大や人頭大の塊石が比較的多く出土した。炉の周囲には石器類(246・248・250・251・252・253)がまとまって出土している。図化掲載した遺物は28点である。

土師器のうち襦は、口縁部が「く」の字(227・230)と内湾気味で直立(226)がある。226・230の外側はタテ方向の、227はヨコ方向への丁寧なヘラミガキが施される。他に高坏(238~241)広口壺(236)やミニチュアの鉢(243)などがある。

石器は打欠石錘(244)打製石斧(245)や磨石(246)・敲石(247・248)と台石・石皿類(249~254)がある。磨石は尾鈴山酸性岩類で、その他は砂岩である。台石(252)は上面中央に溝打痕が明瞭に残り、磨面も認められる。台石(250)・石皿(254)には錆着とみられる付着物があり、250は一部赤化している。

建物床面には形や大きさの揃う棒状の礫が4個出土した(第31表)。量は平均値で長辺165cm、短辺74cmで重さ806.3gとなる。使用痕は認められず、搬入礫または錘具等と推測される。

S A 5 (第64図)

F-1区の平坦部、表土直下の第Ⅲ~Ⅳ層で検出された。北側の隅は調査区外、東側の一部は攪乱(道路跡)に切られており、中央部分も大きな攪乱の影響を受けている。等高線に主軸が直交する1辺約5mの方形である。埋土はアカホヤを含む暗褐色土であるが、床面近くまで削平を受けて数cmしか残存しておらず、また、明確な貼床は確認できなかった。主柱穴は約05mの深さを持つ4本が認められる。

・S A 5 出土遺物(第64図)

建物東側の床面より土師器襦の小破片(255)がまとまって出土したが、接合は困難であった。255の外側には線刻があり絵文の一部と考えられる。内側には種子(イネ?)圧痕が認められる。また、コバルトグリーン色のガラス小玉(256)や台石(257)も床面から出土した。257は磨面と集中的な溝打痕が両方残る。

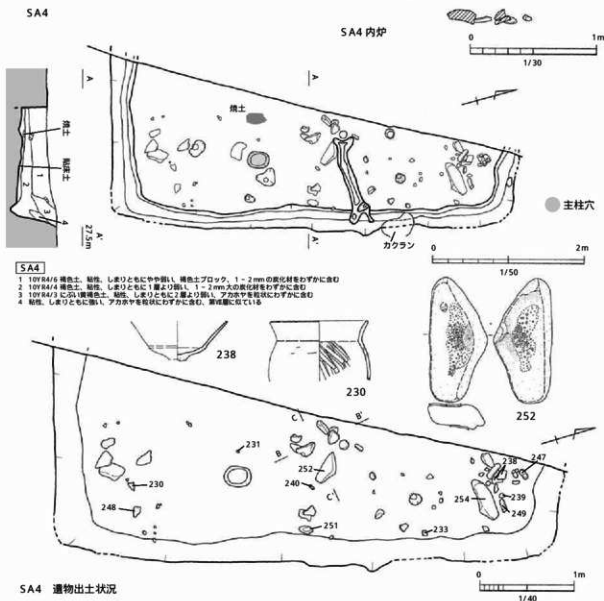
SA 6 (第 65 図)

F-1 区の平坦部、表土直下の第三 - IV 層で検出された。SA 5 から南西方向へ 5 m の距離がある。主軸方向の向きは SA 5 とほぼ同じである。埋土は粒状の炭を含む褐色土であり、貼床面が認められる。建物中央部床面に 20 m × 1.1 m の焼土面があり、その上面から石器や土器が集中して出土した。また、東側の 2 辺の壁際に溝状の掘り込みがみられる。主柱穴は中央付近に 2 本存在している。

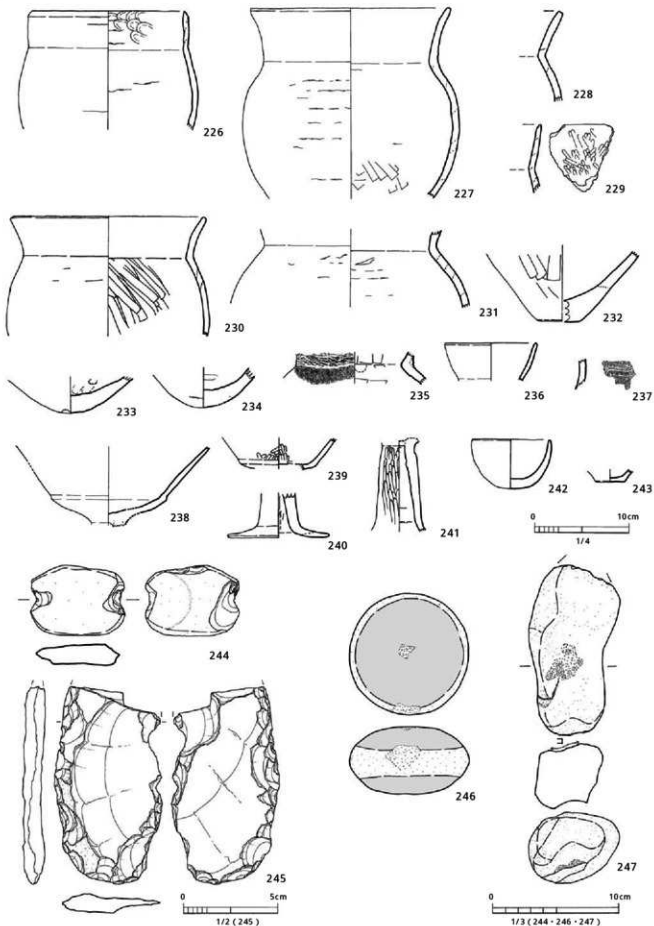
・ SA 6 出土遺物 (第 66 図)

遺物は建物埋土中から床面上にかけて出土した。SA 4 同様に掌大や手のひら大の転石が数多い (第

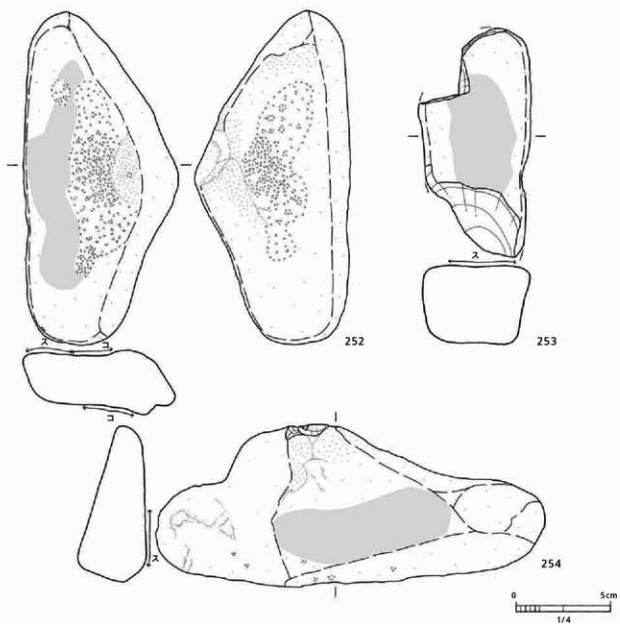
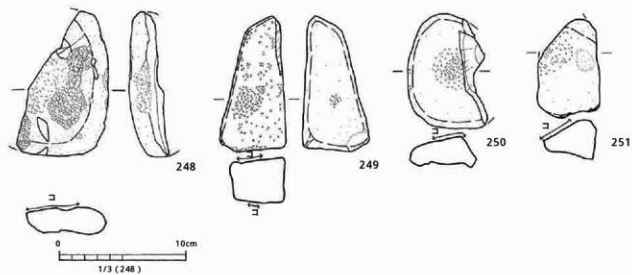
66 図)。259 は土師器甕の底部でわずかな平底である。260 は壺の頸部で絡繰突帯がつく。261・262 は砂岩由来の台石である。261 は上面中央と側縁に集中的な溝打痕があり、端部に粒状の錆着が見られる。262 は磨面も認められる。また、銅冶関連の遺物として、親指大焼土塊 (炉壁) が埋土より少量出土している。



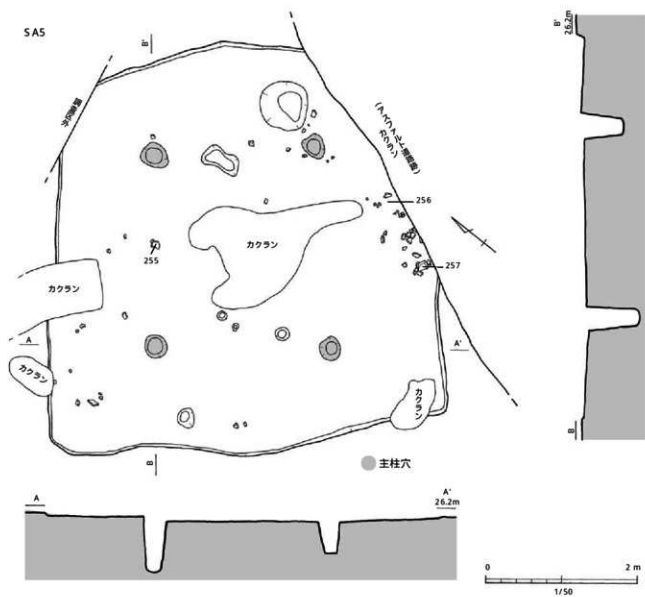
第 61 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA 4) 実測図



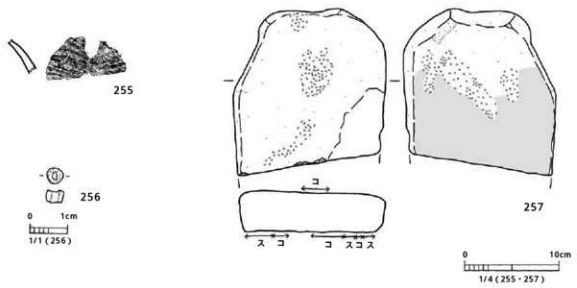
第 62 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA 4) 出土遺物実測図 (1)



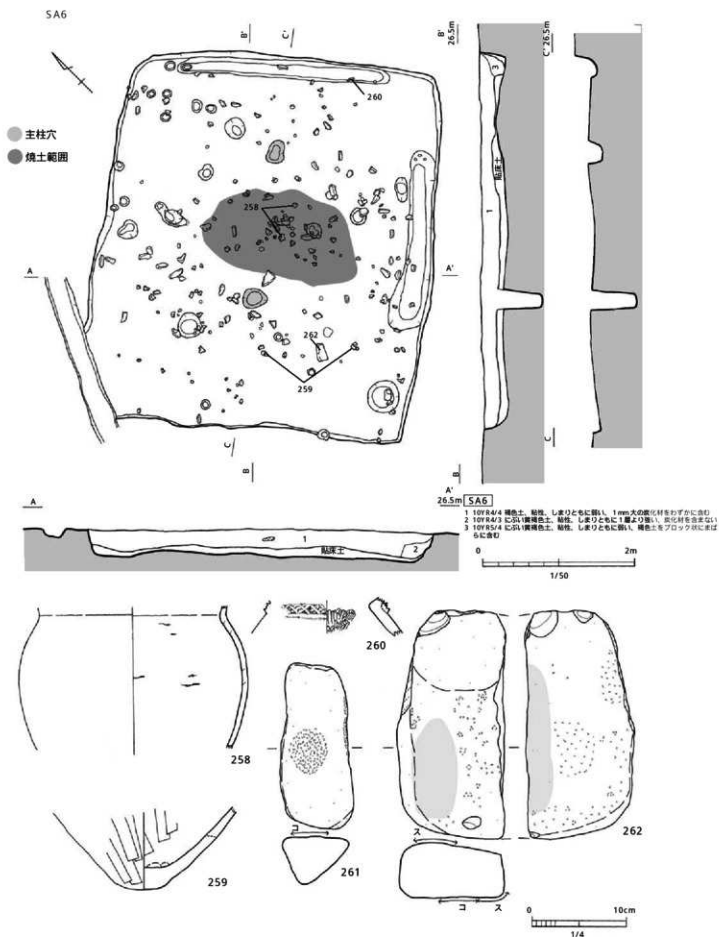
第 63 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA4) 出土遺物実測図 (2)



SA5 出土遺物



第 64 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA5) 及び出土遺物実測図



第 65 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA6) 及び出土遺物実測図

SA7 (第66図)

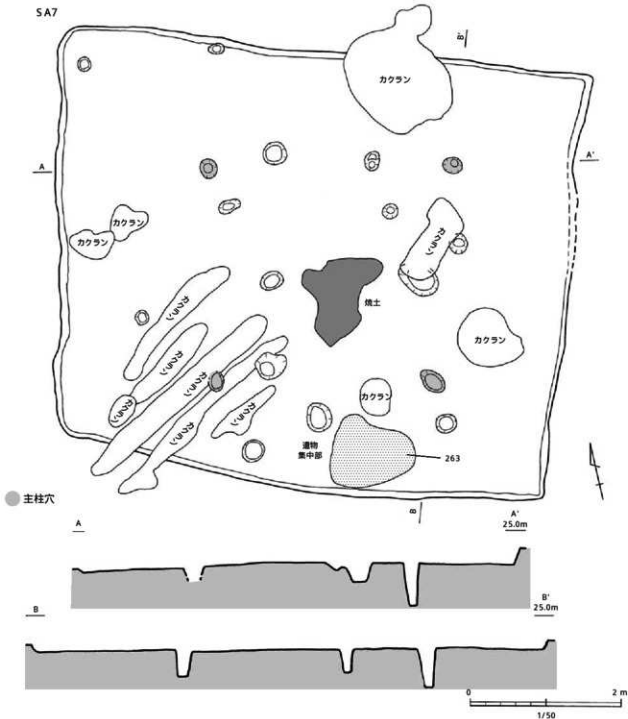
F-2区北側の平坦部の第IV層で検出された。工程の関係で、先に東側の3/4の範囲が、後に残りの範囲が検出された。長辺7.1m、短辺5.4mの長方形で、第4次調査で確認された最大規模の竪穴建物跡である。耕作に伴う穴や溝とみられる攪乱が多く見られる。埋土は黒褐色土をブロック状に含むにぶい黄褐色土で、削平の影響で0.05mほどしか残存していな

かった。その下に同様の土で硬い貼床面が確認された。建物中央部の貼床面で幅10mの不整形の焼土面が見られ、南側の壁際の床面から土師器片が集中して出土した。主柱穴は4本認められる。

・SA7出土遺物(第67図)

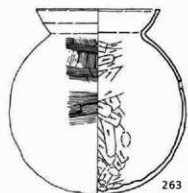
遺物は、建物南側の壁面付近から土師器襖(263)、建物西側の床面から高坏(264・265)が出土した。

263は「布留式」系譜の襖である。内湾する口縁部

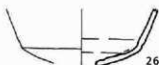


第66図 古墳時代竪穴建物跡(SA7)実測図

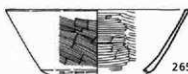
SA7 出土遺物



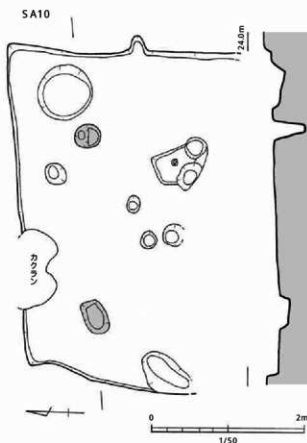
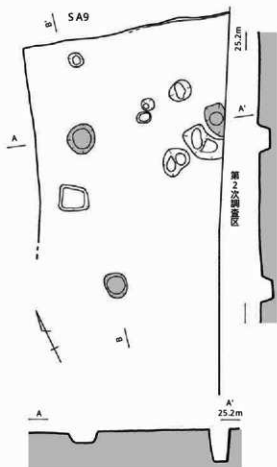
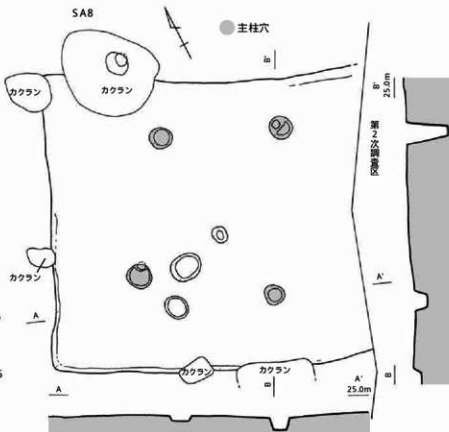
263



264



265



第 67 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA7) 出土遺物及び竪穴建物跡 (SA8-10) 実測図

で端部は内側に突出する。外面は条線の細かい板状工具でタテ方向のちヨコ方向へとハケ調整される。内面はヘラケズリが施されて器壁は極めて薄い。外来(庄内・布留式)系の高環の坏部(264・265)は口径に比して深いタイプである。

S A 8 (第 67 図)

F-2区北側の平坦部の第IV層で検出された。東側の一部は第2次調査の範囲である。建物床面まで削平が及んでいたため、遺物の出土はなかったが、とても浅いながらも方形の暗褐色土の範囲が検出されたことと、主柱穴とみられる4本のビットを検出したことから、竪穴建物跡であると判断した。

S A 9 (第 67 図)

F-2区北側の平坦部の第IV層で検出された。東側は第2次調査の範囲であり、形状は北側の一辺のみを確認した。S A 7まで約1m、S A 9まで約3mと隣接している。建物床面まで削平された関係で遺物は出土しなかったが、北側の一辺から暗褐色土の範囲がグラデーション状に方形に延び、主柱穴とみられるビットを3本検出したことから、4本柱構造とみられる竪穴建物跡であると判断した。

S A 10 (第 67 図)

F-2区中央部の平坦部の表土直下第III層で検出された。既にアカホヤブロックを含む黒褐色土の貼床面が露出していた。南側は広がりを確認できなかった。中央部の貼床面に焼土面がある。主柱穴が2本認められ、配置から4本柱構造であった可能性が高い。遺物は出土しなかった。

S A 11 (第 68 図)

F-2区中央部の平坦部の表土直下第III層で検出された。南側の一部に重機によるとみられる攪乱の影響を受けている。一辺約4mの方形で、隣接するS A 10とほぼ同規模である。埋土は厚さ0.1mで、A T、炭化材を含む。その下に貼床が確認できた。

中央付近に直径0.6m、深さ0.1mの焼土範囲があり、炉であるとみられる。炉内埋土中の炭化材の樹

種同定ではサカキとの結果が出ている。主柱穴は2本確認している。

・S A 11 出土遺物 (第 68 図)

建物床面から土師器襖(266)と高環(267)および砂岩由来の敲石(268)がある。266の口縁部は直立気味でやや内湾傾向である。接合痕の明瞭な粗雑なつくりである。

S A 12 (第 69 図)

F-2区南側の平坦部の表土直下第II層で検出。西側の半分程度は調査区外である。長辺5mの方形と推定される。埋土は明褐色土や炭を含む褐色土で、その下に貼床がみられ、掘り方でできた凸凹を平らにしていると考えられる。ビットはいくつか検出したが、主柱穴は見いださなかった。

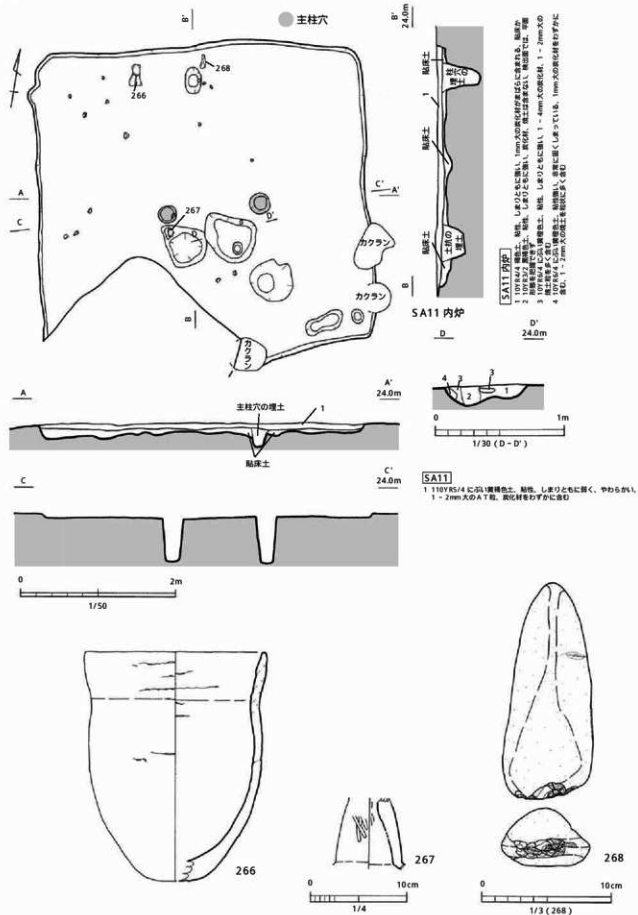
・S A 12 出土遺物 (第 69 図)

遺物は建物埋土中から床面にかけてまとまって出土した。第69図では床面出土遺物の位置と接合関係を示している。図化掲載した遺物は11点である。土師器襖の底部は丸みを帯びた尖底(270・271)がある。272は平底で、その中心部は上げ底状となる。底部を内部から充填して成形する技法である。275は在地系の高環と考えられる。274・276は広口壺で内湾する口縁部を有する。小型丸底壺(277)は二重口縁の口縁部をもつ。

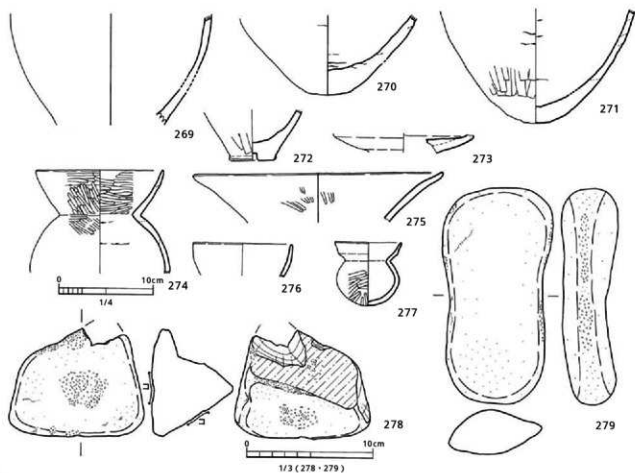
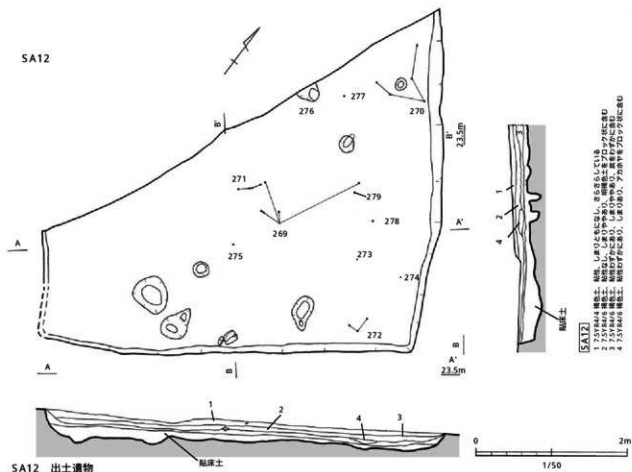
石器は凹石(278)・敲石(279)がある。ともに石材は砂岩である。中央と側縁に集約的な潰打痕を残している。279の側面の潰打痕の周辺は赤化している。

S A 13 (第 70 図)

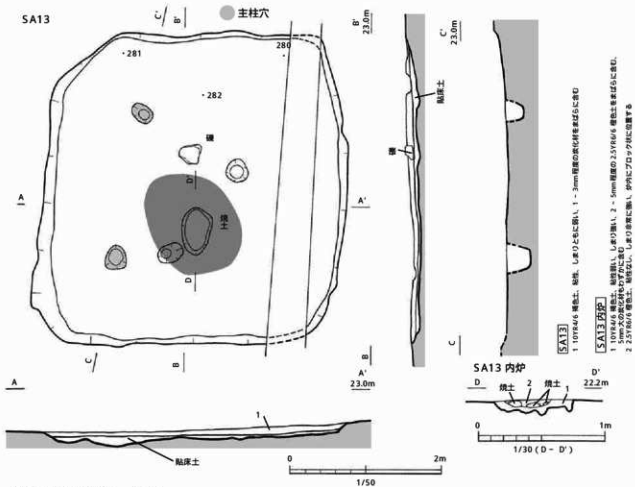
F-2区南側の平坦部の表土直下第IV層で検出された。全体において農業用の溝とみられる攪乱の影響を受けている。埋土は第V・VI層、炭を含む褐色土である。その下に貼床が確認できた。中央付近に直径13m、深さ0.2mの焼土範囲があり、炉であるとみられる。焼土範囲は、中ほどにしまりの強い焼土ブロックを含んでおり、この層を境に2層になっている。主柱穴は2本確認したが、配置から4本柱の構造であると考えられる。



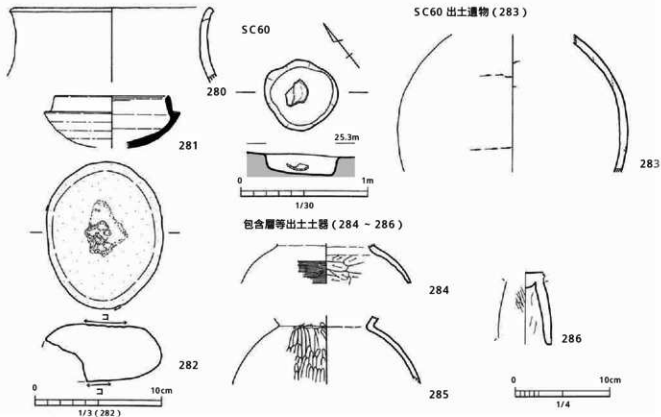
第 68 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA11) 及び出土土物実測図



第 69 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA12) 及び出土遺物実測図



SA13 出土遺物 (280 ~ 282)



第 70 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA13)・土坑及び出土遺物、古墳時代包含層等出土土器実測図

・ S A 13 出土遺物 (第 70 図)

遺物は主に建物床面中央の焼土面より出土した。土師器甕 (280) の口縁部は、緩やかに立ち上がり端部は外反する形態である。須恵器杯 (281) は焼成不良で土師質に近い。口縁部内面には凹線がめぐる。形態的には陶器窯跡編年の M T 15 型式に類似する。

石器は凹石 (282) がある。石材は尾鈴山酸性岩類で中央に潰打痕によるくぼみがあり、裏面割れ口に錆着が見られる。

② 土坑

出土遺物から、土坑 1 基は当時期のものであると確認した。

S C 60 (第 70 図)

F - 2 区北側の平坦部、表土直下の第 IV 層で検出

された。炉穴と隣接して検出されたため、炉穴の可能性も考えたが、底面に焼土が見られなかった。直径 0.6 m の円形で、深さは 0.2 m である。埋土は暗褐色土である。

・ S C 60 出土遺物

283 は土師器壺の胴部である。大型品の部類にはいる。外面には煮炊きの痕跡を示すススや赤変が認められる。

(3) 遺物

包含層等から出土した土器のうち、当時期のものと思われるものを掲載した (第 70 図)。

284 は布留式系の甕である。外面にヨコ方向への八ケ目、内面はヘラ削り調整される。285 は壺の胴部、286 は高坏の脚部である。

第 22 表 古墳時代土坑一覧表

遺構	出土位置 (グリッド)	検出面 (層)	遺構規模 (m)			等高線との位置	グループ	断面形態長軸方向	備考
			長径	短径	深さ				
S C 60	E 14	IV	0.6	0.5	0.2	-	C	長方形	古墳時代の土師器出土

第 23 表 古墳時代土器観察表 (1)

No	種類	器種	部位	出土地点 (位置) (層位)	手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (注量: cm)	
					外面	内面	外面	内面			
182	土師器	甕	口縁 - 柄	SA1	埋土	縦方向の工具ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	にぶい黄褐色 7.5 Y 6/7.4	2mm 以下の灰色・灰白色・褐色の粒を含み、角閃石をわずかに含む	外面にスス付着
183	土師器	甕	口縁 - 胴	SA1	床面	口縁・胴部: 横・斜方向のナデ 胴部: 縦方向のナデ	板状工具による横・斜方向のナデ	黄褐色 10 Y R 6/4	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	3mm 以下の灰色・暗褐色・赤褐色の粒を含み、2mm 程の灰色の光沢粒をわずかに含む	外面全体にスス付着 口径 (192)
184	土師器	甕	口縁 - 底	SA1	床面	口縁・胴部: 板状工具による縦・斜方向のナデ 底面: 縦方向のヘラミガキ	縦・横・斜方向の工具ナデ	暗赤褐色 2.5 Y R 5/6 にぶい黄褐色 10 Y R 7/3	浅黄 2.5 Y R 7/3	8mm 以下の灰色・6mm 以下のにぶい赤褐色の粒を多く含む	外面上部にスス付着 器高 32.2 口径 (20.1)
185	土師器	甕	口縁 - 底	SA1	床面	口縁・胴部: 横・斜方向の粗い工具ナデ 底面: ナデ 底面: 木の葉の痕	板状工具による横・斜方向のナデ	黄褐色 2.5 Y 6/4	にぶい黄褐色 2.5 Y 6/3	1 - 5mm 程の暗褐色・褐色の粒を含み、1mm 程の赤褐色の粒を含み、角閃石をわずかに含む	外面にスス付着 内面全体に黄変 器高 15.3 口径 (12.6)
186	土師器	甕	胴 - 胴	SA1	埋土	胴部: 横方向のヘラミガキ 胴部: 縦方向のヘラミガキ	横・斜方向の粗い工具ナデ	にぶい黄褐色 10 Y R 6/3	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	2 - 8mm 程の灰色の粒、5mm 以下の暗褐色・暗褐色の粒、3mm 以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面にスス付着 胴部最大径
187	土師器	甕	底	SA1	埋土	ケズリ跡、縦・斜方向のナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10 Y R 7/4	黄褐色 10 Y R 1.7/1	5mm 以下の灰色・灰白色・暗褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をわずかに含む	内・外面にスス付着 底径 4.9
188	土師器	甕	底	SA1	埋土	丁寧なナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10 Y R 7/3	にぶい黄褐色 10 Y R 7/2	1 - 5mm 程の灰色・褐色・暗褐色の粒、1 - 2mm 程の赤褐色の粒を含み、2mm 程の白色光沢粒をまばらに含む	8.3 と同一個体の 口径 3.1
189	土師器	甕	胴 - 底	SA1	床面	縦方向のヘラミガキ 胴部: 縦方向のナデ 底面: ナデ	板状工具による縦・斜方向のナデ	にぶい黄褐色 10 Y R 6/3	にぶい黄褐色 10 Y R 7/3	1 - 8mm 程の灰色・褐色・暗褐色の粒を含み、2 - 5mm 程の赤褐色の粒を含み	二重口径 (128)
190	土師器	壺	口縁	SA1	埋土	横ナデ下部に連続刻目	横ナデ	にぶい黄褐色 10 Y R 7/4	にぶい黄褐色 10 Y R 7/4	1 - 2mm 程の白色光沢粒をまばらに含む	
191	土師器	壺	胴	SA1	埋土	縦目状の交差横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色 7.5 Y R 7/4	にぶい黄褐色 10 Y R 7/4	2mm 以下のにぶい暗褐色・褐色の粒を含む	
192	土師器	壺	胴 - 胴	SA1	床面	胴部: 丁寧なナデ 胴部: 横ナデ 胴部: 縦方向のミガキ	胴部: 横ナデ 胴部: 縦ナデ 胴部: ナデ	にぶい黄褐色 10 Y R 6/4	にぶい黄褐色 10 Y R 6/3	1mm 以下の灰白色と褐色の粒を含む	胴部最大径 (120)
193	土師器	壺	胴	SA1	床面	斜・横方向のミガキ	丁寧なナデ	黄褐色 5 Y R 6/8	黄褐色 5 Y R 6/8	1mm 以下の灰色・灰色・灰白色の粒を含む	胴部最大径 (170)
194	土師器	壺	胴	SA1	ピット埋土	工具ナデ	板状工具による横ナデ	にぶい黄褐色 10 Y R 5/3	黄褐色 7.5 Y R 6/6	2 - 7mm 程の灰色・灰白色・淡黄褐色の粒、3mm 以下の暗褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石、1 - 4mm 程の白色・灰白色・灰色の光沢粒をまばらに含む	胴部径 (98) 胴部最大径 (214)
195	土師器	壺	口縁 - 底	SA1	床面	口縁・胴部: 横ナデ 胴部: 縦方向のミガキ 底面: 横・斜方向のミガキ	口縁・胴部: 横ナデ 胴部: 横・斜方向のナデ 丁寧なナデ 底面: ナデ	浅黄 2.5 Y 7/3	浅黄 2.5 Y 7/3	3mm 以下の褐色・2mm 以下の赤褐色の粒を含み、2mm 程の灰色の粒、1mm 程の白色光沢粒、角閃石をわずかに含む	外面底部一部黄変 口径 (90) 底径 10.4

第 24 表 古墳時代土器観察表 (2)

No	種類	器種	部位	出土地点 〔位置〕〔層位〕	手法・調製・文様		色調		胎土	備考 (流量)〔cm〕		
					外側	内側	外側	内側				
196	土器	小瓶	口縁	SA1	土坑	口縁・胴部：横方向のミガキ 横部：横・斜方向のミガキ	口縁・胴部：丁寧な横ナズ 横部：胴部：ナズ	浅黄緑 7.5 Y R 8/6	浅黄緑 7.5 Y R 8/6	1mm 程度の赤褐色・黒色の粒を含む	口径 6.6	
197	土器	小瓶	胴部	SA1	埋土	胴部：横ナズ 横部：横・斜方向のミガキ 底部：ナズ	胴部：横ナズ 横部：斜方向の工具ナズ	浅黄緑 7.5 Y R 8/4 に3.0 5 Y R 7/4	に3.0 5 Y R 7/4	1mm 以下の透明粒を多く含み、1mm 程度の灰色・褐色・赤褐色の粒を含む	外面全部黒炭色 口径部大径 (9.0)	
198	土器	壺	口縁	SA1	埋土	口縁：横ナズ 口縁・胴部：横・斜方向のミガキ 胴部：横・斜方向のミガキ	口縁：横ナズ 胴部：斜方向の工具ナズ 胴部：底部：ナズ、指押さえ	灰白 2.5 Y 8/2	淡黄 2.5 Y 8/3	4mm 以下の褐色の粒を多く含み、2mm 以下の灰色・灰白色の粒を含む、角閃石をわずかに含む	口縁部・胴部 に黒炭入り 口径 (7.8) 底径 (2.2)	
199	土器	小型鉢	底	SA1	埋土	底	指押さえ・指ナズ	褐色 10 Y R 4/1	に3.0 10 Y R 7/4	1mm 以下の透明粒を多く含み、1mm 程度の褐色の粒をわずかに含む	外面全部黒炭色 底径 2.2	
200	土器	高坏	坏	SA1	深面	口縁部：横方向の八角目縁・底部：横・斜方向の八角目	横方向の八角目後まばらなミガキ	に3.0 10 Y R 7/4	に3.0 7.5 Y R 7/4	2 - 3mm 程度の褐色・赤褐色の粒を含む	外面にスリ付 口径 (21.4)	
201	土器	高坏	坏	SA1	埋土	板状工具による横ナズ	横・斜方向のナズ	褐色 7.5 Y R 7/6	浅黄緑 10 Y R 8/4	4mm 以下の灰色・褐色・緑褐色・1mm 程度の赤褐色の粒を多く含み、1 - 3mm 程度の白色・灰白色光沢粒、角閃石をまばらに含む	外面にスリ付 口径 (17.8)	
202	土器	高坏	坏	SA1	埋土	口縁部：横・斜方向のナズ 口縁・底部：横・斜方向のナズ		灰白 10 Y R 8/2	灰白 10 Y R 8/2	1 - 6mm 程度の灰色・灰白色・褐色・赤褐色・1mm 程度の黒色の粒を多く含み、角閃石と 1mm 以下の透明粒をまばらに含む	口径 (20.6)	
203	土器	高坏	坏	SA1	深面	横ナズ後まばらなミガキ	横ナズ後まばらなミガキ	浅黄緑 10 Y R 8/4	浅黄緑 10 Y R 8/4	3mm 以下の灰色・褐色・灰白色・褐色の粒を多く含み、1mm 程度の赤褐色の粒を含む、角閃石・金雲母をまばらに含む	内・外面にスリ付 口径 (23.7)	
204	土器	高坏	坏	SA1	床土	胴部：横方向のミガキ 口縁部：横・斜方向のミガキ 底面：横・斜方向のナズ	横・斜方向のミガキ	褐色 7.5 Y R 6/6	に3.0 7.5 Y R 7/4	1mm 以下の灰色・透明の光沢粒を多く含み、2mm 以下の褐色・赤褐色の粒をわずかに含む	内面に部分的 黒炭 口径 (20.3)	
205	土器	高坏	坏	SA1	埋土	底面：横・斜方向のミガキ 胴部との接合部：縦方向のミガキ	ミガキ	に3.0 7.5 Y R 7/4	に3.0 10 Y R 7/3	1 - 2mm 程度の灰色・灰白色・褐色・赤褐色の粒を含む、角閃石をまばらに含む	内面全部黒炭色 胴部との接合部 に黒炭 口径 (20.5)	
206	土器	高坏 (口の部 口として転用)	胴部	SA1	深面	横ナズ	ナズ	褐色 7.5 Y R 7/6	褐色 7.5 Y R 7/6	1mm 以下の白色光沢粒を含む		
207	土器	高坏 (口の部 口として転用)	胴部	SA1	深面	外縁は環状に近いほど、被熱・還元焼成による変化がみられ、色調は環状に近い方から、次の①-④のように横線状に変化している。①環状との接合部、黄灰 (5 B 6/1) で表面は気泡状、磁青灰色 (5 B 8/1) の付着物が見られる。②胴部下部、黄灰 (5 B 6/1)。③胴部上部、褐色 (7.5 Y R 7/6)。④より下部、褐色 (5 Y R 7/6)。⑤-⑥では付着物や気泡状などの変化はみられない。内側の色調は全体に赤化しなとみられる程度である。付着物等はみられない。断面の色調は斜め縁状 (黄灰・赤灰・明灰・黒) に変化しており、内外面での熱の伝わりを示すと考えられる。	胴部：縦方向のナズ 横部：横ナズ	胴部：縦方向のナズ 横部：横ナズ	褐色 7.5 Y R 7/6	褐色 7.5 Y R 7/6	5mm 以下の灰白色・褐色・2mm 以下の灰色・褐色の粒を多く含み、角閃石・金雲母をまばらに含む	横部径 (13.7)
208	土器	高坏 (口の部 口として転用)	胴部	SA1	床土	胴部：外縁は、環状に近いほど、被熱・還元焼成による変化がみられ、色調は環状に近い方から、次の①-④のように横線状に変化している。①環状との接合部、灰オリーブ (5 Y 5/2) で 1 - 2mm 程度の気泡状の穴が多数見られる。②胴部下部、黄灰 (5 B 6/1)。③胴部上部、褐色 (7.5 Y R 7/6)。④より下部、褐色 (5 Y R 7/6)。⑤-⑥では付着物や気泡状などの変化はみられない。⑦胴部下部、褐色 (7.5 Y R 7/6)。⑧では付着物や気泡状などの変化はみられない。断面の色調は斜め縁状 (黄灰・赤灰・明灰・黒) に変化しており、内外面での熱の伝わりを示すと考えられる。横部内外面は、一部赤化し、一部分は赤化はみられない。	胴部：縦方向のナズ 横部：横ナズ	胴部：縦方向のナズ 横部：横ナズ	褐色 7.5 Y R 7/6	褐色 7.5 Y R 7/6	2mm 以下の灰白色・白色の粒を含み、1mm 程度の赤褐色の粒と角閃石をまばらに含む	横部内径 口径 (15.0)
209	土器	高坏 (口の部 口として転用)	胴部	SA1	深面	接合部：ミガキ 胴部：縦方向のミガキ 横部：横方向のナズ	接合部：ナズ、しぼり痕あり 胴部：ナズ	褐色 7.5 Y R 7/6	褐色 7.5 Y R 7/6	2mm 以下の灰白色・白色の粒を含み、1mm 程度の赤褐色の粒と角閃石をまばらに含む	横部内径 口径 (15.0)	
210	土器	高坏 (口の部 口として転用)	胴部	SA1	深面	胴部：横ナズ 横部：横・斜方向のミガキ 横部：横ナズ	横部：横ナズ 胴部：横方向のナズ 横部：ナズ、横・斜方向のミガキ 横部：横ナズ	に3.0 10 Y R 7/4	に3.0 7.5 Y R 7/4	3mm 以下の赤褐色・1mm 以下の黒色の粒を含む	横部径 (14.4)	
211	土器	高坏 (口の部 口として転用)	胴部	SA1	床土	胴部：外縁は上部と下部で色調が異なり、上部は黄灰 (5 B 6/1) で、環状との接合部で濃い黒炭の影響を受けたとみられ、褐色 (10 Y R 4/1) に変色し、1 - 3mm 程度の気泡状の穴が多数見られる。下部はに3.0で、赤化が少し見られる。胴部内外は、環状との接合部で黄灰 (5 B 6/1) に変色し、胴部下部は褐色 (7.5 Y R 6/6) に赤化している。胴部上部は、胴部内外面での熱の伝わりを示すと考えられる。横部内外面は、一部赤化し、一部分は赤化はみられない。	胴部：縦方向のナズ 横部：横・斜方向のミガキ 横部：横ナズ	明黄緑 10 Y R 7/6	に3.0 7.5 Y R 7/4	3mm 以下の褐色・赤褐色の粒の多くを含む	横部外径 底径 (11.9)	
212	土器	高坏	坏	SA1	深面	環状との接合部：横ナズ 胴部：横・斜方向のミガキ 横部：横・斜方向のミガキ	胴部：斜方向のナズ 横部：横ナズ	黄褐色 5 Y R 7/6	に3.0 5 Y R 7/4	1mm 以下の黒色・灰色・灰白色・白色・赤褐色の粒を含む	横部一部黒炭色 底径 12.8	
213	土器	高坏	坏	SA1	深面	胴部：縦方向のミガキ 横部：横・斜方向のミガキ 横部：横ナズ	胴部：横ナズ 横部：上部は横方向の八角目縁、下部は横ナズ	に3.0 7.5 Y R 7/4	に3.0 7.5 Y R 7/4	5mm 以下の赤褐色・1mm 以下の黒色の粒を含む	横部径 13.2	
214	土器	高坏	坏	SA1	深面	胴部：縦方向のミガキ 横部：横方向のミガキ 横部：横ナズ	胴部：縦ナズ 横部：丁寧なナズ	浅黄緑 10 Y R 8/4	浅黄緑 7.5 Y R 8/4	1mm 程度の褐色・灰色・灰白色の粒を多く含む		

第25表 古墳時代土器観察表(3)

No	種類	器種	部位	出土地点 (位置) (層位)	手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (容量; cm)	
					外面	内面	外面	内面			
215	土師器	高坏	脚	SA1	床面	脚柱部: 縦方向のミガキ 上部: 横・斜方向のミガキ 下部: 横ナデ	脚柱部: 縦・横方向のナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	黄 25 Y R 6/6 赤 5 Y R 6/6	1mm以下の灰白色・白色の粒を含み、角閃石をまばらに含む		
226	土師器	横	口縁-底	SA4	埋土	口縁部: 指押さえ後へのミガキ 上部: 縦方向のヘラケツリ	口縁部: 斜方向のナデ 上部: 斜方向のナデ 下部: 横ナデ	黄 5 Y R 1/1 赤 7.5 Y R 5/4	3mm以下の灰色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体入り付着 口径 (162)	
227	土師器	横	口縁-胴	SA4	床面	口縁部: 横ナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	黄 5 Y R 6/6 赤 5 Y R 5/6	5mm以下の灰色・灰白色・3mm以下の褐色・褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体入り付着 胴部・口縁部にスス付着 口径 (210)	
228	土師器	横	口縁-底	SA4	床面	口縁部: 横ナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	黄褐色 10 Y R 3/1	3mm以下の灰色・暗褐色・2mm以下の褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内外面入り付着	
229	土師器	横	口縁-底	SA4	埋土	口縁部: 横ナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	黄 25 Y 2/1	6mm以下の灰色・4mm以下の褐色・3mm以下の暗褐色・赤褐色・灰白色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面入り付着	
230	土師器	口縁-底	SA4	床面	口縁部: 横ナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	に3.5黄褐色 10 Y R 7/3	4mm以下の灰白色・褐色・3mm以下の灰色・灰白色・褐色・2mm以下の暗褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内外面入り付着 口径 (200)		
231	土師器	横	胴-底	SA4	床面	胴部: 斜方向のナデ 上部: 斜方向のナデ 下部: 横ナデ	胴部: 横ナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	黄 5 Y R 6/6	5mm以下の灰色・3mm以下の暗褐色・褐色・2mm以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	胴部外面入り付着	
232	土師器	横	底	SA4	埋土	底面: 縦方向のミガキ 上部: 横ナデ	底面: 横ナデ 上部: 横ナデ	に3.5黄褐色 10 Y R 7/4	4mm以下の赤褐色・3mm以下の灰白色・褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内外面一部入り付着 容量 (42)	
233	土師器	横	底	SA4	床面	不定方向のナデ、底に指押さえ痕	縦方向の指ナデ、底に指押さえ痕	黄褐色 10 Y R 6/4	5mm以下の灰色・暗褐色・2mm以下の白色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面入り付着 底径 (10)	
234	土師器	横	底	SA4	埋土	不定方向のナデ	不定方向のナデ	に3.5黄褐色 10 Y R 6/4	5mm以下の灰白色・3mm以下の灰色・暗褐色・褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内面全体黒変	
235	土師器	壺	頸	SA4	埋土	不定方向に削みのある変態・横・斜方向のナデ	縦方向のナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	に3.5黄褐色 10 Y R 6/4	4mm以下の灰色・灰白色・褐色・3mm以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体入り付着	
236	土師器	壺	口縁	SA4	埋土	横ナデ	横ナデ	洗黄褐色 7.5 Y R 8/4	4mm以下の灰色・灰白色・2mm以下の褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内面一部黒変 口径 (96)	
237	土師器	壺	口縁	SA4	埋土	ヘラ指さす状況、斜方向のナデ	縦方向のナデ	黄褐色 10 Y R 3/2	3mm以下の灰白色・暗褐色・褐色・1mm粒の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体入り付着	
238	土師器	高坏	坏	SA4	床面	縦化が著しいが、ミガキ平	縦化が著しいが、ミガキ平	黄褐色 10 Y R 8/8	白日光沢粒・2mm以下の灰色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む		
239	土師器	高坏	坏	SA4	床面	口縁部: ナデ後斜方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	口縁部: ナデ後斜方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	洗黄褐色 7.5 Y R 8/4	2mm以下の褐色・暗褐色・灰色の粒を含み、1mm粒の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む		
240	土師器	高坏	脚	SA4	床面	脚柱部: 縦方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	脚柱部: 縦方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	に3.5黄褐色 10 Y R 7/4	5mm以下の灰白色・2mm以下の褐色・褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内外面一部入り付着 胴部径 (108)	
241	土師器	高坏	脚柱	SA4	埋土	坏部との接合部: 横ナデ 脚柱部: 縦方向のミガキ	縦方向のナデ	洗黄褐色 10 Y R 8/4	2mm以下の褐色・暗褐色・灰色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む		
242	土師器	小型鉢	口縁-底	SA4	埋土	口縁-胴部: 横ナデ 底面: 不定方向のナデ	口縁-胴部: 横ナデ 底面: 不定方向のナデ	黄 7.5 Y R 7/6	4mm以下の灰白色・3mm以下の褐色・暗褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体・内面一部黒変 容量 51 口径 (81) 底径 1.8	
243	土師器	小型鉢	底	SA4	埋土	ナデ	不定方向のナデ	黄 25 Y 6/1	3mm以下の赤褐色・2mm以下の褐色の粒を含む	底径 (30)	
255	土師器	横	胴	SA5	床面	横溝が不明顔面状の横溝	丁寧なナデ	灰黄褐色 10 Y R 5/2 黄 25 Y R 1/1	黄 7.5 Y R 6/6	2 ~ 2mmの褐色の粒を含む	外面全体入り付着 胴部に種子とみられる圧痕
258	土師器	横	胴-底	SA6	床面	縦方向のナデ	胴部: 斜方向のナデ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	に3.5黄褐色 10 Y R 7/4	3mm以下の褐色・暗褐色・赤褐色の粒を含み、2 ~ 5mm粒の灰白色の粒・角閃石をまばらに含む	外面全体入り付着	
259	土師器	横	胴-底	SA6	埋土	縦化工具による縦・斜方向のナデ、底面・指押さえ痕	縦化工具による縦・斜方向のナデ、底面・指押さえ痕	黄褐色 10 Y R 3/1	3mm以下の灰白色・3mm以下の灰色・褐色・暗褐色・1mm粒の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	胴部外面入り付着 容量 43	
260	土師器	横	底	SA6	埋土	縦目状の変態横ナデ	縦方向のミガキ	洗黄褐色 5 Y R 4/3	1 ~ 2mm粒の灰色・灰白色・褐色・暗褐色・赤褐色の粒を含み、1mm以下の黒色日光沢粒をわずかに含む		
263	土師器	口縁-底	SA7	埋土	口縁部: 横ナデ 胴部: 縦方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 底面: 横ナデ	口縁部: 横ナデ 胴部: 縦方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ 底面: 横ナデ	黄 7.5 Y R 7/6	2 ~ 5mmの白色の粒をまばらに含む	外面口縁・胴部入り付着 胴部・底面黒変 口径 (130)		
264	土師器	高坏	坏	SA7	床面	丁寧なナデ	丁寧なナデ	に3.5黄褐色 10 Y R 7/4	2mm以下の灰褐色・灰色・黒色の粒を含む		
265	土師器	高坏	坏	SA7	床面	丁寧なナデ	丁寧な縦方向のミガキ	明赤褐色 10 Y R 7/6	2mm以下の白色日光沢粒を含む	口径 (192)	
266	土師器	横	口縁-底	SA11	床面	口縁部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ 胴部: 横方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	に3.5黄褐色 10 Y R 7/3	10mm以下の灰色・灰褐色・7mm以下の褐色・暗褐色の粒を含み、2mm以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	口径 (188) 底径 (44)	
267	土師器	高坏	脚	SA11	埋土	脚柱部: ナデ後まばらなミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	脚柱部: 縦方向のミガキ 上部: 横ナデ 下部: 横ナデ	黄 7.5 Y R 7/4	2mm以下の灰色・暗褐色・1mm以下の灰白色・赤褐色の粒を含む		

第26表 古墳時代土器観察表(4)

No	種類	器種	部位	出土地点 (位置)(層位)	手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (寸法:cm)	
					外面	内面	外面	内面			
269	土師器	甕	胴	SA 12	床面	縦方向のナデ	不定方向のナデ	にぶい横 7.5 Y R 5/3 にぶい横 7.5 Y R 5/4	2mm 以下の灰白色、灰色の粒を含む、角閃石をまばらに含む	内面入側スリ付	
270	土師器	甕	胴-底	SA 12	埋土	胴部:縦方向のナデ 底部:ナデ	ナデ	浅黄 2.5 Y 7/4	浅黄 2.5 Y 7/3	5mm 以下の褐色、緑褐色の粒を多く含む、4mm 以下の灰白色、灰白色の粒を含む	内面入側スリ付 底径(46)
271	土師器	甕	胴-底	SA 12	ピット埋土	胴部:板状工具による縦方向のナデ 底部:ナデ	ナデ	にぶい横 10 Y R 6/4	横 7.5 Y R 6/6	2-7mm の緑褐色、灰色の粒を多く含む、2mm 以下の灰白色、赤褐色の粒を含む、角閃石をまばらに含む	外面底、内面全体入側付
272	土師器	甕	胴-底	SA 12	床面	胴部:ケズリ後斜方向のナデ 底部:ナデ	ナデ	黒 10 Y R 2/1	にぶい横 7.5 Y R 6/4	2mm 以下の灰色、灰白色、2-5mm の褐色、緑褐色、1mm 程の赤褐色の粒を含む	上板底 底径 49.5
273	土師器	高坏	坏	SA 12	埋土	縦・横方向のナデ	横ナデ	にぶい横 7.5 Y R 7/4	にぶい横 10 Y R 7/4	2mm 以下の灰色、灰白色、3mm 程の灰褐色の粒を含む	
274	土師器	甕	口縁-胴	SA 12	埋土	口縁上部:横方向のミガキ 口縁下部:縦方向のミガキ 胴部:横方向のミガキ 底部:斜方向のミガキ	口縁部:横ナデ後横方向のミガキ 胴部:ナデ	横 7.5 Y R 6/6	横 7.5 Y R 6/6	2mm 以下の灰色、灰白色の粒を含む、角閃石をまばらに含む	外面全体、内面口縁部入側付 口径(135)
275	土師器	高坏	坏	SA 12	床面	横ナデ後まばらなミガキ	横ナデ	にぶい横 10 Y R 7/4	にぶい横 10 Y R 7/4	3mm 以下の褐色、灰色、灰白色、褐色、緑褐色の粒を多く含む、角閃石をまばらに含む	内面一部入側付 口径(266)
276	土師器	甕	口縁	SA 12	埋土	横ナデ	横ナデ	黒 5 Y R 7/8	横 7.5 Y R 7/6	1mm 以下の褐色、白色の粒を多く含む、2mm 程の黒色光沢粒をわずかに含む	口径(102)
277	土師器	小型尖底甕	ほぼ底壳形	SA 12	埋土	口縁-胴部:横ナデ 胴部:縦方向のミガキ 底部:縦方向のミガキ	口縁-胴部:横ナデ 胴-底部:ナデ	明赤横 10 Y R 7/6	明赤横 10 Y R 7/6	1-2mm の赤褐色の粒を含む、3mm 以下の白色光沢粒を含む	二重口縁 器高 67 底径(68) 口径 69
280	土師器	甕	口縁-胴	SA 13	埋土	口縁部:横ナデ 胴部:斜方向のナデ	口縁部:横ナデ 胴部:斜方向のナデ	紫横 2.5 Y R 3/1	浅黄 2.5 Y R 7/4	1-5mm の灰色、灰白色、緑褐色、1mm 程の褐色、赤褐色の粒を含む	外面全体入側付 口径(208)
281	須恵器	坏身	胴-底	SA 13	埋土	口縁-受部:回転横ナデ 底部:回転ヘラズリ	回転横ナデ 胴部に凹縁	灰白 5 Y 7/2	灰白 5 Y 7/2	精粒、1mm 以下の灰白色の粒を含む	口径 120 胴部径 144
283	土師器	甕	胴	SC60	埋土	横・斜方向のナデ	横・斜方向の工具ナデ	浅黄 2.5 Y 7/4	にぶい横 10 Y R 7/3	1-3mm の灰白色、灰褐色の粒を含む	
284	土師器	甕	胴	F15 Gr	Ⅲ	胴部:横ナデ 胴部:縦方向のハゲ目 後横方向のハゲ目	胴部:丁寧な横ナデ 胴部:横ナデ	にぶい横 10 Y R 7/4	にぶい横 7.5 Y R 7/4	2mm 以下の灰白色、灰色、褐色の粒を含む	
285	土師器	甕	胴-口	B20Gr	Ⅱ上面	胴部:横方向のミガキ 胴部:縦方向のミガキ	横方向のナデ	横 7.5 Y R 7/6	横 7.5 Y R 7/6	1mm 以下の褐色、灰色、灰白色、褐色の粒を含む、角閃石をまばらに含む	
286	土師器	高坏	坏	N04Gr	埋土	縦方向のミガキ	縦方向のナデ しぼり痕	横 2.5 Y R 6/8 横 5 Y R 6/6	横 7.5 Y R 7/6	1mm 以下の灰白色の粒を多く含む	

第27表 古墳時代甕2建物跡出土石器計測表(1)

No	器種	石材	出土地点		計測値			備考	
			(位置)	(層位)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		重量(g)
216	石斧	瑠璃頁岩	SA 1	埋土	7.58	4.92	0.94	42.10	正面は自然面、裏面は削り面にて削。両側面と下部に削製調整
217	刮石	砂岩	SA 1	埋土	7.80	3.70	3.50	149.3	下部に削打痕集中、左側面にまばらな削打痕、一部赤化
218	刮石	砂岩	SA 1	埋土	13.10	5.50	4.10	433.9	正面、裏面中央に削打痕集中、左側面の削打痕は細かく集中、下部に削製痕
219	刮石	砂岩	SA 1	床面	11.25	10.40	6.10	871.4	正面に放射状、線状の使用痕、正面全面に磨製、やや集中した削打痕、右側面に削製痕
220	刮石	砂岩	SA 1	床地土面	33.70	13.65	10.90	6770.0	正面の大部分が磨製、磨製の一部分が褐色に着色(錆着か?)
221	刮石	砂岩	SA 1	床面	34.85	14.15	18.80	13500.0	3面に磨製、裏面は赤化、粒状の錆着、一部欠損
244	刮石	砂岩	SA 4	埋土	5.55	7.45	1.60	93.7	長軸方向の両側面を打ち欠き、裏面に削製痕
245	石斧	砂岩	SA 4	埋土	10.12	5.62	1.11	73.00	正面、裏面とも左右からの削打で削製、両側面、下部を削製調整、裏面に自然面残存
246	刮石	厚砂山酸性雑岩	SA 4	床地土面	9.60	9.45	5.40	711.8	正面、裏面に磨製、側面の一部に削打痕
247	刮石	砂岩	SA 4	床面	13.35	7.25	5.50	530.4	正面中央部、下部に削打痕集中、一部欠損
248	刮石	砂岩	SA 4	床面	11.40	7.30	2.20	221.8	正面に薄層の削打痕集中、右側面にも削打痕、一部欠損
249	刮石	砂岩	SA 4	床面	14.40	7.00	4.60	718.5	正面中央部に削打痕集中、裏面中央部にも削打痕
250	刮石	砂岩	SA 4	床地土面	11.90	8.10	2.50	417.5	正面中央部に削打痕集中、一部赤化、割れ口に錆着、一部欠損

第 28 表 古墳時代竪穴建物跡出土石器計測表(2)

No	器種	石材	出土地点		計測値			備考	
			〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕		重量〔g〕
251	台石	砂岩	SA 4	床面	10.30	5.50	4.20	300.5	正面中央部にややまばらな駄打痕。一部欠損
252	台石	砂岩	SA 4	床底土面	33.90	16.30	5.80	4620.0	正面、裏面中央部にややまばらな駄打痕。正面左側に磨面。石面からの転用か
253	石面	砂岩	SA 4	床底土面	24.20	11.80	8.60	3120.0	正面中央部に磨面。一部赤化。一部欠損
254	石面	砂岩	SA 4	床面	41.10	17.20	7.30	5760.0	正面中央部に磨面。粒状の結着
257	台石	砂岩	SA 5	床面	18.00	16.00	4.30	2250.0	正面、裏面中央部にやや不規則な駄打痕集中。裏面に磨面跡、石面からの転用が併用。一部欠損
261	台石	砂岩	SA 6	埋土	17.50	7.90	5.10	973.4	正面中央部に駄打痕集中。両側面にも駄打痕。下面に粒状の結着あり。耐石との併用か
262	台石	砂岩	SA 6	埋土	24.20	11.30	5.80	2920.0	正面、裏面ともまばらな駄打痕と一部磨面。石面からの転用が一部欠損
268	耐石	砂岩	SA 11	床面	16.70	7.00	4.50	557.3	下部に使用痕。左側面に駄打痕
278	凹石	砂岩	SA 12	埋土	8.55	10.70	7.60	641.7	正面、裏面の中央部に駄打痕集中。ややまばらな駄打痕も数箇所
279	耐石	砂岩	SA 12	埋土	17.00	8.75	4.45	876.7	両側面中央部にややまばらな駄打痕。右側面の一部が赤化
282	凹石	尾跡山酸性岩類	SA 13	埋土	11.60	9.30	4.60	621.9	正面、裏面中央部に駄打痕集中。裏面割れ口に粒状の結着あり。一部欠損

第 29 表 古墳時代竪穴建物跡出土装飾品計測表

No	器種	出土地点		計測値			色調	備考	
		〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕			重量〔g〕
256	ガラス小玉	SA 5	床面	0.4	0.45	0.35	0.08	コバルトグリーン	完形

第 30 表 古墳時代竪穴建物跡出土鉄滓計測表

No	種類	出土地点		計測値			備考	
		〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕		重量〔g〕
222	鉄滓状の塊	SA 1	遺構内炉 1 埋土	4.4	2.4	1.6	13.39	砂質付着層
223	鉄滓状の塊	SA 1	遺構内炉 1 埋土	3.9	5.0	2.1	22.18	砂質付着層
224	鉄滓状の塊	SA 1	遺構内炉 1 埋土	4.3	3.9	2.6	15.06	砂質付着層。本炭層
225	瓶形滓状の塊	SA 1	遺構埋土	4.5	4.9	1.7	60.89	瓶形鉄滓

第 31 表 古墳時代竪穴建物跡出土棒状礫計測表

No	器種	石材	出土地点		計測値			備考	
			〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕		重量〔g〕
	棒状礫	砂岩	SA 1	床面	16.65	6.00	5.35	723.2	
	棒状礫	砂岩	SA 1	床面	19.55	5.80	4.05	812.8	
	棒状礫	砂岩	SA 1	床面	15.40	6.30	3.70	433.1	
	棒状礫	砂岩	SA 1	埋土	20.70	9.00	5.40	1074.0	
	棒状礫	砂岩	SA 1	埋土	15.50	6.10	5.30	773.5	
	棒状礫	砂岩	SA 4	床面	15.00	6.70	4.35	503.1	
	棒状礫	砂岩	SA 4	埋土	18.30	6.75	3.30	685.3	
	棒状礫	砂岩	SA 4	床底土面	14.40	7.65	4.95	681.8	
	棒状礫	砂岩	SA 4	床底土面	18.10	8.40	7.65	1355.0	
	棒状礫	砂岩	SA 7	床面	18.40	6.10	4.40	526.8	
	棒状礫	砂岩	SA 7	床面	16.80	7.40	4.65	807.1	
	棒状礫	砂岩	SA 12	床面	14.50	8.30	5.30	885.7	
	棒状礫	砂岩	SA 12	床面	18.90	5.90	5.50	727.1	
	棒状礫	砂岩	SA 12	床面	16.80	6.75	5.10	762.0	
	棒状礫	砂岩	SA 12	埋土	17.50	8.00	5.30	1102.4	
	棒状礫	砂岩	SA 12	埋土	18.10	7.50	3.15	575.4	
	棒状礫	砂岩	SA 13	埋土	17.30	7.90	4.60	719.1	

6 古代～近世の遺構と遺物

(1) 概要

今回の調査では、表土直下の遺構検出中、多数のピットが検出された。また、包含層掘削や遺構掘削の過程で新たなピットが検出されることもあり、調査区全体にわたり900基以上のピットを確認した。掘立柱建物跡を現場での調査中及び整理作業の過程において12棟確認し、近世のものと思われる溝状遺構を8条確認した(第71図)。

また、遺構や撓乱、包含層の掘削の結果、中世の土器や近世の陶磁器、古銭等が出土している。

(2) 遺構

① 掘立柱建物跡(第32表)

第4次調査区内の掘立柱建物跡は、E-1区で3棟(SB1～3)、E-2区で2棟(SB4・5)、F-1区で2棟(SB6・7)、F-2区で5棟(SB8～12)の合計12棟である。現地調査中に確認できたものは2棟(SB8・9)で、他は整理作業の過程で配置や埋土等を検討した結果、認定した。

遺物の出土したものは少なく、時期が不明確であるものがほとんどである。根固め石のようなものも見られなかった。身舎面積は、第2・3次調査で確認されたものと比較して小さいものが多い。

SB1(第72図)

E-1区の谷部の北側傾斜面に位置し、SB2・3と隣接している。5つの柱穴のうちP2～4は第II層上面で、P1・P5は第III層上面で検出された。主軸は北から2°西に振れる。桁行2間(約27m)、梁行1間(約17m)であると思われるが、P1と対になる柱穴は検出されなかった。身舎面積約44㎡を測る。今回確認した掘立柱建物跡の中では最も面積の小さいものである。梁行の向きを谷の向きにほぼ並行にして建てられている。

SB2(第72図)

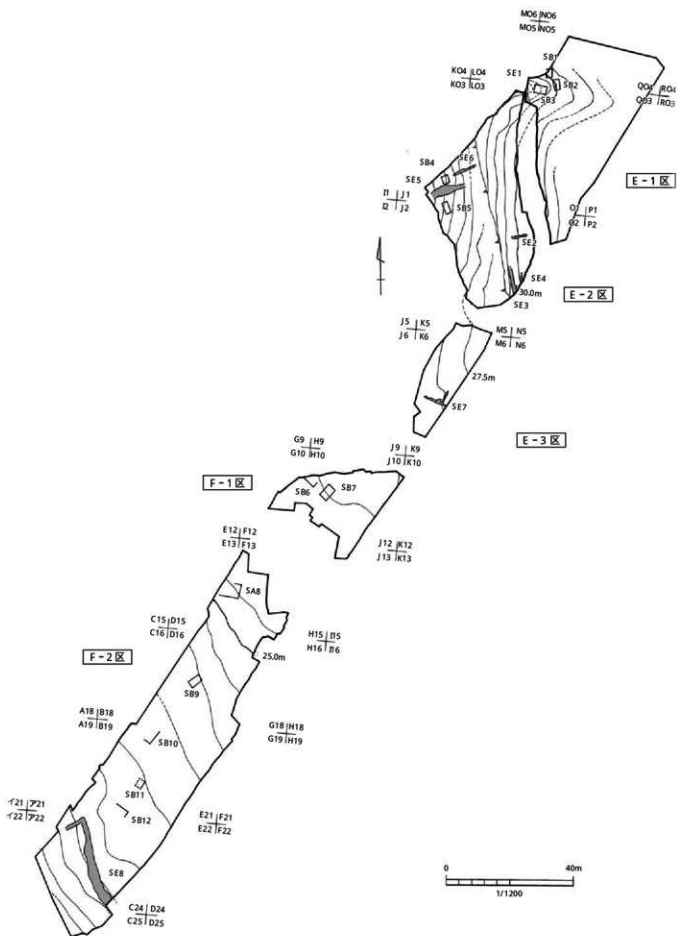
E-1区の谷部のほぼ中央部に位置する。6つの柱穴のうち、P5は第III層上面で、他の5つは第II層上面で検出された。主軸は北から16°西に振れる。桁行2間(約35m)、梁行1間(約20m)で、身舎面積約68㎡を測る。SB1と同様に、梁行の向きを谷の向きにほぼ並行にして建てられている。

SB3(第72図)

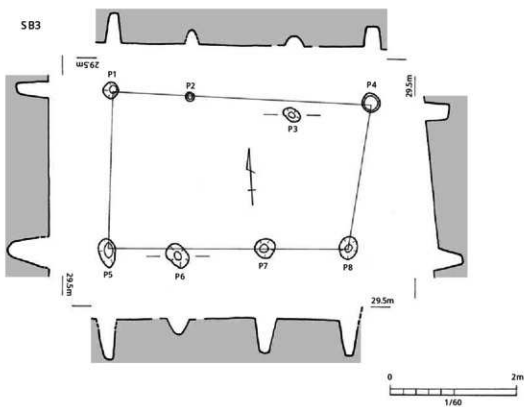
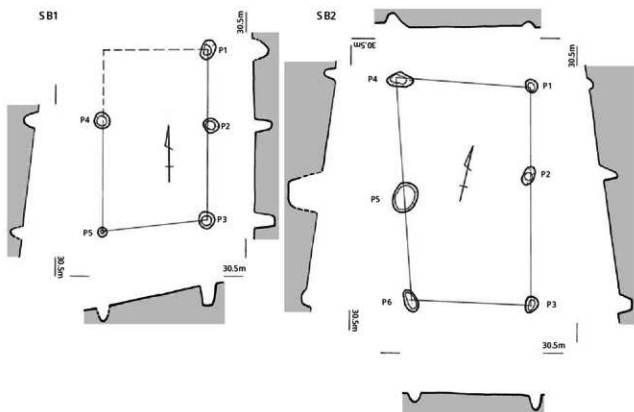
E-1区の谷部のほぼ中央部に位置する。柱穴は、SA1(竪穴建物跡)の掘削中に検出された。主軸は北から86°西に振れ、隣接するSB1・2と異なり、桁行を谷の向きにほぼ並行にして建てられている。桁行3間(約39m)、梁行1間(約24m)で、身舎面積約94㎡を測り、SB1・2よりやや大きい。

第32表 掘立柱建物跡一覧表

遺構	位置 (グリッド)	主軸方位	身舎面積 (㎡)	桁		梁		備考		
				規格	桁行 (m)	規格	梁行 (m)			
SB 1	N04	N-2°-E	4.41	2間	2.67	1.34	1間	1.65	1.65	整理作業で認定
SB 2	N04-N03	N-16°-E	6.83	2間	3.50	1.75	1間	2.01	2.01	整理作業で認定
SB 3	N03	N-86°-E	9.35	3間	3.93	1.31	1間	2.38	2.38	整理作業で認定
SB 4	K1	N-24°-E	4.55	2間	2.32	1.16	2間	1.96	0.98	整理作業で認定
SB 5	K1-K2	N-28°-E	5.98	2間	3.74	1.87	1間	1.62	1.62	整理作業で認定
SB 6	G10-H11	N-51°-E	7.43	2間	4.22	2.11	1間	1.76	1.76	整理作業で認定
SB 7	H11	N-39°-W	12.35	3間	4.38	1.46	2間	2.82	1.41	整理作業で認定
SB 8	E14-F14	N-83°-E	27.10	3間	6.16	2.05	1間	4.40	4.40	現地調査中に確認 縄文時代早期土器片・弥生土器片・吉墳時代土器片、近世後半陶器片が出土
SB 9	D17-E17	N-46°-W	8.40	2間	3.79	1.90	1間	2.24	2.24	現地調査中に確認 近世後半陶器片が出土
SB 10	C19	N-33°-W	10.70	3間	4.84	1.61	2間	2.21	1.11	整理作業で認定
SB 11	C20-C21	N-29°-W	5.47	2間	2.58	1.29	1間	2.13	2.13	整理作業で認定
SB 12	B21-C21	N-58°-E	6.96	3間	4.38	1.46	1間	1.59	1.59	整理作業で認定



第 71 图 古代 - 近世遺構配置図



第 72 图 掘立柱建物跡実測图 (1)

S B 4 (第73図)

E-2区に位置する。最も近いS B 5から約6m離れた位置にある。柱穴は第Ⅱ層上面で検出された。P 2はテラスを持つ2段ピットである。主軸は北から24°西に振れる。桁行2間(約23m)梁行2間(約20m)であるが、梁行が2間とすると、その平均柱間が約1mと短いことから、P 4は独立した棟持柱である可能性もある。身舎面積約46㎡を測る。等高線に並行に建てられている。

S B 5 (第73図)

E-2区に位置する。柱穴は第Ⅱ層上面で検出された。P 4・5は2段ピットである。主軸は北から28°西に振れ、近くにあるS B 4とほぼ並行であり、等高線にほぼ並行に建てられている。桁行2間(約37m)梁行1間(約16m)で、身舎面積約60㎡を測り、S B 4よりやや大きい。

S B 6 (第73図)

F-1区の平坦地に位置する。柱穴は表土直下の第Ⅲ層で検出された。S B 7と隣接している。P 1は2段ピットである。主軸は北から51°西に振れる。桁行2間(約42m)梁行1間(約18m)であると思われるが、P 1・2と対になるピットは確認できなかった。身舎面積約74㎡を測る。等高線に並行に建てられている。

S B 7 (第73図)

F-1区の平坦地に位置する。柱穴のうちP 1～4はS B 6と同じ第Ⅲ層で、P 5～7はS A 6(竪穴建物跡)掘削中に検出された。主軸は北から39°東に振れ、S B 6の主軸と直交している。対になる柱穴が一部見つからなかったが、桁行3間(約44m)梁行2間(約28m)であると思われる。身舎面積は約123㎡を測り、S B 6より大きい。等高線に対し直交して建てられている。

S B 8 (第74図)

F-2区で検出された。他の掘立柱建物跡と離れたところにある。表土直下の第Ⅲ～Ⅳ層で検出した。他のものと比較して、柱穴が大きく、深さが揃っており、埋土がとても似通っている(第Ⅰ層の土と似ている小礫の混じった暗褐色土)ため、現場調査中に掘立柱建物跡と確認した。主軸は北から83°西に振れる。桁行3間(62m)梁行1間(44m)であると推測されるが、P 7と対になる柱穴は調査区外にあると思われる。また、梁行が比較的長く、2間であるとも考えられたが、中間付近に柱穴らしいピットは確認できなかった。等高線に並行に建てられている。

P 1から古墳時代の土師器片と近世後半の陶器片、P 3から縄文時代早期の土器片、P 7から弥生土器片が出土した。縄文時代早期の炉穴(S P 15～22)と古墳時代の土坑(S C 60)を囲むようにして建てられていることから、この時代の土器が入り込んだと考えられる。この建物自体は、近世後半以降のものと思われる。

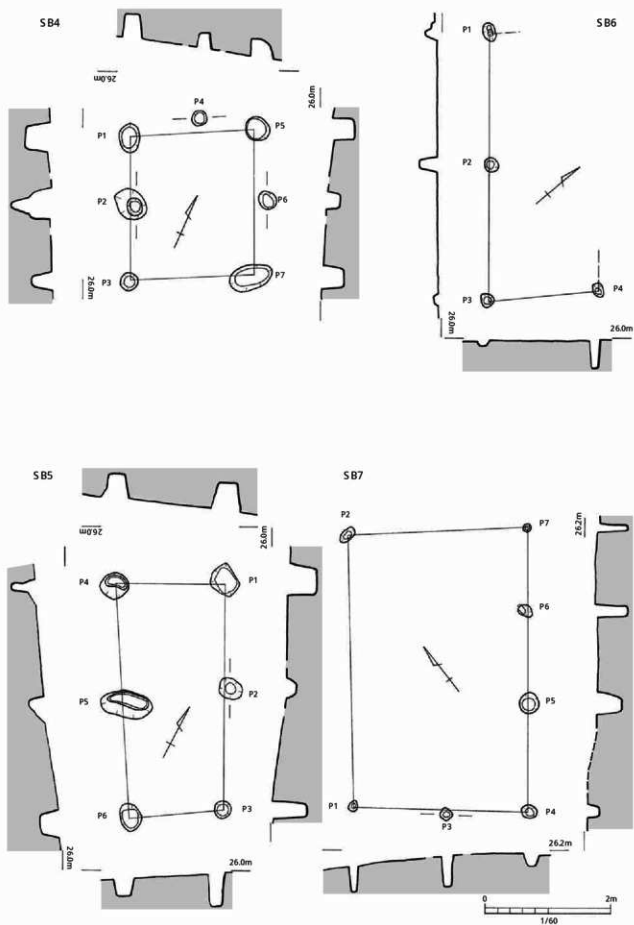
S B 9 (第74図)

F-2区で検出された。他の掘立柱建物跡と離れたところにある。表土直下の第Ⅳ層で検出され、現場調査中に掘立柱建物跡と確認した。埋土は暗褐色土で、埋土上部に灰白色の土をブロック状に含んでいる。主軸は北から48°東に振れる。桁行2間(約38m)梁行1間(約22m)で、身舎面積約85㎡を測る。等高線に直交して建てられている。

P 4から近世後半の陶器片が出土しており、この時期以降の建物跡であると思われる。

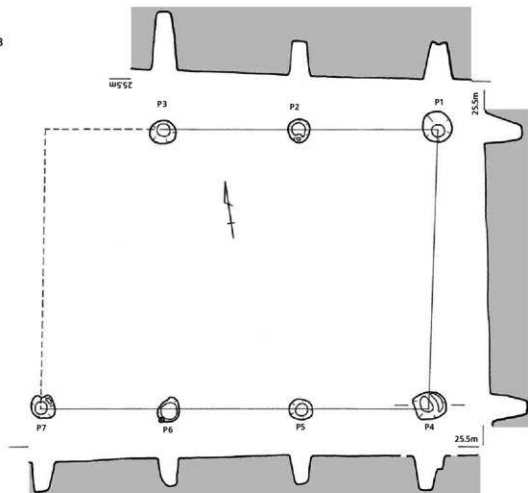
S B 10 (第75図)

F-2区に位置する。最も近いS B 11から約10m北にある。柱穴は表土直下の第Ⅳ層で検出された。主軸は北から33°東に振れる。P 2・4～6に対応する柱穴は確認されなかったが、桁行3間(約48m)梁行2間(約22m)であると思われる。身舎面積約107㎡を測る。等高線に直交して建てられている。

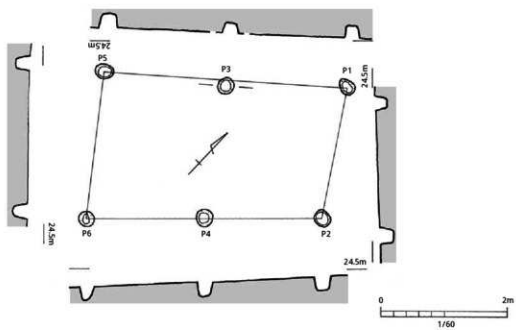


第 73 图 掘立柱建物跡实测图 (2)

SB8



SB9



第74図 掘立柱建物跡実測図(3)

S B 11 (第75図)

F-2区に位置する。S B 10とS B 12の間にある。柱穴は第IV層上面で検出された。主軸は北から29°東に振れ、S B 10とほぼ並行である。P 1・3に対応する柱穴は確認されなかったが、桁行2間(約26m) 梁行1間(約2.1m)であると思われる。身舎面積約55㎡を測る。等高線に直交している。

S B 12 (第75図)

F-2区に位置する。最も近いS B 11から約10m南に位置する。柱穴は第IV層上面で検出された。主軸は北から58°西に振れ、S B 10やS B 11と直交する。P 1・3に対応する柱穴は確認できなかったが、桁行3間(約44m) 梁行1間(約1.6m)であると思われる。身舎面積約70㎡を測る。等高線に直交して建てられている。

② 溝状遺構

調査区全体から、表土直下で多数の溝が検出された。そのうち、現代の耕作に用いられたと思われるものを除き、8条の溝状遺構を確認した(第71図)。

埋土や遺物の状況から、近世後半以降のものであると考えられる。また、位置関係などから、耕作や土地区画用の溝として掘られたものであると考えられる。

S E 1

E-1・2区の間で検出された。谷を横切るように掘られている。検出面からの深さは約0.5mで、埋土は第I層(耕作土)の土に近い。S A 1(竪穴建物跡)を切っているため、土師器片が多く出土し、S A 1の貼床上で見つかったものと接合したのものもある。近世後半の染付(第75図291)が出土した。

S E 2-4

E-2区南側で検出された。S E 2は等高線に直交し、S E 3・4は並行している。検出面からの深さはS E 2は非常に浅く、S E 3・4は約0.4mである。埋土はともに第I層に近い。S E 2から縄文時代早期の土器片、S E 2-4から古墳時代の土師器

片、S E 2から中世の瓦、S E 3から近世後半の瓦・陶器が出土している。

S E 5・6

E-2区北側で検出された。ともに等高線に直交している。検出面からの深さは、S E 5の中央付近で約0.3m、S E 6は約0.1mであった。埋土はともに第I層の土に近い。S E 5・6で出土した近世後半の染付(第75図295)が接合した。その他、S E 5からは、近世のキセルと弥生土器片、S E 5・6から古墳時代の土師器が出土した。

S E 7

E-3区で検出された。削平により、検出面からの深さは約0.1mである。直交する2条の溝からなる。

S E 8

F-2区南側で検出された。第2次調査区側から北西に約30m延びたところで直角に曲がり、南西に約5m延びている。幅は広いところで約35mを測る。底の中央部が高くなっており、2条が並行する。埋土は第I層由来と思われる暗褐色土で、小礫やA Tブロックを含んでいる。

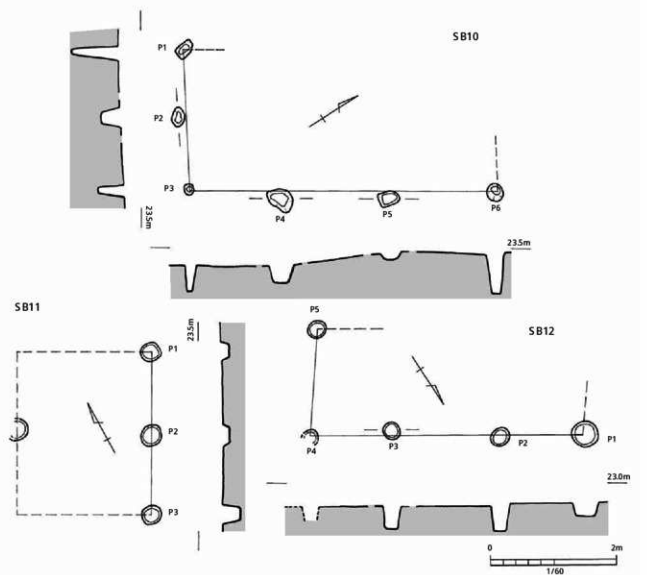
石鏝(第84図310)、弥生土器片、古墳時代の土師器片、近世の瓦、近世後半の陶器・磁器が出土した。

(3) 遺物

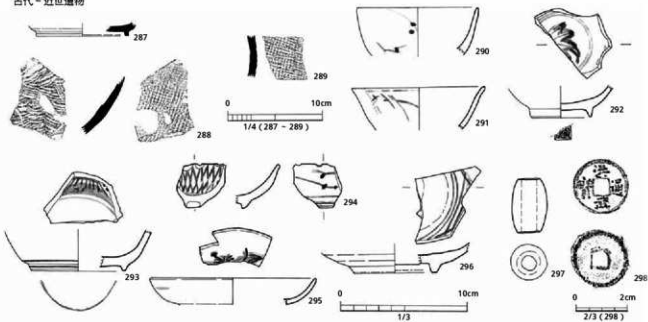
表土中や攪乱土、ピットや溝状遺構より古代-近世の遺物が出土した。古代-中世の遺物は須恵器や土師器などがある。近世の遺物は、肥前系磁器を主体とする陶磁器や土製品などで、陶磁器の総重量は1989gである。古代-近世の遺物は細片化が著しいために図化・掲載できたのは287-298の12点にとどまる(第75図)。

なお、その他に近代の瓦製品や銅版転写磁器やクロム青磁なども出土している。

須恵器の高台付壺(287)と髷胴部片(288)はともに焼成は不良気味で形態や製作技法から8世紀前半段階に属する。289は中世須恵器の甍片である。薄手のつくりで堅く焼き締まる。



古代 - 近世遺物



第 75 図 掘立柱建物跡実測図 (4) 及び古代 - 近世遺物実測図

肥前系磁器は碗と鉢、皿がある。291はS E 1、295はS E 5より出土した。

碗は、雪輪梅花文の染付(290)、青磁染付(292)、赤絵の端反碗(291)がある。292は見込に蝶の文様、高台内に渦福文がある。鉢(293)は内面に花文の染付がある。皿(294～296)のうち、294は内面に網目文を施す。296は蛇の目輪八ギがなされるが、全体のつくりは粗雑である。

これらの磁器は、概ね18世紀後半～19世紀前半の時期と考えられる。

陶製品は土鍾(297)がある。内外面は褐色釉だが、両端の小口部は釉薬を掻きとられて露胎となる。孔径は12cmである。近世から近代にかけての製品と推定される。

金属製品は、洪武通宝(298)の銭貨2枚と近世後半のキセル(S E 5出土)がある。

第33表 古代～中世土器観察表

No	種別	器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量:cm)
				(位置)	(層位)	外面	内面	外面	内面		
287	須恵器	高台付碗	底	F-2区	I	回転模ナズ 底面:砂粒の目の傷	回転模ナズ	灰黄 2.5 Y 5/2	灰黄 2.5 Y 6/2	1mm以下の黒褐色の粒を含む	焼成不良 底径:9.6
288	須恵器	碗	胴	A 23Gr	トレンチ内	菱格子目タタキ 上部:横方向力半目	同心円文当て具傷	にぶい黄橙 10 Y R 7/3 にぶい黄 7.5 Y R 5/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/3 にぶい黄 7.5 Y R 5/4	1mm以下の赤褐色・灰白色の粒を含む	焼成不良
289	須恵器	碗	胴	S A 12	埋土	格子目タタキ	ナズ	黄 10 Y R 2/1	黄 7.5 Y R 6/6	1mm以下の灰色の粒を含む	外面全体スス付着

第34表 近世陶磁器観察表

No	種別	器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		胎土	焼成	色調		備考 (法量:cm)
				(位置)	(層位)	外面	内面			外面	内面	
290	染付	碗	口縁	B 20 Gr	攪乱埋土	回転ナズ、施釉、雪輪梅花文	回転ナズ、施釉	精良	堅焼	灰白 2.5 G Y 8/1	灰白 2.5 G Y 8/1	口径(9.5)
291	染付	碗	口縁	S E 1	埋土	回転ナズ、施釉、赤絵、口縁部墨線	施釉	精良	堅焼	灰白 2.5 G Y 8/1	灰白N 8/	銅版転写、明治以降か 口径(10.3)
292	青磁染付	碗	底	F 16 Gr	攪乱埋土	施釉、高台輪はぎ、高台内「渦福」文	施釉、見込に蝶の文様・二重墨線	精良	堅焼	明緑灰 7.5 G Y 8/1	灰白 N 8/	底径(4.6)
293	染付	鉢	胴-底	F-2区	I	施釉、底部付近に墨線2本、高台輪はぎ・砂目、高台内墨線	胴部に花文、底部に墨線	精良	堅焼	灰白 5 G Y 8/1	灰白S G Y 8/1	底径(7.4)
294	染付	皿	口縁-底	F-2区	I	施釉、文様あり、高台に墨線2本	施釉、一重網目文	精良	堅焼	明緑灰 7.5 G Y 8/1	明緑灰 7.5 G Y 8/1	
295	染付	皿	口縁-胴	S E 5・S E 6	埋土	回転ナズ、施釉、胴部に破線状の墨線2本	回転ナズ、施釉、文様あり	精良	堅焼	灰白 2.5 G Y 8/1	灰白 2.5 G Y 8/1	口径(13.0)
296	染付	皿	胴-底	E-1区	攪乱埋土	施釉、高台輪削ぎ	施釉、見込に蛇の目輪削ぎ・砂目傷、二重墨線、文様あり	精良	堅焼	灰白 1.0 Y 8/1	灰白 1.0 Y 8/1	底径(6.4)
297	磁器	土鍾	壳形	E-1区	表採	回転ナズ、施釉(鉄釉)両端小口部輪はぎ	回転ナズ、施釉(鉄釉)	精良	堅焼	にぶい赤褐 5 Y R 4/3	にぶい赤褐 5 Y R 4/3	最大長さ 2.85 最大幅 38.3

第35表 中世銭貨計測表

No	銭名	材質	出土地点		計測値			備考
			(位置)	(層位)	銭径[cm]	孔径[cm]	厚さ[cm]	
298	洪武通宝	銅	O 03 Gr	攪乱埋土	2.1	0.6	0.1	2.1 明銭 洪武元年(1368年)始銭、壳形

7 その他の遺構と遺物

(1) 概要

表土除去後や包含層の掘削を行っていく過程で、調査区全域において、第IV層上面を中心に、陥し穴状遺構が14基、その他の土坑が45基検出された(第76図)しかし、その所属時期は明確には判断しづらいため、ここで取り扱うことにした。

また、F-1区の第III層を中心として、調査区全域の包含層や攪乱から石鏃、敲石、磨石、台石等の石器が多数出土しているが、流れ込み等も考えられ、時期が不明確のものも多い。そこで、石器については、F-1区の第VI層(AT)下位で出土した旧石器時代のもの、時期が特定される遺構から出土したものを除き、ここでまとめて記載することにした。

(2) 遺構

① 陥し穴状遺構(第36表)

E-2区で2基、E-3区で2基、F-1区で2基、F-2区で9基の陥し穴状遺構が検出された。その分布は調査区全域に広がっており、SC50・51が切り合っている以外は、隣接しているものはない。これは、約20m四方の範囲で集中して見つかった第2次調査の結果とは対照的である。検出面はすべて第IV層であるが、表土直下での検出であるものが多い。また、土器片等の遺物が出土しているが、少数であり、ほとんどが埋土中からのものである。そのことから、所属時期ははっきりとしない。なお、分布の詳細や

時期の検討については、第IV章に譲る。

遺構の規模は、長径約15m、短径約0.5m程度ものが多く、検出面からの深さは約0.5mほどのものが多い。また、14基中9基で、底面に杭痕と見られる小穴が検出されている。

また、等高線に対し、長軸方向が直交するもの、並行するものの両方がみられた。

この節では、検出面の平面形態をもとに、

A a類...長方形で、短軸の短いもの(7基)

A b類...長方形で、短軸の長いもの(4基)

B類...楕円形であるもの(2基)

C類...円形であるもの(1基)

の4類に分類し、報告する。なお、SC51はB類であるが、SC50(A b類)と切り合っているため、ともに第78図で掲載した。

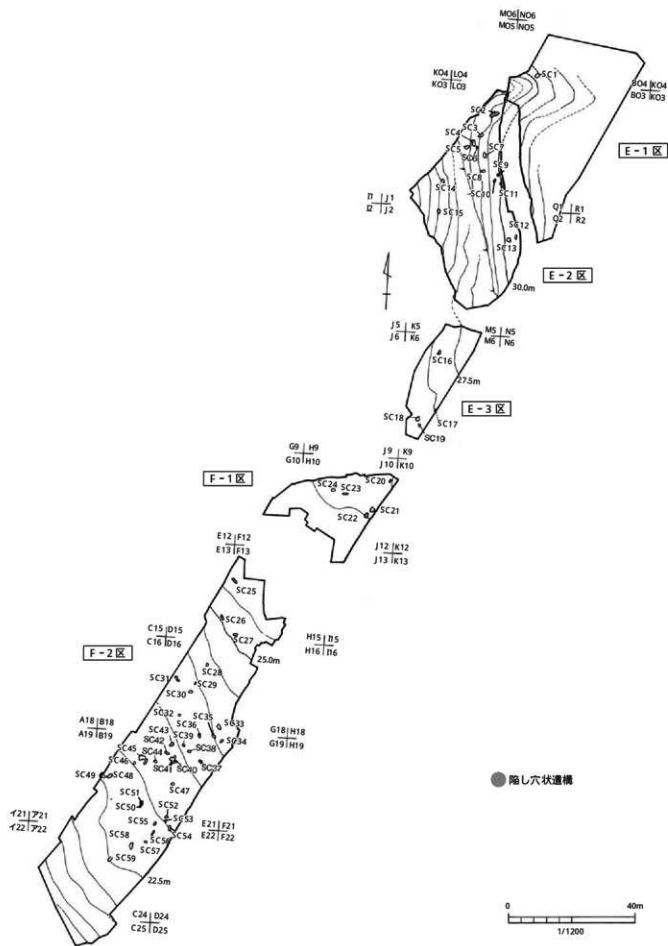
(A a類)

SC16(第77図)

E-3区の平坦面検出された。同区のSC19とは20m以上離れている。第IV層上面で検出された攪乱を掘り上げたところで確認されたため、埋土の記録はない。長軸1.5m、短軸0.5mの細長い長方形で、等高線と並行である。断面形態は深さ0.6mの長方形である。底面に杭痕と見られる小穴が5つ確認でき、うち4つは長軸方向の直線上に並んでいる。小穴の深さは0.05m程度である。壁に第VI層(AT)があり、底面は第VII層である。埋土から縄文時代後期の土器片、古墳時代の土師器片が出土した。

第36表 陥し穴状遺構一覧表

遺構	出土位置 (グリッド)	検出面 (層)	遺構規模(m)			等高線 との位置	グループ	断面形態 長軸方向	備考
			長径	短径	深さ				
SC2	M03-02	IV	2.8	1.5	0.7	並行	A b	台形	底面3か所に掘り込み
SC16	L6	IV攪乱下	1.5	0.5	0.6	並行	A a	長方形	底面に小穴、縄文時代後期土器片、古墳時代土師器片出土
SC19	K8	IV	1.0	0.9	0.3	-	C	長方形	底面に掘り込み
SC22	J11	IV	1.8	1.1	0.5	直交	A a	長方形	古墳時代土師器片出土
SC23	I11	IV	(1.8)	0.4	0.4	並行	A a	長方形	底面に小穴、古墳時代土師器片出土
SC25	F14	IV	1.9	0.4	0.2	並行	A a	台形	底面に小穴
SC26	E15	IV	1.7	0.5	(0.7)	並行	A a	長方形	
SC27	F15	IV	1.4	0.5	0.6	直交	A b	逆三角形	底面に小穴、古墳時代土師器片出土
SC31	D17	IV	1.9	0.5	0.3	並行	A a	台形	底面に小穴
SC36	E19	IV	1.3	0.7	0.4	並行	A b	台形	底面に小穴
SC37	E19	IV	1.3	0.6	0.3	並行	B	長方形	底面に小穴
SC50	C21	IV	1.4	0.5	0.5	直交	A b	台形	底面に小穴、古墳時代土師器片出土、SC51と切り合い
SC51	C21	IV	1.2	0.7	0.5	直交	B	台形	SC50と切り合い
SC56	C22	IV	1.4	0.3	0.3	直交	A a	台形	底面に小穴



第 76 図 土坑配置図

S C 22 (第 77 図)

F-1 区の平坦地で、表土直下の第IV層で検出された。長軸 18 m、短軸 1.1 m の長方形で、等高線に直交している。北・東・西側は上部にテラス状の広がりが見られ、南側は真っ直ぐ落ち込んでいる。断面形態は深さ 0.5 m の長方形で、底面は第 V・VI 層に近いところまで掘り込まれており、長方形に近い形態である。

・ S C 22 出土遺物 (第 79 図)

299 は二重口縁壺の口縁部である。厚手なつくりで、外面に粗雑な波状文が施される土師器である。色調は赤褐色 (5 Y R 系) で、1 mm 程度の赤色粒を含む胎土である。

S C 23 (第 77 図)

F-1 区の平坦地で、表土直下の第IV層で検出された。一番近い S C 22 から約 8 m 離れている。農業用の溝と見られる攪乱に両端を切られ、上端の一部がはっきりしないが、長軸 18 m (推定)、短軸 1.1 m の細長い形状で、等高線に並行である。長軸方向の断面形態もはっきりしないが、短軸方向の断面から判断すると、深さ 0.4 m の長方形であると思われる。底面は第VI層 (A T) で、杭痕とみられる小穴が 6 つあり、2 つは中央部で短軸方向に並び、4 つは長軸方向に並んでいる。埋土に第II層 (アカホヤ) が粒状に見られる。埋土から古墳時代の土師器片が出土した。

S C 25 (第 77 図)

F-2 区北側の平坦地で、第IV層上面で検出された。一番近い陥し穴状遺構である S C 26 から約 10 m 北に位置する。長軸 19 m、短軸 0.4 m の細長い形状で、等高線に並行である。断面形態は深さ 0.2 m の台形である。底面は第VII層で、深さ約 0.1 m の小穴が 10 個あり、中央付近に集中している。埋土に第VI層 (A T)、粒状の炭を含む。

S C 26 (第 77 図)

F-2 区の北側の平坦地で検出された。S C 27 とは約 5 m 離れているが、ほぼ同じ高さにある。第IV

層で検出されたが、上面の大部分は重機によると思われる攪乱の影響を受けている。長軸 1.7 m、短軸 0.5 m の細長い形状で、等高線に並行である。断面形態は長方形で、深さ 0.7 m (推定) と深く、底面は第VII層である。

S C 31 (第 77 図)

F-2 区の北側の平坦地で、第IV層で検出された。長軸 19 m、短軸 0.5 m の細長い形状で、等高線に並行である。断面形態は深さ 0.3 m の台形である。埋土上面の状況から、当初は攪乱であると判断し掘削を行ったため、埋土についての記録はない。底面は第VI層で、杭痕とみられる小穴が 7 つ見られ、小穴の深さは 0.1 ~ 0.2 m である。

S C 56 (第 77 図)

F-2 区南側の平坦地で、表土直下の第IV層で検出された。最も近い陥し穴状遺構である S C 50・51 から約 9 m 南東に位置し、ほぼ同じ高さである。長軸 1.4 m、短軸 0.3 m の細長い形状で、等高線に直交している。断面形態は深さ 0.3 m の台形である。底面は第V層であり、中央部に杭痕とみられる小穴が 5 つ見られる。

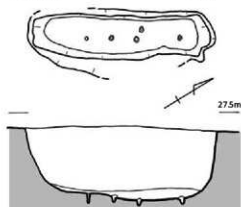
(A b 類)

S C 2 (第 78 図)

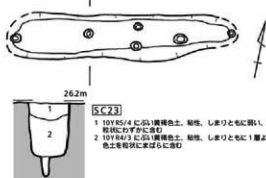
E-2 区の北側、北東向きの傾斜地で、表土直下の第IV層で検出された。他の陥し穴状遺構から離れた位置にある。長軸 28 m、短軸 1.5 m の長方形で、第4次調査で検出された陥し穴状遺構では最大規模であり、等高線に並行である。北側上部はテラス状に広がっている。断面形態は深さ 0.7 m の台形で、底部は約 2.5 m × 0.7 m の長方形で、第VII層まで掘り込まれている。底面に 3 箇所掘り込みがあり、東側のものは底面よりさらに約 0.3 m の深さを持つ。埋土に A T・アカホヤのブロック、小礫を含む。

< Aa 類 >

SC16



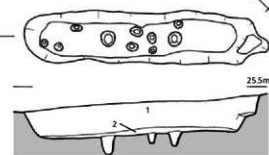
SC23



SC23

- 1 10YR5/4 に近い黄褐色土、粘性、しまりとも無い、アカホヤを数珠にわずかに含む
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土、粘性、しまりとも1層より強い、褐色土を数珠にまぎらに含む

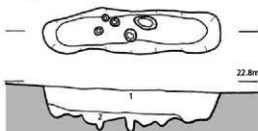
SC25



SC25

- 1 10YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともなし、炭を数珠に少量含む
- 2 10YR4/4 暗褐色土、粘性、しまりともなし、10YR6/6 暗黄褐色土、ATブロックを少量含む、炭は1層より少ない

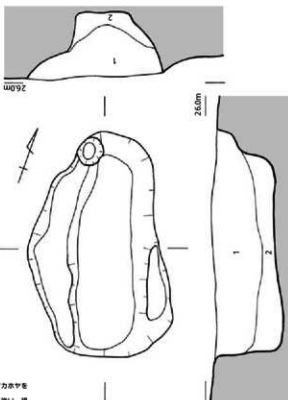
SC56



SC56

- 1 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともなし、さらさらしている、アカホヤをブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともなし、炭、褐色土ブロックをわずかに含む

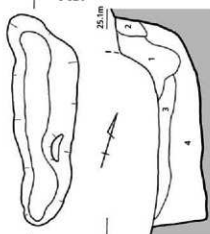
SC22



SC22

- 1 10YR3/2 黄褐色土、粘性に強くしめる、炭とホコリが数珠に入る、褐色土をブロック状にわずかに含む
- 2 10YR3/1 黄褐色土、粘性に強くしめる、褐色土をブロック状にわずかに含む

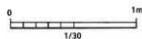
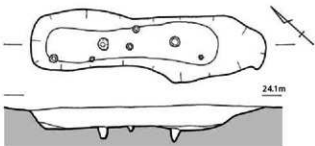
SC26



SC26

- 1 10YR4/6 暗褐色土、粘性中程度、しまり少ない、10YR4/6 暗褐色土を数珠にわずかに含む
- 2 10YR4/4 暗褐色土、粘性はまじり少ない、炭が数珠に入る、黒土が少量含む
- 3 10YR4/4 暗褐色土、粘性はまじり少ない、炭が数珠に入る、黒土が少量含む
- 4 10YR4/6 暗褐色土、粘性はまじり少ない、炭が数珠に入る、黒土が少量含む

SC31



第 77 図 陥し穴状遺構実測図 (1)

S C 27 (第 78 図)

F-2区の北側の平坦地で、表土直下の第IV層で検出された。長軸 14 m、短軸 05 m の長方形で、等高線に直交している。断面形態は深さ 06 m の逆三角形である。埋土は A T をブロック状に含む。床面は第VII-VIII層である。底面に杭痕とみられる小穴が 4 つ、長軸方向にならんでおり、深さは約 02 m で、うち 2 つは第IX層(礫層)まで達している。埋土から古墳時代の土師器片が出土している。

S C 36 (第 78 図)

F-2区の中央部の平坦地で、表土直下の第IV層で検出された。約 8 m 離れた陥し穴状遺構 S C 37 とほぼ同じ高さにある。一部を攪乱に切られている。長軸 13 m、短軸 07 m の長方形で、等高線に並行である。断面形態は深さ 04 m の台形である。埋土にアカホヤ・白斑ロームのブロックを含む。底面は第V層であり、杭痕とみられる深さ約 03 m の小穴が 6 つ見られ、そのうち 5 つは長軸方向に並んでいる。

S C 50 (第 78 図)

F-2区南側の平坦地で、第IV層で検出された。等高線と直交している。長軸 14 m、短軸 05 m の台形に近い形状である。断面形態は深さ 05 m の台形である。埋土全体に第II層(アカホヤ)が混ざり、炭も見られる。底面は第VII層である。杭痕とみられる小穴が 6 つ見られ、うち 4 つは長軸方向に並んでおり、深さは約 03 m で、第IX層上面に達している。埋土中の炭化材の ¹⁴C 年代測定では 6185 ± 25 年 B P (B C 5220 ~ 5050 年) との結果が出ている。

・ S C 50 出土遺物 (第 79 図)

300 は小型壺の頸部付近である。器表に丁寧なミガキがなされる土師器である。色調はにぶい黄橙色 10 Y R 系で胎土は精良だが微細な雲母片を多く含む。

(B 類)

S C 37 (第 79 図)

F-2区の中央部の平坦地で、表土直下の第IV層で検出された。長軸 13 m、短軸 06 m の楕円形で、等高線に並行である。断面形態は深さ 03 m の長方形

である。埋土にアカホヤ・白斑ロームのブロックを含む。底面は第VI層である。実測図には表れていないが、杭痕とみられる小穴が 4 つ見られ、長軸方向に並んでいる。

S C 51 (第 78 図)

F-2区南側の平坦地で、第IV層で検出された。南側の一部を S C 50 に切られている。長軸 12 m、短軸 07 m の楕円形で、等高線と直交している。断面形態は深さ 05 m の台形である。埋土に A T ブロックを含んでいる。底面は第VII層である。杭痕のような小穴は見られない。

(C 類)

S C 19 (第 79 図)

E-3区の南側の平坦地で、表土直下の第IV層で検出された。半分程度をトレンチにより削平されているが、復元すると直径約 10 m の円形であると思われる。断面形態は深さ 03 m の長方形である。底面は第V層で、北側に深さ約 01 m の掘り込みがある。その南側にも小穴が検出されたが、別の時期のピットであると思われる。

② その他の土坑 (第 37 表)

前述のように、陥し穴状遺構を除く土坑が 45 基検出されたが、これらは現場での調査において、形態的特徴などから土坑と判断した。しかし、E-1・2区がもと果樹園であったように、多くの樹木があったところであるため、樹痕である可能性の高いものも見られる。整理作業の段階で検討した結果、樹痕でないと思われる 31 基について、掲載・報告する。

この節では、土坑の平面形態をもとに、

A 類...長方形のもの(4基)

B 類...楕円形であるもの(15基)

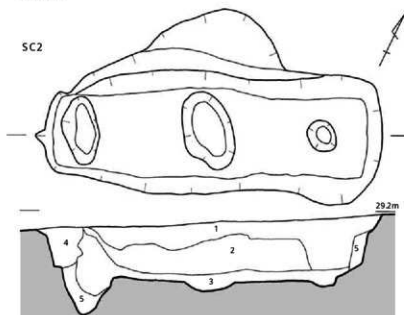
C 類...円形であるもの(6基)

D 類...不整形のもの(6基)

の4類に分類して、各類ごとに報告する。

< Ab 類 >

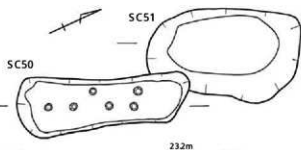
SC2



SC2

- 1 7.5YR5/6 暗褐色土、粘性なし、しまり弱し、AT をブロック状に含む
- 2 7.5YR5/6 暗褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、径 1mm 程度の線をわずかに含む
- 3 7.5YR5/6 暗褐色土、粘性あり、しまり弱し、黒褐色土をブロック状にわずかに含む
- 4 10YR5/3 に近い褐色土、粘性弱し、しまりあり、径 1mm 程度の線を大量に含む
- 5 7.5YR4/6 褐色土、粘性あり、しまりなし、アカホヤをブロック状にわずかに含む

SC50

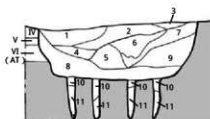


SC50

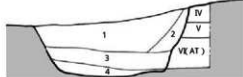
- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、近い褐色土をブロック状に含む
- 3 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、近い褐色土をブロック状に含む
- 4 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともになし、黒色を含む、アカホヤをわずかに含む
- 5 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤ、近い褐色土を含む
- 6 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤ、近い褐色土を含む
- 7 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、近い褐色土をブロック状に含む
- 8 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤ、近い褐色土をブロック状に含む
- 9 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤ、黒褐色土を多く含む
- 10 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、含まれていない
- 11 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性ややあり、しまりなし、黒色土を少し含む

23.2m

23.2m

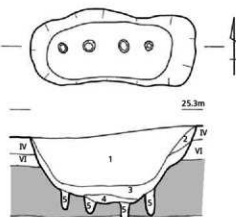


SC50 断面図



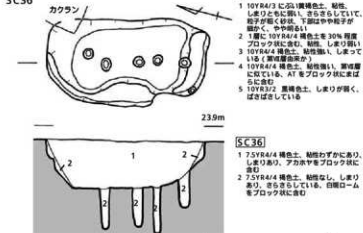
SC51 断面図

SC27



25.3m

SC36



23.9m

SC27

- 1 10YR4/3 に近い褐色土、粘性、しまりともに弱し、さらさらしている、粒子が粗く砂状、下部はやや粒子が細く、やや硬い
- 2 1層に 10YR4/4 褐色土を 30% 程度ブロック状に含む、粘性、しまり弱し
- 3 10YR4/4 褐色土、粘性弱し、しまりなし、さらさらしている
- 4 10YR4/4 褐色土、粘性弱し、しまりなし、AT をブロック状に少し含む
- 5 10YR2/1 黒褐色土、しまりが弱く、さらさらしている

SC36

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、白顔料-R をブロック状に含む

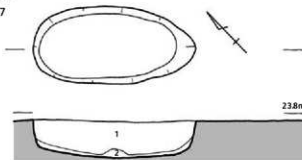
0 1m

1/30

第 78 図 陥し穴遺構実測図(2)

< B 類 >

SC37



SC37

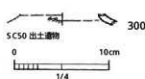
- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しめりあり。アカホヤをブロック状に含む
2 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しめり強い、さらさらしている。白銅ロームをブロック状に含む



SC22 出土遺物



299

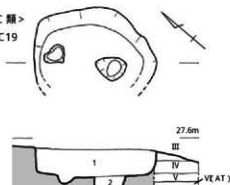


SC50 出土遺物

1/4

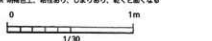
< C 類 >

SC19



SC19

- 1 10YR5/8 黄褐色土、粘性わずかにあり、しめりあり。黄色土をブロック状にわずかに含む
2 7.5YR 褐色土、粘性あり、しめりあり、乾くと固くなる



0 1/30 1m

第 79 図 陥し穴状遺構実測図 (3) 及び陥し穴状土坑出土遺物実測図

第 37 表 陥し穴状遺構を除く土坑一覧表

遺構	出土位置 (グリッド)	検出面 (層)	遺構規模 [m]			等高線と の位置	グループ	断面形態 長軸方向	備考
			長径	短径	深さ				
SC1	N 04	II	1.4	1.0	0.3	直交	A	台形	底面 2 辺に囲り込み 古墳時代の土師器、靱石出土
SC6	L 01	IV	0.6	0.5	0.7	-	C	縦長長方形	埋土に焼土を含む。 ヒットの可能性あり。
SC8	M 01	IV	1.2	0.6	0.2	直交	B	台形	
SC9	M 01	IV	0.9	0.7	0.1	-	D	台形	埋土に焼土を含む。 古墳時代の土師器片出土
SC10	M 1	IV	0.9	0.5	0.3	直交	B	長方形	
SC11	M 1	IV	0.8	0.7	0.3	-	C	長方形	
SC13	N 2	IV	1.4	1.2	0.2	並行	D	長方形	古墳時代の土師器片出土
SC14	K 1	III	1.3	0.6	0.3	並行	B	台形	
SC15	K 2	III	(1.3)	0.8	0.3	並行	B	台形	
SC24	H 11・I 11	III	1.3	0.7	0.7	直交	B	不整形台形	
SC28	E 16	III	0.7	0.5	0.3	直交	B	逆三角形	埋土に焼土を含む。 弥生時代中期の土師器片出土
SC29	D 17・E 17	III	0.7	0.2	0.2	直交	B	台形	埋土に焼土を含む。
SC30	D 17	III	1.2	0.7	0.3	直交	D	台形	埋土に焼土と炭を含む。 古墳時代の土師器片、靱石出土
SC32	D 18	III	0.7	0.7	0.3	-	C	台形	埋土に焼土と炭を含む。
SC34	E 19	IV	1.1	0.6	0.2	直交	D	長方形	
SC35	E 19	IV	1.4	0.7	0.2	並行	B	台形	
SC38	D 19	IV	1.0	0.6	0.2	並行	B	台形	
SC39	D 19	IV	0.8	0.6	0.3	-	C	台形	
SC42	D 19	IV	1.3	0.5	0.4	並行	A	台形	古墳時代の土師器片出土
SC43	D 19	IV	1.3	0.6	0.4	直交	B	逆三角形	
SC44	C 19	IV	1.0	0.6	0.2	並行	B	台形	石礫出土
SC46	C 20	IV	0.8	0.7	0.3	-	C	逆三角形	
SC47	D 20	IV	1.0	0.5	0.2	並行	B	台形	
SC48	B 20	II	2.0	1.0	0.1	直交	B	台形	埋土に焼土と炭を含む。 古墳時代の土師器片出土
SC49	B 20	II	1.7	1.0	0.1	並行	D	台形	埋土に焼土と炭を含む。 弥生時代・古墳時代の土師器片出土
SC52	D 21	IV	1.1	0.6	0.2	直交	B	台形	
SC53	D 21	IV	0.7	0.5	0.4	-	C	逆三角形	
SC54	D 21・D 22	IV	1.6	0.8	0.1	並行	D	台形	
SC55	C 21	IV	1.2	0.6	0.7	直交	B	不整形台形	
SC58	C 22	IV	2.1	0.9	0.4	直交	A	台形	
SC59	B 23	IV	(1.5)	0.9	0.4	直交	A	台形	

〈A類〉

SC1 (第80図)

E-1区の谷部において、第II層で検出された。SA2(竪穴建物跡)を切っており、全体がSA2内に収まる。長径14m、短径10mの長方形に近い形で、南西・南東側は底面より約0.1m掘り込まれている。埋土は炭を含む暗褐色土である。

・SC1出土遺物(第80図)

301は高坏の脚部である。脚柱部外面にはタテ方向へのヘラミガキが施される。色調は浅黄橙(10YR系)ないし橙色(5YR系)で、胎土には1~2mm次の赤色粒や白色粒、石英と雲母片が含まれる。SCA1の埋土中より出土した破片と接合した。その他埋土中より、古墳時代土師器片、敲石(砂岩)が出土した。

SC42(第80図)

F-2区中央部の表土直下第IV層で検出された。埋土にアカホヤをブロック状にわずかに含んでいる。長径13m、短径0.5mの長方形で、古墳時代の土師器の裏の破片が出土した。

SC58(第80図)

F-2区南側の第IV層上面で検出された。長径2.1m、短径0.9mの楕円形で、検出当初は形状などから炉穴であると考えていたが、底面に焼土や炭などは見られなかった。南側にテラス状の段があり、底面は第VII層である。

SC59(第80図)

F-2区南側第IV層で検出された。長径推定1.5m、短径0.9mの楕円形である。北側の一部を攪乱に切られている。埋土は明褐色土で第IV層より明るい、しまりのない土で、アカホヤもしくはA.T由来であると思われる。

〈B類〉

SC8・10(第80図)

E-2区西側の表土直下第IV層で検出された。どちらも長径1.0m、短径0.5mほどの楕円形で、深さが約0.3mである。ともに等高線に直交している。

SC14・15(第80・81図)

E-2区東側緩斜面の第III層で検出された。ともに長径1.3mの楕円形で、深さは0.3mであり、SC15では底面は第VII層に達する。

SC24(第81図)

F-1区の第III層で検出された。長径1.3m、短径0.7mの楕円形で、深さ0.7mである。埋土は第II層が主体である。東側は壁面の張り出しが見られる。

SC28・29(第81図)

F-2区北側の第III層掘り下げ中に検出された。どちらも埋土に焼土を含むが、底面に焼土は見られない。SC28は長径0.7m、短径0.5mの長方形に近い。焼土粒は比較的少なく、上面に見られる。埋土中から、弥生時代中期とみられる土器片が出土した。SC29は長径0.7m、短径0.2mの楕円形である。焼土粒は埋土中ほどに多い。

SC35・47(第81図)

F-2区中央部の表土直下第IV層で検出された。近くで検出されたSA36・37(陥し穴状遺構)と、楕円形であることや埋土(アカホヤブロックを含む褐色土)が似ているが、やや浅く、杭痕とみられる小穴は検出されなかった。SC35は長径1.4m、短径0.7m、SC47は長径1.0m、短径0.5mである。

SC38(第81図)

F-2区中央部の表土直下第IV層で検出された。長径1.0m、短径0.6mの楕円形である。中央部に浅い凹みがあるが、底面の白斑ロームによるものと思われる。

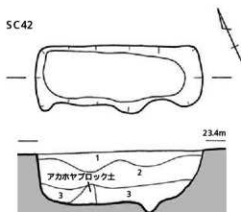
< A 類 >
SC1



SC1

- 1 7.5YR3/4 暗褐色土。粘性なし、しまりなし、褐色土をブロック状に含む。断面に葉を含む

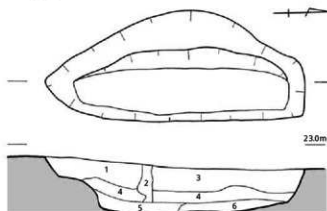
SC42



SC42

- 1 7.5YR3/3 暗褐色土。粘性なし、しまりなし、アカホヤをブロック状にわずかに含む
2 7.5YR3/4 暗褐色土。粘性なし、ややしまりあり、アカホヤ、黒褐色土をブロック状に含む
3 7.5YR3/4 暗褐色土。粘性わずかにあり、ややしまりあり、断面に1層土をブロック状に少量に含む

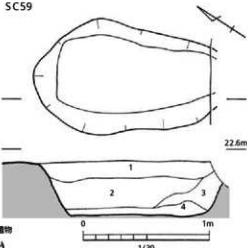
SC58



SC58

- 1 7.5YR4/4 褐色土。粘性ややあり、しまりあり、暗褐色土をブロック状に含む
2 7.5YR4/3 褐色土。粘性なし、しまりあり、暗褐色土をブロック状に含む
3 7.5YR3/3 暗褐色土。粘性なし、しまりあり、暗褐色土をブロック状に含む
4 7.5YR2/3 暗褐色土。粘性なし、しまりあり、黒色土をブロック状に含む
5 7.5YR4/6 褐色土。粘性、しまりともにあり、葉土を含有
6 7.5YR4/4 褐色土。粘性なし、しまりあり、暗褐色土をブロック状に含む

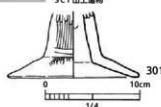
SC59



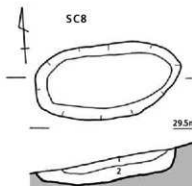
SC59

- 1 7.5YR5/8 暗褐色土。粘性、しまりともに強い
2 7.5YR5/6 暗褐色土。1層と似ているが、しまりは1層よりある
3 7.5YR5/8 暗褐色土。粘性、しまりともに強い
4 10YR4/4 褐色土。粘性ややあり、しまりあり、断面に葉を含有

SC1 出土遺物



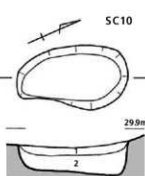
SC8



SC8

- 1 7.5YR5/8 暗褐色土。しまりなし、さらさらしており、数くと厚くなる。A T をブロック状にわずかに含む
2 7.5YR5/6 暗褐色土。粘性弱い、しまりあり、褐色土をブロック状に含む

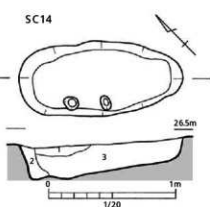
SC10



SC10

- 1 7.5YR5/6 暗褐色土。しまりなし、さらさらしており、数くと厚くなる
2 7.5YR5/8 暗褐色土。粘性わずかにあり、しまりあり、径1mm程度の礫を含有

SC14



SC14

- 1 10YR5/4 白引暗褐色土。固くしまる、アカホヤのブロックが数くと厚くなる
2 10YR4/4 褐色土。粘性、しまりともにやや強い、炭化物を少量含む
3 10YR3/2 黒褐色土。粘性、しまりともに強い

第 80 図 土坑実測図(1)及び土坑出土遺物実測図(1)

SC 43・44 (第 81 図)

F-2区中央部の表土直下第IV層で検出された。どちらも埋土にアカホヤをブロック状にわずかに含んでいる。SC 43は長径13m、短径06mの楕円形である。東側に2箇所の掘り込みがあるが、後世の別遺構に切られたものと思われる。SC 44は長径10m、短径06mの楕円形で、底面は第VI層で、一部を後世のピットに切られている。

・SC 44 出土遺物 (第 83 図)

304は石鏃である。石材は頁岩である。鏃身は平面二等辺三角形の長身で、基部に抉りをもつ。

SC 48 (第 82 図)

F-2区南東側調査区境の表土直下第II層で検出された。長径20m、短径10mの楕円形で、焼土や炭を多量に含む。深さが0.1m程度と浅く、底面には焼土が見られないため、削平の影響を強く受けているが、自然為の凹みのどちらかと思われる。

・SC 48 出土遺物 (第 83 図)

303は弥生土器製の口縁部である。端部に刻目が施され、口縁部に刻目突帯がつく。口縁部の傾き具合から突帯文土器と考えられる。浅黄橙色(10YR系)できめの細かい粘土に1~3mm大の円磨度の高い砂粒を含む。他に、古墳時代の土師器片も出土した。

SC 52・55 (第 82 図)

F-2区南側の表土直下第IV層で検出された。SC 56(陥し穴状遺構)の近くにあり、どちらも楕円形であるなど似ている点もあるが、杭痕と見られる小穴は検出されなかった。SC 52は長径1.1m、短径06mであり、中央部にピット状の掘り込みがあり、埋土にアカホヤ・白班ロームのブロックを含む。SC 55は長径12m、短径06mで、中央部に底面から04mのやや深い掘り込みを持つ。

(C類)

SC 11 (第 82 図)

E-2区西側の表土直下第IV層で検出された。SC 9・10と隣接している。直径約08mの円に近い形状で、深さ約03mである。

SC 32 (第 82 図)

F-2区北側の第III層掘り下げ中に検出された。SA 10(竪穴建物跡)と隣接している。直径07mの円形で、埋土上部から中部にかけて、焼土と炭を含むが、底面に焼土は見られない。

SC 39 (第 82 図)

F-2区中央部の表土直下第IV層で検出された。直径約07mの円形であり、底部に凹みがあるが、底面の白班ロームの地山の凹みによるものと思われる。

SC 46 (第 82 図)

F-2区中央部の表土直下第IV層で検出。直径08mの円形で、埋土にATのブロックを含む。

SC 53 (第 82 図)

F-2区南側の表土直下第IV層で検出された。SC 56(陥し穴状遺構)の近くにあり、埋土などに共通点はあるが、杭痕と見られる小穴は検出されなかった。直径06mの円に近い形状で、埋土に白班ロームのブロックを含む。

SC 6 (第 82 図)

E-2区西側の緩斜面の表土直下第IV層で検出された。直径約05mの円形で、約07mの深さまでほぼ真っ直ぐに掘り込まれている。上面に焼土をブロック状に含み、埋土にも炭と焼土粒を含む。規模や断面の形状からピットの可能性もあるが、周囲のピットより深く、埋土も異なる。

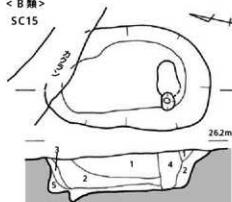
(D類)

SC 9 (第 83 図)

E-2区西側の表土直下第IV層で検出された。長径09m、短径07mの横長の台形に近い形状である。深さは浅いが、埋土上面に焼土ブロック状に含む。古墳時代の土師器片が出土した。

< B 類 >

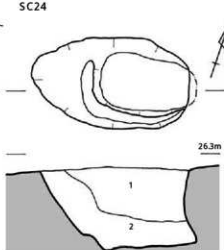
SC15



SC15

- 1 10YR6/6 暗黄褐色土、粘性あり、しまりやや強い、アカホヤを多く含む
- 2 10YR6/4 に近い黄褐色土、粘性、しまりともに強い、アカホヤを数粒に若干含む
- 3 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともにやや強い
- 4 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともにやや強い、10YR5/4 に近い黄褐色土をブロック状にまばらに含む
- 5 10YR4/4 に近い黄褐色土、粘性、しまりともに強い、堆山（黄褐色）に近く、腐り過ぎによるものと思われる

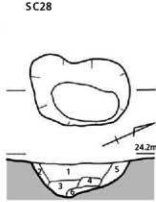
SC24



SC24

- 1 10YR6/4 に近い黄褐色土、粘性、しまりともに強い、アカホヤを数粒に含む
- 2 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともに1層より強い

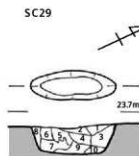
SC28



SC28

- 1 10YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともに強い
- 2 10YR3/3 暗褐色土、粘性弱い、しまりやや強い
- 3 10YR3/4 暗褐色土、中央部に10YR3/3 暗褐色土をブロック状に多く含む
- 4 10YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともに強い
- 5 10YR3/3 暗褐色土、褐色土をブロック状に20%程度含む、しまり1層より強い
- 6 10YR4/4 褐色土、腐り層よりしまりやや強い

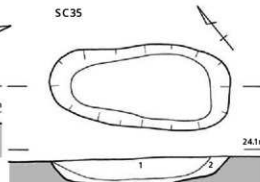
SC29



SC29

- 1 10YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともにあり、塊土粒をわずかに含む
- 2 10YR3/3 暗褐色土、しまり弱い、ばさばさしている、塊土粒をわずかに含む
- 3 10YR3/3 暗褐色土、1層よりしまりが強く、やや強い
- 4 10YR3/4 暗褐色土、1層よりやや弱い、塊土粒は1層より多い
- 5 10YR3/4 暗褐色土、4層よりしまりやや強い
- 6 10YR3/4 暗褐色土、5層と同様だが、塊土粒を含まない
- 7 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともにあり、塊土粒をわずかに含む
- 8 10YR4/4 褐色土、7層より強い
- 9 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりとも1層よりやや強い
- 10 10YR4/4 褐色土、9層よりしまりがあり、やや強い

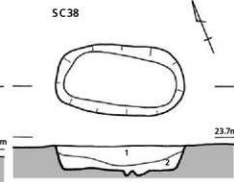
SC35



SC35

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性なし、しまり弱い、さらさらしている、1層よりやや弱い、白磁ローンをブロック状にわずかに含む

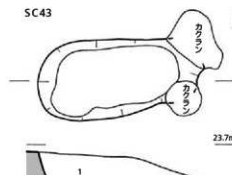
SC38



SC38

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、黄褐色土をブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、白磁ローンをブロック状に含む

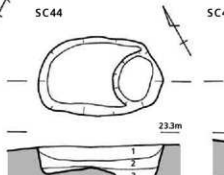
SC43



SC43

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、アカホヤをブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、1層よりわずかに強い
- 3 7.5YR5/4 褐色土、粘性、しまりともにあり、褐色土をわずかに含む

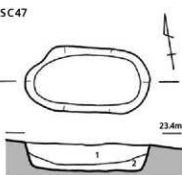
SC44



SC44

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性、しまりともになし、さらさらしている、1層より強い、白磁ローンをブロック状に含む
- 3 10YR5/8 黄褐色土、粘性、しまりなし（黄い曲線が）

SC47



SC47

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性弱い、しまりなし、さらさらしている、1層より強い、白磁ローンをブロック状に含む



第 81 図 土坑実測図 (2)

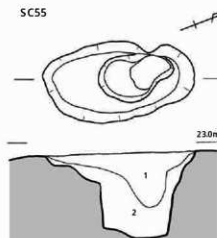
< B 類 >
SC52



SC52

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘けわずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性、しまりともなし、さらさらしている、1より明るし、白腐ロームをブロック状に含む

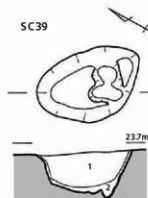
SC55



SC55

- 1 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、細い土粒をブロック状に含む
- 2 7.5YR5/6 暗褐色土、粘性、しまりともなし、白腐ロームをブロック状に含む

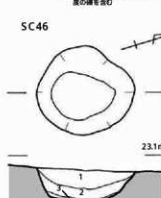
SC39



SC39

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘けわずかにあり、しまりあり、黄褐色土、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、白腐ロームをブロック状に含む

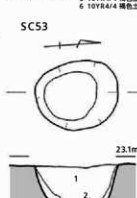
SC46



SC46

- 1 7.5YR4/6 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、AT をブロック状に含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性弱し、しまりあり、細い土粒をブロック状に含む
- 3 7.5YR4/6 褐色土、粘性、しまりともなし、白腐ロームをブロック状に含む

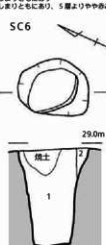
SC53



SC53

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性は弱し、しまりあり、黄褐色土をブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性、しまりともなし、白腐ロームをブロック状に含む

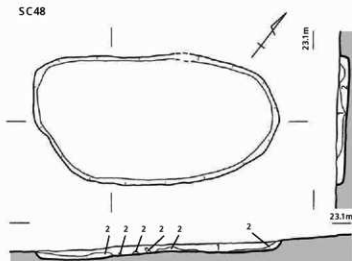
SC6



SC6

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性弱し、しまりなし、黄褐色土を多量に含む
- 2 7.5YR5/6 暗褐色土、粘性、しまりともなし、径 1mm 程度の礫を含む

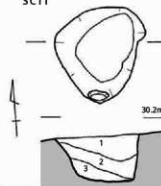
SC48



SC48

- 1 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともなし、さらさらしている、炭を多く含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性弱し、しまりあり、暗褐色土を散粒にわずかに含む

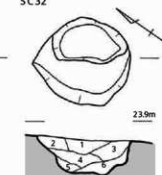
< C 類 >
SC11



SC11

- 1 7.5YR5/6 暗褐色土、粘性なし、しまりあり、径 1mm 程度の礫を大量に含む
- 2 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともなし、褐色土をブロック状にわずかに含む
- 3 7.5YR5/6 暗褐色土、粘性あり、しまりなし、径 1mm 程度の礫を含む

SC32

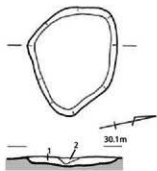


SC32

- 1 10YR4/4 褐色土、粘性やや弱し、しまりはあり、炭、礫土をブロック状に含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土、粘性は草田層よりわずかに弱し、しまりあり、炭を散粒に少し含む
- 3 10YR4/4 褐色土、4層と同層だが、暗褐色土をブロック状に含む、炭土なし
- 4 10YR4/6 褐色土、しまりややあり、炭の礫と炭土(5YR5/6 暗褐色土)を含む
- 5 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともなし
- 6 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともなし、5層よりやややみがある

< D 類 >

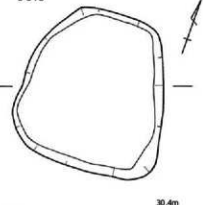
SC9



SC9

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまりあり、腐植土をブロック状に含む
- 2 7.5YR5/6 暗褐色土、粘性なし、しまりあり、腐土、腐葉むずかに含む

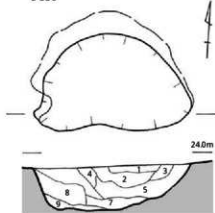
SC13



SC13

- 1 7.5YR5/6 暗褐色土、しまりなし、さらさらしているがかわくと固くなる、アカホヤをブロック状にむずかに含む
- 2 7.5YR6/8 暗褐色土、粘性なし、しまりあり、径 10mm 程度の塊を大量に含む、AI をブロック状にむずかに含む

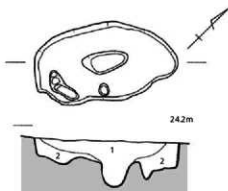
SC30



SC30

- 1 7.5YR2/4 暗褐色土、粘性強い、しまりややあり、5YR5/6 細砂褐色土（残土）を粗かに含む
- 2 7.5YR3/4 暗褐色土、1 よりも残土粒が大きく全体がぼびり見える、炭化物をむずかに含む
- 3 5層よりしまりが強く、やや明るい
- 4 10YR3/4 暗褐色土、5層よりややしまりが強い、3層よりやや明るい、残土粒を含む
- 5 10YR3/4 暗褐色土、粘性少しあり、腐土をむずかに含む
- 6 10YR3/4 暗褐色土、粘性は強い、しまりあり、炭化物よりやや明るい
- 7 10YR4/4 暗褐色土、粘性あり、しまり強く、炭化物よりやや明るい
- 8 10YR3/4 暗褐色土、粘性は6層より強い、6層と7層の間で暗く少しの色合いである
- 9 10YR4/4 褐色土、粘性は炭化層よりやや強い、しまり強い

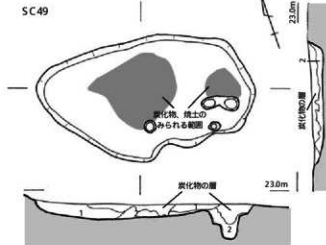
SC34



SC34

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性むずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性なし、しまり強い、さらさらしている、白顔土をブロック状に含む、1層よりやや明るい

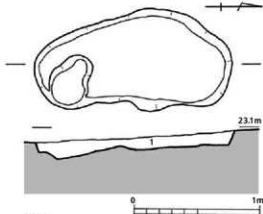
SC49



SC49

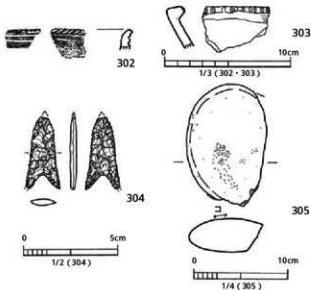
- 1 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりもなしに、さらさらしている、炭を多く含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性強い、しまりあり、暗褐色土を粗粒にむずかに含む

SC54



SC54

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、アカホヤ、腐植土をブロック状にむずかに含む



第 83 図 土坑実測図(4)及び土坑出土遺物実測図(2)

SC 13 (第 83 図)

E-2 区西側の表土直下第IV層で検出された。長径 14m の台形に近い形状で、深さは 0.2 m ほどである。古墳時代の土師器片が出土した。

SC 30 (第 83 図)

F-2 区北側の第Ⅲ層掘り下げ中に検出された。検出時は長径 12 m、短径 0.3 m ほどの細長い形態であると考え、南側を断ち割ったため、土層断面図より南側の底面についてははっきりしない。北側は検出面より円状に広がり、壁面が張り出しており、床面付近で攪乱と見られる別遺構と切り合っている。埋土上部から中ほどにかけて焼土や炭を含むが、底面に焼土は見られない。埋土中から、古墳時代の土師器片と凹石が出土した。

SC 34 (第 83 図)

F-2 区中央部の表土直下第IV層で検出された。近くにある C 35・47 同様、検出時は陥し穴状遺構と考えたが、深い掘り込みや、杭痕とみられる小穴は検出できなかった。長径 1.1 m、短径 0.6 m で、中央部に掘り込みがあるが、別のピットであると思われる。底面は第VI層である。

SC 49 (第 83 図)

F-2 区南東側調査区境の表土直下第Ⅱ層で検出された。SC 48 と隣接し、形状は似ているが、向きが異なる。長径約 1.7 m、短径 1.0 m の楕円形に近い形状である。SC 48 と同様、焼土や炭を多量に含んでいるが、深さが浅く、底面には焼土が見られない。古墳時代の土師器片が出土した。

SC 54 (第 83 図)

F-2 区南側の表土直下第IV層で検出された。SC 53 と隣接している。長径 1.6 m、短径 0.8 m のやや真ん中がふくらんだ楕円形である。埋土にアカホヤを含むなど、近くにある SC 56 (陥し穴状遺構) と共通点もあるが、浅く、杭痕とみられる小穴は確認されなかった。底面南側にピット状の掘り込みが見られる。

・SC 17 出土遺物 (第 83 図)

302 は縄文土器深鉢の口縁部である。端部に刻目、外面に二条の沈線がめぐる。

・SC 20 出土遺物 (第 83 図)

305 は砂岩製の台石である。全体の 1/3 程度を欠損している。片面に溝打痕が認められる。

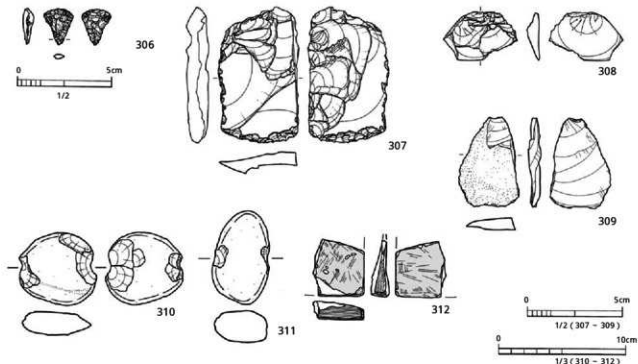
(3) 遺物

ここでは、表土や耕作土中より出土した遺物のうち、所属時期が明確に把握できなかった石器について図化・掲載して報告する (第 84 図)。

石錐 (306) の石材はチャートである。逆三角形の平面を呈し、錐先以外の周縁を微細刻離調整する。スクレイパー (307) は珪質頁岩を石材とする。短冊形の平面の短辺を刃部とし、側縁部も微細刻離がなされる。剥片は 308 と 309 がある。308 は砂岩、309 は礫面の残る珪質頁岩の剥片である。石錐は砂岩製の 310・311 がある。打ち欠きは、長軸 (310) のものと短軸方向 (311) がある。砥石 (312) は、緑色頁岩製である。両面とも使い込まれて薄くなっている。光沢痕や擦痕が認められる。大半を欠損しているが、平面形は方形で、側辺は直角・直線的に加工してその隅角は面取りするなど規格的なつくりである。

第 38 表 土坑出土土器観察表

No	種別	器種	部位	出土地点 (位置) [層位]	手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (注量: cm)	
					外面	内面	外面	内面			
299	土師器	甕	口縁	SC 22	埋土	ナデ	明赤焼 5 Y R 5/6	明赤焼 5 Y R 5/6	3mm 以下の黒褐色の粒を含み、2mm 以下の灰白色・赤褐色の粒をわずかに含む		
300	土師器	小型壺	胴	SC 50	埋土	上部: 横ナデ下部: 斜方向のミガキ	上部: 横ナデ 下部: 丁型ナデ	にぶい焼 7.5 Y R 6/4	7.5 Y R 6/4	1mm 以下の灰白色・灰色・褐色の粒を含み、焼閃石をまばらに含む	
301	土師器	高杯	胴	SC 1・ SA 1	埋土	胎土部: 縦方向のウラミガキ 裾部: ナデ後端方向 のミガキ 裾部端部: 横ナデ	胎土部: 縦い横ナデ 裾部: 横ナデ	横 5 Y R 6/6	にぶい焼 7.5 Y R 7/4	3mm 程の白色・赤褐色、1mm 程の灰色・灰白色・暗褐色の粒を多く含む、焼閃石をまばらに含む	裾部径 (14cm)
302	縄文土器 (後遺)	深鉢	口縁	SC 17	埋土	端部: 連続押印刻目 横方向に 2 条の沈 線文	ナデ	にぶい焼 10 Y R 4/3	明焼 7.5 Y R 5/6	1mm 以下のにぶい褐色の粒を含む	
303	弥生土器	甕	口縁	SC 48	埋土	口縁部: 刻目突帯文 横ナデ	ナデ	横 7.5 Y R 7/6 焼灰 7.5 Y R 4/1	にぶい焼 7.5 Y R 7/4	1mm 程度の灰白・褐色の粒を含む	外面スチ付帯



第 84 図 包含層等出土石器実測図

第 39 表 土坑出土石器計測表

No	器種	石材	出土地点		計測値				備考
			〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	
304	打製石錐	頁岩	S C 44	埋土	3.80	1.80	0.40	2.22	縦長い二等辺三角形。凹基で切りは大きい。先端部欠損
305	台石	砂岩	S C 20	埋土	12.90	8.60	3.60	5278	正面にまばらな剝打痕。一部欠損

第 40 表 包含層等出土石器計測表

No	器種	石材	出土地点		計測値				備考
			〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	
306	石錐	チャート	F - 2 区	I	1.90	1.60	0.60	1.25	二等辺三角形。全面に剝離調整
307	スクレイパー	珉質頁岩	P 03 G r	II 上面	7.05	4.16	1.18	39.00	縦長剥片素材か。刃部は剝離調整。両側面は微細剝離調整
308	剥片	砂岩	E - 3 区	攪乱埋土	2.54	3.89	0.65	5.80	縦長剥片
309	剥片	珉質頁岩	D 20 G r	トレンチ内	4.73	3.22	0.62	9.90	縦長剥片。正面に自然面
310	石錐	砂岩	S E 8	埋土	5.70	6.10	1.80	848	長軸方向の両側面を打ち欠き
311	石錐	砂岩	G 15 G r	トレンチ内	7.40	4.55	2.45	1224	長軸方向の両側面を打ち欠き
312	砥石	緑色頁岩	E - 3 区	攪乱埋土	4.45	4.00	1.40	241	正面・裏面とも全体に磨面状の光沢のある使用痕・多数の縁状の使用痕。下面と右側面に長軸方向の縁状の使用痕。一部欠損

第6節 自然科学分析の結果

自然科学分析では、放射性炭素年代測定、樹種・種実同定、金属分析を実施した。

板平遺跡(第4次調査)では、炉穴や竪穴建物跡、土坑より炭化材、さらにフローテーションにより種実が得られた。当時の自然環境や食料や建築材における植物利用のあり方を把握するため、炭化材や炭化物の樹種等を同定した。さらに出土遺構の年代を推定するために、放射性炭素年代測定も行った。

また、竪穴建物跡(SA1)出土鉄滓等を分析することで、始発原料および製造工程上の位置づけを回り、古墳時代の鉄生産の実態を把握するために顕微鏡組織観察・化学成分分析・硬度試験を実施した。

各分析の方法や・結果の詳細については、下記に掲載した。

1 放射性炭素年代測定

(1) 試料

№2 SA 1床面出土の炭化材(ツブラジイ)

№9 SP 2床面出土の炭化材(クリ)

№11 SP 7床面焼土内の炭化材(クリ)

№12 SI 1の下部埋土出土の炭化材
(アカガシ亜属)

№13 SC50床面出土の炭化材

(2) 分析方法

各資料を超音波洗浄と酸-アルカリ-酸処理の後、AMS[加速器質量分析法(Accelerator Mass Spectrometry)]により年代を測定し、暦年校正した。

(3) 測定結果

第41表に放射性炭素年代測定結果および暦年代(校正年代)を示した。

№2の炭化材では1670±20年BP(2σの暦年代でAD260-280, 330-400年) №9の炭化材では9260±30年BP(BC8610-8340年) №11の炭化材では9230±30年BP(BC8550-8320年) №12の炭化材では4090±20年BP(BC2860-2810, 2750-2720, 2700-2570, 2520-2500年) №13の炭化材では6185±25年BP(BC5220-5050年)の年代値が得られた。

このうち、№12の炭化材では暦年代の年代幅がかなり広がっているが、これは該当時期の校正曲線が不安定なためである。なお、樹木(炭化材)による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や乾用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることがある。

2 樹種同定

(1) 試料

試料は、竪穴建物跡、炉穴、集石遺構から採取された炭化材11点である。

(2) 分析

試料を割削して新鮮な横断面(木口と同義)放射断面(柁目)接線断面(板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50-1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

第41表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。また、その樹種の特徴も記した。

a) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸はた木など広く用いられる。

b) ツブラジイ *Castanea crenata* Schottky ブナ科

ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径15mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材等に用いられる。

c) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen.

Castanea crenata ブナ科

コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径15m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

d) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靱、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

(4) 所見

樹種同定の結果、ツブラジイ5、クリ4、コナラ属アカガシ亜属1、サカキ1が同定された。SA1(竪穴建物跡)の貼床面から採取された6試料のうち5試料はツブラジイである。また、炉穴SP2、SP6、SP7から採取された3試料は、いずれもクリである。

ツブラジイ、コナラ属アカガシ亜属、サカキは、温帯下部の暖温帯に分布する常緑高木で、ツブラジイとコナラ属アカガシ亜属は照葉樹林を構成する主要高木である。コナラ属アカガシ亜属は一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、イチイガシは自然度が高いがアラカシは二次林性でもある。クリは温帯に広く分布する落葉高木で、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。

3 種実同定

(1) 試料

試料は、竪穴建物跡(SA4)の炉周辺から採取された選別済みの種実類である。

(2) 方法

肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態の特徴および現生標本との対比によって同定し、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(3) 結果

分析の結果、草本1分類群(イネ)が同定された(第41表)。イネ(*Oryza sativa* L.)は長さ×幅:4.69mm×2.67mmである。炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

(4) 所見

種実同定の結果、竪穴建物跡(SA4)の炉周辺から採取された種実類はイネ(炭化米)と同定された。この炭化米は、粒形と大きさから短粒の小粒に区分される(佐藤, 1988)。

4 金属分析

(1) 試料

- Na1 SA1 床面出土の高坏脚部(掲載番号206)
- Na2 SA1 炉内埋土上部出土の鉄滓状の塊(222)
- Na3 SA1 炉内埋土上部出土の鉄滓状の塊(223)
- Na4 SA1 炉内埋土出土の鉄滓状の塊(224)
- Na5 SA1 床面出土の鉄滓状の塊(225)

(2) 分析方法

a) 重量計測、外観観察および金属探知調査

試料重量の計量は電子天秤を使用して行い、小数点2位で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、試料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。試料の出土位置や試料の種別等は提供された試料に準拠した。着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機(MC: metal checker)を用いて調査した。金属検印にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱(1.5mmφ x 1.5mmH、2.0mmφ x 2.0mmH、5mmφ x 5mmH、10mmφ x 10mmH、16mmφ x 16mmH、20mmφ x 20mmH、30mmφ x 30mmH)を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

b) 顕微鏡組織観察

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)する。顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物(不純物、非金属鉱物)の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍、及び400倍で撮影を行う。

c) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- ・全鉄(T. Fe): 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・金属鉄(M. Fe): 臭素メタノール分解-EDTA滴定法。
- ・酸化第一鉄(FeO): ニクロム酸カリウム滴定法。

- ・酸化第二鉄 (Fe₂O₃): 計算。
- ・化合水 (CW.): カールフィッシャー法。
- ・炭素 (C) イオウ (S): 燃焼-赤外線吸収法。
- ・ライム (CaO) 酸化マグネシウム (MgO) 酸化マンガン (MnO) 酸化ナトリウム (Na₂O) 珪素 (Si) マンガン (Mn) リン (P) ニッケル (Ni) ジルコニア (Zr) アルミニウム (Al) バナジウム (V) チタン (Ti): ICP 発光分光分析法。
- ・シリカ (SiO₂) アルミナ (Al₂O₃) 酸化カルシウム (CaO) 酸化マグネシウム (MgO) 二酸化チタン (TiO₂) 酸化リン (P₂O₅) 酸化カリウム (K₂O): ガラスビード蛍光X線分析法。

※ 但し CaO, MgO, MnO は含有量に応じて ICP 分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。

- ・酸化ナトリウム (Na₂O): 原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分(全鉄 T.Fe、金属鉄 M.Fe、酸化第一鉄 FeO、酸化第二鉄 Fe₂O₃、シリカ SiO₂、アルミナ Al₂O₃、ライム CaO、マグネシア MgO、酸化ナトリウム Na₂O、酸化カリウム K₂O、二酸化チタン TiO₂、酸化マンガン MnO、酸化リン P₂O₅、ジルコニア Zr、化合水 C.W、炭素 C、バナジウム V、銅 Cu) を化学分析している。分析は各元素について、酸化物に換算して表示した。

d) 耐火度試験

耐火物及び耐火物原料の耐火度試験は、JISR 2204 (耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法) 及び JISR 8101 (耐火度試験用標準コーン) に準拠して測定する。

遺物試料を粉砕し、規定(量的に少量であるから)寸法は第2種の小型:幅7mm、高さ27mm)のゼーゲルコーンを成型する。このゼーゲルコーンを傾斜80°で受台に装着し、毎分5℃で加熱する。コーンの先端が曲がり始め、受台に接触したときの温度を耐火度とする。

なお、耐火度を測定できない場合は、必要に応じて既分析の146試料について耐火度(ゼーゲルコーン溶融温度 y (℃))の試験結果を整理して得た y = 110.98 f(x) + 927.82 の推算式から耐火度を測定する。

※ f(x) = (25.8Al₂O₃ + 5.2SiO₂) / (146MgO + 448MnO + 12.5T.Fe + 10.4TiO₂ + 78.6CaO)

e) 硬度試験

ビッカース硬度計を用いて硬度を測定する (JIS Z 2244)。鏡面仕上げした試料面に対面角 136°の四角錐ダイヤモンド圧子を一定荷重、荷重時間 10 秒で押し込み、生じた圧痕の対角線の平均長さ d から、次式によって硬度を算出する。

$$\text{ビッカース硬度 (Hv)} = (\text{荷重}) / (\text{圧痕の表面積}) \\ = 2P \sin(\alpha/2) / d^2 (\text{kg/mm}^2)$$

ここで、Hv はビッカース硬度、α は対面角で 136°、d は圧痕の対角線の平均長さ μm、P は荷重 gf である。本測定に当たっては組織の硬さを考慮して荷重は 100 gf としている。

(3) 分析結果

a) No.1 試料 [着磁度: なし、メタル反応: なし]

① 外観観察: 長さ 468mm × 幅 478mm × 厚さ 74mm。試料の重量は 29.4g である。12 頁に外観写真を示す。先端部の内径は 22mm、炉壁部の内径は 55mm の接合補修された羽口で、先端部は未広がりがりになっており、緻密でよく練り上げられた組織である。先端部から 10mm 程度の外表面部分は、被熱により本来の羽口の色彩の茶褐色から灰色に変色し、やや発泡しているが熔融には至っていない。羽口の内面側、及び炉壁側は羽口本来の茶褐色の状態である。変色の少ない部分を分析する。

② 顕微鏡組織: 半透明の石英粒や長石類の粒子が観察され、外観に比べ石英や長石類が多い。素地は締まり緻密である。

化学成分: 強熱減量は 41% で、熱影響は余り強く受けておらず結合水の一部が抜けた状態での分析である。SiO₂ は 62.4% と羽口としては低目の値であり、通常の粘土の約 60% に近いが、耐火度に有利な Al₂O₃ は 21.1% とやや高い。一方、渣滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + Na₂O + K₂O) 中の軟化性を持つアルカリ土類成分 (CaO + MgO) は 1.79% と通常の範囲である。耐火度を低下させると思われる Na₂O + K₂O は 3.39% とやや多く、軟化性成分である全鉄分も 45.7% とやや多い。MnO は 0.05% である。

③ 耐火度: 耐火度は 1140℃ で、成分系を反映している。鍛冶炉用羽口としては低めで、炉壁並みの値である。

以上から本試料は、炉壁並みの耐火度 1140℃ の鍛冶炉用羽口と思われる。

b) No.2 試料 [着磁度: なし、メタル反応: なし]

①外観観察: 長さ 419mm × 幅 242mm × 厚さ 157 mm。試料の重量は 134g である。滓が炉壁と反応した炉壁附着滓の小片で、表面には微細な亀裂が多く、ぼそぼそとした感じである。明確な破面は観察されない。厚みの約半分の部分は褐色で残り半分は滓と反応したものと思われ、やや灰黒色を帯びている。下面側はよく溶融している炉底部付近の炉壁附着滓と思われる。

②顕微鏡組織: 全面が胎土の粘土組織であり鉄滓の組織は殆ど見られない。滓と反応してよく発泡した多孔質な組織で、所々にメタル粒が観察される。

③化学成分: 全鉄は 798% と極めて少なく、FeO は 0.64%、Fe₂O₃ は 10.5% である。SiO₂ が 54.5%、Al₂O₃ が 27.4%、CaO が 10.6%、MgO が 1.63% をそれぞれ示しており炉壁と反応した炉壁附着滓と思われる。

④推算耐火度 (参考値): 試料が少なく耐火度の測定が困難であったため、胎土と見られる部分から試料を採取して化学成分を分析して推算した。推算耐火度は 1150°C であった。

以上の結果を総合すると、本試料は炉底部付近の炉壁と反応し生成した炉壁附着滓の小片と思われる。

c) No.3 試料 [着磁度: 0 - 1、メタル反応: なし]

①外観観察: 長さ 552mm × 幅 37.1mm × 厚さ 190 mm。試料の重量は 222g である。表面が溶岩のようにゴツゴツとした凹凸が激しい形状の炉壁附着滓であり、小石の噛み込みも観察される。明確な破面は観察されない。表面は酸化土砂に覆われて茶褐色を帯びているが、滓そのものは黒色でよく溶融する。

②顕微鏡組織: 全面が胎土の粘土組織であるが、僅かながら微細な白色微小結晶の多角盤状のマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織が晶出している。顕微鏡組織写真 3-1 は結晶がやや大きい部分、顕微鏡組織写真 3-2 は結晶が微細な部分である。

③化学成分: 全鉄は 18.5% と少なく、FeO は 10.4%、Fe₂O₃ は 14.6% である。SiO₂ が 45.7%、Al₂O₃ が 21.5%、CaO が 18.4%、MgO が 1.54% をそれぞれ示しており炉壁と反応した炉壁附着滓と思われる。本試料は炉壁と反応した炉壁附着滓の小片と思われる。

以上の結果を総合すると、本試料は炉壁附着滓の小片と思われる。

d) No.4 試料 [着磁度: 0 - 1、メタル反応: なし]

①外観観察: 長さ 481mm × 幅 355mm × 厚さ 222 mm。試料の重量は 151g である。不整三角形で酸化土砂に覆われ茶褐色を呈した炉壁附着滓の小片で、明確な破面は 1 である。破面で見ると滓そのものは黒色でよく溶融しており、内部はブツブツと発泡している。20 × 15mm 大の木炭痕が観察される。

②顕微鏡組織: 約半分が粘土組織、残り半分が滓の組織である。滓組織にはウルボスピネル (Ulvospinel: 2FeO · TiO₂) 組織が観察され、その背景にはファイヤライト (Fayalite: 2FeO · SiO₂) 組織も観察される。

③化学成分: 全鉄は 140% と少なく、FeO は 459%、Fe₂O₃ は 14.6% である。SiO₂ が 49.6%、Al₂O₃ が 23.5%、CaO が 2.47%、MgO が 1.17% をそれぞれ示しており炉壁と反応した炉壁附着滓と思われる。TiO₂ が 10.6% であることや、顕微鏡組織から TiO₂ 鉱物組織のウルボスピネル (Ulvospinel: 2FeO · TiO₂) 組織が観察されたこと等から判断すると、始発原料は砂鉄と判断される。本試料は炉壁と反応した炉壁附着滓の小片と思われる。

④硬度試験: ピッカース硬度計を用いて硬度を測定した。ウルボスピネル (Ulvospinel: 2FeO · TiO₂) 組織と見られる部分の硬度は Hv705 で、ファイヤライト (Fayalite: 2FeO · SiO₂) 組織と見られる部分の硬度は Hv625 をそれぞれ示した。

以上の結果を総合すると、本試料は始発原料を砂鉄とする炉壁附着滓の小片と思われる。

e) No.5 試料 [着磁度: 3 - 4、メタル反応: 2 - 3]

①外観観察: 長さ 51.1mm × 幅 460mm × 厚さ 177 mm。試料の重量は 60.8g である。不整三角形の乗のような形状をした緻密で重量感のある鉄滓である。炉壁の胎土が付着していた痕跡があり、中央部がやや窪んだ形状であること等から本試料は碗形滓底部の小片と思われる。表面は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈し、滓は黒色でよく溶融している。

②顕微鏡組織: 多角盤状のマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) 組織と凝集したウスタイト (Wustite: FeO) 組織の混晶で、背景にわずかながらファイヤライト (Fayalite: 2FeO · SiO₂) 組織が観察される。

③化学成分: 全鉄 56.7% に対して金属鉄は 0.13% とわずかである。FeO は 39.3%、Fe₂O₃ は 37.2%、SiO₂

は14.3%、TiO₂は0.28%であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO-Fe₂O₃-SiO₂の3成分系に換算するとFeOは43.3%、Fe₂O₃は41.0%、SiO₂は15.7%となり、9FeO-Fe₂O₃-SiO₂系の平衡状態図ではマグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)領域にあり、顕微鏡観察の結果と一致する。鍛錬鍛冶滓と思われる。④硬度試験: ピッカース硬度計を用いて硬度を測定した。マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)組織と見られる部分の硬度はHv551でウスタイト(Wustite: FeO)組織と見られる部分の硬度はHv496、ファイヤライト(Fayalite: 2FeO・SiO₂)組織と見られる部分の硬度はHv676をそれぞれ示した。

以上の結果を総合すると、本試料は鍛錬工程の初期に生成した椀形鍛冶滓の小片と思われる。

4 分析結果のまとめ

(1) 試料群の性格

試料群は、炉壁付着滓が3試料、椀形滓が1試料、羽口が1試料の合計5試料である。椀形滓の工程別分類では、鍛錬鍛冶滓であり、製錬滓の該当は全く本遺跡では鍛冶炉による精錬から鍛錬が行われていたものと考えられる。

(2) 始発原料について

鉄滓(№5試料)から、TiO₂鉱物のウルボスピネルが観察されていることから、本遺跡の始発原料は砂鉄と判断された。

(3) 高炉転用のファイゴの羽口

羽口(№1試料)は、外面側が炉内還元炎に曝され先端部は溶融していた。耐火度は1140℃で、成分系を反映して鍛冶炉用の羽口としては低めで、炉壁並みの値であった。

第7節 小結

第4次調査では、第1～3次調査と同様に、後期旧石器時代から近世までの遺構や遺物を確認することができた。

その結果、調査範囲は、板平遺跡の位置する河岸

【文献】

(放射性炭素年代測定)

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363
Paula J Reimer et al, (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

(樹種同定)

島地謙・佐伯浩・原田浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司(1985)木材の構造、文永堂出版、290p.

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史、植生史研究特別1号、植生史研究会、242p.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の14C年代、p.3-20.

(種実同定)

笠原安夫(1988)作物および田畑雑草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版、p.131-139.

佐藤敏也(1988)弥生のイネ、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版、p.97-111.

南木睦彦(1991)栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通I、雄山閣出版、p.165-174.

吉崎昌一(1992)古代雑穀の検出、月刊考古学ジャーナルNo355、ニューサイエンス社、p.2-14.

段丘平坦部のほとんどの部分に及び、第3次調査と合わせて、第2次調査区より西側への遺構や遺物の広がりを把握することができた。

本来ならばここで第4次調査についてまとめるところであるが、重複を避けるため、後述の第IV章の中で一括して述べることにする。

第41表 自然科学分析の結果(1)

放射性炭素年代測定結果

試料 No	測定番号 PED-	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代(校正年代)	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
2	16266	-26.99 ± 0.14	1670 ± 20	A D 350-370 (20.2%) A D 375-415 (48.0%)	A D 260-280 (2.1%) A D 330-430 (93.3%)
9	16267	-26.46 ± 0.14	9260 ± 30	BC 8570-8450 (68.2%)	BC 8610-8340 (95.4%)
11	16268	-27.01 ± 0.13	9230 ± 30	BC 8540-8500 (13.9%) BC 8490-8420 (32.6%) BC 8410-8390 (6.6%) BC 8380-8340 (15.2%)	BC 8550-8320 (95.4%)
12	16269	-27.75 ± 0.16	4090 ± 20	BC 2840-2810 (12.2%) BC 2670-2570 (56.0%)	BC 2860-2810 (18.5%) BC 2750-2720 (2.9%) BC 2700-2570 (73.1%) BC 2520-2500 (1.0%)
13	16270	-27.97 ± 0.14	6185 ± 25	BC 5210-5200 (1.7%) BC 5170-5070 (66.5%)	BC 5220-5050 (95.4%)

板平遺跡における樹種同定結果

No	遺構	出土位置	結果(学名/和名)	
2	SA 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (No 1)	<i>Castanopsis cuspidata</i> S chottky	ツブラジイ
3	SA 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (No 2)	<i>Castanopsis cuspidata</i> S chottky	ツブラジイ
4	SA 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (No 3)	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
5	SA 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (No 4)	<i>Castanopsis cuspidata</i> S chottky	ツブラジイ
6	SA 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (No 5)	<i>Castanopsis cuspidata</i> S chottky	ツブラジイ
7	SA 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (No 6)	<i>Castanopsis cuspidata</i> S chottky	ツブラジイ
8	SA 1 1 (竪穴建物跡)	炉内	<i>Cleyera japonica</i> T hurb.	サカキ
9	SP 2 (炉穴)	床面	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
10	SP 6 (炉穴)	焼土	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
11	SP 7 (炉穴)	焼土	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
12	SI 1 (築石遺構)	下部埋土	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属

板平遺跡における種実同定結果

No	遺構	出土位置	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
1	SA 4 (竪穴建物跡)	炉周辺	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	炭化果実	1	種実ではない

第 42 表 自然科学分析の結果 (2)

調査試料と調査項目

試料 No.	遺構番号	出土位置	分析試料	蓄磁度	MC 反応	外観観察	化学分析	組織観察	耐火度試験	硬度試験	掲載図・掲載番号
No.1	SA.1	貼床面	高杯脚部	○	○	○	○	○	○		第 58 図 206
No.2	SA.1	炉内埋土上部	鉄滓状の塊	○	○	○	○	○			第 59 図 222
No.3	SA.1	炉内埋土上部	鉄滓状の塊	○	○	○	○	○			第 59 図 223
No.4	SA.1	貼床面	鉄滓状の塊	○	○	○	○	○	○		第 59 図 224
No.5	SA.1	貼床面	鉄滓状の塊	○	○	○	○	○	○		第 59 図 225

分析資料と結果

試料 No.	遺構番号	出土位置	分析試料	分析結果
No.1	SA.1	貼床面	高杯脚部	耐火度 1140℃の鍛冶炉口
No.2	SA.1	炉内埋土上部	鉄滓状の塊	炉壁付着滓
No.3	SA.1	炉内埋土上部	鉄滓状の塊	炉壁付着滓
No.4	SA.1	貼床面	鉄滓状の塊	始見原料を砂鉄とする炉壁付着滓
No.5	SA.1	貼床面	鉄滓状の塊	鍛錬工程の初期に生成した楕形鍛冶滓

耐火度試験結果

試料 No.	耐火度 (SK)	溶倒温度 (℃)	色	膨張	試験時の性状
No.1	SK 3a	1140	茶褐色	やや収縮	普通

硬度試験結果

No.4		No.5		
ウルボスピネル	ファイヤライト	マグネタイト	ウスタイト	ファイヤライト
705	625	551	496	676

鉄滓の化学成分分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	比率 (%)	
											FeO	Fe ₂ O ₃
No.2	798	0.16	0.64	10.5	54.5	27.4	1.06	1.63	1.9	0.77	5.8	94.2
No.3	18.5	0.18	10.4	14.6	45.7	21.5	1.84	1.54	2.57	0.92	41.5	58.5
No.4	14	0.25	4.59	14.6	49.6	23.5	2.47	1.17	1.96	0.77	24	76
No.5	56.7	0.13	39.3	37.2	14.3	5.93	1.35	0.44	0.61	0.17	51.4	48.6

鉄滓の化学成分分析結果 (つづき) (%)

試料 No.	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Zr	C.W.	C	V	Cu	TiO ₂ /T. Fe	MnO/TiO ₂	渣滓成分%
No.2	1.23	0.33	0.136	0.021	0.53	0.12	0.02	0.005	0.154	0.268	87.3
No.3	0.99	0.27	0.184	0.019	0.54	0.11	0.014	0.009	0.054	0.273	74.1
No.4	1.06	0.18	0.153	0.02	0.79	0.08	0.011	0.006	0.076	0.17	78.5
No.5	0.28	0.09	0.089	0.004	0.3	0.03	0.001	0.016	0.005	0.321	22.8

C.W.= 化合水、渣滓成分 = SiO₂+ Al₂O₃+ CaO+ MgO+ Na₂O+ K₂O

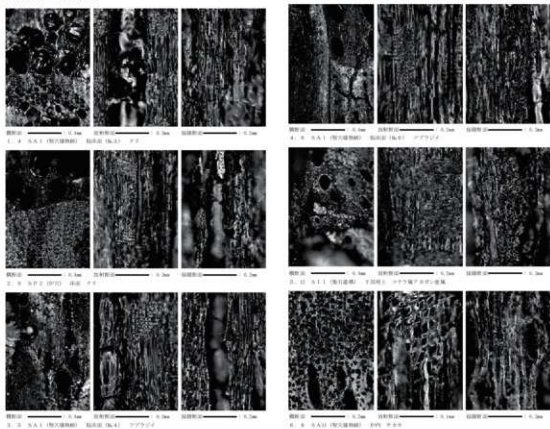
羽口の化学成分分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	TiO ₂	MnO	C	強熱重量
No.1	457	0.43	6.06	62.4	21.1	0.66	1.13	1.96	1.43	0.79	0.05	0.3	4.1

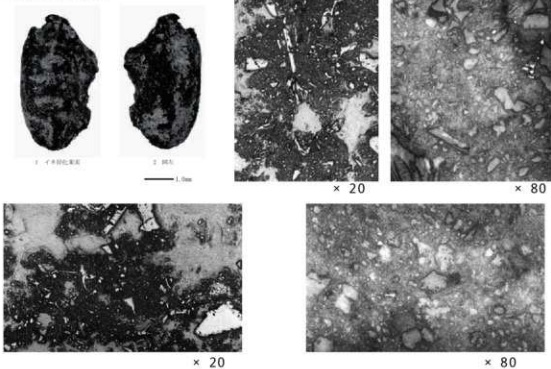
胎土の化学成分分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	TiO ₂	MnO
No.2	8.1	52	29.6	0.62	1.5	1.17	1.36	0.3

板平遺跡出土の炭化材

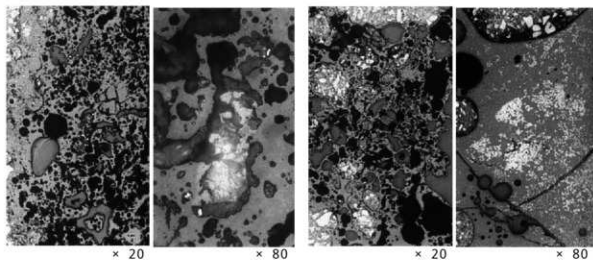


板平遺跡出土の種実

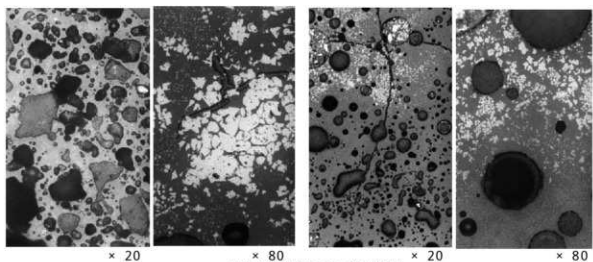


試料 1 (掲載番号 206) の顕微鏡組織

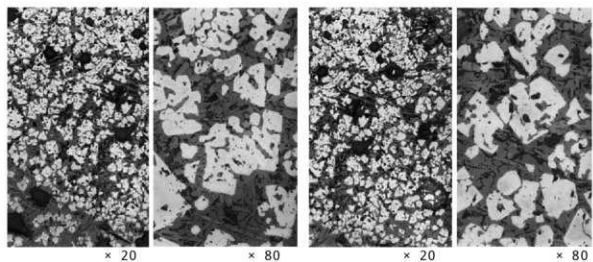
第 85 図 自然科学分析の結果 (1)



試料 2 (掲載番号 222) の顕微鏡組織

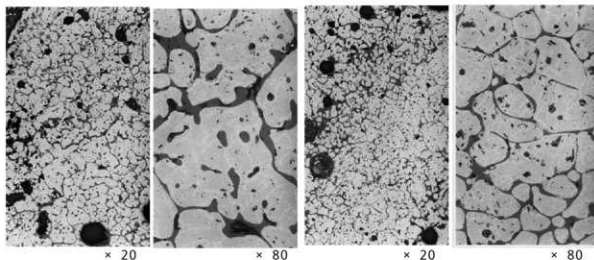


試料 3 (掲載番号 223) の顕微鏡組織

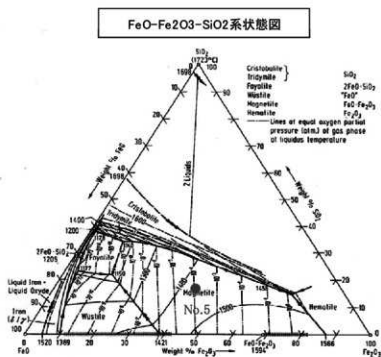


試料 4 (掲載番号 224) の顕微鏡組織

第 86 図 自然科学分析の結果 (2)



試料 5(掲載番号 225)の顕微鏡組織



FeO-Fe₂O₃-SiO₂系状態図 (by Osborn and Muan) :Slag Atlas
 [ドイツ鉄鋼協会](1981) [Verlag Stahleisen] Düsseldorf, Fig. 106, p.76

図 1 FeO-Fe₂O₃-SiO₂系鉄滓の平衡状態図

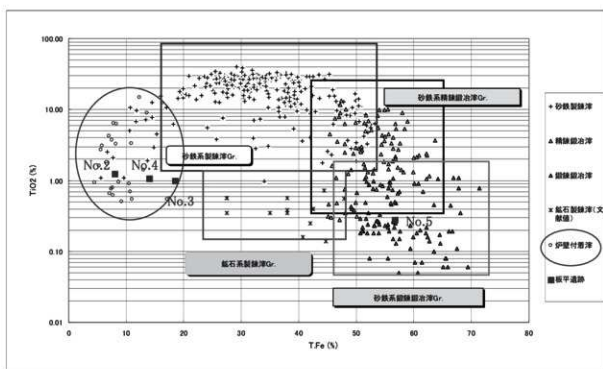


図2 鉄滓のT.FeとTiO₂濃度

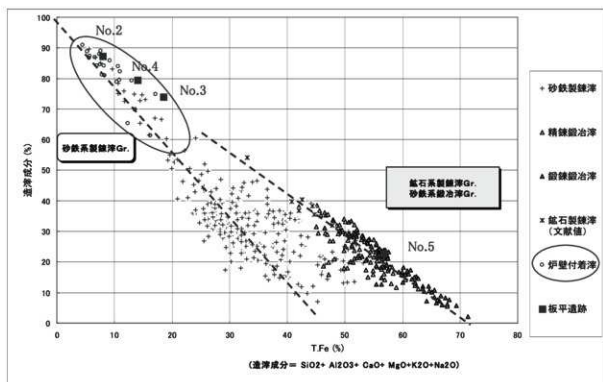


図3 製錬滓と鋳冶滓の分類

第 88 図 自然科学分析の結果 (4)

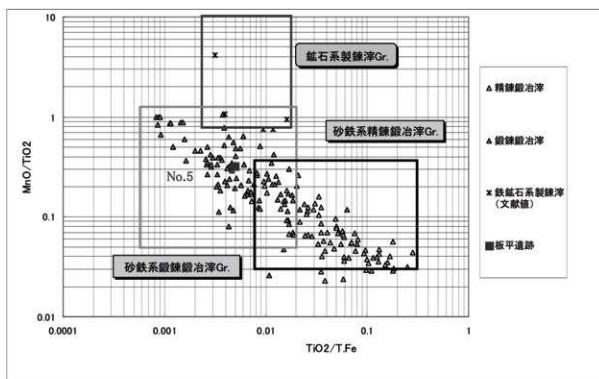


図4 砂鉄系製錬滓と鉄石系製錬滓の分類

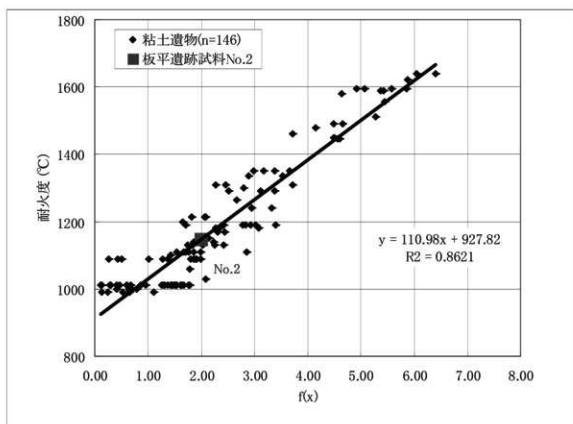


図5 粘土遺物の耐火度の推算

第IV章 総括

～今次までの調査成果～

板平遺跡の調査は、都合4次、4ヶ年を数えた。本章では、既報告分(第1・2次)と今回の報告分(第3・4次)の調査成果を時代毎に総括することにする。

I 後期旧石器時代

第1・2次調査で、N9グリッド杭を中心に半径約10mの範囲(以下、Aエリア)で41点、第3次調査で、J9グリッドなど(以下、Bエリア)で14点、第4次調査でJ12グリッド杭を中心に半径約10mの範囲(Cエリア)を中心に253点の旧石器が出土した。

まず、各調査での出土範囲の地形と位置関係、出土層位について述べる。Aエリアは、谷部への落ち込み際のAT下位の第Ⅷ層であるのに対し、B・Cエリアは、Aエリアから緩い尾根状の地形を越えた、平坦地のAT下位の第Ⅶ層である。また、AエリアとCエリアの中心は約50m離れている。

次に、使用石材について述べる。Aエリアでは41点中、ホルンフェルス23点(56%)、流紋岩18点(44%)であった。Bエリアでは14点中ホルンフェルス8点(57%)、流紋岩5点(36%)、チャート1点であった。Cエリアでは253点中珪質頁岩241点(95%)、流紋岩4点(2%)、チャート5点、その他3点であった。A・BエリアのホルンフェルスとCエリアの珪質頁岩は、色調などからほぼ同じものと考えられ、各調査を通じてこの石材が多く利用されている。また、A～Cエリアを通じて流紋岩が出土していることは、第2次調査報告にもあるように、五ヶ瀬川流域との交流の可能性があると言えよう。ただしその割合は、Aエリアで流紋岩が約4割を占めているのに対し、Cエリアではその割合が極めて少ない。

製品は2点のみで、ほとんどが剥片・石核であったことから、調査区付近は、石器の使用の場というより、製作の場であったと考えられる。また、旧石器出土数の多いAエリアとCエリアは、出土位置が離れており、出土層位や使用石材の割合も大きく異なっていることから、調査区周辺には、使用石材の

異なる複数の石器の製作場所があり、その製作時期は少なくとも2期にわたると推定される。

製品2点は、Cエリアで出土したチャート製の楔形石器と、調査区南側のSA11(竪穴建物跡)で出土した頁岩製のナイフ形石器である。第Ⅶ・Ⅷ層で頁岩製の剥片・石核は出土せず、チャート製についても出土数が少ないことから、この2点について、調査区内で製作されたものであるかは明らかにすることはできなかったが、こうした器種の石器が調査区内で製作されていた可能性は指摘できる。

II 縄文時代

1 縄文時代早期

a) 散礫

散礫は4群(調査順にA～D群)に分かれ、主に第Ⅲ層で検出された。

このうち、A群はC群と繋がっており、遺跡中央部の尾根状の微高・平坦地であるJ12・13、K12・13グリッド周辺に位置し、南北方向約30m、東西方向約25mの範囲に広がっていることが確認された。この散礫はJ11グリッド付近では疎になっている。

B群はA群から東に8m離れた谷部への落ち込み際に、半径4mの範囲で検出されている。

D群は、調査区西側の尾根状の微高・平坦地であるH11グリッド周辺に位置し、南北方向約15m、東西方向約10mの範囲で広がっており、A・C群とは約7mほど離れている。A・C群とD群を連続した一群とみなすと、南北方向約30m、東西方向約40mのドーナツ状の散礫が見出せる。この散礫群の主体は、A・B群の散礫構成礫(散礫範囲内集石遺構の礫を含む)の重量が約2,200kg、C・D群約440kgであることや、それぞれの礫群の礫の密度の状況から、A群であると推定される。

b) 集石遺構

集石遺構は合計36基が検出された。内訳は掘り込み・配石ありが15基、掘り込みあり・配石無しが11基、掘り込み無しが10基である。

集石遺構36基中30基は、散礫内または周辺で集中して分布する。散礫A群内・周辺では、SI5・16(第

2次)等20基がある。その中で掘り込み・配石のあるものが11基と多く、直径12m程度のものが多い。散礫D群内・周辺ではS I 8・S I 10(第4次)等8基がある。掘り込み・配石のあるものは2基のみであり、直径0.8m以下の比較的小規模のものが多い。また、散礫B群内では掘り込みが深く、配石が見られる2基(第2次S I 18・19)を確認している。

散礫と関係の薄い6基(第2次S I 1・第4次S I 1等)は調査区北側の斜面地・南側の谷状の緩斜面に散漫に分布する。配石のあるものはなく、比較的規模の小さいものが多い。

このことから、周囲よりやや小高く平坦な土地である調査区中央部が集石遺構の好適地と考えられる。

散礫・集石遺構を構成する礫の大半は砂岩であり、供給源は富高川の河原等と考えられる。また、集石遺構埋土出土の炭化材の樹種同定の結果からは、燃料材としてコナラ類が利用されていたと推定される。

c) 炉穴

炉穴は合計55基が検出された。内訳は、切り合い関係のある炉穴は9群(37基)、単独の炉穴は18基である。炉穴埋土出土の炭化材の樹種同定からは、燃料材にブナ類やクリ類の利用が推定される。

炉穴の形状 炉穴の平面形は概して長楕円形で、規模は長径約2m、短径約1mが多い。S P 4・7(第4次)のように1つの焼土部分からL字状に2方向に延びるもの、S P 19(第2次)のように煙道とみられる部分が扇状に広がるものもある。ブリッジの痕跡とみられる、くびれがあるものが10基(第2次S P 8・21、第4次S P 2等)あり、うち4基(第2次S P 12・19・21、第4次S P 6・7間)では、ブリッジの残存もしくは崩落土が土層断面から確認された。

炉穴の切り合い状況 炉穴の切り合いについては、いくつかのパターンがあり、切り合いの前後関係等がはっきりしているものについて、日高広人氏による分類(日高2003)を参考に、次のように分類した(→は作られた順番を示す)。

- ① 古い炉穴の焼土がある側に、新しい炉穴を構築するもの... 2例(第4次S P 12→11→9)
- ② 古い炉穴の焼土がない側に、新しい炉穴を構築す

るもの... 7例(第2次S P 5→6→7、第4次S P 13→14等)

③ 軸をずらし交差するように新たに炉穴を構築し、古い炉穴の一部を足場にするもの... 10例(第2次S P 26→24、第4次S P 10→9等)

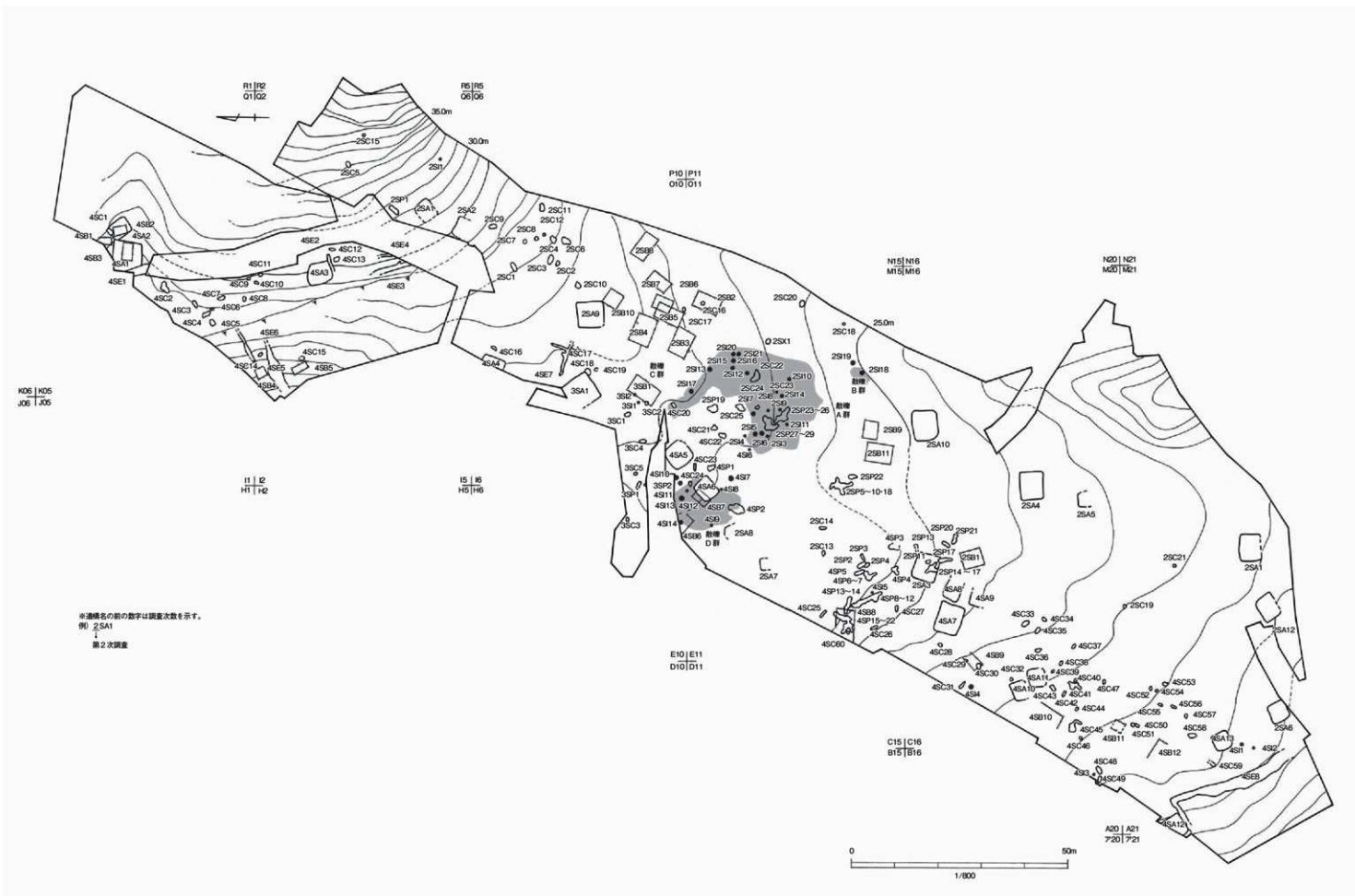
④ 古い炉穴の長軸に対して並列するように構築するもの... 2例(第2次S P 5→18、S P 23→24)

いずれのパターンにおいても、何もないところに炉穴を新たに作るよりも、古い炉穴をもとに作る方が合理的であるため、掘り直しによる切り合いが行われると考えられる。また、①と②においては長軸が並ぶため、片方がもう一方の煙道として機能しやすいと思われる。特に、S P 2(第4次) S P 6・7(第4次) S P 8・9(第4次)等は、間にくびれの見られる大小の穴の組み合わせであることから、そうした利用が行われた可能性もあるが、大小両方の穴に焼土面が見られることなどから、独立した炉穴であったとも考えられる。

炉穴の分布状況 炉穴が最も多く検出されたのはE 14-G 17グリッドの南北方向約40m、東西方向約20mの範囲で、S P 15-22(第4次)等、5群(21基)、単独11基の計32基が集中して検出された(I群)。この付近は尾根状の微高・平坦地から東へ下る緩斜面へ変わる変換点で、炉穴は6基を除き、等高線に並行に作られている。この範囲内には集石遺構は1基のみしか確認されなかった。散礫A・C・D群付近では、S P 27-29(第2次)等、2群(7基)、単独5基の計12基がやや集中して確認された(II群)。平坦地であるこの範囲では、炉穴は切り合いのうちの3基を除き、等高線に直交して作られている。I・II群間のやや窪地状の平坦地(I 14グリッド付近)に、S P 5-10(第2次)等、1群(7基)と単独1基によるまとまりがある。その他、S P 1(第2次)は北側の斜面地に、S P 30・31(第2次)は調査区南端の平坦地に、それぞれ離れた分布である。

d) 集石遺構と炉穴の関係

炉穴埋土中の炭化材について、放射線炭素年代測定の結果では、北側斜面地のS P 1(第2次)、散礫D区内のS P 2(第4次) I群中のS P 7(第4次)



第90図 全体遺構配置図

とも、約 9200 年 B P との結果が出たので、炉穴群はかなり近接した時期に存在したと考えられる。

また、集石遺構埋土中の炭化材の放射性炭素年代測定では、散磔 B 群内の 2 基については約 8200 年 B P、散磔 A 群内の S I 12 (第 2 次)については約 9300 年 B P との結果が出た。S I 12 は、炉穴とほぼ同時期、S I 18-19 は約 1000 年ほど後出する。数少ない年代測定結果ではあるが、遺構が近接した時期に営まれたことや、長期間の空間利用が読み取れた。

一方、集石遺構と炉穴の切り合いは S I 5 と S P 9 (第 4 次)のみで、S P 9 の埋設後に S I 5 が構築された前後関係が読み取れる。一方、散磔 A 群内では、炉穴と集石遺構の前後関係を示す切り合いはなく、まるで、炉穴が集石遺構を、もしくは集石遺構が炉穴を避けるような分布のあり方を示す。その点では、ある時期には炉穴と集石遺構は併存していた可能性を指摘できる。

e) 出土遺物

出土土器については、貝殻文が施されるものが多い。中でも、口縁部に 2 ~ 3 段の貝殻刺突文 (第 2 次 19 21 等) や貝殻条痕文 (第 4 次 135 等) が施され、内面はナデ調整がなされるタイプの深鉢が多く出土しており、これらは中原Ⅱ式土器に相当すると考えられる。出土量全体のおよそ半分にあたる。

中原Ⅱ式土器の時期は縄文時代早期前半にあたり、放射性炭素年代測定で得られた散磔 A 群内の集石遺構や炉穴の推定構築年代とほぼ対応する。こうしたことから、縄文時代早期前半においては、人々の活動が盛んに行われていたことが想像される。

また、第三層から、手向山式土器 (第 4 次 143) 天道ヶ尾 (妙見) 式土器 (第 4 次 144) に相当すると考えられるものも数少ないが出土している。これらの土器は縄文時代早期後半にあたり、放射性炭化物年代測定で得られた散磔 B 群の集石遺構の推定構築年代とほぼ一致する。縄文時代早期後半においても、人々の営みが続いていたことが想像される。

出土土器については、炉穴内や第三層 (縄文時代早期相当) から、打製石鏃や石皿、磨石等、定住の要素を窺わせるものが出土している。

2 縄文時代後 - 晩期

この時期の遺構は、第 2 次調査で検出された縄文時代後期の土坑 1 基 (S C 20) 石組遺構 1 基 (S X 1) のみである。この 2 基はいずれも調査区東側の谷部付近に位置するため、遺構は調査区外の谷部縁辺に広がる可能性がある。

土器は、調査区東側の第 1・2 次調査区で多く出土している。一方、調査区西側の第 3・4 次調査区では出土数が少なく、そのほとんどが古墳時代の竪穴建物跡の埋土から出土している。また、当時期の遺構はほとんど確認できないことから、人間活動の希薄さが窺える。

縄文時代後期の土器では、三万田式系のものが大半を占める。深鉢 46 (第 2 次) などは頸部が明瞭に屈曲し、上げ底の底部を持つ器形である。全体に口縁部に 1 本ないし数本の沈線を持つものが多く、66 (第 2 次) のように、横沈線の間に波状沈線のあるものも数点出土した。

縄文時代晩期の土器では、黒川式に相当すると考えられるもの (第 2 次 97 等) や無刻目突帯文をもつもの (第 2 次 90 等) が出土した。

Ⅲ 弥生時代

1 弥生時代前期末 - 中期前半の土器

第 4 次調査では、口縁端部やその直下に刻目突帯をもつ甕が少量ながら出土した。いわゆる下城式土器や突帯文土器の系譜を引く「亀の甲」タイプである。

現段階までに、北は延岡市北浦町中野内遺跡、南は都城市大岩田村の前遺跡などを宮崎県内でも広く確認される。これらの大分県沿岸部を中心とする下城式土器と北部九州域を代表する亀の甲タイプといった二系統の甕の存在は、弥生時代前期末 - 中期前半の土器の一樣相として把握可能となりつつある。

板平遺跡のある日向市域 (旧東郷町を含む) では越シ遺跡、鶴野内中水流遺跡や下水流遺跡などで出土している。板平遺跡は、塩見川支流の富田川沿いの狭隘な土地で沖積地よりも内陸側に立地する。同じく日向市下水流遺跡や鶴野内中水流遺跡も耳川支流沿いの自然堤防上といった狭隘な地形に位置する。

弥生時代前期末 - 中期前半は、弥生文化がこれら

県北部の中山間地帯にも波及していく動きであり、板平遺跡はその過程を示す遺跡と位置付けられる。

2 弥生時代後期

弥生時代の遺構は、第4次調査で検出されたS A 3（竪穴建物跡）のみである。この所属時期を建物内出土の弥生土器壺（173）から導くことにする。

胴部は「ソロバン玉」状を呈し、いわゆる、免田式土器の重弧文長頸壺に類似する。しかし、胴部肩部に特徴的な重弧文は認められず、胎土も在地的であるから器形を模倣した土器といえる。この壺は、器形的には西健一郎氏の編年観でいう第2～4 a型式や宮崎市中岡遺跡の中岡I式に相当するので、弥生時代後期中葉～後葉の時期と考えられる。

このことから、S A 3の時期は弥生時代後期と捉えておきたい。そうすると、S A 3と第2次調査出土の扶入石包丁（第2次399）や磨製石鏃（第2次400）の存在は、板平遺跡における弥生時代後期の生業活動を意味付ける資料と評価できよう。

IV 古墳時代

1 遺構出土遺物の検討

a) 竪穴建物跡出土の土器

板平遺跡では26軒の竪穴建物跡が検出されたが、古墳時代に属するのは25軒である。その出土土器群は、概ね古墳時代の前期～中期を中心とする時期と考えられる。この土器群から各竪穴建物時期を割り出し、集落の変遷を導くことで総括としたい。

しかし、土器群の特徴は外来的要素（器形や調整技法）の影響を強く受けた襍や庄内・布留式系の高坏及び小型丸底壺といった小型器種を一定量含んでおり、従来の編年の指標とされた在地襍は少ない。

そこで、土器群の時間的位置付けをはかるために、従来提示されてきた先学諸氏による編年案を尊重しつつ、板平遺跡とその周辺地域（延岡・日向）の古墳時代初頭～中期の土器編年（変遷）を改めて概括した（第91～93図）。対象とした資料は、耳川・塩見川・五ヶ瀬川流域の資料を中心に、一部は、宮崎平野部等の資料で補完した。器種は、主要なものに限定した。

古墳時代初頭～中期土器の変遷過程 古墳時代初頭から中期末葉までの土器器の変遷過程を大きく3期（Ⅰ～Ⅲ期）の画期に区分し、各々の小画期を段階として細分した。（なお、以下の本文中で触れる土器の番号は第2次調査分と第3・4次調査分の遺物掲載番号で、第91～93図の挿入番号ではない。）

〔Ⅰ期の概要〕

襍の口縁部は「く」の字形で、底部は小さな平底や上げ底状となる。平底タイプは、円盤状や端部が外方に張り出す形態がある。外面をタキ調整する襍もⅠ期より一般化する。襍の口縁部つけ根のしまりが強く、屈曲するタイプをⅠ期a段階、しまりが緩くなり「く」の字状タイプと立ち上がり気味タイプの口縁部をⅠ期b段階とした。

高坏はⅠ期a段階では石川悦雄氏分類のAⅡ・AⅤ類から、坏部の口縁部付け根断面が三角形状となるタイプに移行する。BⅠ類も出現するようだ。Ⅰ期b段階では、AⅤ類とBⅠ類が伴うようである。

Ⅰ期は、石川悦雄氏による弥生土器編年のⅥ期および後続する土器群であり、加飾された細頸壺や高坏、台付の小型壺や広口壺の存在が特色である。装飾高坏は、瀬戸内海沿岸地域の庄内式土器併行期に認められるタイプと類似する。

この庄内式土器を弥生時代終末期とするか、古墳時代初頭に位置づけるか見解が分かれるが、少なくとも、Ⅰ期の土器群は弥生時代の終わりから古墳時代への移行期と位置付けられる。

Ⅰ期に相当する土器は、包含層出土の土器にわずかに破片が認められるのみである。

〔Ⅱ期の概要〕

Ⅱ期a段階の襍は、口縁部付け根の締めりは強いが、Ⅱ期b段階には緩くなる。Ⅱ期c段階ではさらに緩くなり、立ち上がり気味の口縁部となって口径と胴部最大径が近似する。Ⅱ期の襍底部は、Ⅰ期段階よりも接地面の小さい平底を指向する。

なお、Ⅱ期a段階には、布留式襍の器形や調整手法（内面のヘラケズリ）を模倣した襍が製作されはじめ、Ⅱ期c段階まで続くようである。

高坏は、Ⅱ期a段階になると石川分類のAⅥ類は認められなくなる。Ⅱ期b段階は、脚部がエンタシ

ス状となるBⅡ・Ⅲ類と、有稜高坏や有段高坏と呼称される庄内式系及び、坏部底部が水平な布留式系の長脚な高坏が伴う。Ⅱ期c段階は布留式系の高坏が主体となり、今のところ石川分類のB類はこの段階には衰退するようである。

壺は、Ⅰ期と同様に単口縁と複合(二重)口縁タイプがある。単口縁は大きく逆「八」の字に開く。安国寺式系譜の壺は、Ⅱb段階で二次口縁部と一次口縁部の接合部に突出部をなす形態となる。二次口縁部が直立する壺類はⅡ期C段階まで続くようである。

浅鉢類は底部が尖底や丸底気味となり、口縁部端部が外に突出するタイプも認められる。

布留式土器にみられる小型丸底壺(鉢)はⅡ期b段階以降に盛行する。Ⅱ期a段階は、その先駆的な小型土器が出現する。

器台はⅡb・c期段階に、布留式系譜のX字形器台や山陰系の鼓形器台、口縁部が短く直立し脚部に三角形の透かしを持つ器台が認められるなどバリエーションが豊かとなる。

Ⅱ段階は、甕の球形胴指向や庄内式・布留式系譜の新たな小型器種の登場と展開に特色づけられる。高坏や小型丸底壺の形態から、各小期はⅡ期b段階は久住猛雄氏のⅡB・C期、Ⅱ期c段階はⅢA期と併行関係にあると推定される。Ⅱ期a段階は宮崎県域における布留式土器の本格的な波及時の段階と考えられる。従ってⅡ期は古墳時代前期の前半(Ⅱ期a・b段階)と後半(Ⅱ期c段階)としておきたい。

Ⅱ期に相当する土器のうち、第2次調査のSA10の甕(155・157・158・160・161)がⅡ期a段階にあたる。二重口縁壺(169)はそれに前後する段階であろう。SA9の甕(131・132)はⅡ期b段階である。共伴して出土した有段高坏(146)もこの段階としておく。SA1の高坏(104)・SA4の甕(117)・SA6の小型丸底壺(126)はⅡ期c段階と考えられる。

第3次調査SA1は全体形の判明する遺物に乏しいが、甕(27)や高坏(29)からⅡ期a段階であろう。壺類(35～37)もⅡ期に位置付けられる。

第4次調査SA7出土の高坏(265)はⅡ期c段階で、内面ヘラケズリ甕(263)も同じ段階となろう。

〔Ⅲ期の概要〕

甕の底部は、平底から丸みを帯びた尖底や丸底に変化する。今のところ、口縁部と底部形態により4小期に細分される。Ⅲ期a段階の甕は、口縁部付け根のしまりが強く、底部は丸みを帯びた平底である。後続するb段階は、しまりは弱くなるが、「く」の字形口縁部で底部は尖底となる。なお、口径と胴部最大径が等しいタイプと、胴部最大径が口径を上回るが、Ⅲ期a段階よりは口縁部付け根のしまりが弱いタイプがある。

Ⅲ期c段階になると、口縁部の屈曲が弱まり、底部はⅢ期a段階よりも接地面の広い丸みを帯びた平底や丸底を志向する。一方、内湾気味や直立する口縁部を持つものも加わる。Ⅲ期d段階になると口縁部の屈曲や縮まりは、さらに弱くなって口縁部と胴部との境が不明瞭となる。底部は丸底を基調とし、丸みを帯びた平底の形態もある。

高坏は、脚柱部の長いタイプに加えて短いタイプも加わる。坏部と脚部の接続方法は「凸面付加法」のほかには円錐形粘土塊による「重填法」があり、後者による製作が多くなるようだ。Ⅲ期のc・d段階の器面調整はヘラミガキからナデ主体と変化する。

Ⅲ期a段階は、Ⅱ期c段階より坏部の口縁部付け根の稜は薄くなる。Ⅲ期b段階になると、坏部が深くなる短脚高坏が出現する。長脚・短脚高坏とも脚部は小ぶりなつくりとなり、脚径は口径より小さくなる傾向となる。また大型の高坏が認められるのもb段階の特徴である。

Ⅲ期c段階では、坏部の底面は脚柱部側へやや落ち込む形態となり、受部と口縁部との境が不明瞭になる。この坏部底面の形態変化からc段階を古相と新相に細分することができる。また、脚部がスカート状に開く形態がある。c段階には食器類の坏に脚部を接合した古墳時代後期につながる新しいタイプも出現する。

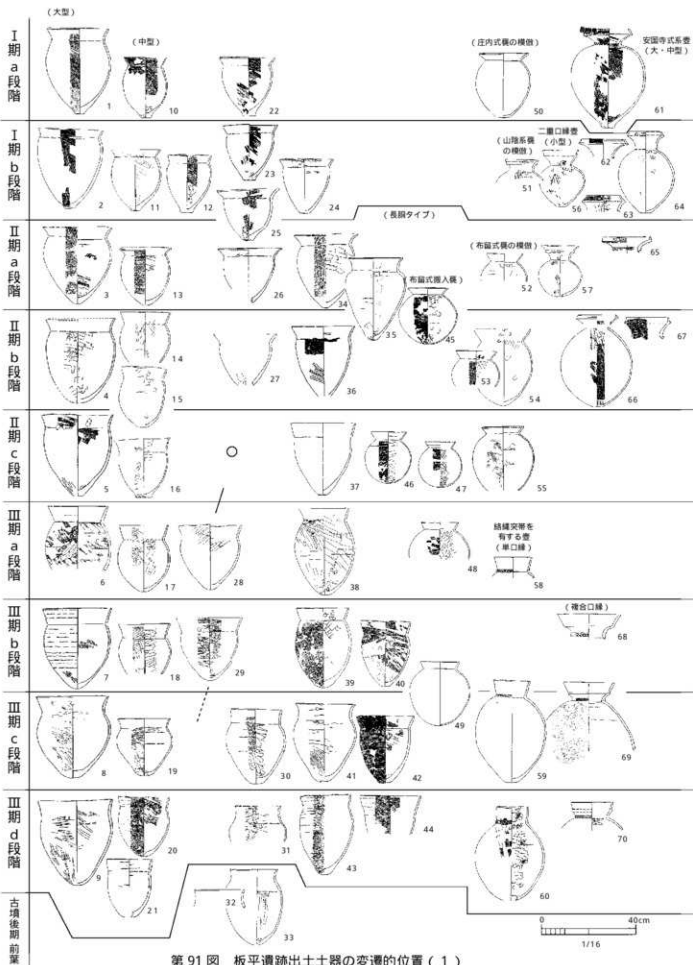
Ⅲ期d段階になると、坏部の矮小化が進む。

壺は、頸部の付け根に絡縄突帯を付す単口縁や複合口縁の壺が認められる。内湾口縁の広口壺も多く出土するようになる。

小型丸底壺は、Ⅲ期a段階で口径と胴部最大径が

椀類

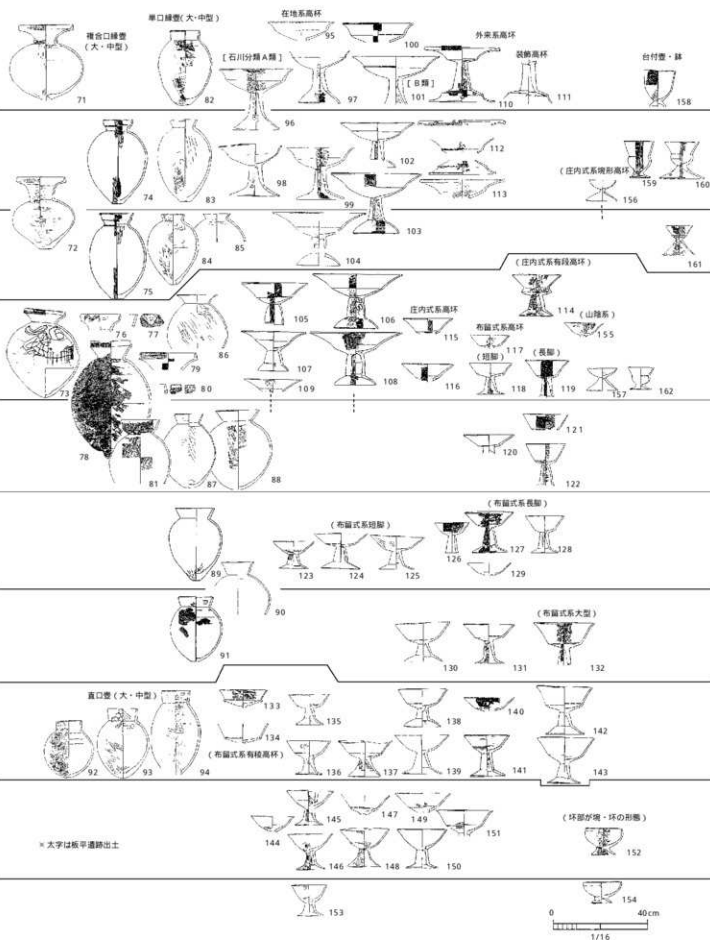
壺類



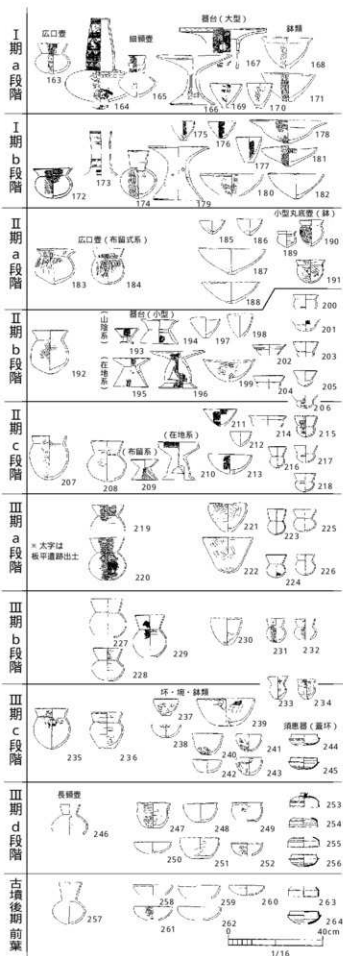
第91図 板平遺跡出土土器の変遷的位置(1)

壺類

高杯類



第 92 図 板平遺跡出土土器の変遷的位置 (2)



第93図 板平遺跡出土土器の変遷的位置(3)

等しくなり、b段階では口径が縮小化、c段階までにはつくり自体が粗雑化・萎縮化し終焉を迎える。

壺や環はⅢ期c段階で出現し、食器構成の主要な器種となる画期である。この画期は集落内に須恵器が持ち込まれる時期と同調している。

Ⅲ段階は、布留式系譜の高坏や小型丸底壺の盛行と衰退期にあたる。襖は精美的な器形から弛緩への過程をたどる。小型丸底壺の形態からⅢ期a段階は久住猛雄氏のⅢB・C期に併行関係がとれる。Ⅲ期b段階の土器群には田辺昭三氏のTK73型式に類似した須恵器と、寺沢薫氏の布留4式にあたる小型丸底壺が伴う。Ⅲ期c段階はTK216・208型式に類似する須恵器が伴い、小型丸底壺の終焉期にあたる。Ⅲ期d段階はTK23・47型式に類似する須恵器が伴う。

よって、Ⅲ期は古墳時代中期前葉(a段階)中葉(b・c段階)後葉(d段階)に位置付けられよう。

Ⅲ期に相当する土器のうち、第2次調査SA3の小型丸底壺(109)はⅢ期b段階に位置付けられる。

第4次調査SA12の出土遺物のうち、底部がやや平底気味の襖(270)や高坏(273)および小型丸底壺は概ねⅢ期a段階と考えられる。SA1の襖(184)は、c段階に位置付けられる。183はそれより後続するd段階である。高坏(220)はc段階でも古相、203は新相に位置付けられる。受部と口縁部の境が突出するタイプ(204)もc段階であろう。小型丸底壺はb期(196)とc期(198)の両者がある。従って、SA1の出土土器は概ねⅢ期c段階となろう。また、SA4の襖(227・230)と高坏(238)はc段階である。SA6の襖(258)はc段階となる。SA11の襖(266)はd段階に位置付けられる。

〔Ⅲ期に後続する土器〕古墳時代後期前半代に位置付けられるのは、第2次調査のSA5(MT15型式)に併行する須恵器)とSA11の環、第3次調査のSA13(MT15型式)に併行する須恵器)がある。後期後半代は第2次調査SA12出土の須恵器がある。

第43表 土師器の色調／胎土の分類基準

色 調		胎 土	
分類番号	内容(標準土色値)	分類番号	内容(肉眼による識別/面積割合は標準土色値に準拠)
A a	橙色 5Y R	I	精選された粘土に赤色粒(1~5mm大)を含む(面積割合2%程度) 黒・灰色粒(1mm以下)はごくわずか
A b	橙色 7.5Y R	II a	粒径の揃わない黒・赤・灰色粒(1~2mm大)を含む(面積割合15%程度)
B	明赤褐色 5Y R	II b	粒径のそろった黒・灰色粒(1mm大)と揃わない赤色粒(1~5mm大)を含む(面積割合15%程度)
C	明黄褐色 10Y R	III	粒径の揃わない灰・黒色粒(1mm以下)・管母片を含む(面積割合15%程度)
D	にがし黄褐色 10Y R	IV	シルト質に富み、粒径の揃った黒・白・透明色粒(1mm以下)を含む(面積割合15%程度)
E a	浅黄褐色 7.5Y R	V	粒径の揃った赤・黒・白・透明色粒(1mm以下)を含む(面積割合15%程度)
E b	浅黄褐色 10Y R	VI	粒径の揃った白・透明色粒(1mm以下)を含む(面積割合15%程度)
F	灰白色 10Y R	VII	ほぼ精良

第44表 板平遺跡出土土師器の色調／胎土の分類(1)

小型丸底壺

	A a	B	C	D	E a	E b	F
I						277(4次)	
II a			235(2次)	109(2次) 124(2次) 206(2次)			
II b				103(2次)			
III					194(4次) 197(4次)	198(4次)	
IV	234(2次)						
V		233(2次)					
VI	110(2次)				207(2次)		

鉢・坏類

	A a	B	C	D	E a
I		183(2次)			
II a	231(2次)	230(2次)	141(2次)	102(2次)	
II b				112(2次)	
III		212(4次)		242(4次) 199(4次)	
IV		286(4次)			
V				125(2次) 142(2次)	
VI				232(2次)	145(2次)

※第43~45表中の番号は、各調査分の遺物掲載番号である。

b) 古墳時代土師器の色調と胎土について

第1・2次調査分の報告書(宮崎県埋蔵文化財センター2008)では、胎土と調整技法の観点から在地系土器と外来系土器の比較検討を行っている。この項は第3・4次調査分を含めた総括としたい。第44・46表は、土師器の色調と胎土の相関関係を示したものである。色調と胎土の分類は第43表に一覧化した。

甕はD・E・F(色調) - II類(胎土)が最も個体数が多い。砂粒の大きくて多量に含むII類胎土への選択性が強いことが指摘できる。なお、II類胎土中の砂粒は基本土層のVII・VIII層に認められる。

壺はA・D・E - II類が主体的である。次いでIII類の順となる。絡縄突帯を有する成川式土器の影響を受けた壺は、II類胎土である。

高坏はD・E(色調) - II a類(胎土)が主体である。甕ほどの砂粒の混入を避けた胎土(II a)が主に選択される。次いで砂粒の細かく揃った(III・IV類)精選された土に赤色砂粒を混入する(I類)胎土が使用されるので精製品を目指したようである。

小型丸底壺は色調的にはD類がやや多い程度で、バラツキが認められる。胎土は、高坏と同様な選択性が読み取れる。

鉢・坏類は、色調的にはA b・D類が主体となる。

ただ、胎土の選択性はまとまりを持たない。

このように、器種別の色調と胎土の傾向をみると、色調はD・E類、胎土はII類の個体が最も多い。この点から板平遺跡における在地系土師器の色調と胎土と位置付けられる。I類に含まれる赤色砂粒はII類と共通するので、I類胎土の土器は在地系となる。

他方、III類は管母片を含み、IV類はシルト質、V・VI類はI・II類とは異なる胎土のあり方を示す。今後は、その由来を探索していくことが必要となる。このうち、甕のF - V類(第4次284)やA a - VI類(第4次263)は、いわゆる布留式甕であり、在地系甕とは一線を画す調整技法であり、胎土も異なるので搬入品である可能性が極めて高い。

さらに、甕(第2次156)壺(第2次223)高坏(第2次147)小型丸底壺(第2次233)の色調は赤褐色(B類)で異彩を放つ存在である。胎土はV・VI類で在地系胎土とは異なる。147は坏部と脚部の接合部に軸芯痕を有する山陰系の高坏でもある。これら赤色系の土器は、器形や製作技法的な精美さや精緻さを有さないが、特別な意味を持たされた土器もしくは搬入品の可能性を指摘できる。

第45表 板平頭出土土師器の色調/胎土の分類(2)

種	Aa	Ab	B	C	D	Ea	Eb	F
IIa	100(2次)・170(2次)・ 210(2次)	90(2次)・210(2次)		110(2次)	120(2次)/布面式横線・110(2次)・110(2次)・110(2次)・ 150(2次)・160(2次)・160(2次)・160(2次)・160(2次)・ 200(2次)・210(2次)・210(2次)・210(2次)・210(2次)	210(2次)	110(2次)・100(2次)・100(2次)	200(2次)
IIb	230(4次)	50(3次)		110(2次)/布面式横線・ 210(2次)・210(2次)・220(4次)	110(2次)・110(2次)・100(2次)・100(2次)/布面式横線・ 140(2次)・150(2次)・160(2次)・160(2次)・160(2次)・ 180(2次)・190(2次)・200(4次)・200(4次)	100(2次)・200(2次)・ 250(4次)・260(4次)	100(2次)・100(2次)・ 140(2次)・150(2次)・160(2次)・ 200(4次)・210(4次)	
III		110(2次)/布面式横線・ 210(2次)・210(2次)・220(4次)		110(2次)	200(2次)	230(4次)	190(2次)	200(4次)/布面式
IV	200(2次)・260(4次)/ 布面式)							
V	100(2次)							
VI								

差

種	Aa	Ab	B	C	D	Ea	Eb	F
I	220(2次)							
IIa	100(2次)・170(2次)・ 210(2次)	170(2次)・110(2次)/布面式横線・ 140(2次)/布面式横線・ 140(2次)/布面式横線・ 140(2次)/布面式横線		100(2次)・110(2次)・110(2次)・110(2次)・110(2次)・ 220(2次)・210(2次)・400(2次)/布面式横線・180(2次)・ 220(2次)/布面式横線	100(2次)・110(2次)・110(2次)・110(2次)・110(2次)・ 220(2次)・210(2次)	230(4次)・220(2次)	100(2次)・110(2次)/布面式横線・ 220(2次)/布面式横線	300(3次)・100(2次)
IIb	190(4次)	270(4次)・280(4次)		100(2次)・110(2次)・ 220(2次)	170(2次)・110(2次)・ 300(3次)・220(4次)	190(4次)	200(4次)・100(4次)/ 二重口縁・100(4次)・200(4次)	300(3次)
III	160(2次)	190(4次)						
IV	160(2次)	190(4次)						
V	200(4次)							
VI	140(2次)							

高杯

種	Aa	Ab	B	C	D	Ea	Eb	F
I						200(4次)	200(4次)・210(4次)・ 210(4次)	
IIa	110(2次)・180(2次)・ 200(2次)	160(2次)・200(4次)	160(2次)		160(2次)・160(2次)・200(2次)・220(2次)	200(4次)・270(4次)	160(2次)・160(2次)・ 180(2次)・180(2次)・ 200(4次)・210(4次)・ 240(4次)・240(4次)・ 280(4次)	200(4次)・210(4次)・ 240(4次)・280(4次)
IIb					160(2次)・200(2次)		200(4次)・200(4次)	
III					160(2次)・210(2次)・200(4次)			
IV	200(4次)					200(4次)・200(4次)		
V						160(2次)		
VI			140(2次)/山崎類)			160(2次)		
VII				100(2次)				

c) 石器

石器が床面より複数個出土した竪穴建物跡は、複数軒が認められた。第2次SA4（敲石1・石皿1）SA9（敲石1・台石2・石鍾1）SA10（敲石3・砥石1・石鍾1）と第3次SA1（二次加工剥片3・磨石3・敲石類6・石鍾1・台石1）第4次SA1（砥石1・石皿2）SA4（磨石1・敲石2・台石4・石皿2）等である。また、遺構埋土中からは打製石斧が第4次SA1・4で出土した。

板平遺跡では、古墳時代前期～後期を通じて磨石・敲石・台石・石皿がセット関係をなす。打製石斧や剥片石器は鉄器と補充関係にある利器である。石皿は長くて幅狭な川原石が好まれ、台石の機能も併せ持つ（第2次SA8・12、第3次SA1、第4次SA1・4）。石皿・台石は炉の付近や建物内の隅角部に置かれ、その場所が作業空間となるようだ。

敲石は円形と棒状の二者があり、前者は磨石の転用例（246）が少なくない。後者は中ほどや端部・側面に潰打痕を残す場合（218）があり、間接・直接打撃兼用の使用法が類推される。

石器石材は砂岩が圧倒的に卓越（全体の約84%）し、ついで尾鈴山酸性岩類（11%）やホルンフェルス・頁岩（5%）である。器種による石材選択の差異も認められない。石材の採取地は遺跡近くの富高川や露出した礫層とみたい。

なお、第4次SA1・4・7・12-13や第3次SA1では使用痕のない棒状の砂岩礫が出土した。第4次SA4では北東隅付近でまとまって出土している。法量的には平均値で長165cm、幅74cm、厚さ51cmの8063gで、ほぼ同じ大きさの礫である。

これら古墳時代竪穴建物内に存する棒状礫は、宮崎県下では延岡市吉野第2遺跡A地点1号竪穴建物跡（中期後半）や新富町上園F地区1・9号竪穴建物跡（中期後半）都城市中尾遺跡1号竪穴建物跡（中期末）などの類例が知られている。

棒状礫の機能として、先学により「編物石」や「鍾具」等が指摘されているが、板平遺跡の場合、出土状態等からは判断しえなかった。

2 遺構の位置づけ

a) 古墳時代集落の変遷

さきに、古墳時代初頭（弥生時代終末期を含む）から中期末葉まで土器の変遷過程（Ⅰ～Ⅲ期）を想定し、板平遺跡出土土器群との対応関係を確認した。ここでは個々の建物跡の細別時期（期）を与えて板平遺跡の古墳時代集落の消長・変遷過程をまとめる。

細別時期は、以下のとおりである。第94図は、各期の竪穴建物跡の分布状況を示している。

A期（Ⅱa・b期：古墳時代前期前葉）

…SA9・10（第2次）SA1（第3次）

B期（Ⅱc期：前期後葉）

…SA1・4・6（第2次）SA5・7（第4次）

C期（Ⅲa期：中期前葉）…SA2・12（第4次）

D期（Ⅲb・c期：中期中葉）

…SA3（第2次）SA1・4・6（第4次）

E期（Ⅲd期：中期後葉）…SA11（第4次）

F期（後期前葉）

…SA5・11（第2次）SA13（第4次）

G期（後期後葉）…SA12（第2次）

上記以外の竪穴建物跡6軒は、出土土器が細片なため、細別時期が不明である。しかし、その立地状況からA・B・C期に属する竪穴建物跡が含まれるものと考えられる。

集落の範囲は、調査区（路線）の位置から類推しておきたい。調査区は富高川左岸の高位段丘面全体に広がり、ほぼ南北に貫いている。北端は山稜が迫り、東側に谷部、西側は低位段丘面に接する。南端は富高川で分断される（第2図）このことから、調査区は段丘面西縁の一部を残して可住域の多くを表出させたものと考えられる。また、調査区内では古墳時代の掘立柱建物跡は検出されなかったため、竪穴建物主体の集落としておきたい。

集落の形成は、古墳時代前期前葉に始まる（A期）調査区中央付近に2軒、やや南側に1軒ある。ともに南北に延びるすべ尾根線上に位置する。

次の段階（B期）は、調査区中央部に1軒と南側に2軒、南端と北端付近に1軒ずつ位置する。配置的には尾根線上から西側緩斜面にかけて、A期の住居よりやや西側に列状となり、軒数も増加する。

C期には、調査区南端と北端のSA2・12(第4次)の2軒が認められる。富高川に向けて下る西斜面に位置する。どちらも調査区西側に位置するため、集落主体は段丘面の西縁に広がる可能性がある。

D期になると竪穴建物跡は、調査区やや西側の緩斜面面上に4軒が列状の分布を示し、B期の分布と同じような傾向であるといえる。この期は集落内鍛冶が行われている(第4次調査のSA1)。

E期はSA11(第4次)の1軒と少ない。立地から段丘面西縁に集落主体が存在する可能性がある。

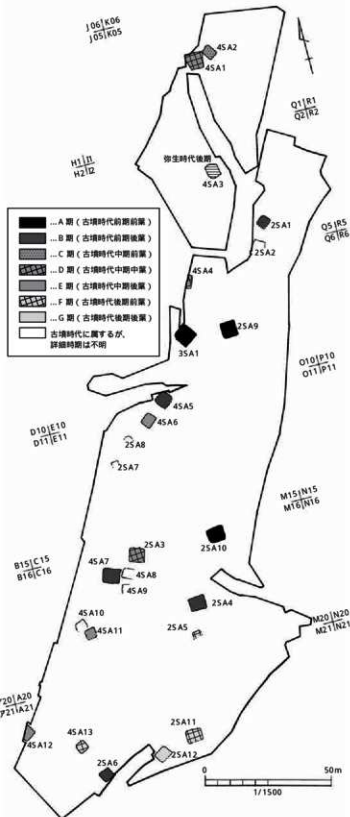
F期の3軒は調査区南側に移動し、D・E期と大きく分布が異なる。この調査区南端より南側は谷部や急崖となるので、集落範囲は狭く限られる。

G期はSA12(第2次)の1軒と少ない。立地形態はF期と同様だが、集落規模の減少が読み取れる。また、G期より後出する竪穴建物跡や掘立柱建物跡は認められず、包含層出土遺物にも見いだせない。この期で古埴時代集落は終焉すると考えられる。

上記のように、板平遺跡における古埴時代集落の消長は、合計7期に区分できる。集落形成はA期、G期には終焉を迎える。その盛行期はB～D期頃と考えられる。その集落の規模は一時期に3～5軒程度で、拠点集落ではなく小規模な村落像となる。

そうすると、第2次調査出土の車輪石(石製腕飾)は集落規模とは対照的な存在となる。この車輪石は全体の1/4程度に破片化しているが、遺跡内への流入経路を考えると富高古墳群2号墳の存在は無視し得ない。築造時期は「前方後円墳集成編年」でいう4期後半ないし5期と考えられ、埴見川流域を束ねる初源的な地域首長墳とされている。築造時期は板平遺跡の集落盛行期とほぼ重なる。また、板平遺跡例と類似する車輪石が副葬される時期(熊本県向野田古墳例)とも同調的である。

車輪石の来歴は、第2次調査報告で指摘された遺跡付近に存在していた前期古墳の崩壊によるものという想定に加えて、4世紀後半代における埴見川流域の勢力伸長過程のなかで入手され、それが板平遺跡にも首長層との関係性を示す品に姿を変えて分与(分割)された可能性も指摘しておきたい。



第94図 竪穴建物変遷図

b) 屋内炉に関して

S A 4 (第4次)の東壁付近で河原石の配置された炉が検出された。矩形に配置された上に積み重ねられて石組状となる。台石や石皿も使用されていた。

この石組状の炉は、宮崎県下では延岡市山口遺跡第2地点の3号竪穴建物跡(砂岩製砥石の転用)や宮崎市猿野遺跡4号竪穴建物跡(軽石)例がある。板平遺跡例も合わせて古墳時代中期前～中葉にあたる。また、炉に伴うかは不明だが宮崎市北中遺跡(平成13年度調査)の15号竪穴建物跡(中期後半)より焼土と赤化した軽石が大量に出土した事例もある。

宮崎県下の古墳時代前・中期の炉は、掘り込みのない炉(焼土の広がりのみ)や地床炉(土坑状)となるので、石使用の炉は特異的である。炉の上部は立体的構造となるから、カマドの導入と定着(古墳時代後期)以前の先駆的な炉形態または手工業生産に必要な特化した炉の可能性を指摘しておきたい。

3 古墳時代の鉄生産に関して

a) 第4次調査 S A 1 検出の鍛冶関連遺構と遺物

S A 1の床面には埋土に焼土を含み壁体が焼けた「炉」が検出され、鉄滓や高環を転用した羽口も出土した。S A 1は古墳時代中期中葉に属する。

「炉」は、焼土や鉄滓の出土状況から「鍛冶炉」と考えられる。その構造は帯状に深く掘り込んだ後に一旦埋め戻し、浅く窪めて炉心(火窟)とする。土坑埋土より出土した鉄滓状の塊は、炉壁付着滓との分析結果を得たので、「鍛冶炉」の裏付けとなった。

また、床面出土の椀形滓は工程別分類上、鍛錬鍛冶滓と推定されたので、鍛冶炉では精錬から鍛錬工程が行われたものと考えられる。

「鍛冶炉」に隣接する「建物内土坑」は、その埋土に炭化物や鉄滓を含むので鍛冶に伴う残渣を廃棄(集積)する施設とみなしたい。

なお、竪穴建物内の鍛冶関連施設には「水溜め」の施設(土坑)が付随するケースが多いが、本例の場合は見出しにくい。ただ、その候補として「炉」の西側端に置かれた土師器甕(184)が挙げられる。

この土師器甕に相対する位置に石皿(221)が置かれていた。この石皿は三面に使用痕が認められる。

上面は敲打痕と全体的に赤みを帯びている。左右側面には溝打痕とこなれた光沢面を有し長軸方向への擦痕があることから、石皿というよりは鉄を対象とした砥石とみなせる。さらに、使用面の凹みや端部には粒状の錆着が点々と確認される。これら肉眼的所見と鍛冶炉との位置関係を積極的に捉えるならば、砥石兼用の「金床石」として評価できる。

上記の検討結果と付属施設と遺物出土状況の関係性から、S A 1内部に鍛冶炉と土師器甕及び金床石が矩形に配置された作業空間の存在を想定できる。

その操業は土師器高環脚部を転用したフィゴの羽口が5個体確認された点から、単発的ではなく継続的な形態となる。特に、本書の掲載番号 X08 は竪穴建物内で高環を羽口へと転用する再加工の過程を如実に示す資料である。

また、鍛冶には「金槌」も必要な道具であるが、そのものは見当たらなかった。おそらく敲打石がその機能を果たしていたと考えられるが、S A 1出土の敲打石(247・248)にはその使用痕が見出しにくい。

なお第4次調査のS A 4出土の石皿(254)にも点々と粒状の錆着が認められるので、鍛冶関連遺物の可能性が指摘できる。

b) 板平遺跡における古墳時代の鉄(器)生産

鍛冶関連の遺構(鍛冶炉)と遺物(金床石・羽口・鉄滓)が認められたのはS A 1(第4次)のみで生産規模としては小さいが、その立地は集落域外縁部にあたり、かつ谷地形に位置するなど特異な立地である。これは、集落における鍛冶工場的な存在であり、通風のよい地形を選定した結果と考えられる。

また、椀形滓の始発原料は砂鉄で、鍛錬工程に伴う鍛冶滓と判明した。S A 1内から鉄器(製品)そのものや鍛造鉄片は認められなかったが、集落内で鍛錬工程後に引き続いて鉄器(利器)生産が行われた可能性は低いとは考えられない。

なお、原料の入手先と、精錬より前の段階である「製錬」の実態解明は今後の課題となった。

南部九州における古墳時代の鉄(器)生産を窺える遺跡は、現時点でそれほど多くはなく、「鍛冶炉」の具体的構造が把握できる遺跡は数例にとどまる。

類例の一つには、鹿児島県指宿市の尾長谷迫遺跡1号竪穴建物跡(6世紀代)の「中央ピット」がそれにあたる。「中央ピット」は、浅く掘りくぼめた中心にピットが付設する2段の掘り方をなす。1段目の壁面は焼土化している。高環脚部を転用したフィゴの羽口14点も出土するなど、炉の構造や羽口のあり方は板平遺跡第4次調査のSA1と共通している。SA1の調査成果は数少ない重要な類例となった。

また、鍛冶関連遺物〔敲石・台石(金床石) 鉄滓や羽口など〕が出土した遺跡は、管見の限りにて(発掘調査報告書刊行分:2010年現在)鹿児島県指宿市尾長谷迫遺跡(古墳時代後期)橋牟礼川遺跡(後期)鹿屋市榎木原遺跡(後期)高山町永野原遺跡(中期-後期)宮崎県さびの市内小野遺跡(前-中期)佐牛野遺跡(後期)宮崎市北中遺跡(後-終末期)新富町上園遺跡F地区(中期)・E地区(後期)などがある。共通的なのはフィゴの羽口は高環の転用品が多く、敲石を用いる点である。

これらの特徴について、野島永氏によると5~6世紀の畿内地方では、高環の転用羽口はほとんど認められないが、関東地方と九州地方で多くの事例が存在するという(野島1997)。また、角南健一郎氏は尾長谷迫・永野原遺跡における敲石と台石を鍛冶具とする点を「鉄製鍛冶具を積極的に採用する畿内とは大きく異なる」とし、両遺跡の「5~6世紀段階の鉄器生産の様相は(中略)弥生時代的鉄器生産形態」と解釈されている(角南2000)。

板平遺跡の鉄(器)生産のあり方は、南部九州の他の遺跡と同様に、高環の転用羽口を用いる列島弧の周縁部的な様相と石器を鍛冶具とする弥生時代的様相の脈絡のなかに位置付けられる。

しかしながら、先進地的生産のあり方ではないにせよ、古墳時代の一般集落における自家生産・消費的様相を、板平遺跡においても読み取ることができた。

4 植物質食料・建築材と古環境

板平遺跡では、竪穴建物跡の床面や炉より土を採取してフローテーション作業を行い、析出した炭化種実の同定を進めた。その結果は本書と第2次調査報告(宮崎県埋文センター2008)に掲載している。

食用となる種実は、ツブラジイ(第2次SA4)コナラ属(第2次SA9)・イネ(第2次SA6・10、第4次SA4)がある。タデ属やヒコ属、カタバミ属とカラスザンショウなども検出されている。タデ属は集落や畑地及びその縁地に生育する人里植物ないし耕地雑草とされるから、集落の付近には耕地(イネ)が広がる環境が復元される。あわせてツブラジイといったドングリ類も食用された可能性が高い。

SA1(第4次)からは床面や埋土下層で炭化材がまとまって検出された。埋土中には焼土も含むので「焼失住居」の一種とみなせる。

この炭化材の一部(8点)のうち、ツブラジイ(7点)とクリ(1点)との分析結果が得られている。検出状況から判断すると、SA1の場合、屋根材(垂木)にはツブラジイが主に使用されたようである。ただし、耐久性・保存性の低い樹種である。また、SA1(第3次)よりクリ近似種が認められている。

燃料材としては、SA10(第2次)ミズキ属の可能性もあるものやSA11(第4次)のサカキがある。カラスザンショウやヒコ属、タデ属とカタバミ属といった木本・草本類も燃料材とされた可能性がある。ツブラジイやサカキは照葉樹林を構成する主要な高木であり、クリは落葉高木で乾燥した台地や丘陵地を好む二次林種であるという。カラスザンショウは温暖な沿岸部の森林要素で二次林種とされる。

建築材や燃料材を遺跡周辺より獲得したとするならば、当時の遺跡周辺は照葉樹林帯に囲まれた環境となる。その一部は二次林(里山)や耕地といった人為による環境も造りだされていたようである。

V 古代-近世

掘立柱建物跡を計24棟把握できた。その内訳は、2間×1間が9棟、3間×1間が8棟、3間×2間が5棟、2間×2間が2棟である。身舎面積別の内訳は、10㎡未満が9棟、10㎡-20㎡が8棟、20㎡-30㎡が6棟、30㎡以上が1棟である。

中世の掘立柱建物跡 最も多くの建物跡が確認されたのはM9・M10グリッド付近で、SB3・4(第2次) SB1(第3次)など9棟が集中している。このうち6棟が身舎面積15-25㎡であり、3間×2

間または3間×1間の間取りのものが多く、第2次調査の考察で示されたように、中世の平均的農家の建物跡の可能性が高い。この範囲は遺跡中央部の尾根状の平坦地であり、集落の立地条件を満たしている。また、身舎面積12～15m²の比較的小規模の建物も含まれており、住居以外の機能を持った建物も併設されていたとも考えられる。

この範囲にはS B 5・6(第2次)の切り合い関係があり、建て替えとみなされる。また、建物の向きにより、S B 7・8・10(第2次)・S B 1(第3次)とS B 2～6(第2次)と、掘立柱建物群を大きく2グループに区分できる。これらは、複数の世帯や数世代による村落経営の反映と考えられる。

他に、調査区南側の尾根状の平坦地に、S B 1・9・11(第2次)の3棟が、調査区東側の平坦地にS B 6・7(第4次)の2棟がそれぞれ位置する。やや規模が小さいものもあるものの、立地等から住居として利用されたと考えられる。S B 9・11(第2次)とS B 6・7(第4次)は隣接し、建物の向きが一致するため、それぞれ併存した建物であると思われる。

中世の板平遺跡では、調査区中央部東側の尾根状の平坦地が日常生活の中心地であったといえよう。

近世の掘立柱建物跡 北側の傾斜地にS B 1～5(第4次)の5棟、西側の平坦地～緩い傾斜地にS B 8～12(第4次)の5棟が認められる。このうちS B 8は身舎面積28m²とやや大きく、住居として利用されたと考えられる。また、S B 8・9は近世後半の磁器片が複数出土しており、この時期以降の建物であると考えられる。

この建物群の特徴は、S B 8を除き身舎面積が13m²未満と小規模で、柱間距離も短いことである。機能的には、農耕用等の小屋としての利用が想定される。S B 1・2、S B 4・5はそれぞれ、ほぼ同じ等高線上で隣接し、建物の向きが一致するため、同一時期の建物と思われる。S B 9～12は10～20mの間隔で等高線に直交して列状に並んでおり、このうちS B 10～12は建物の向きがほぼ一致する。

出土遺物 古代～中世の土師器、中世～近世の陶磁器・銭貨、近世のキセル等が出土した。特に中世については第2次調査区(調査区東側)を中心に、

輸入陶磁器や青磁、宋・明銭等が出土している。これは中世とした掘立柱建物跡の分布等とも一致する。

これらの遺物は、中世の平均的な農家といえども、中世の物資や貨幣の流通ルートとの関係性を示すものと解釈される。天然の良港である美々津・細島港にほど近い立地条件も影響しているであろう。

VI 陥し穴状遺構について

陥し穴状遺構は合計29基礎確認した(第95図)。

縄文時代早期の陥し穴状遺構 斜面地から緩やかな勾配に変わる変換点付近であるN7グリッド付近で10基(第2次S C 1～4、S C 6～11)による群となる求心的な配置である。埋土にアカホヤ火山灰土が含まれず、貝殻条痕文土器が出土すること、谷部の埋没土から縄文時代のものとみられる石鏃等の狩猟具が出土していることから、縄文時代早期の遺構である可能性が高い。

東へ下る緩い傾斜地であるH9～K9グリッドで、S C 1・3～5(第3次) S C 19(第4次)が等高線に直交して弓状に並ぶあり方が認められた。遺構の時期を確認できる遺物の出土はないが、埋土にアカホヤ火山灰土は含まれず、炉穴の埋土に近い土質を示すことから、縄文時代早期の遺構の可能性が高い。

また、S C 5(第2次)は、調査区北側の急な傾斜地で、他の陥し穴状遺構とは離れて検出された。S C 51(第4次)は、南側の緩傾斜地で検出され、S C 50(埋土にアカホヤ火山灰と古墳時代土師器を含む)に切られている。この2基についても、埋土の観点から、縄文時代早期の遺構の可能性が高い。

アカホヤ火山灰降灰後の陥し穴状遺構 S C 2(第4次)はS C 5(第2次)と同様に、調査区北側に位置する。S C 2は長径28m、短径15mと最大の陥し穴状遺構であり、S C 1(第2次)と似た底面の両端に掘り込みを持つ形状で、大型動物を捕らえる目的のものと考えられる。遺物の出土はないが、埋土にアカホヤ火山灰が含まれるため、少なくともアカホヤ火山灰降灰後の遺構であると考えられる。

その他、第4次調査では、西側の平坦地から南側の緩い傾斜地にかけて11基の陥し穴状遺構が検出された。これらは、平面形態が隅丸長方形または楕円



第 95 図 土坑配置図

形で、うち9基に床面に抗痕とみられる小穴がみられる。S C 23・24、S C 25 - 27、S C 31・36・37、及びS C 50・56はお互いに形状が類似し、10 mほどの距離で同一の等高線上に並ぶことも共通するので、各々の遺構は関係性を有し、且つ同時性が高いと考えられる。また、埋土にアカホヤ火山灰が含むものが5基（S C 23・36・37・50・56）古墳時代の土師器片が出土したものが5基（S C 16・22・23・27・50）ある。遺構の時期は、少なくとも3基（S C 31・36・37）はアカホヤ火山灰降灰以降、8基（S C 16・22・23・25 - 27・50・56）は古墳時代以降の遺構であると推定される。このように立地や形態・配置の共通性から、この11基は古墳時代集落廃絶後の遺構である可能性が高い。

なお、今次までの調査では、底面に抗痕とみられる小穴の有無の他、平面・底面の形状や掘り込みの有無、断面形態や深さなどについて検討し、陥し穴状遺構であるかどうかを判断してきた。しかし、検出された遺構は既に上部を削平される場合が多いことを考慮すると、「その他の土坑」として報告した土坑には、陥し穴状遺構が含まれている可能性がある。

板平遺跡では4次にわたる発掘調査の結果、旧石器時代から近世にかけての遺構や遺物が確認され、本書では調査報告を記載し、その成果を総括した。

後期旧石器の出土に始まり、縄文時代早期の集石遺構や炉穴の検出、弥生時代後期の免田式土器や古墳時代の集落跡・鍛冶炉の存在は塩見川系流域を含めて、日向地域の重要な成果といえよう。第2次調査出土の車輪石は県内で唯一であり特筆される。

今後、周辺地域での発掘調査や研究が進められることにより、各時代に暮らした人々の実相や交流等がさらに明らかになることを期待したい。

参考文献

田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
 宮崎県総合博物館 1983 「六野原古墳群」『宮崎県総合博物館収蔵資料目録』考古・歴史編
 宮崎県教育委員会 1983 「東平下1号円形周溝墓」『宮崎県文化財調査報告書』第29集
 宮崎市教育委員会 1984 「中岡遺跡」『宮崎市遺跡等詳細分布

調査報告書1』宮崎市教育委員会
 宮崎県教育委員会 1985 「熊野原遺跡（C地区）」『宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書』第2集
 川南町教育委員会 1986 「上ノ原遺跡」『川南町文化財調査報告』4
 寺沢薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
 指宿市教育委員会 1986 「尾長谷遺跡」『指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書』第7集
 東郷町教育委員会 1987 「赤松遺跡・下水流遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第1集
 宮崎県教育委員会 1988 「陣ノ内遺跡」「前原南遺跡」「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書』第4集
 石川悦雄 1989 「弥生時代後期後半から古墳時代の土器編年に向けて」『宮崎県総合博物館研究紀要』第15輯
 都農町教育委員会 1990 「新別府下原遺跡」『都農町文化財調査報告書』第3集
 高鍋町教育委員会 1991 「大戸ノ口第2遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第5集
 東郷町教育委員会 1991 「樋田遺跡」『県営園地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 延岡市教育委員会 1991 「中尾原遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第6集
 米田敏幸 1991 「土師器の編年近畿」『古墳時代の研究』6
 雄山閣
 新富町教育委員会 1991 「八幡上・銀代ヶ迫遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集
 正岡睦夫ら編 1992 「弥生土器の様式と編年」木耳社
 西都市教育委員会 1992 「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集
 日向市教育委員会 1994 「百町原地区遺跡」『県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 新富町教育委員会 1995 「上籠遺跡F地区」『新富町文化財調査報告書』第18集
 吉本正典 1996 「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察 - 須恵器出現以前の資料を中心として - 』『宮崎考古』第14号
 石川悦雄 1996 「宮崎県の後期土器」『日本土器事典』雄山閣
 宮崎市教育委員会 1996 「猿野遺跡・萩崎第2遺跡」『市道下北方通線改良工事に伴う発掘調査報告書』
 新富町教育委員会 1996 「上籠遺跡A・B・C地区（I）E地区

(I) 『新富町文化財調査報告書』第 19 集

野島永 1997 「弥生・古墳時代の鉄器生産の様相」『たたら研究』38 たたら研究会

北浦町教育委員会 1997 「中野内遺跡」『北浦町文化財発掘調査報告書』第 1 集

西健一郎 1997 「重弘文長頭蓋」『弥生土器Ⅱ』雄山閣出版

久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』第 19 号

宮崎県埋蔵文化財センター 1999 「鶴野内中水流遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 16 集

宮崎県埋蔵文化財センター 1999 「上の原第 3 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 25 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2000 「上の原第 1 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 25 集

えびの市教育委員会 2000 「内小野遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第 24 集、「佐牛野遺跡」『同』第 27 集

梅木謙一ら編 2000 「弥生土器の様式と編年」。木耳社

角南総一郎 2000 (IV , 小結) 「永野原遺跡」『高山町埋蔵文化財調査報告書』第 7 集高山町教育委員会

宮崎市教育委員会 2002 「江田原第 3 遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』第 50 集、「北中遺跡Ⅱ」『同』第 51 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2002 「別府原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 61 集

宮崎市教育委員会 2003 「史跡生目古墳群-保存整備事業発掘概要報告書Ⅳ-」宮崎市文化財調査報告書第 54 集

日高広人 2003 「宮崎県別府原遺跡の炉穴について」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』九州縄文研究会

中原一成 2003 「2 炉穴(連結土坑)」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』九州縄文研究会

東郷町教育委員会 2003 「上野原遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第 6 集

新富町教育委員会 2004 「祇園原遺跡・春日遺跡」『新富町文化財調査報告書』第 39 集

松永幸寿 2004 「日向における古式土師器の成立と展開-宮崎平野部を中心として-」『西南四国-九州間の交流に関する考古学的研究』平成 14 年度-15 年度科学研究費補助金

宮崎県埋蔵文化財センター 2005 「山口遺跡第 2 地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 99 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2006 「西ノ別府遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 124 集

(財) 大阪府文化財センター編 2006 『古式土師器の年代学』久住猛雄 2006 「土師器からみた前期古墳の編年」『前期古墳の再検討』第 9 回九州前方後円墳研究会大分大会発表要旨

宮崎市教育委員会 2006 「史跡生目古墳群-保存整備事業発掘概要報告書Ⅵ-」宮崎市文化財調査報告書第 61 集

坪根伸也 2007 (第 2 節下都遺跡出土の弥生時代終末期から古墳時代初期の土器について) 「下都遺跡群Ⅴ」『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 76 集大分市教育委員会

大手前大学史学研究所 2007 「弥生土器集成と編年」『大手前大学史学研究所研究報告』第 5 号

宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「登り口第 2 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 141 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「国光原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 149 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「赤坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 151 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「湯年田遺跡(二次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 152 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「吉野第 2 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 155 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「尾立第 2 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 169 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「野首第 2 遺跡」『第二分冊』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書。第 172 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「板平遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 176 集

鹿児島県埋蔵文化財センター 2008 「上水流遺跡 2」『鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 121 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2009 「黒仁田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 181 集

吉本正典 2009 「西都原古墳群墳丘上出土土師器の検討」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 5 号

第 35 回九州古墳時代研究会実行委員会 2009 「宮崎北部の古墳と古墳群」『第 35 回九州古墳時代研究会(宮崎県大会)資料』

宮崎県埋蔵文化財センター 2010 「中野内遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 189 集

杉井健 2010 「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第 13 回九州

前方後円墳研究会大分大会発表要旨



1号集石遺構検出状況



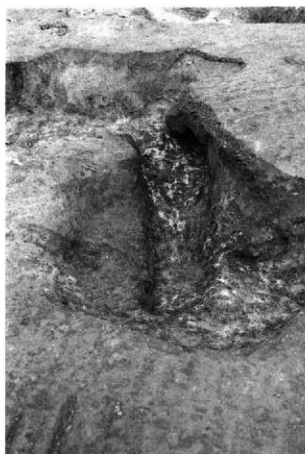
2号集石遺構検出状況



散磔検出状況



2号陥し穴状遺構完掘状況



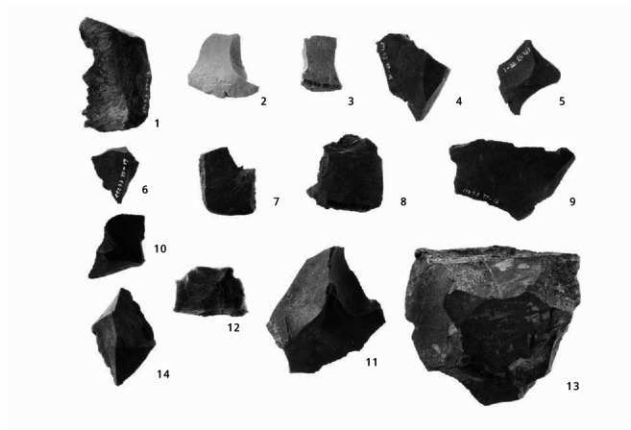
1号炉穴完掘状況



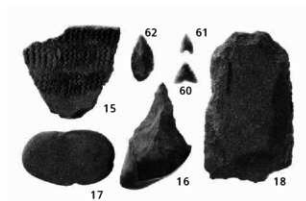
1号竪穴建物跡完掘状況



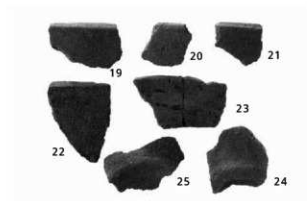
1号竪穴建物跡遺物出土状況



旧石器時代石器



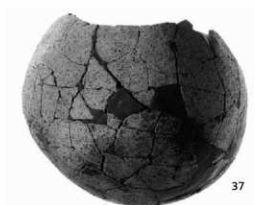
縄文時代早期遺物



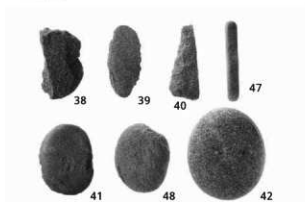
縄文時代後期土器



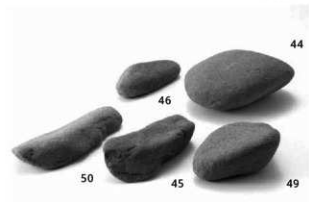
1号竪穴建物跡出土土器(1)



1号竪穴建物跡出土土器(2)



1号竪穴建物跡出土石器(1)



1号竪穴建物跡出土石器(2)



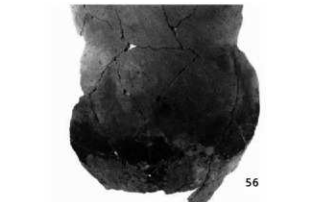
1号竪穴建物跡出土石器(3)



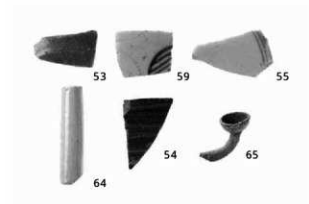
1号竪穴建物跡出土石器(4)



古墳時代土器(1)



古墳時代土器(2)



中世・近世遺物



1号集石遺構検出状況



3号集石遺構検出状況



4号集石遺構検出状況



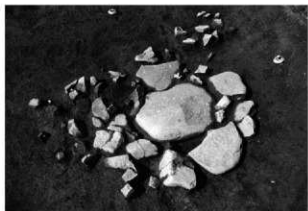
6号集石遺構検出状況



8号集石遺構検出状況



8号集石遺構半截状況



10号集石遺構検出状況



11号集石遺構検出状況



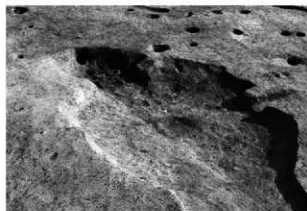
12・13号集石遺構検出状況



14号集石遺構検出状況



1号炉穴完掘状況



2号炉穴完掘状況



F-2区炉穴群(1)



F-2区炉穴群(2)



6・7号炉穴完掘状況



8-10号炉穴完掘状況



25号陥し穴状遺構完掘状況



27号陥し穴状遺構完掘状況



31号陥し穴状遺構完掘状況



27号陥し穴状遺構半截状況



60号土坑遺物出土状況



36号陥し穴状遺構完掘状況



3号竪穴建物跡完掘状況



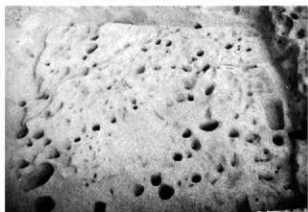
1号竪穴建物跡遺物出土状況(1)



1号竪穴建物跡遺物出土状況(2)



1号竪穴建物跡炭化材出土状況



1号竪穴建物跡貼床下状況



2号竪穴建物跡完掘状況



4号竪穴建物跡遺物出土状況



5号竪穴建物跡完掘状況



6号竪穴建物跡焼土核出状況



7号竪穴建物跡完掘状況



10号竪穴建物跡完掘状況



11号竪穴建物跡完掘状況



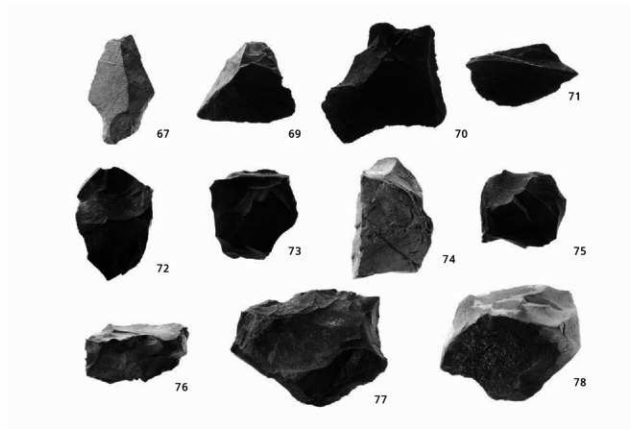
12号竪穴建物跡完掘状況



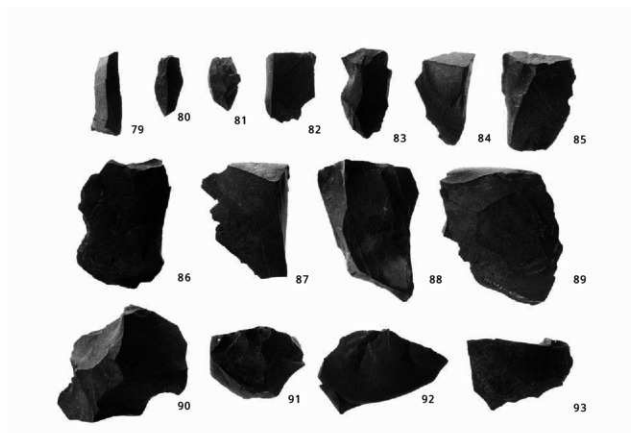
13号竪穴建物跡完掘状況



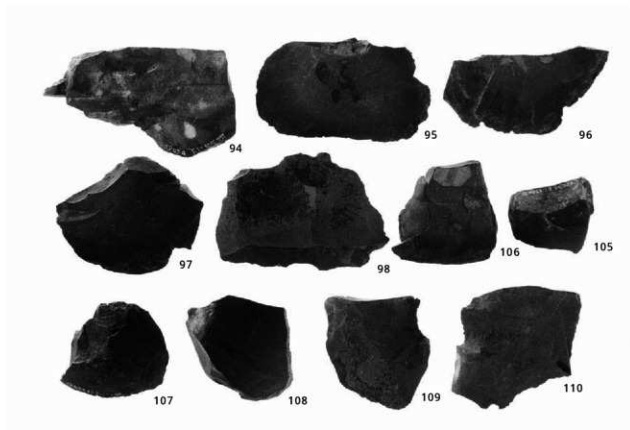
F-1区全景



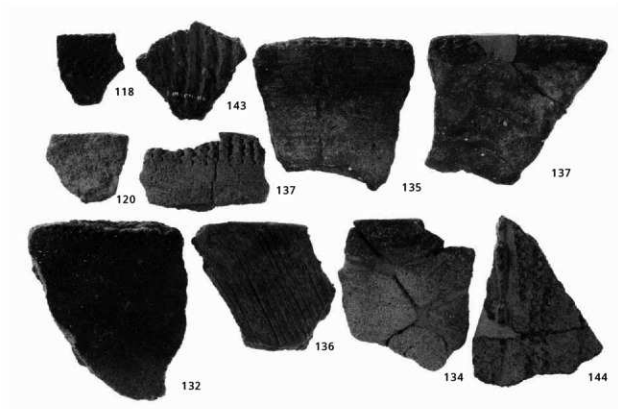
旧石器時代石器(1)



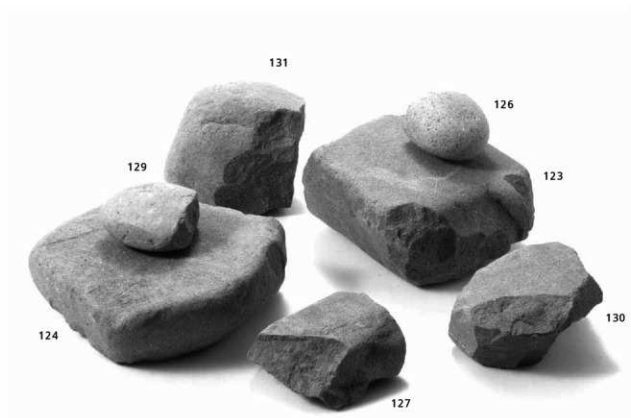
旧石器時代石器(2)



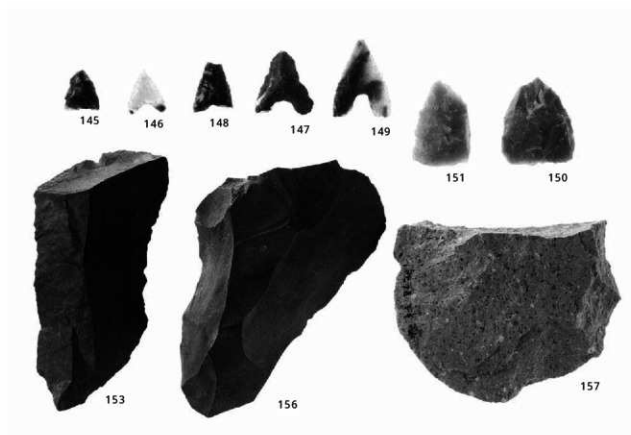
旧石器時代石器(3)



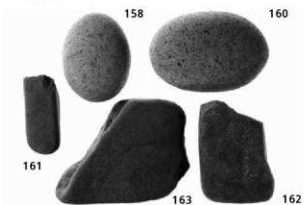
縄文時代早期土器



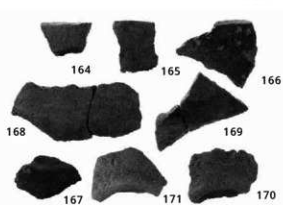
縄文時代早期炉穴出土石器



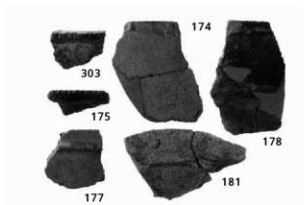
縄文時代早期包含層等出土石器（1）



縄文時代早期包含層等出土石器 (2)



縄文時代後期土器



弥生時代中期土器



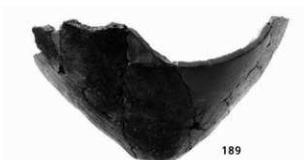
3号竪穴建物跡出土土器



1号竪穴建物跡出土土器 (1)



1号竪穴建物跡出土土器 (2)



1号竪穴建物跡出土土器 (3)



1号竪穴建物跡出土土器 (4)



185

1号竪穴建物跡出土土器 (5)



191

1号竪穴建物跡出土土器 (6)



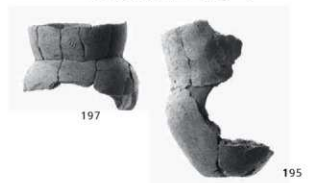
190

1号竪穴建物跡出土土器 (7)



196

1号竪穴建物跡出土土器 (8)



197

195

1号竪穴建物跡出土土器 (9)



203

1号竪穴建物跡出土土器 (10)



201

1号竪穴建物跡出土土器 (11)



204

1号竪穴建物跡出土土器 (12)





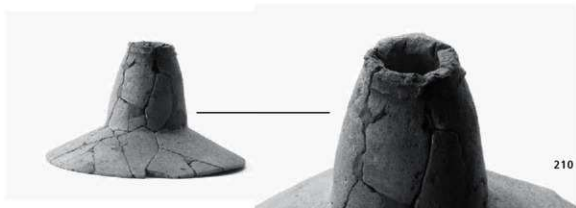
1号竪穴建物跡
出土土器 (13)



1号竪穴建物跡出土土器 (14)



1号竪穴建物跡出土土器 (15)



1号竪穴建物跡出土土器 (16)



1号竪穴建物跡出土土器 (17)



211

1号竪穴建物跡出土土器 (18)



212

1号竪穴建物跡出土土器 (19)



213

1号竪穴建物跡出土土器 (20)



214

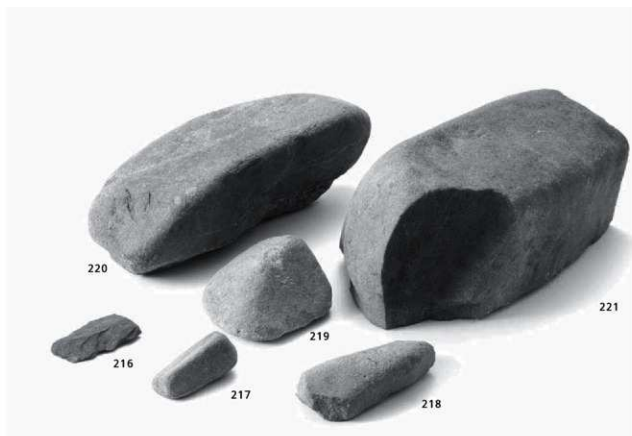
1号竪穴建物跡出土土器 (21)



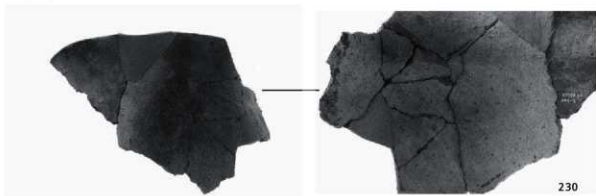
1号竪穴建物跡出土土器 (22)



215



1号竪穴建物跡出土石器



4号竪穴建物跡出土土器(1)



4号竪穴建物跡出土土器(2)



4号竪穴建物跡出土石器



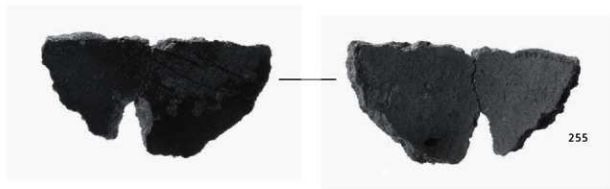
4号竪穴建物跡出土土器(3)



古墳時代竪穴建物跡出土石器



古墳時代竪穴建物跡出土棒状礫



5号竪穴建物跡出土土器



6号竪穴建物跡出土土器(1)



6号竪穴建物跡出土土器(2)



7号竪穴建物跡出土土器(1)



7号竪穴建物跡出土土器(2)



266

11号竪穴建物跡出土土器



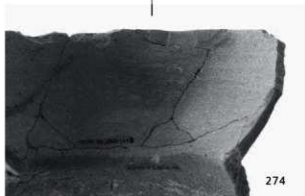
271

12号竪穴建物跡出土土器(1)



272

12号竪穴建物跡出土土器(2)



274

12号竪穴建物跡出土土器(3)



277

12号竪穴建物跡出土土器(4)



280

13号竪穴建物跡出土土器(1)



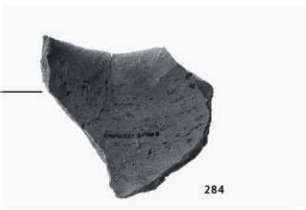
281

13号竪穴建物跡出土土器(2)



285

古墳時代包含層出土土器(1)



284

古墳時代包含層出土土器(2)



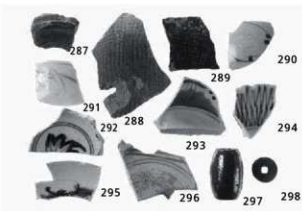
283

60号土坑出土土器



301

1号土坑出土土器



古代・中世・近世遺物

報告書抄録

ふりがな	いたびらいせき(だい3・4じちょうさ)								
書名	板平遺跡 第3・4次調査								
副書名	東九州自動車道(門川~日向間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3								
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	第199集								
編著者名	土屋 雄毅 島木 良浩 松田 博幸 今塩屋 毅行								
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター								
所在地	宮崎市佐土原町大字下那珂 4019 番地								
発行年月日	2011年3月18日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
板平遺跡 第3・4次 調査	宮崎県 日向市大字富高 字板平 他	45206	3009	32° 26' 43"	131° 36' 22"	【第3次調査】 2008.5.7 ~ 2008.6.13 【第4次調査】 2009.5.18 ~ 2010.1.13	480㎡ 8,500㎡	東九州自動車 道(門川~日 向間)建設に 伴う発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
板平遺跡 第3次調査	集落	旧石器時代				剥片・石核			
		縄文時代早期		集石遺構2基、陥し穴状遺構4基、 土坑1基、炉穴2基		土器・石器			
		縄文時代後期				土器			
		古墳時代		竪穴建物跡1軒		土師器・石器			
		中世・近世		掘立柱建物跡1棟、ビット		土師器・陶磁器・ キセル・火打ち石			
板平遺跡 第4次調査	集落	旧石器時代				石器・剥片・石核		銅冶関連 遺物の出土	
		縄文時代早期		散礫、集石遺構14基、炉穴22基		土器・石器			
		縄文時代後期				土器			
		弥生時代		竪穴建物跡1軒		土器			
		古墳時代		竪穴建物跡12軒、土坑1基		土師器・須恵器・ 石器・鉄滓・ガラ ス小玉			
		古代・中世・ 近世		掘立柱建物跡12棟、溝状遺構8条		須恵器・土師器・ 陶磁器・鉄貨			
時期不詳		陥し穴状遺構14基、土坑45基、ビット		石器					
要約	<p>板平遺跡は日向市大字富高に所在し、富高川の河岸段丘上に位置する。第3次調査は2008年5月~6月、第4次調査は2009年5月~2010年1月に行われた。調査の結果、第1・2次調査(2006~2007年)に続いて旧石器時代~近世にかけての遺構・遺物が確認され、遺跡の広がりが確認された。旧石器時代については、遺構は検出されなかったが、多数の剥片・石核が集中して出土した。縄文時代については、早期の集石遺構16基、炉穴24基が検出された他、少数ながらも早期の土器を中心に遺物が出土した。弥生時代については、竪穴建物跡1軒が検出され、少数の土器が出土した。古墳時代については、竪穴建物跡が13軒検出され、その建物内から土師器を中心とする多くの土器・石器が出土した。土師器は在地系・畿内系のどちらのものも出土している。また、竪穴建物跡のうち1軒は上層構造が喪失したものであり、建物内から銅冶関連遺物(転用羽口等)が出土した。古代~近世については、掘立柱建物跡13棟を確認した他、少数ながら近世の陶磁器などの遺物が出土した。その他、陥し穴状遺構が18基検出された他、多数の土坑・ビットが確認された。</p>								

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第199集

板平遺跡（第3・4次調査）

東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書3

2011年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 098(36)1171 FAX 098(72)0660

印刷 小柳印刷株式会社
〒880-0803 宮崎市旭1丁目6-25
TEL 098(24)4155 FAX 098(24)1512
